

---

# 運命のマスティマ

鏡 香夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

運命のマステイマ

### 【Nコード】

N2989K

### 【作者名】

鏡 香夜

### 【あらすじ】

十年前、マフィアの抗争に巻き込まれた私を救ってくれた存在、闇組織マステイマ。

銃は苦手だし、争いことも好きじゃない。もっとも重要な条件である男でもない。

けれど、私にしかできないこともあるはず。

恩に報いようとコックを志したのはいいけど……。

恩人であるはずのボスはとんでもな人だったり？

周りの人も皆個性豊か過ぎだったり？

主人公ミシエルが、騒動に巻き込まれつつも、男のコックとして切り抜けてゆくお話。

（第一部完結済み。現在登場人物を紹介する特別編を更新中。第二部の連載開始時期は未定です）

## 1・十年前 始まりの夜

あの夜の出来事ははっきりと思い出せる。十年たった今でも。石釜から漂うピツアの香りや沸き立つ鍋から立ちのぼる湯気。鼻歌を歌いながら厨房を歩き回る父の姿さえも。

白衣に包まれたふつくらとした体つき。コック帽から覗く柔らかい栗色の髪。

陽気な鳶色の瞳は料理へ向うと光に溢れる。始終浮かんでいた笑顔。まるで特別なものを作り出すかのように。

小さな料理店の経営者であり、コックでもあった父。思い出すのはいつも白衣姿。

父の手伝いは、幼い私の楽しみでもあった。厨房は不思議に溢れた魔法の園。父は魔法使いであり、私はその弟子の気分だった。

包丁を持たせてもらったのは五才になる頃で、簡単な料理も教えてもらった。もっとも、まだ子供だからと、お客に出す品には手を出させてはくれなかったけれど。

それでも、料理を運んで店を訪れた人と話するのは面白かった。可愛いウエイトレスさん。みんなそう呼んで優しくしてくれた。

そして十年前のその夜も。

店の入り口には閉店の札をかけているが、奥の席は三人の男が占めていた。黒っぽいスーツ姿で煙草をくゆらし、ワイングラスを傾ける。

彼らの低く柔らかい声。

皿を乗せた盆を手に近寄ると、話し声がぴたりと止まる。

「お手伝いとは偉いね、お譲ちゃん」

私の背からすると高いテーブルに、ようやく料理を並べる。顔なじみの初老の男が手を伸ばして、頭をなでてくれる。

「お譲ちゃんじゃないわ。ミシエルよ。ブルーノさん」

ごつごつとした大きな手で、髪をくちやくちやにされてふてくさ

れると、男は顔を綻ばせる。髪と同様白の混じった口ひげが余計楽しげに見せる。

膨らんだ私の頬に、人差し指を押し付けながら彼は言葉短く詫びた。

両脇の彼より若い二人の男が微笑んでいる。

よくあるやりとりだった。小さな料理店を持つ父の手伝いに借り出されるのは。

そしてこの初老の男。店を貸切にして食事をする、何度も訪れるお得意様。当時の私にとって彼はそれ以上ではなかった。

優しい微笑みを持つおじいちゃん。例え連れの男達が何度も鋭い目つきで入り口を見やっていたとしても。それを知っていたところで幼い私の想像できることなど、たかがしれている。

十歳の誕生日を迎えて間もないその日。それは起こった。

入り口のガラスが弾ける。

続いてドアが蹴破られ、黒い衣服に身を包んだ男達が押し入ってきた。

奥にいた初老の男の頭を手の平で守りながら、テーブルの下に逃がす連れの若い男は、素早くジャケットの下から何かを取り出した。連続の銃声と共にテーブルのグラスが砕け、壁の絵画がソファに落ちる。

「ミシエル」

立ち尽くす私を抱えるようにして、父は床に身を投げ出した。

男達の怒号。応戦する奥の男の一人が銃弾を浴びながら後ろに倒れた。

粉々になった照明が激しい雨のように落ちてくる。

「皆殺しにしる。誰一人逃がすな」

銃声を突き破る声で侵入者の一人が怒鳴った。

父は私をかばいながら、カウンターの傍へと這った。

「大丈夫か、ミシエル」

がたがたと震えることしかできない私を父は氣遣う。

「怪我はないな？」

頷くのを見て安心したように笑む。その微笑みにほっとしたのは私のほうだった。

途絶えることのない銃声の中でパニックに落ちいらすに済んだのは、父の存在ゆえだった。

簿のかな明かりが上から降り注ぐ。カウンターの上に置かれたシールド付きのランプ型のライト。傘を失いながらもまだ光を放ち続けていた。

「パパ、血が……」

その明かりの元、胸を濡らす血を目に止める。赤い色はどんどん広がり、白衣を染めていった。

「パパ……！」

カウンターに上半身を預け、苦痛に耐えるように目をつぶっていても父の唇には微笑みが残っていた。弾丸が顔の脇の板にめり込んだときも。

銃口を向けて男が近付いてくる。私たちをどうするつもりなのかは明白だった。

父は顔を引きつらせ、半目を開けながら、私を抱き寄せた。男に背を向けるようにして。

男の歪んだ笑み。父の腕越しに恐ろしいその表情を目にしたのが最後だった。

一発の銃声。

恐る恐る父の背から顔を覗かせたとき、男の姿は消えていた。

新たな人影を見つけて身をすくませる。長い丈の黒いコートを着た黒髪の男がそこにいた。大型の拳銃を手にしている。

「下衆が」

コートの男は床に転がる銃撃者を足で押しやった。

苦痛の声を上げながら床をまさぐる手の届かないところへ銃を蹴り飛ばす。

「ブルーノの救出が最優先だ」

コートの男が良く響く声で命ずる。他にも同じような上着の男達が店の中にいた。

彼らの銃弾は確実に侵入者を仕留めていった。

黒髪の男は歩み寄ってきて私たちを一瞥した。傍にいた仲間と思しき者に向って命ずる。

「救急車を呼んでやれ」

私は男を仰ぎ見た。戻ってきた視線とぶつかりそうになり、慌てて俯く。だが、彼のコートの袖にあったエンブレム。描かれた黒い翼は不吉な予感のようなものだった。

父を見やる。荒い息をし、目をつぶったままの父。

不意に涙がこみ上げてきた。泣き始める私の傍に黒髪の男の仲間であるう、若者が腰を落とした。

「もう大丈夫だ。俺たちが来たんだから。救急車だつてすぐに来る」  
そんな言葉が幼い私の何の救いになるだろう。

男が差し伸ばしてきた手を引つ込めたのは、私の声を耳にしたからだろう。

私は父を呼び続け、隣の男はそれ以上何も言わずにそこにいた。

やがて救急車が到着し、救急隊員が父の処置を始めた。

私は何もできずに立ち尽くし、泣くだけだった。

担架で先に救急車に運ばれようとしていたブルーノさんは、声をかけてそれを止めた。

「すまないミシエル。巻き込んでしまつて。本当にすまない」

彼は腕を伸ばし、血で汚れた手で私の頭をなでた。

こんな状況でなければいつもの仕草。それは、この悪夢のような状況が現実であることを知らしめるだけだった。

私はより激しく泣き出した。担架は去っていき、詫びるブルーノさんの声だけが置き去りになった。

「もう大丈夫」……なんてことはなかった。

病院に搬送されて三日後、父は息を引き取った。

何よりも料理を作ることを愛し、私たち家族を愛してくれた父は逝ってしまった。

後に、お得意様だったブルーノさんは地域一体を仕切るマフィアのボスで、私達が巻き込まれたのは組織の抗争だったことが分かった。穏健派であるボスを亡き者にしようとした 武闘派の一味によるもの。

そして、私と父を救い出した者たちはそれを阻止するためにやって来たのだと。

彼らの正体を知り、その存在を知ったこと。それは私の運命の方向を付け、私の志の源となった。



## 1・十年前 始まりの夜（後書き）

闇社会に属する組織が出てくるお話です。

主人公ミシエルを通すことで、コミカルな部分も多くなっていく予定です。（最初の方はシリアスですが……）

当サイト初投稿ですが、よろしくお願いします。

## 2・ミシエルの決意

住み慣れた、気兼ねない人たちのたくさんいる街。賑やかで温かい街。

南イタリアのこの街で私は生まれ育った。母の郷でもあるこの地は、父を亡くしてからも変わらないものの一つだった。

周りの人たちは私たちを力づけてくれた。祖母、母、私と男手のいない我が家を何かと気遣ってくれた。

なによりもブルーノさんは。私の進学の相談に乗り、返済はいつになってもいいからと学費の肩代わりまでしてくれた。

お陰で無事に義務教育を終えて、希望通り、各地を巡っての料理の修業に打ち込むことができた。

私の唯一といってもいい才能を磨くための旅。そんなことができたのも、後ろ盾あってこそだ。

どれほど礼を尽くしても足りることはない。そんな人の心に背くことはしたくなかった。

だが、他にどうすればいいというのだろう。頼る人は他になく、彼の力添えなくしては私の目標に近づくことさえできないのだ。

チャンスを見知らせる一本の電話。これを逃せば二度と巡っては来ないだろう。今までの努力はまったくの無駄になってしまうかもしれない。

料理の師匠に慌しく別れの挨拶をして、荷物をまとめると飛行機に飛び乗った。そして、故郷へ戻ってきたのだ。

私の足取りは重かった。

ブルーノさんの家は目の前にあった。

高い塀に囲まれた屋敷だ。両開きの門に手をかけると開いていた。無用心だと思いつつ、一応植木に隠された監視カメラに手を振ってみる。気付けば誰か出てくるはずだが、その様子はない。

私は仕方なく門を開けて入った。玄関を目指して歩いてみると、

二頭の犬が駆けてきた。黒と茶色の屈強なマスティフ犬だ。彼らは私に狙いを定めて飛びかかってきた。

バランスを崩し、座り込むと胸に両足をかけられた。荒い息がすぐ傍に聞こえる。

「もう、ネーロ、カフェラツテ、やめてよ」

言っている傍から顔をべろべろと舐められる。くすぐつたい。

笑い声を上げながら、黒いネーロの顔を両手で挟んでもみくちやにする。彼の顔の皺があちこちに動いて奇妙な形を作る。それがおかしくてさらなる笑いを誘う。

カフェラツテが負けじと顔を突っ込んでくるので、二頭の耳の後ろを搔いてやりながら、彼らの鼻先にキスをした。

「誰だ？」

声をかけられたのはその時だった。

屋敷から出てきたのだらう、男が上着の懷に手を入れたまま近付いてくる。

「こんにちは。お久しぶりです」

私の挨拶にも男は怪訝そうな顔をしている。まるで誰だか分からない感じがした。

唇を舐めてこようとすると二頭をなだめながら、私は立ち上がった。

「ブルーノさん、いらっしやいますか？」

「……お前、ミシエルか？」

男は困惑気味に指を差す。

頷いて笑い返すしかなかった。こんな格好では分かれて言うほうが無理なのかもしれない。

今の私は赤いカンフー着にポストンバッグを肩に提げ、大きな中華鍋を背負ってるんだから。

男はブルーノさんの部下だった。確かマルコと呼ばれていて、父のレストランにもよく訪れていた一人だった。あの十年前の事件のときも。

その頃は濃い灰色だった彼の髪にも、今は白いものが混じっ

る。

「ブルーノさんの所に連れて行ってください」

私の言葉に彼はぎよっとする。再び私の全身を見回す。奇妙な格好なのは分かっている。

「時間がそんなにないんです。お願いします」

彼は屋敷を見返し、窮屈そうにネクタイをいじった。

「分かった。来い」

それでもそう言うてくれた。

私は、名残惜しく垂らした尻尾をゆっくりと振る二頭を背にして、彼の後ろに付いていった。

玄関を抜け、廊下を歩いて、私たちは一つの扉の前に立ち止まる。マルコはここで待つよう指示して、先に部屋に入ってしまった。

「会ってくださるそうだ」

しばらくして扉が開き、彼は顔を覗かせて言った。

荷物を抱えなおし、バッグの肩掛けを握り締めながら、私は部屋へと入った。

豪華な部屋だった。

壁には額縁に入った絵画やコレクションである銃やナイフのケースが掛けられている。東洋のものと思われる白磁気の花瓶に入った花。厚みのある艶のあるカーテンは飾り紐で止められ、窓際に押しやられている。

昼下がりの日差しを遮っているのはレースのカーテンだった。それを背にしてブルーノさんはいた。

白い髪に白い口ひげ。十年前と変わったのはそれだけではない。膝にはエンジ色のブランケットがかけられている。座っているのは車椅子だった。あの事件で受けた傷の後遺症のせいだ。

「やはり来たね。ミシエル」

変らない柔らかい物腰。ネクタイを締め、スーツを着た彼には威厳があった。マフィアのボスの座を退いて隠居の身の今でさえ。

「わしは正直言つて、君に来てもらいたくはなかったのだがね」  
渋い声。

「でも私は来ました。昨日連絡を頂いたから」

私は彼の前まで歩み寄つた。彼は目を細めてじつと私を見つめた。  
「君に頼まれていたからね。だが、面接は今晚だ。中国からでは時間がかかっただろう。間に合わなければ良かったのに」

「私はここにいます。面接だって間に合わせませす」

私の言葉に、彼は車椅子の肘置きを節くれだった手で握り締めた。床を睨みつけている。

私はさらに彼に歩み寄つた。腕を取り、留めようとするマルコの手を払う。

「お願いです。あなたの推薦状が必要なんです。そう教えてください。つたのはあなたじゃないですか」

「君は何も分かつたらん」

ブルーノさんは厳しい口調で言った。私へと戻ってくる視線。彼の雰囲気agaraりと変わった。それはまさしく闇を治める男のものだった。

柔らかかった眼差しは鋭い光を放ち、同じ人物とは思えないほどだった。

私はバッグを床に置き、たすき掛けにした中華鍋の紐を解いた。バッグの上に鍋が落下する。

「マステイマはわしらと同じだ。闇に属するものだ。そんなところへ君を……」

ブルーノさんの声を物音が止めた。床の鳴る低い音だった。バッグに落ちた中華鍋の音。重さを受け止め切れなかったバッグは、ペしゃんこに潰れている。

「どうおっしゃろうと私の決心は変わりません」

私の言葉に、彼の唇から深い溜め息が漏れた。

「だがね、ミシェル。マステイマに入れるのは男だけだと言っただろう。女の君に資格はない」

今度はなだめるような声。

私は唇を噛んだ。自分の技術が足りないから認められないというのなら分かる。だが、変えようのない性別で拒まれるなんて。

変えようのない……性別？

私は壁に目をやった。二人の視線を感じながらも、足は止まらなかった。

壁掛けのガラスケースから一番大きいナイフを取り出す。マルコが慌てたように駆け寄ってくるが、間に合うわけもなかった。

腰に届くお下げを前に寄せ、切り落とす。

「男になればいいんでしょう」

切り離れた、茶色がかった金髪を握り締める。髪を伸ばしていたのは十年前からだ。願掛けのようなものだ。願いが叶ったときに切るつもりだったが、この際仕方ない。

「……無茶苦茶だ」

マルコが呆れたように言う。

ブルーノさんかというと、笑い出していた。彼は最後に溜め息と共に笑いを収め、肘かけを叩いた。

「降参だミシエル。推薦状は渡そう」

彼は懐から封筒を取り出した。

マルコが寄り、それを受け取ると私の前に持ってきた。

「最初は騙せたとしてもすぐにばれるぞ」

「その時はその時ですよ」

推薦状を受け取りながらの私の答えは、彼をさらに呆れさせたようだった。

「マルコ、彼女を君の行きつけの理髪店に連れて行ってあげ。その髪ではあんまりだ」

「……分かりました」

随分と歯切れの悪い返事。

私はブルーノさんの近くまで行って床に膝を付いた。

「ありがとうございます、ブルーノさん。本当に何から何までお世

話になって」

彼は首を横に振り、私の頭に触れた。

「ミシエル、君はわしの娘同様だ。君のお父さんはいい友人だった。彼にそう誓ったのだから」

私の髪をなでる彼の手は、昔と変わらず大きく優しくかった。

「さあ行きなさい。面接の時間に遅れてはいけない」

彼は促した。私は頷いて立ち上がり、彼を後にした。

「幸運を。娘よ」

最後に振り返ったとき、彼は微笑んでいた。

心の中に温かい光が点ったように感じられ、私はそれに背を押さ  
れて屋敷を後にした。

## 2・ミシエルの決意（後書き）

次回予告：ブルーノより得た推薦状を手に、マスティマの本拠地イギリスへと発つミシエル。向った先は窓口である警備会社だった。

第3話「ディケンス警備会社」



### 3・ディケンス警備会社

指定時間の午後八時を前にして、ロンドンの空港からタクシーに乗り、たどり着いた。

緯度の高いこの地ではまだ空も薄っすらと明るい。

ここは企業のビルが立ち並ぶオフィス街。ディケンス警備会社はその一画にあった。

建物を前にして身なりを整える。

今までにないほど短くなった髪は手櫛でも簡単に梳ける。もともと扱いにくいクセのある髪だが、それさえも気にならないほどだ。風通しが良くなったせいで首筋が涼しいが、すぐに慣れるだろう。いつ慣れるか分からないのは紺色のパンツスーツだ。首を絞めつけるネクタイ。

よく男の人はこんな息苦しいものを毎日着けていられるものだよ。いや、苦しい思いをするのはこの服のせいだけではない。

胸に手を置く。もともとそう大きくはない胸だが、巻きつけたサポーターのお陰でほとんど分からない。

おかしいのか悲しいのか分からない気分で、私は俯いた。

そして、顔を上げて建物を見やる。天を突く高層のビル。世界にその名を轟かす一流の会社にふさわしい外観だ。

明かりがいくつもの窓からもれている。色を深めていく空がいつもより遠くに感じられる。

車寄せに刻まれたディケンス警備会社の文字。植え込みから覗くライトが建物を照らし出している。

意を決して、エントランスへと入り、広いロビーに出る。

明度を落とした照明の下、人は誰もおらず、受付のカウンターにも姿はない。

どうすればいいのか決めかねて立ちすくんでいると、背後から声をかけられた。

「マイケル？」

ミシエル改め、今日からの私の名前。

呼ばれて振り向くと、黒髪のグレーのスーツを着た男が歩み寄ってきた。書類が入っていると思われる茶封筒を片手に、微笑みを浮かべている。

「面接担当のアーロンだ。よろしく」

年のころ四十歳くらいだろうか。

細い黒ぶち眼鏡の奥の瞳が細まる。目の脇に浮かぶ笑い皺。気さくな感じを醸し出している。

「よろしくお願います」

私はほっとした思いで、差し出された彼の手を握り返した。

彼はロビーのソファへと私を案内した。

茶封筒から書類を取り出す。先に送っていた履歴書だ。彼はそれに一度目を落としただけだった。

渡したブルーノさんが書いてくれた推薦状にも目を通そうとはせず、履歴書ともども封筒にしまった。

「ブルーノとは昨日電話で話したんだが、もし君が来ても採用を断つてくれと言われたんだ。君には向いていない仕事だと。社会の裏側をわざわざ見せる必要はないとね」

私は膝上で拳を握り締めた。昨日といえば、私が屋敷を訪れる前の話だ。

「彼の気持ちも分かる。我々警備では踏み込めない暗闇に挑むものがマステイマだからね。そんな陰の組織に属すれば、見たくないものだって目にするようになるかもしれない」

その声はどこまでも落ち着いたものだった。俯いてしまった私を慰めるような響きがあった。

ブルーノさんの気持ちは、私だとよく分かっていた。彼は友人であった父を死なせた上、その娘まで危険にさらすことになるのではないかと恐れていたのだ。

だが、彼は分かってくれた。これでもう気兼ねなく私は私の道を

貫ける。

顔を上げてアaronを見たとき、彼は微笑みを浮かべていた。

「決心は固いようだね。マステイマのコック、勤務は大変だが君には頑張ってもらいたい」

「……それって、採用ってことですか？」

言葉の意味が分かるのに数秒を要した。

アaronは頷いた。

「まだ仮だがね。詳しいことは……そうだな、あっちの人事に聞いたほうがいいな」

私の混乱をよそに、アaronは上着のポケットから取り出した携帯電話で何かを話し始めた。

ディケンス警備会社の裏組織であるマステイマ。採用は厳しいものだと聞いていた。試験自体も難しく、倍率もかなりのもので、おいそれとは入れないと。

だが、仮とはいえ、これほど簡単に採用を言い渡されるとは。アaronの行動は早かった。私をエレベーターに押し込み、屋上を目指す。

扉が開くとともに耳を覆いたくなるような騒音が襲った。プロペラを回転させながらヘリコプターが待機していた。

状況についていけない私を引っ張るようにして、彼は座席に乗り込んだ。

私のシートベルトの世話までして、操縦士に行き先を告げる。

マステイマへ。

機体を前に傾けて飛び立つヘリの中で悲鳴を押し殺す。

「仕事は住み込みだから。荷物は後で送ればいいからね」  
騒音に負けじとアaronは大声で告げる。

座席にしがみつきながら、これは拉致に近いものだと確信していた。

### 3 ・ティケンス警備会社（後書き）

次回予告：アaronと共にマステイマの本拠地へ向ったミシエル。扉の奥から現れたのは総務担当だというアビゲイル。彼女の案内でミシエルはマステイマの内部へ入り込むこととなる。

第4話「マステイマの城」

#### 4・マステイマの城

乗り物酔いというのはヘリコプターにもあるらしい。

極度の緊張と恐怖と相まって、私は半分グロッキー状態だった。

締め付けるネクタイや胸のサポーターも影響していたに違いない。

降り立ったのは古めかしい石を敷き詰めた地面。だが、乗り物酔いのせいでその感触はふわふわとしたものだった。

よろめきながらも足元に注意しつつ、先を歩くアーロンの後に続く。

「ここがマステイマの本拠地。君の勤務場所だ」

指し示す彼の指先を追って、私の足は止まった。

ここが勤務場所とは。近代的ビルのディケンズ本社とはまるで違う。目を疑うほどだった。

周りを高い壁に取り囲まれた、朽ちかけにも見える古城。中庭の外灯がぼんやりとした形を照らし出す。観光目的の旅行者も素通りしそうな代物だった。

どちらかと言ったらお化け屋敷に近いような。月の光も届かない、雲の多い空だったから余計そう思えたのかもしれない。

軋んだ音を立てて玄関の扉が開く。

怪しすぎる。中から出てくるのは、蝋燭を持ったざんばら髪のせむし男とかだったりして。

私は思わず唾を飲み込んだ。内側の明かりが四角くもれる。

現れたのは白衣を羽織った女だった。二十代後半くらいで、カールした赤毛をアップにして、藍色のシャツに黒いタイトスカートを身に着けている。

綺麗な人だった。

化粧品ブランドのモデルと言っても通りそうだ。それにスタイルも抜群で私よりもずっと背が高い。

彼女はアーロンの姿を目に止めて、顔を輝かせた。

「早かったのね。お久しぶり、セオ」

「お待ちかねのコックを連れてきたよ」

アーロンは笑顔で私を彼女の前に押し出した。

「マイケル、彼女はアビゲイル。マステイマの総務を仕切っている。優秀な医者だよ」

「よろしく願います」

乗り物酔いはどこかへ吹っ飛んでいった。

華やかな彼女の笑顔を受け止めて、女である私も赤面してしまっ  
た。

「可愛い子ね。あなたが推すなんて珍しいけど」

「デイヴィッドには内緒だ」

人差し指を唇につけて、アーロンはいたずらっぽく笑った。アビゲイルは肩をすくめる。

「もちろんだわ。こんなことでボスにへそ曲げられちゃかなわないもの」

「中を見せて、色々説明してやってくれ」

彼は私たちに背を向ける。へりを待たしているからと。

だが、去りかけた彼は思い出したように、引き帰して来た。

「健康診断は済ませている。再度する必要はないよ」

怪訝そうに形の良い眉をひそめるアビゲイルの肩を叩く。そして、彼は本当に行ってしまった。

「いらっしやい、マイケル。案内するわ」

促され、私は古城に踏み入った。

外と同じく、中もまたどれだけ痛んでいて、ボロボロになっているだろうかと思像していたが、まるで違っていた。

ホテルのような内装。大きなロビーを抜けて、天井の高い廊下を歩く。

画一的な装飾がホテルに近い印象をより深めていた。壁に取り付けられたベルを思わせるウォールライトも。アイボリーの壁紙も。どれだけ歩いて同じだった。扉の形、素材や色さえも。

差し掛かったのは木の階段。磨きぬかれた踏み板は艶々と輝いている。

「よく覚えていてね。最初は迷うかもしれないけど」

昇りながら、振り返るアビゲイルの言葉に相槌を打つ。これだけ同じ風景が続くなら本当に迷ってしまいそうだ。侵入者を考えての構造だという説明に納得する。

「天井と壁は対衝撃、ガラスも防弾になっているのよ。まあ、そういった意味では役立つたことは今までないんだけどね」  
彼女は苦笑を浮かべる。

そういった意味では役立つたことはない……ということとは、そういった意味とは別のことでは役立つているということだ。

とはいえ、その時の私にはまるで分かっていなかった。後に良く分かることになるのだけど。

「ここがあなたの部屋。住み込みだつてことは聞いてるわね」

ポケットから取り出した鍵で扉を開ける。電気が付いて部屋を見渡すとちょうどホテルのシングルルームのような造りになっていた。「荷物はディケンズ本社宛に送るといいわ。こっちに回してくれるから」

「この住所は秘密つてことですね」

「そう。マステイマは公的社会に害あるものを狩る黒い天使なの。保安面に抜かりがあつては駄目つてことよ」

マステイマ。それが十年前の私たち親子の前に現れた黒いコート  
の集団。あの地域のマフィアを仕切るブルーノさんが教えてくれた  
正体。ディケンズ警備会社の陰の組織。

「他にも色々面倒な規則があるんだけど、それは後々ね。次はボスの食堂。奥にあるのよ」

部屋の鍵を渡してもらい、それをジャケットのポケットにしまう。  
アビゲイルの後に続いて、辺りに目を凝らしながら廊下を進む。

私の部屋から幾つ目の角をどちらに曲がり、向かっているのか覚えなければならぬ。

息詰まるような緊張は続いていた。

「ここよ。奥がボスの席。あの人はほとんど一人で食事するんだけど」

扉を開けると、細長いテーブルが見えた。白いテーブルクロスがかけられた様は道のようなのだ。

両脇の壁には高級そうな食器棚が並んでいる。中の食器もおそらく最上級の品だろうと想像できる。

「給仕係がないから、あなたに配膳までしてもらうことになるわ。うちのボスは厳しい人だけど頑張っつてね。とにかく時間厳守は基本だから。朝は八時。昼は十二時。夜は二十時ね。慣れるまでは私が様子を見に来るから」

「分かりました」

ポケットから取り出したメモに書き込む。

そして、自分の部屋からの地図を描こうとして止められる。文字は良いが図面は駄目だとのこと。始点と終点は明らかにしてはいけないと。やっぱり厳しい。

「あとは厨房ね。続きの食堂は一般の隊員が主に使っているの。こつくて色気のない連中よ。彼らの食事も用意してもらっつわ。遅番、早番もあるし、時間はまちまちになるわね」

頷きながら、ボスの食堂から厨房までの道順をメモに書き込む。

ページを変えて……左、右、真っ直ぐ、左、右、右と。

「言い忘れていたけれど、三ヶ月は仮契約の期間で時給制になるわ。その期間を超えたら自動的に本契約へと移行する。本採用になったら……ま、その話はその時にしましょう。仮契約の開始は明日二十時のボスの夕食からね」

「はい」

一応そのこともメモしておこう。

顔を上げると、立ち止まったアビゲイルを追い抜いてしまった事に気付く。慌てて戻ると、彼女は窓を覗きこんでいた。

「ボスたちがお帰りだわ」



私も並んで目を凝らす。

止まった車のヘッドライトが見えた。三台の車。黒塗りなのだろう、はつきりとした形は見て取れない。

ドアの締まる音が聞こえてきた。いくつかの人影が見える。

「ミッションの後はまずいわね」

アビゲイルは独り言を呟く。

「いらっしやい」

彼女は窓に張り付く私の腕を取って歩き出した。

#### 4・マスティマの城（後書き）

次回予告：ミシエルの前に姿を現したマスティマの幹部の男たち。  
彼女はその中に幼い自分を救ってくれたであろう人物を見つける。

第5話「ミッション後」

## 5・ミッション後

程なく廊下の先に五人の男たちの姿が見えた。明かりの下に浮き上がる闇の色。

彼らの着衣が黒だったため、それは一角を埋め尽くす塊のようにも見えた。

体に緊張が走る。彼らの中に幼い私を救ってくれたあの夜の男が含まれているかもしれないのだ。

黒髪の青年が先頭を歩く。なびくコートに襟の開かれた白いシャツ。ネクタイは緩められ、両手には黒くぴったりとした革手袋を着けている。

背丈は私より三十センチほど上に見える。百八十以上あるんじゃないだろうか。

鋭い目は随分前からこちらを捉えている。ライフルを片手にしていることから、スナイパーなのだろう。ボスのボディガードというところだろうか。

その後ろに見えているのはこれまた黒髪の男だった。彼は私たちを見ると笑みを浮かべた。黒い巻き毛が、優しい笑顔に柔らかさを付け加えていた。

コートは着ていないが、黒い上着を身に着け、しっかりとネクタイを締めている。胸に挿しているのは濃い紫色のポケットチーフ。歳は三十代後半くらいだろうか。落ち着いた雰囲気のある男だった。年齢からして彼がボスなのだろう。

私を救ってくれた人に違いない。

脇にいるのは赤毛の青年。ノーネクタイのシャツに上のほうまでボタンをとめたコート。襟から束ねた癖のある髪がのぞいている。彼は顔をしかめ、不審そうに私を見ていた。

「お疲れ様」

アビゲイルが声をかける。赤毛の男が一転して嫌味ない笑顔に向

ける。

「ミッションは完璧だぜ、アビー。ボスが出る幕はなかったんだがな。……んで、その若造は誰だ？」

「新しいコックよ。マイケルって言うの」

「よろしくお願いします」

アビゲイルの紹介に慌てて挨拶をする。

すると、その横にライフルを持った目つきの悪い男が寄って来た。私には目もくれず、彼はアビゲイルにそのライフルを押し付けた。

「壊れた」

低くよく響く声だった。その言葉にただ彼女は銃を見下ろした。

銃床が欠けていた。それで全てを悟ってしまったようで、彼女は憤然と彼を見やった。

「壊れたじゃなくて壊したんでしょ」

彼女の怒りを含んだ言葉など何処へやら。

彼は私たちの傍を通り抜けていった。最後に恐ろしく迫力のある一瞥を私にくれて。

世界が切り取られて時間が止まったかように思われた。頭から冷や水をかぶせられたような感覚。

なんとという恐ろしい目をした人だろう。息をするのも忘れたほどだ。

「まったく自分のじゃないと扱いが荒いんだから」

収まらないアビゲイルに彼女と同じ赤毛の男が笑いを浮かべる。

「そいつで敵の顎、砕いてたからな」

その言葉に彼女は絶句した。

銃をそんな風に扱うなんて。あの目つきの悪い人ならやりそうだ。できるだけ関わりたくない。

「お前若いな。それに小さいし細い。そんなんでもマステイマのコックが務まんのか？」

赤毛の人が私の顔を覗き込みながら、頭をぼんぼんと叩く。上から振り下ろしてくるので、はっきり言って痛いくらいだ。

あの目の怖いボディガードより少し低めだが、私との身長差は二十センチはある。

「ジャズ、最初から脅さないの」

アビゲイルが助け舟を出してくれたお陰で、連打から開放された。

「マイケル、彼はジャザナイア。私の弟で部隊長よ」

「よろしくな、若いの」

今度は腕を叩かれる。そこで彼は一瞬真顔になった。

「おっ、いい筋肉してるじゃねえか」

「料理のためですから」

私は胸を張る。その言葉に偽りはない。料理人としての意地だった。

にやりと彼は笑った。

その後ろからぼそりと「面白れーの」と言う声と馬鹿にしたような鼻息が同時に聞こえてくる。

ジャザナイア隊長は肩越しに背後の二人を見やった。彼らは黙り込んだ。

「まあ頑張れや」

私へと視線を戻すのにこやかに言う。

そうして、黒いコートの男達と共に歩き去っていった。

ジャザナイア隊長はいまいち距離感が分からないが、悪い人ではなさそうだと思った。

それにボスも親しみの持てる感じのようだ。

歩きながら隊長に「ヘラヘラ笑うな。姉貴に色目使ってるんじゃないやねえ」って、突っ込まれていたし。

アビゲイルは彼らを見送りながら、溜め息をついた。欠けたライフルを恨めしそうに見つめている。

私には銃の修理の大変さや費用など分かるはずもなかったが、彼女の憂鬱さだけは感じ取れた。

私の視線に気付いた彼女は気を取り直して言った。

「あとは厨房ね」

耳にして今まで以上に身が引き締まる。向かいながら胸は高鳴る。私の仕事場。全てを注ぎ込む勝負の場所。妥協は許されない聖域。マステイマのその場所に立つためにどれほどの積み重ねがあったか。

それが今日の前に、壁一枚を隔てた向こうにあるのだ。扉の前で立ち止まり、興奮は最高潮になる。

アビゲイルが開け、電気を付けてくれた。

……とたん、息が詰まりそうになる。何なの、これは。

## 5・ミッション後（後書き）

次回予告：とうとう足を踏み入れたマステイマの食堂。ミシエルは、  
そこで宿敵にして最強の脅威と対面する。

第6話「隠れ潜む脅威」

## 6・隠れ潜む脅威

目の前にした食堂。二十人ほどが入れるそのスペースに並べられたイスとテーブル。その上に散らかったゴミ。

干からびた食べ物や汁が染み付いている。これでは床もテーブルの上もほとんど差はない。

ゴミ箱に溢れているインスタント食品の包装。そして、食べ残し。匂いも相当なものだ。

「これは……酷いわね」

アビゲイルも言葉を詰まらせた。思いっきり眉間に皺が寄っている。

「仮契約の開始は明日の午後からでしたよね？」

私の確認に、口と鼻を手で覆っている彼女は頷く。

「今から掃除してもいいですか。こんな所で食事したら病気になっちゃいますよ」

マステイマが男所帯だとしてもこれは酷すぎる。アビゲイルもそれを認めた。彼女は深く頷くと、掃除道具の手配をしてくれた。

雑巾やモップ、箒にちりとり。掃除機も。それにゴミ袋。

掃除に取りかかるべく、ジャケットを脱ごうとしてやめる。

誰が訪れるかしのれない。薄いシャツでは女であることが分かっってしまう可能性だってあった。仕方なく上着を着たままで掃除を始める。

別の仕事があるからとアビゲイルは出て行ってしまった。

まずはゴミ箱からあふれたゴミを袋に入れる。袖を汚さないように気をつけて。

こういうところにはアレが出る。

普通なら考えそうなことだ。だが、私は初めて取りかかった仕事に夢中になっていて、そんなことは思いもしなかった。

よく知ったあの音を聞くまでは。丸まった紙が地面を転がるよう



な音。

ぎくりとして振り向くとソレはいた。

油でも塗っているかのような艶やかさ。長い触角。まさにアレだ。六本足の超危険生物！

一匹ではない。私の足元にも。

今まさに足の甲の上を通りかかっている。革靴の上からでもその感触が伝わってくる。

気が付いたときには悲鳴がもれていた。まったく素の声。誰が聞いても女の声だと分かる。

慌てて口を塞ぎ、廊下に飛び出して回りを確認する。

幸い誰もいなかった。誰か通りかかる様子さえない。アビゲイルももう遠くに行行ってしまったようだ。

ほっとしながらも食堂にはもう戻れない。

扉を閉めて考え込む。開ければいる。私の苦手なゴの付く生き物たちが。

他の昆虫に罪はない。アレが特別なのだ。

何が嫌いってあのフォルム。メタリックとは違う、触ったらベタベタしそうな艶のある体。動き方も嫌だ。素早いくせに、時々はたと立ち止まる。何を考えてるのか分からない。

人類よりもずっと昔から地球に棲んでいた大先輩ではあるが、残念ながら敬意なんて感じない。

アレとのバトルロイヤルは人類滅亡の日まできつと続くと思う。

私は頭をめぐらせる。ここにじっとしているわけにもいかない。

思い切って入って戦う？

箒で叩くか……まともに見れないほど嫌なのにヤツらに当たるはずもない。

掃除機で吸う……アレがまた忘れた頃に吸い込み口から出てくるかもなんて考えるだけでもホラーだ。

殺虫剤を借りに行く……でも、殺虫剤ですぐに効かないって言うし、飛んだアイツらは方向感覚ないからこっちへ来るかもしれないな

いし。

こうして考えをめぐらせているだけでもぞっとする。扉の前で苦悩すること数十分。

「何してんの？」

突然、声をかけられた。

振り返ると、黒いハーフコートのポケットに両手を突っ込んだ銀色の髪の男がいた。

長い前髪で右目は殆ど見えない。年は私と同じかもっと若いようにも見える。少年を思わせる華奢な体格だが、もちろん私よりはずっと背が高い。

さつきジャザナイア隊長の後ろにいた二人のうちの一人だ。

「いえ、中を掃除してたんですけど、アレが出たもんで」

「アレ？」

上ずった私の声に首をかしげながらも、彼は躊躇なく食堂の扉を開けた。

「ああ、コレね」

彼は振り返って片手を突き出した。摘むようにして持っているのは長い黒っぽい紐のようなもの。そしてその先にはよく知った楕円の形が。

私は声もなく後退りした。

素手で持っているアレを。どうやって、いつ、手にしたなんか問題ではない。

よほど酷い顔をしていたのだろう。その人は嘔き出した。

「オモチャだよ、オモチャ。面白れー奴だな」

私に向かって投げてよこす。思わず横に飛び退く。

オモチャだと言われても嫌いなものは嫌いだ。よく出来ているし……。というか、オモチャでもじっと見ていると鳥肌ものだ。

だが、それは甘いものだった。距離を置いてアレのオモチャをやり過ごして、食堂の入り口に立つ。

そして目にしたもの。私は呻いて口を押さえた。

アイツらが死んでいる。それも床の上で串刺しになって。貫いているのはダーツの矢。

私は半分涙目で隣の銀髪の男を見やった。彼はにやっと笑うと廊下を振り返った。

「おいお前、何人が連れて来い」

通りかかった黒いジャケットの男に声をかける。

「はい、 그레이さん」

男は慌てて今来た道を走って戻っていった。 그레이と呼ばれた銀髪の男よりも年上に見えたが。

私が顔を見上げると、彼は扉に手を付きながら、再び唇の端を上げて笑った。

## 6・隠れ潜む脅威（後書き）

次回予告：食堂の掃除を終えたミシエルたち。彼らの耳に突然響いてきた爆発音。動揺するマステイマ隊員。現場に駆けつけた彼女が目にしたものは……。

第7話「初日の事件」

## 7・初日の事件

グレイの呼びかけて集まってきたのは五人。いずれも黒いジャケットを身に着けている。

袖にエンブレムもあり、マステイマの制服だと分かる。皆体格もいい。

お陰で掃除はあっという間に済んだ。

綺麗になった食堂を見て思わず笑顔になる。やっぱり食事をするところは清潔でない。

あとは厨房だが、ここ最近使われた形跡はなく、埃を取るだけで済みそうだ。

お礼を言おうと食堂に戻ると、グレイが棚の奥からなにやら引っ張り出していた。

「あんだ、美味いコーヒーは入れられるか？」

目の前に置かれたのはコーヒーメーカーとコーヒー豆の缶。

「お好みの味かどうか。味見していてももらえませんか。皆さんも一緒に」

掃除を手伝ってくれた、せめてものねぎらいに。

グレイは頷き、男達は顔を輝かせた。コーヒーでこんなに喜んでもらえるなんて、料理のしがいがありそうだ。

豆をひいたり、ミルクや砂糖を搜したり、コーヒーカップを用意したり、皆協力してくれた。

食堂に香りが広がる。コーヒーが溜まっていくサーバーに熱い視線が集まる。皆の期待が高まるのが分かった。

その時だった。爆発音が遠くに聞こえ、振動が伝わってきた。

グレイが舌打ちをする。男達を見ると彼らは明らかに動揺していた。

「何事ですか？」

私が問うと彼は一度手首のブレスレットを見やっつて、それから笑

顔を向けた。

「なんでもない。まあ気にすんな」

なんでもない……なんて訳がない。何かの事故か、敵襲か、どちらかだろう。

開け放しの扉の向こうを苛立ちを口にしながら駆けていくアビゲイルの姿が見えた。

私は彼女の後を追った。グレイの止める声が聞こえような気がしたが構わなかった。

向こうはハイヒールだというのに、悲しいかな足の長さの違いか私よりずっと早い。引き離されそうになりながらも必死に走る。

そして、立ち止まった彼女を見つけたとき、その足元に人がいるのが見えた。

廊下の壁に寄りかかるようにして座り込んでいる。黒いジャケット、この人もマステイマの人だ。

「下手をやったわね」

手早く上着をはだけさせ、シャツの胸に手を当て触診しながら、彼女は半ば呆れたように言う。

「僕は……決済を伺いに来ただけで。サインをもらいに」

その若い男は喘ぎながら言った。ボードに挟んだ書類を握り締めている。

男の顔が一瞬引きつる。大きな音を耳にして、思わず振り向くと彼の正面の扉が閉まったところだった。

遅れてアビゲイルもそれを見やった。

「今近寄るなんて自殺行為……」

言いかけて私の存在に気付く。

「あら、マイケル。何をしてるの、こんな所で」

心なしか声が殺気立っているような。

私が言葉を返そうとしたとき、後ろから腕を取られた。

「ちよっと気になったただけだよな。今からコーヒー入れてくれるんだよな」

現れたのはグレイだった。慌てたように私を後ろに引っ張っていく。

「コーヒーができた頃だ。さあ、行こうぜ」

私の意向など関係なしだ。有無を言わず引っ張られ、食堂まで連れ戻される。

扉を閉めると、彼は深い溜め息をついた。

「無茶をするな、あんた。初日からあんなのに巻き込まれたいのか」「でもあの音、ただごとじゃないですよ」

私の言葉にグレイは苦笑を浮かべる。

そして、自分の手首のブレスレットを外すと私に押し付けた。

「緊急連絡用だ。付けてろ。メッセージと色で連絡が来る。赤でEコードは敵。数字五段階で敵の規模を表して五が最大。黄色が召集青色が業務連絡だ。今のは何も出なかったから、事故でも敵襲でもない」

だったら何だというのだろう。

答えを待つも彼はそれ以上何も言わなかった。私の疑問など無視して、サーバーからカップにコーヒーを注ぎだす。男達はもういなかった。仕事に戻らせたと言った。

「あんた、ボスに会ってみてどうだった？」

ブレスレットを付けていると、彼はコーヒーを口に含みながら問う。ずっとあんたと言われっぱなしだ。なんだか居心地が悪い。

「わ……僕の名前はマイケルですよ。グレイさん」

「グレイでいいよ。んで、どうだったんだ、ミック？」

いきなり呼び方愛称だ。でも先輩だから仕方ないか。

私は廊下で会ったボスの微笑みを思い出した。

「優しそうな方だと。まだちゃんとお話はしていないので分からないですけど」

その答えにグレイはコーヒーを噴き出した。

「大丈夫ですか？」

気管に入ったようで咳き込んでいる。彼は涙目になりながら私を

見た。顔をしかめながらも唇は笑っている。

「面白れーの。最高だな、ミック」

何が最高なのか分からないが、とりあえずは褒め言葉なのだろう。私は催促する彼に二杯目のコーヒーを注いだ。これも気に入ってもらえたようだ。

結局、他の人たちに用意した分全てを飲み干してから、彼は上機嫌で食堂から出て行った。

あんなにカフェインを摂って眠れるのだろうか。もう深夜だといふのに。

私もゆっくりとは眠れそうにない。明日の夕刻からが契約開始だとしても。

やることは沢山ある。まずは食材の確認。それから厨房の掃除だ。廊下を通りかかった人にアビゲイルの連絡先を聞いて、厨房の電話からかける。

彼女は食材については心配ない、明日正午までには色々と届けるように指示しているからと教えてくれた。

調理器具を使いやすいように並べなおし、包丁を研ぐ。手に馴染まず、満足のいく道具ではないが、とりあえずは私の物が届くまでの辛抱だ。

全てを終えて、道順を書いたのメモを見ながら自分の部屋に戻った頃には、三時を回っていた。

服を脱ぎ、サポーターを外し、ようやくほっとする。

Tシャツに下着だけとは心もとないが、着替えもないし、スーツを蹴だらけにするわけにもいかない。私はベッドに潜り込み、明日（正確には今日だが）のことを考えた。

なんだかまだ実感がわかないが、今自分はマステイマにいるのだ。仮契約ではあるが念願だったマステイマのコックになれたのだ。

興奮に眠気が訪れることはなく、やっと眠りに付いたのは日が昇り始めた頃だった。

そして、私は夢の中でもマステイマのコックとして働いていてい



た。

## 7・初日の事件（後書き）

次回予告：仮契約の日を迎えて働き始めるミシエル。マステイマの隊員たちの期待に応えようとする。

第8話「マステイマのコック」

## 8・マステイマのロック

目が覚めたのは午前八時。

三時間ほどしか眠ってはいないが、高まった気分には眠気は感じない。

急いで身なりを整え、厨房に向かう。

食堂に入ると、テーブルに白衣が置かれているのに気付いた。メモが上に乗っている。

『あなただよ。着替えてね。アビゲイル』

早速上着を脱いで袖を通すとサイズも丁度いい。真新しい白衣に気も引き締まる。

まずはコーヒートの準備だ。

それから冷凍庫にあった食パンで朝食にしよう。そういえばベーコンもあつたし、焼いてみるか。野菜もほしいところだがそれは仕方ない。届くまで待つしかない。

用意を始めると、コーヒートの匂いに釣られてきたのか、男が一人顔を覗かせた。

「コーヒートありますよ。どうぞ」

厨房からの言葉に笑顔で入ってくる。一人だけではない。三人いる。

「俺たち遅番で今上がりなんだ。丁度コーヒート飲みたいと思ってたら、いい香りがしたから。缶コーヒートなんて不味いから飲めたもんじゃないし」

「そうそう、これには比べられないな」

彼らは本当においしそうに飲んでくれる。

「パンとベーコンもいかがですが。ちょうど焼こうとしてたところなんです」

三人は大喜びだ。こんなちょっとしたものでしかないのに。

昨日の食堂の掃除を思い出す。あんなのばかりを食べていたから

なんだろうな。

過酷な労働にあれでは体が持つわけがない。これから栄養面も良く考えて食事を作らないと。

軽食を平らげ、礼を言いながら出て行く彼らを見送り、後片付けをしながら考えをめぐらせる。

栄養もあつて美味しい食事。目指すはそれだ。献立表を作ったほうがいいかもしれない。アレルギーのことも考えておかなければ。

私は厨房の電話の脇に置かれたメモに料理の名前を書き出していく。まずは一週間の献立。バランスを考え、料理を入れ替えたり、素材を変えてみたり。

そうこうしているうちに時間は瞬く間に経ち、アビゲイルがスーツ姿の男を連れてやってきた。ディケンス本社からやってきた食料調達係だという。

食材の入ったダンボール三箱が台車に積まれている。溢れんばかりの野菜。それに肉。調味料や酒の瓶まで入っている。

中をチェックし、追加したい物を告げる。メモを取ったその男は空になった台車を転がしながら帰っていった。

「これで料理のほうは大丈夫かしら」

野菜を整理して冷蔵庫に入れる私に、背後からアビゲイルが声をかける。

「はい」

冷蔵庫を閉め、私は振り返った。

「これだけあれば、大概のものは作れますよ」

中華だろうがイタリアだろうがフランスだろうが日本だろうが、料理であればほぼ何でも作れる食材の多さだ。

アビゲイルは微笑みを浮かべた。だめだ。この人の笑顔を見るとやっぱり赤面してしまう。それくらいに艶やかなのだ。

「……ところで、ボスの好きな物と嫌いな物って教えてもらえますか。あと食物アレルギーは」

気を取り直して問うと、彼女は思い出すように首をかしげた。

「アレルギーはないわ。好物はとにかく肉。牛肉ね。それにお酒も好き。ワインは毎晩欠かさないわね。嫌いなものはありすぎて私も分からないわ」

あまり参考にはならない答えだ。肉と酒だけで食事なんて作れない。まして栄養のバランスを考えてとなると……。

彼女は考え込む私の肩に触れる。

「歴代のコックたちがメモを残しているんじゃないかしら。厨房になかった？」

首を横に振る。昨日の掃除のときにもなかったし、今日もそんなものは見かけなかった。

棚も引き出しも全部見たのだ。間違いはなかった。

「探り探り行くしかないわね。あなたなら大丈夫じゃないかと思うわ、私」

彼女の声がほんのちよっぴり自信なさげに聞こえたのは、私の気持ちからだろうか。

肩を叩かれ、指差した先を見ると、食堂の扉から覗いている男達の顔が見えた。

「早速噂が広がったみたいね」

アビゲイルは食堂まで戻ると彼らを追い払おうとする。

「彼の契約は今晚のボスの食事からよ。あなた達の世話はまだ焼けないわ」

彼女の登場に彼らは明らかに怖気づいている。

「でも、姐さんねえ」

「あいつら……ベーコン」

「俺たちも……」

途切れ途切れだが、声が聞こえてくる。

私が食堂へ出ると、アビゲイルが困った顔をして振り返った。そこで、私は食堂の扉を全開にしながら言った。

「大丈夫ですよ。もうお昼ですもんね。何か作ります。何か……そう、チャーハンはいかがですか」

冷凍庫に大量のライスがあつた。あれを使えば、本格的ではないにしる、そう時間はかからず作れる。

「チャーハン、中華料理か！」

男達は廊下で歓喜の声を上げる。

数えると十人いる。計算外だが何とかなるだろう。多分。

中華鍋がないからフライパンを代用だ。それを二つ使つて両手で一気に作る。それしかない。

お師匠様、感謝します。

『片手を怪我したら料理が出来ないなんて料理人ではない。両手を同じように使えて初めてプロだ』

そう教えてくれたのは、つい最近まで私の修行をしてくれた中華料理の達人である、師匠だった。

それがここで大いに役立つ。

卵を割るのも、ご飯を宙で返すのも二つ一度で出来る。両手を鍛えたお陰だ。

男達はカウンターで歓声を送つてくれた。その後ろでしばらく笑つて見ていたアビゲイルだったが、いつの間にか姿を消していた。

付け合せのスープをカップに注ぎ、チャーハンを皿に載せ、彼らに振舞う。

皆豪快にそれも美味しそうに食べてくれる。男の人の食事って見えていて気持ちがいい。

そして食べ終えた彼らは口々に礼を言つて、去つていった。

## 8・マステイマのコック（後書き）

次回予告：マステイマのコックとしての正式な初仕事。夜を迎えたボス専用の食堂でミシエルを待っていたのは……。

第9話「ボスの夕食」

## 9・ボスの夕食

さて、そろそろボスの夕食の準備に取りかからなければ。

十個の皿とカップを洗い終え、調理器具も片付けた私は考え込む。それから、皆の分もだ。少なくとも十人分は用意したほうが良さそう。

まずは何を作るかだ。最初だから得意なものを作るのが無難なんだろうな。

やっぱりイタリア料理にしようか。一番年季が入っているし、自分なりのアレンジもききやすいし。

食材を見て回りながらメモを取る。

牛肉もある。それを使った料理をメインにして。

お酒も必要だろう。ちょうどイタリアワインがダンボールの中に入っていたし。

一時間程かかってなんとかまとまった。あとはもうこれで作るしかない。決めてしまえば早いものだ。

下ごしらえを終えた後、ボスの食堂との間を何度か行き来してみ。道を間違えました、迷って遅れました、なんて許されるわけではない。運搬用のワゴンと食器を持ち出して、厨房に置いておく。

鍋に火を入れて、壁に掛けられた時計を見上げ、息を吐く。

あと二時間。長いようで短い。いや、短いようで長いのだろうか。私はテスト前の学生のように落ち着かない気分でその時を待っていた。

午後八時を十分前にして、料理を皿に載せる。

そして、ワゴンを押して廊下へ出て、ボスの食堂へと向かう。

扉の前で腕時計を確認する。三分前だ。ノックをして部屋に入ると、奥の正面の席に人が座っているのが見えた。

落ち着かずに見渡すと、壁際に立つアビゲイルと目が合う。さす



がに白衣は着ておらず、スカートにマステイマの制服であろう黒い上着を身に着けていた。こちらにウインクをくれる。

彼女の存在に勇気をもらって、私は部屋の中を進んだ。

テーブルの横にワゴンを止め、食事の準備を始める。皿の配置は頭に入っていたし、置き方だつて自信があつた。だてに子供の頃からウエイトレスをやつてはいない。

だが、私の手は皿を持ったまま、完全に止まってしまった。

アビゲイルを振り返る。彼女は何かと近寄ってきた。

「ボスは……後でいらつしやるんですか？」

問いかけに彼女はまるで要領を得ないという顔をしていた。

「この人、ボディガードの人ですよね？」

念押ししてみる。彼女は目を見開いて私を見つめた。

「早くしろ」

ボスの席に着いた人が低い声で凄む。上着を脱いでちゃっかりボスの場所にいるなんて、ずうずうしい。

この黒髪の人ボディガードだ。廊下ですれ違ったライフルを持っていた人。どんなに怖がらせても、ボスのために作った料理を渡したりするもんですか。

「ちよつと、マイケル」

彼女は壁際に私を引っ張る。

「彼がマステイマのボスよ。何言ってるの？」

「え？ あのジャザナイア隊長の横にいた人じゃ……」

「あれは部隊が捕縛した犯罪者よ」

彼女の答えに一気に血の気が引く。どうも私はとんでもない勘違いをしていたらしい。

にしても、あんな温和そうな犯罪者なんて反則だ。どう見ても椅子に座っているこの人のほうが悪者に見える。

今も彼は恐ろしい目つきで私を睨みつけている。全身の血が凍りつきそうだ。

「いつまで待たせる気だ？」

冷たい刃のような声。含まれる怒りの度合いが増した気がする。私は慌てて準備を続けた。ボスの視線をかわすようにして。グラスを返しかけること一回。それだけで済んだのは奇跡だ。

彼はナイフとフォークをとる前にスープ皿に触れた。黒い革手袋をつけたままで。

もともと上がり気味の眉がさらに吊りあがる。彼が眉を寄せたせいだ。

それから、いきなり牛フィレ肉のソテーに手を付けた彼は一口だけで、ナイフもフォークも置いてしまった。

「おいお前、こんな不味いものを俺に食わせる気か？」

迫力のある声にあの目つき。人を威嚇するには効果抜群だ。おまけに苛立っているのが分かる。

しかし、不味いと言われるとは。味見はちゃんとしたし、そこまでの味ではないと思う。

だが、相手はマステイマのボスで、もちろん私のボスでもある。私は言葉もなく、手の付けられていない料理を見下ろすだけだった。

「アビゲイル、いつもの店に電話しろ。今から行く」

彼の言葉にアビゲイルは肩をすくめ、上着のポケットから携帯電話をとった。

ボスは席を立とうとしていた。

そんな。こんな風に最初の食事が終わってしまうなんて。私はテーブルに歩み寄り、ボスの傍に立った。

「何処がいけなかったんでしょうか？」

アビゲイルがあっけにとられて、私たちを見つめている。

「ああ？」

ボスは立ち上がり、私を見下ろした。かなりの身長差になる。怖いけど、今さら後には引けない。

私は恐怖を押し殺し、彼を見上げた。

「自分で考える」

次の瞬間、何が起こったのか分からなかった。

頭に温かいものが降り注いだ。その後が続く硬い感触。顔を滑り落ち、胸を伝わって、絨毯に広がるそれを目にするまでは。

私の料理だ。彼は私の頭にスープ皿を投げつけたのだ。

思わず力が抜ける。膝を崩して座り込む私の横を、上着を羽織ったボスが通り抜けていった。

頭を下げると皿も落ちてきた。

ボスが扉を閉めるのと皿が床に落ちるのは同時だった。

茫然と座り込む私にアビゲイルが声をかける。

「私がボスをちゃんと紹介しなかったから。ごめんなさいね、マイケル」

違います、アビゲイル。確認しなかった私が悪いんです。

心の中で思うも言葉として出てこない。ただ、私にできたことは床を片付けることだけ。

体を動かしていないと涙が出てきそうだった。悪寒を感じているように震えが走る。

アビゲイルの慰めの言葉に何も返すことが出来ないまま、私は片付けを終えると、ワゴンを押してボスの食堂を後にした。

## 9 ・ボスの夕食（後書き）

次回予告：ボスの仕打ちにショックを受けるミシエル。食堂で待っていたグレイは、彼女に過去の料理人たちが残したメモを見せるのだが……。

第10話「料理人の覚悟」

## 10・料理人の覚悟

厨房に戻つてくると、続きの食堂に一人の男がいた。グレイだ。彼は飲みかけのコーヒーを置いて、気の毒そうに私を見た。一目で何が起こったのか察したようだ。

「派手にやられたな。まあ、初日の洗礼はこんなもんだろ」  
彼も次々と慰めの言葉を口にする。

私は何も言わず、ワゴンから下した食器を厨房の台に並べていった。

「こんな目に合うんだ。今辞めたって誰も文句は言わねーさ」

何も言葉がないせいとか、彼はそんなことを言い始める。うつむく私の顔を覗きこんで。

「誰がつ……」

不意にもれた、たった一言が引き金になる。

「誰が辞めるもんですか！」

私は叫びながら勢いよく顔を上げた。

おかげで、グレイと頭をぶつけてしまった。

彼は呻きながら額を押さえて後退りした。

「あんな目に合つて辞める？ 冗談じゃないですよ。ボスには絶対負けるもんですか」

あんな目つきが悪いゴロツキみたいな人。気持ちを含めて作った料理を粗末にされて、逃げ出すなんて自分が許せない。絶対に。

いつか彼には美味しいと言わせてやるんだ。炎の決意は私を昂ぶらせる。

グレイはぼかんと私を見ていた。

そして、笑い出す。まったく愉快だと彼は腹を抱えた。

「ミツク、お前みたいなのを待つてたんだ。面白ろ過ぎだぜ」

どうもこの人は何でも面白がる癖があるようだ。ただ、今そんなことはどうでもいい。

私はボスが手を付けた唯一の皿の料理を取り出したナイフで切り分け、口に運んだ。一口で不味いと言われたものだ。

何が不味いのか見極めなくては。よく味わってみるがまるで分からない。

そして、次に思い出したのは、ボスが最初にスープ皿に手をやっていったことだ。

私の頭にかけられたもの。

あれが引き金だとすると温度しかない。確かにかけられたとき、熱くはなかった。だが、確信はもてない。

皿の前に、腕を組んで考え込んでいると、グレイが目の前にA5サイズの古臭いノートを差し出した。

「歴代のコックの記録ノートだ。参考になるかもな」  
アビゲイルが言っていたものだ。

彼が持っていたのか。道理で見つからないはずだ。

私は受け取ると、ページを開いた。日付順になっているから後ろのほうが新しいものになっている。

最後に書き込まれたページを見ると、そこにあったのは献立やレシピなどではなかった。

『もう駄目だ。俺はもう耐えられない。』

これを見た者へ。このときすでに俺はここにはいないだろう。万歳。

最後の忠告だ。ボスには逆らわないこと。

逆らったら何をされるか想像しただけでも恐ろしい。今では夢にまで見る。

現実と夢の境目がなくなってきた。

四六時中付きまとうのはボスの顔。ボスの仕打ち。いくら高給でもここは我慢できない。

俺は辞める。自由の身だ。自由、なんという素晴らしい響きだろ

『し』

最後のほうはミミズが這ったような文字。

何これ。まるで無人島漂流者が投獄された者の書き遣しのようだ。私はグレイを見やった。

彼の判断は正しかったのだろう。

こんなものを先に見せられていたら、私だって決心が揺らいでいたかもしれない。

ボスの献立表のページを見つけてさらに驚く。

殆どが肉料理だ。付け合せも気持ちだけ。サラダなんかもない。

きつとボスの恐ろしさに耐えかねて、こんな献立になってるんだろ  
う。

レシピのページも無茶苦茶だ。調味料の量からして味が濃い過ぎ  
る。

こういうのは、旦那を病気にして早死にさせたい極悪妻の料理だ。  
こんな料理をずっと食べていたら、体調がおかしくなるに違いな  
い。

若いうちはともかく、長生きできるとはとも思えない。もしか

したら、ボスが短気なのはこの傾榮養のせいかもしれない。

『温度に気をつける。熱過ぎても温すぎてもボスは許さない』

この走り書きにはアンダーラインが二本も引かれていた。

思わず笑いがもれてしまう。やるべきことははっきりとしている  
ではないか。

グレイがぎょっとしたように私を見ていた。

「ボスの体質改善計画、始めます」

私の宣言に彼はさらに面白かった。

そう、コックはコックの出来ることをやればいいのだ。

## 10・料理人の覚悟（後書き）

次回予告：覚悟を決めたミシエルの奮闘は、マステイマ隊員たちの間で噂となる。果敢にボスに挑む彼女であったが……。

第11話「天使と悪魔」



## 11 天使と悪魔

朝食作り。それは夕食以上に頭の痛い問題だった。

昨日の夕食のことだけではない。何をどう作るか以前に大きな問題があつた。それはポリユームだ。

我が家の朝食はいつもしっかりとしたものだった。十年前までは父が、それ以降は祖母が作っていた。

イギリス人と日本人。どちらもポリユームのある朝食を好む傾向があるらしい。周りのイタリアの友人に聞くとまったく違っていた。朝からベーコン、焼き魚と聞いて目を丸くしていた。

もちろん、その国民の傾向だけではない。個人差も大きい。

ボスが朝食に重きを置いているか否か、それが核心だ。

アビゲイルに聞いてみるが、どちらとも言えないとの要領を得ない回答が返ってきた。

コーヒーだけで済ますこともあるし、しっかり食べるときもあると言ふのだ。

一番たちが悪い。だけど、大は小を兼ねる。

第一回目の朝食は代表的なイングリッシュ・ブレックファストに決めた。

なんといつても、ここはイギリスだし。その国の例に沿ってみようではないか。

失敗だった。

料理に手をつけないのはもちろんのこと、最初に手にしたコーヒで勝負は決まってしまった。

一口飲んで、ボスは私を視線で突き刺した。

「これはなんだ？」

「……コーヒーです」

凝視の拷問、約三秒。

カップが宙で返された。足元に注がれるコーヒーに慌てふためく。絨毯に広がるシミに思わず手をさし伸ばす。

コーヒーには届かなかったが、遅れて放られたカップはダイビングキャッチでなんとか受け止めた。

「エスプレッソじゃねえ」

それは当たり前だ。エスプレッソメーカーで作ったコーヒーじゃないから。

カップを両手で抱えたまま腹ばいで倒れる私の傍を通り抜け、ボスはさっさと出て行ってしまった。

起き上がると絨毯のシミが私の白衣に思いつき移っていた。

朝のコーヒーはエスプレッソ。それがボスから学んだ最初の教訓だった。

エスプレッソメーカーがボスの食堂にあることを教えてくれたのはアビゲイルだ。

食器棚の下の段、木の扉に隠されたそれは、鎖を巻きつけられていた。鎖の先は棚の奥の板に螺子で固定されている。

前に何度かグレイが無断で持ち出したという。それでこんな嚴重になっているわけか。

だけど、こんな動かせない状態じゃ使えない。まさに宝の持ち腐れだ。

ドライバーを借りてきて、エスプレッソメーカーの解放に取り掛かりながら思った。これがコックの仕事なんだろうかと。

今朝はコーヒーだけだったし。

肝心な料理も一口も食べてもらわないければ話にならない。味だの量だの言っている場合ではない。

もっとも、調理にしてもなんとかこなしているという状態だった。器具がとにかく扱いづらい。手にフィットしないし、バランスも悪い。重さもしつくりとこない。

ここに着いた晩、すぐにイタリアの家に私の道具を送ってもらうように連絡した。だけど着くまでには時間がかかるだろう。

万全の体制で挑みたいところだが、こればかりは仕方ない。やっとの思いでエスプレッソメーカーを棚から取り出して、ワゴンに移す。汗ばんだ額を手の甲でぬぐった。前途は多難だが、何とかするしかないのだ。

驚いたことに、取り寄せた調理道具は夕方に届いた。ディケンス本社が関わってくれたためだ。拉致同然に連れてきたあのアーロンという人の罪の意識もあったのかもしれない。

特に皆の目を引いたのは大きな中華鍋だ。中国から持って帰ってきた、修行終了証明でもあるもの。

あまりの大きさに風呂なのか、中で魚でも飼う気かと聞かれたほどだ。

鍋を片手で扱う私を隊員たちのどよめきが包む。

これで少しはましな料理が作れるはずだ。使い慣れた道具を使えば効率も上がるに違いない。

だが、もちろん、それは甘い考えだった。

ボスとの戦いは連敗が続いている。

「熱い」「不味い」「温い」「味が無い」etc……。

時として感想はくれるようになったが、結果は同じだった。

皿を床に放られたこともあったし、足蹴りを食らってワゴンを道連れにひっくり返ったこともあった。

料理は何度も投げつけられた。思わず受け止めたときなど「何受け止めてんだ」と二皿目が来た。

ボスの住居は城の二画で執務室の奥にあるという話だった。だから、三食必要なのだ。

日に三度の真剣勝負。コーヒーはクリアした朝食、そして昼食で突っ込まれるのは、味はもちろんのこと、主に盛り付けや焼き加減だった。

「こんなふやけてんの食えるか」「これは目玉焼きじゃねえ」「八ムが湿ってんぞ」

これらを翻訳すると、スープのクルトンはカリカリでなければならぬ、目玉焼きは卵二つで両面焼き黄身半熟が常識だ、生野菜と焼いたハムは別の皿に入れる……である。

短くて説明なんかないボスの言葉。真意を推し測るだけでも大変だ。皿の数が少ない朝食、昼食でこれだ。夕食こそが本番だといつていい。

救いなのはボスが城にいない日、そして夜があることだ。ヨーロッパを始めとして世界各地を股にかけ、夜間を主な活動時間とするマステイマの任務のお陰だ。

最初の方こそ、仕事明けにも何か食べるべき、疲れている時こそ栄養ある食事をと用意していたが、すぐに考えを改めた。

ミッション開けのボスには関わりたくなかった。いつも以上に「機嫌斜めなのだ。恐ろしくピリピリしている。」

声でもかけようものなら、とぼつちりが来ることは身をもって知った。

そんな目に合いながらも、食事を出し続ける私の奮闘振りは噂になつたようだ。

食堂に出入りする隊員たちは皆同情的だった。彼らも私と同じような、いやもつと酷い仕打ちを受けた者もいた。

「僕なんか決裁のサインをもらいに行つただけなのに」  
見覚えのある男は泣きそうな顔で言った。

マステイマに着いて初日、爆発音を聞いて駆けつけたところに倒れていた男だった。

あの夜の出来事、今なら何が起こつたのか想像できる。止めたグレイの気持ちも。

過去に私の命を救ってくれた人だということ差し引いたとしても、お釣りが来る。

恐ろしいボスに耐えられる者はそう多くなく、マステイマの隊員たちの入れ替わりが激しいことはすぐに分かった。彼らは半泣きで最後の挨拶に来てくれたのだから。

女が入れないことも理解できた。あんな扱いをされたら続かないだろう。

ボスが影で皆から悪魔デビルだと呼ばれていても仕方ない。あの人の名前はデイヴィッドだというから、なるほど少し言葉がかぶっている。

私は父に感謝した。私の名前はミシエル。

イギリス人であつた父が、大天使ミカエルにちなんで付けてくれた名前だ。数々の悪魔を成敗した勇敢な天使。

少なくとも名前の上では私に軍配が上がっている。それを考えただけでも、また今日も一日耐えていける。

応援してくれる声と料理を美味しく食べてくれる皆の存在が私をまた強くしてくれるのだ。

私は胸を張る。そして、もう一枚の白衣とタオルを厨房に準備してから、ボスの食事を載せたワゴンを押して行った。

## 11・天使と悪魔（後書き）

次回予告：静かな朝の空気を切り裂く悲鳴。それは城の一画から聞こえてきた。通りかかったミシエルは思わぬものを目撃することになる。

第12話：「モーニングコール（前編）」

注）デイヴィッドは聖人の名前にもある、歴史ある美しい名前だと思っと思っています。

ミシエルの主観としてああいう表現になってしまいました。著者はこの名前に対して何の偏見も中傷の意図もないことを申し添えさせていただきます。

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします

## 12・モーニングコール（前編）

マステイマの任務には危険がつき物だ。

その内容は多岐に渡っていて、ニユースになることはない裏社会に踏み入ったものだ。

闇世界のバランスを崩壊させる活動の阻止、横流し武器の奪取、犯罪組織の計画の暴露、警察も手を出せない重犯罪者の暗殺など上げればきりが無い。

まだ正式な隊員ではないということ、詳しくは教えてもらえないが。

他の組織と大きく違うのは幹部が中心となって動くことだ。

他の隊員たちは彼らのサポート役。だが、いくら裏方とは言っても危険なことには変わりはない。

ボスたちが無事に任務をこなしているのは、やはり格段に違う能力の差なのだろう。

城の中でも、時として三角巾で腕をつったり、包帯を巻いたりしている負傷者を見かける。

処置をするのももちろん医師でもあるアビゲイルだ。

一度彼女の治療を見かけたことがある。

それは丁度用事があったて医務室を訪れていたときだった。

痛みで脂汗を流して顔色の真っ青な患者を押さえつけ、外れた肩を入れなおす彼女は鬼気迫るものがあった。

脱臼が治って痛みの取れた患者とは反対に、私は気分が悪くなつて座り込む始末だった。

任務中の怪我とはいえ大変だ。患者もそしてアビゲイルも。

だが、それらの全てが任務のためではないと気付くのに、そう時間がかからなかった。

一日の始まりとなる仕事、ボスの朝食作り。

食事は八時開始なので、私が厨房に出てくるのは六時頃だ。

住み込みの良さを最も感じる時間だ。通っていてはさらに早起きをしなければならなかっただろう。化粧なんていらなくて、ぎりぎりまで眠れていたとしても。

食堂のカーテンを開ける。

この頃にはもう外は完全に明るくなっている。イギリスでは季節によって夜明けの時間がかかなり違ってくるのだ。

窓を開けて、新鮮な空気を吸い込む。

この辺りには他に建物もないから、開けた風景、連なる丘はとても美しく見える。

気合を入れて、コーヒーマーカーをセットする。ガスの元栓を開けて、下ごしらえの開始だ。

次にボスの食堂に朝食用の食器を取りに行く。脇のテーブルにあるエスプレッソメーカーの準備をし、部屋の空気の入れ替えをする。その間にするのはボスの食卓であるテーブル拭きだ。

これらの作業の時間は七時前くらい。

それはちょうどその後。食器を載せたワゴンを押して厨房を目指して歩いている時だった。

なんだか騒いでいるような声が聞こえてきたので、私は首をめぐらせた。

廊下には誰一人おらず、部屋の入り口である扉も硬く閉ざされたままだ。

立ち止まってみたが、何処から聞こえてきたものかは分からなかった。今は耳を澄ませても何の音も聞こえない。気のせいだろうと思つて、再びワゴンを押し始める。

すると急に聞こえてきたのは人が叫んでいる声。しかもどんどん近くなってくる。

あまりの異様さに、足を止めた私の横の扉がいきなり開いた。

部屋から顔色を真っ青にした男が飛び出してきた。口は叫んだ形に固まっていたが、すでに声は出ていない。



ここからはまるで映画のようだった。よくあるB級の巨大モンスターが出てくるパニック映画だ。

男は私に向かって手をさし伸ばした。私に救いを求めている。だが、何かが彼の上着の裾を引っ張った。

男は伸ばした手をそのままに部屋の奥に消えていった。続けて扉も音を立てて閉じる。

そして、聞こえてきたのは更なる悲鳴。

何が起こっているのか分からず、私はその場に立ち尽くした。やがて爆発音と共に地響きがして、悲鳴がぴたりと止まった。

何かに縛り付けられていた私の体がやっと動いた。恐る恐る扉に近付いて耳を寄せる。何の音もしない。

そこで、扉のノブに手をかけた。大きく息を付いてからノブを回す。扉を開けるべく、引っ張ろうとした時だった。私の手首を掴むものがいた。

「駄目よ、マイケル」

そう言いながら、静かにと唇に指を押し付けている。

アビゲイルだった。彼女は私の肩に手を回して、そっと扉から離れた。

「でもアビゲイル、あの人が……」

「今行っても屍しかばねが二つになるだけよ」

戸惑う私に彼女は不吉なことを言い出す。

「運が悪かったのよ。可哀想だけど彼には受け入れてもらうしかないわ」

屍しかばねになることを？

私は愕然と彼女の顔を見つめる。酷く真面目な顔つきでアビゲイルは扉に寄ると、耳をそばだてた。

「いいわ」

廊下の先に向かって指で招く。

私が目を向けると、角に二人の隊員の顔が見えた。

彼らは走ってやってきた。そのうちの一人は何やら布を巻きつけ

た二本の棒のようなものを手にしている。  
アビゲイルが扉を開けて部屋に入っていくと、彼らも続いた。

## 12・モーニングコール（前編）（後書き）

次回予告：部屋の中に引きずり込まれた隊員。爆発音と地響き。扉の向こうで何が起こったのか。駆けつけたアビゲイルと共に部屋に入ったミシエルは真実を知るのだが……。

第13話「モーニングコール（後編）」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッと願います（ランキングの表示はPCのみです）

### 13・モーニングコール（後編）

私はこっそりと入り口から中を覗いた。

カーテンを閉め切った部屋は薄闇の中に沈んでいた。

窓の形に薄っすらと浮かび上がる光。大きなデスクやソファが影を纏い、重厚な黒の色で存在を示している。

そして、壁際には倒れている人物が見えた。さっき目にした男だろう。

アビゲイルが彼の体を触っている。何処か骨が折れていないか調べているようだ。

呻く声が聞こえる。相当激しく壁に体をぶつけたようで、壁にかかっている額のようなものがずり下がっている。

男達が手にした二本の棒を広げて布を張った状態にする。担架だ。

二人がかりで抱えて乗せると、痛みからか男は大きく喘いだ。

運ばれる担架に目が行っているときに、別の大きな音を耳にした。何か床の上に落ちた。そして、その向こう。四角い光の中に黒い人影を見つけた。

別の部屋に続いているのだろう。その部屋から差し込む明かりで、その人は影としてしか映らない。

それでも私の背中に冷たいものが走った。よく見えなくとも分かる。その人が発している眼差しの強さが。

アビゲイルは床の上のそれを拾った。随分と重そうに抱えてくる。

担架の後から彼女が出てきた。

再び、人影へと目をやったが、すでに扉は閉じられたようで何も見えなくなっていた。

廊下の光の下で彼女が持ち出した物の正体を知る。

それは盾だった。暴動鎮圧のニューズ映像でよく見るような。

ポリカーボネート製の半透明の丸みを帯びた盾。腰をかがめれば大の男でも隠れてしまえる大きな物だった。

しかも盾には落書きがされていた。

一番大きい文字は「イージスの盾」。それから「神よ、お慈悲を」とか「悪魔退散」やら訳の分からない言葉が連ねられている。

「まさにロシアンルーレットね。あの子は運がないわ。起きてこないボスに当たるんだもの」

先に行く担架を見やってアビゲイルは言う。

ロシアンルーレットって、確か弾を込めた拳銃の弾倉を回して撃つていく、死を賭けた遊びだ。凄まじい例えだ。

私は先ほどの人影が放っていた視線を思い出していた。体がぞくりと震える。

「今のつて、まさかボス……？」

「起こされたばかりで超不機嫌だね。さすがのイージスの盾も役に立たなかったようね」

アビゲイルは盾を覗き込んで苦笑う。

「衝撃銃を使わせるなんて、よっぽどボスを怒らせたのね」  
話についていけず、混乱する私に彼女は説明してくれた。

ボスを起こす係を隊員たちで回しているのだと。

朝ボスが起きてくればセーフ。目覚ましで起きてても、もちろんセーフ。問題なのは時間通りに起きてこないときだ。

確率は約七パーセント。それほど高確率でないのは、ボスが元々不眠症で寝付けないことがあるからだ。

起きること自体が関係ないことも多いらしい。だが、一旦寝入った彼を無理に起こすとどうなるか、想像は容易だ。

「枕元に護身の銃を置いているから。悪くすれば、寝ぼけたボスに撃たれるってわけ」

とんでもない話だ。起こすのも命がけだ。だから、あの盾が必要なのだと言う。

だけど、あの男の人は相当ダメージを受けていたが、撃たれた様には見えなかった。血を流している様子もなかったし。

その答えもまた想像を超えるものだった。

「城の中でいつも本物の銃を振り回されちゃかなわないでしょ。だから、ボスには衝撃銃を持たせているの。うちの技術情報部が開発したシヨック・パルス・ランチャーよ。気晴らしに派手な爆発音はするけど、死にはしないわ。もちろん、撃たれ所が悪ければ分からないけど」

今日もそうだけれど、ここに来た初日に聞いた爆発音もそれだったのだろう。

だが、選択をボスがするのなら、危険度は変わらないのではないだろうか。気分によって本物の銃を使われるなんて、恐ろしすぎる。「大丈夫よ。基本的にはうちでボスに銃なんて必要ないわ。あの声、睨みだけで十分でしょう」

私の脅えを感じ取ったのか、彼女は微笑んで言った。確かにそう思うが、基本的にといい所に引つかかる。例外もあるということだ。例えば、ボスを本当に怒らせたときとか。

「それよりマイケル、ボスの朝食の用意は大丈夫なの？」  
彼女の言葉が私を非情な現実を引き戻す。

恐る恐る腕時計を見る。八時まであと十五分しかない。一気に血の気が引いた。急げば間に合うだろうか。いや、何とか間に合わせるしかない。

アビゲイルに別れを告げ、慌ててワゴンを押して厨房に戻った。ボスを本当に怒らせることがあったらって、今の私が一番それに近いではないか。

担架で運ばれて行った隊員が目には浮かぶ。あれは十五分後の私の姿ではないだろうか。

目玉焼きを作ろうとして慌てすぎて黄身を壊してしまう。えい仕方ない、スクランブルエッグに変更だ。

ハムと一緒にフライパンで焼いている間に、付け合せの野菜を用意する。

慌てているときほど、時は早く流れる。

無事にボスの食堂にたどり着くまで、私の背中は冷たいものが流

れっぱなしだった。

### 13・モーニングコール（後編）（後書き）

次回予告：ある日、会議室にコーヒーをと連絡があった。届けたミシエルの目の前には寛く幹部達、そしてボスの姿が。だが、ボスの様子はいつもと違って……。

第14話「コーヒーブレイク」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッと願います（ランキングの表示はPCのみです）



## 14・コーヒーブレイク

ある日、時計の針が午後を回ってしばらく経った頃、厨房に一本の電話が入った。

幹部会議をしている部屋にコーヒーを届けてもらいたいというものだった。

道順を詳しく聞き、準備をする。サーバーを保温性のものに置き換えて、抽出開始だ。

幸いにもエスプレッソをボスが飲むのは朝だけだから、これできあがり。

サーバーに並々と入ったコーヒー、コーヒーカップとソーサー、ミルクに砂糖、スプーン。忘れ物はないことを確認して、ワゴンを押して会議室を目指す。

形も色も同じ扉が続く。メモを睨みながらもなんとか目的の扉の前にたどり着いた。

ノックを試してみる。何も反応がない。

メモを再確認すると会議室はなんと隣の扉だった。危ない危ないワゴンに戻して扉の前で立ち止まり、再びノックをする。開けてくれたのはグレイだった。

中には彼以外に、ボス、ジャザナイア隊長、アビゲイルともう一人体の大きな男の人がいる。

奥の椅子には、テーブルをオットマン代わりにして座っているボス。行儀が悪いし、とんでもなく偉そうに見える。

腕を組んで考え込んでいる様子で、こちらには目もくれない。

「待ってたぜ」

グレイは一番に注いだコーヒーを手にした。

「少しは控えたらどうだ」

ジャズ隊長の隣に座っている体格のいい男が声をかける。

服の上からでも盛り上がった筋肉が分かる。コートを詰襟にして

着ている姿はまるで軍人のようだ。

その頬には横一直線の大きな傷跡があった。短い逆立った金髪や浅黒い肌、たくましい体と相まって迫力を増している。

「いつも飲みすぎじゃないか、グレイ」

「うるせーな。いーんだよ。オレはこれがねーと体のキレが悪くなんだから」

彼より随分と若いはずのグレイは気安い言葉で返した。

それはカフェイン中毒じゃないんだろうか。そう私は思いながらもソーサーにミルクと砂糖とスプーンをセットし、ボスのテーブルへと寄る。

後ろから置けば、彼の視線とかち合うことはない。

無事にコーヒーを置き、手を引っ込めようとしたとき、ボスの頭が小さく揺れた。

私は瞬時に後ろに飛び退く。カップが小さな音を立ててしまったが、幸運にもこぼれはしなかった。数秒待っても何も反応がないので彼の顔を覗きこむ。

眠っている。会議の場で堂々と。

なんていう人だろう。

呆れるというより、起きたときに冷えたコーヒーに気分を害して怒られるのは嫌だ。私は傍のジャズ隊長に耳打ちした。

「起こした方がいいですか？」

「なんだと？」

私の声より数倍は大きな声で聞き返してくる。

隣の男と向かいに座っているアビゲイルが、慌てて静かにと人差し指を立ててジェスチャーする。

「お前、殺されたいのか」

今度は普通の声だ。

「こいつの眠りを妨げるなんて自殺行為だぞ」

一同ものすごい速さで頷いている。コーヒーを啜っているグレイまでも。

皆その恐ろしい結果を十分知っているようだ。

「だいぶ良くはなつてきてるんだがな。昔は所構わずで、扉が開かないと思つたら、向こうでこいつが寝てたなんてこともあつたし」  
ジャズ隊長は大物だ。ただの懐かしい昔話をしているかのようなにこやかな口ぶり。

そんなに楽しい話のはずではないのだけど。ドアをぶつけられたボスのそれからの行動を考えたら。

「……でも、起きた時、冷めたコーヒーなんてあつたら同じことだと思えますけど」

私の言葉に一瞬にして真顔になる。そして撤収だと命令した。

それは賢い選択だとは思うけど、引くのは私だ。

片手を伸ばし、ソーサーを持ち上げる。緊張に手が震え、かちやかちやと音が鳴る。どうかこれで目を覚ましたりしませんように。

なんとか無事に回収した時には妙に疲れていた。コーヒーを出すだけで、こんな緊張感なんて味わいたくない。

結局、ワゴンの周りに皆が集まって立ち飲みになった。いざボスが目覚めたときに皆にカップがあつて自分のところにないとなくなつたら、また大変だということだ。

ああもう、なんでこんなことまで気を遣わなければいけないの。

溜め息をつく私。慰めとなったのはコーヒーを絶賛してくれるグレイだ。

それに隊長やアビゲイルも美味しいといってくれた。

唯一、あの小山のような男の人だけは、ボスにちらちら目をやりながら、無言で飲んでいた。あんな強面な人なのに、コーヒーに入れたミルクと砂糖の量は半端ではなかった。相当な甘党らしい。

そのギャップに笑い出しそうになるが、真面目な顔の男と目が合い、耐えるしかなかった。

皆でコーヒーを飲みほした。空のサーバーの載つたワゴンを押して私は厨房に戻ることにした。またコーヒーが必要になったら呼びだしがくることになっていた。

ドアを開けて廊下へと出ようとしたときだった。ボスが起きたようだ。欠伸が聞こえる。私の背後にアビゲイルとグレイが立ち、隠してくれた。

「コーヒーの匂いがしねえか？」

開口一番の彼の言葉。

振り返るとアビゲイルとグレイが一齐に首を横に振っている。奥のジャザナイアと大きな男の人も。

「そうか？」

ボスは声からして不審そうだ。

これではばれてしまう。そうなら誰にその怒りが落ちるのか。コーヒーを持ってきた私ではなく、他の人が怒られることになるのだろうか。

戻りかけた私を後ろ手で出て行くように二人は押しやった。

「匂いってこれじゃねえか？」

ジャズ隊長がポケットから何やら取り出した。丸い、紙に包まれたもの。飴玉のようだ。

「食うか？」

「ふざけんな」

差し出した手をボスは払う。だが、それで納得したようだ。隊長の機転で助かった。

大人の男が飴玉なんて持ち歩いているなんてとは思うが、あの人がだったら似合ってる気がする。

それにしてもボスは手間のかかる人だ。

「会議を再開するぞ。議題は何だったかな」

資料を覗き込み、ジャズ隊長は自然にそう言った。視線がちらりとこちらに向く。私には出て行けと、二人には戻って来いというこ

とだ。  
「ミッションの更なる効率化について。経費との折り合いのグラフの評価からだ」

ボスの言葉は、今まで眠っていた人の口から出てくるものとは思

えない。ジャザナイア隊長よりもずっと状況を把握している。

あれは本当に寝ていたのではなくて、狸寝入りだったのだろうか。私は音のないようにゆっくりと外へ出て、扉を閉めた。

安堵の溜め息をつく。

最後に振り返ったとき、ボスと目が合ったように思ったが気のせいだろう。もし本当にそうなら、無事に会議室から出て来られるわけがない。

いつ呼び出しがかかるかもしれない。またコーヒーを用意していなければ。

ワゴンを押して急いで厨房に戻る。だが、その日電話がかかってくることはなかった。

## 14・コーヒープレイク（後書き）

次回予告：複雑なボスの好き嫌い。適応し始めたミシエルであったが、ボスを満足させることはまだまだ先のようで……。

第15話「ボスの地雷原（前編）」

お話を気に入っていただけでしたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

## 15・ボスの地雷原（前編）

「何か変なもん、入れてんだろうが」

ああ、今晚もまただ。勘弁してください、ボス。

今日はサラダに入れたホウレン草が気に入らないらしい。

マステイマに入って早一ヶ月。この人の嫌いなものはなんとなく分かってきた。

だが、調理によって変わるのは本当に面倒くさい。スープに入っていたホウレン草には何も言わなかったのに。

「こんなもん、ブタに食わせる」

酷い言われようだ。でも大分慣れてきた。涙も出ない。あるのはふつふつとたぎる闘志だけ。

彼はサラダを私の頭にぶちまけると、皿を壁に投げつけた。

聞こえてくるのは耳に馴染んでしまった破壊音。

「おい、アビゲイル」

「もう店には連絡してるわ」

アビゲイルも呆れ気味だ。

ボスが去ってから片付けを手伝ってくれるのもいつものことだ。

また食器が一枚減ってしまった。私が買う気にもなれない高価なものなのに。あの人はまったく気にすることがない。

「進歩はあるようね」

一緒に皿の破片を拾いながら、彼女は思いもかけぬことを言う。

啞然として振り返ると微笑む彼女がそこにいた。

だから弱いんだってば、この人の笑顔には。顔が赤くなる。

「日によって二皿目まで大丈夫なことがあるし、文句を言いながらも少し食べてたでしょ」

「そうでしょうか」

今日は「ブタに食わせる」まで言われたのに。自分で繰り返して少し凹む。

「ボスはあれであなたに期待してるんだと思うわ。毎回食事の時間にはちゃんと来ているもの。それに嫌なら絶対に口にしない人よ」  
ただ私を苛めて楽しんでいるだけのようない気もするけど。その機会を逃さないために、席に着いているんじゃないだろうか。

でも物事は受け取りよう。この際、アビゲイルの言葉に乗っておくか。

「……僕、頑張ります」

「あなたって前向きだから好きよ」

笑顔での褒め言葉に顔が真っ赤になる。

やばい。自分自身を褒められるなんてそう経験ないから、戸惑ってしまう。

私の反応に彼女はさらに笑む。見ないようにしよう。心臓がばくばくだ。

胸を押さえながら考える。

そう、もちろん、私なりに前向きに努力はしてきた。

ボスが食べずに無駄になる料理。

なるべく少量で済ませたい私は、ワゴンの改造を頼んで鍋を直置きできる保温機能をつけてもらった。

そして選んだのはコース料理。一品一品出していけば被害は最小限で済む。

手をつけることなく残った料理や試作品は隊員たちに食べてもらえばいい。

ボス専用の高級食材だ。彼らは大喜びで食べて感想までくれる。

参考にならないことも多かったが、時には食べた人にしか思いつかないヒントをもらえることもあった。

皆の存在は私を支えてくれた。

ボスの料理への助けというだけではない。笑顔で美味しいと言ってくれる人がいるということが、どれだけ料理人である私に力をくれるか。

どうやって彼らに報いれば良いだろう。私にできることはなんだ



ろうか。

そして、思いついたのがスイーツだ。皆の疲れを癒してくれるもの。

マステイマは男ばかりだから、あまり甘すぎず、カロリーも考えたものを作ったらいい。

だけど、あいにく製菓は専門外だ。その上、低カロリーで美味しい物という条件付。他に知恵を借りるしかない。

私は母にメールをして相談した。

私を生むまでパティシエを志して勉強していた母。途中でやめたのが悔やまれるほどだ。

彼女の作るデザートは最高だった。幼い頃、父と私とで取り合いになったものだ。

母からの返事はすぐに来た。応援のメッセージと共にとくさんのレシピが。大助かりだ。

早速、次の日から調理に取りかかる。

コーヒアの香りと共に甘い匂いが厨房からもれ出して来ると、食堂にはさらに人が集まるようになった。

## 15・ボスの地雷原（前編）（後書き）

次回予告：ミシエルは、隊員たちのためにスーツを用意することに。評判は上々。グレイと一緒に幹部会議にいた大柄な男までやってくるようになって……。

第16話「ボスの地雷原（後編）」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッと願います（ランキングの表示はPCのみです）

## 16 . ポスの地雷原（後編）

「今日はテイラミス。一人一個までですよ」

私は食堂で声を張り上げる。

食べるのは男の人だから切り分けは大きめにして、カロリーを考えて個数制限をした。

大好評だ。次は何がいいとかリクエストまで来る。

いつものように訪れたグレイは、人の多さに驚いていたが。

彼は半分でいいからとケーキを分けていた。それを足してもらっていたのが、意外にも幹部会議にいた体格のいい短い金髪の人だ。

私と目が合うと、彼は決まり悪そうに肩を丸めた。

「いや、試食に來ただけだ。隊員たちにどんなものを食べさせているか気になつてな」

「ただ甘いものが好きただけだろ？」

グレイの言葉に彼は慌てた。

「おいグレイ、話が違つぞ」

「いーじゃん、レイバン。どーせまた来るんだし。先に言つとけば」

「いや、そうじゃなくてだな……自分は……」

しどろもどろだ。大きい体を縮込ませている様を見ていると可哀想になつてくる。

私は彼の前にコーヒーを差し出した。もちろんミルクと砂糖を添えて。

「どうぞ、レイバンさん。いつでもいらしてください。毎日違つてザートを用意してますから」

「毎日、違つ？」

彼の目が輝く。本当に好物のようだ。私は頷いた。

聞いたかというように彼は何度も脇のグレイを見やった。グレイはそれを無視している。

「さんとか付けなくていーんだよ、ミック。呼び捨てで。オレの後

輩なんだし」

どう見てもグレイのほうが十歳くらいは年下に見えるのだけど。文句も言わず、じっと耐えているから本当なのだろう。この組織の上下関係ははっきりしている。

悲しげな瞳に折れたのは、グレイのほうだった。体は大きいのにつぶらな瞳だ。

「へーへー、オレはあんまり甘いもの好きじゃねーけどな。ま、これなら半分くらいは付き合ってやるぜ」

フォークにケーキを乗せて、一口食べる。

すると、レイバンもまた食べ始めた。一口一口味わうように噛みしめている。唸り声もれてることからして、満足な味だとは思っただけど、彼はなに一言口にしない。

「まあ、こんなものだろうな」

すべて食べ終わって最後に出たのはその言葉だった。

「てめー、正直に美味いって言えよ」

グレイがせつつく。だが、彼はそれ以上言わずに席を立ち、食堂を出て行ってしまった。

「あいつ、お前にライバル心燃やしてんだぜ」

レイバンの姿が見えなくなって、グレイはテーブルに肘を付いて私を見上げた。

「お前はすぐに辞めるって言っているくせにな。このままずっといい、ボスの気に入りにならないか冷や冷やしてるんだ。あいつは狂信的なボス信奉者だからな」

「ボスの気に入り？ そんなことありえませんか。今日だって料理を壁に投げつけられたんですから」

私の答えにグレイはにやっと笑う。意味深な笑い方だ。

「オレはお前がずっと続けるに賭けてるんだ。あいつに勝ってもらっちゃ困るんだよ」

なるほど、そういうことか。いくら賭けているかは分からないが、お金が絡んでいるから、こんなことを言うんだ。なんだか気が抜け

てしまった。

「あなたにはお世話になってるし、負けさせませんよ」

私は笑いながら言った。

グレイはコーヒーカップを手に取った。

「あいつの好きな物作っている間は大丈夫だろうが、後ろには気をつけるよ。男の嫉妬っていうのもたちが悪いんだからな」

悪い冗談だと思い、笑っていると、彼は真顔でコーヒーを飲んでいた。

まさか、そんなことが本当なんてあるんだろうか。このマステイマ内部で。

「まあ、城の中でそんなことしようもんなら、ボスの鉄槌が下るだろうけどな」

彼の言葉はますます本気だ。私の笑いも思わず引きつる。

当のグレイはいつもと変わらなかった。固まる私に向かってコーヒーの催促をした。

まったくマステイマの人たちは（特に幹部は）、私の常識を超えている。皆一癖も二癖もある人たちばかりだ。

次の日もレイバンはグレイにくつついて、好物を食べに来た。

大きな手でちっこいタルトを頬張る姿は微笑ましくも見える。美味いところ言ってはもらえないが、グレイが残した分を紙ナプキンに包んで、ポケットにしまうのを目にしまった。

あんなのを見てしまったら、明日も頑張って作ろうと思うじゃないの。

私は無言ではあるが常連の訪問者を得て、嬉しくなってしまった。

他の隊員たちには好評だったスイーツ。だけど、ボスにはまるで効果がなかった。

食事の後に出してもまるで手を付けようとはしない。それどころか、突き返されてしまった。

「男がこんなもん食うか」とのお小言付だ。

レイバンは嬉しそうに食べていますけど。そう言いかけて、慌てて口を塞ぐ。そんなことを言ったら最後、とばかりが彼へと行きそうだ。

だいたいボスは好き嫌いが多すぎるのだ。特にスパイスは地雷原だ。香草も要注意だ。

コリアンダーなんかは爆発する類だ。試したことはないけれど、おそらく間違いない。タイやベトナム料理は詳しくないから冒険する気にもならないけれど。

新しい料理を出すときには、いつもただならぬ緊張感に包まれる。そして、文句を言われずに済んだときのあの脱力感。

私がつけるコックのメモ帳はどんどん埋まっていった。失敗したときの料理とレシピは細かく記しておく。二度と同じ失敗を繰り返さないように。

お陰で、すぐいっぱいになり新しいメモ帳が必要になった。

いつしかこのメモに何も書かずに済む日が来るのだろうか。私は見えない未来を思って、溜め息をつく。そして、今日もまた新しいページに書き込んでいくのだった。

## 16 ポスの地雷原（後編）（後書き）

次回予告：マステイマの城の庭でミシエルが目にした黒い人だかり。聞こえてきたアイリツシュ・ダンスの音楽。これから何が始まるのか……。

第17話「サロン・ド・マステイマ（前編）」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッと願います（ランキングの表示はPCのみです）

## 17・サロン・ド・マステイマ（前編）

髪というのは人それぞれだ。形や色、質感。どれも個性だ。

例えば、アビゲイルとジャザナイア隊長姉弟の巻き毛は燃えるような赤い色。

二人とも長いので遠くからでも目立つ。見事過ぎて地毛かどうか疑いたくなるくらいだ。

レイバンの短い金髪は刈りたての芝生のようだ。思わず手を伸ばして触ってみたくなる。マステイマーの背の高さ。身長差から考えると、そんな機会は巡ってきそうもないけれど。

グレイの髪は銀色でさらさらだ。長めの前髪がいつも左目を隠している。掻き分けている仕草なんて見ないから、髪越しに目を使っているのだろう。透明感ある髪だからその辺りは可能そうだ。

マステイマの象徴色でもある真の黒の髪を持つのはボスだ。艶があつてしなやかだ。この人の第一印象はきつと皆“目つきの悪い黒髪の男”だろう。それしか頭に残らない。残る余地がない。

そして、私の髪はというと、一言で済ますなら典型的なクセつ毛。その上、伸びるのが早い。背丈に行く分のエネルギーが髪に行っているのではと思うほどだ。

一番扱いづらいのが中途半端な長さ。あちこち跳ねて收拾が付かなくなる。

それに微妙な髪の色。ダークブロンドと言えば聞こえがいいが、日陰ではほとんど茶に見える、かろうじての金髪。

色はともかく、この髪質は幼い頃からずっと疎ましいものだった。マステイマに入る前に短く刈った髪も今やかなり怪しい雰囲気になってきている。

そろそろ街へ出て切つてこなければ。

そんな風に思うも、仕事の忙しさに流されて日はどんどん経っていく。



やばくなってきた。このままでは爆発後の髪型になりかねない。言い方を良くするなら、ボンバーヘッドという奴だ。

廊下の窓ガラスに映りこんだ姿に足を止める。このまま、医務室に行つてアビゲイルに時間休を貰えるようお願いしよう。

だが、私の足は止まったままだった。覗いた窓の向こうに見えたものに引きつけられたのだ。

下の中庭にブルーシートが広げられていた。隊員たちがぞろぞろと集まってきている。

何が始まるのだろうか。

窓から見下ろしていると、赤い頭がひよいと動いて私を見上げた。ジャザナイア隊長だ。彼は白い歯を見せると手招いた。

隊長に呼ばれたからには無視するわけにはいかない。それに好奇心心もあつた。

中庭に下りると、隊員たちがシートの上にパイプ椅子を並べていた。横一列に五席。

集まっている人数から見るとあまりに少ない数だ。まさか椅子取りゲームじゃないだろうけど。

隊長が名前を呼びかけている。四人の隊員が応えて席に座つた。そして、彼は手を腰にあてたまま振り向いた。傍へやってきて顔を覗きこむなり、「うん」と唸る。片手を私の頭に乗せると、くしゃくしゃに髪を撫でた。

「よし、マイケル。お前もそこに座れ」

一つ空いた席を指し示す。

なんだか分からないが、隊長命令だ。

私は辺りをきよるきよると見回しながら、席に着いた。

何かあるのかは不明だが、そう悪いことではなさそうだ。席に着いている人も回りにいる人の表情も柔らかい。笑顔を見せている人もいる。

「リクエストは簡潔にな。左から順番に言っていけ」

隊長は私の後ろに立っていて、左手に四席並んでいる。というこ

とは私が最後だ。

「J・デップ」

「C・ロナウド」

隊員たちは次々に言っていく。アメリカの映画俳優、それにスペインチーム在籍のサッカー選手の名前だ。

「五分<sup>ごぶ</sup>」

「お任せ」

彼らの言葉に周りの人たちは笑って囁し立てる。

「デップにロナウド？ 勝手なこと言ってるな」

ざわめきを割ったのは知った声。グレイだ。

私たちを取り囲んでいた隊員が彼のために道を開ける。とたんに音楽が聞こえてきた。軽やかなダンスでも踊れそうな音楽。これはアイリッシュ・ダンスの曲だ。

唇の端を上げて笑っているグレイは、右肩に大きなスピーカーの付いたCDデッキを乗せていた。その格好はいつもの制服姿ではない。カーキ色のつなぎを身に着けている。

彼は傍の隊員にCDデッキを任せると、腕をまくった。

振り返ったその手には四角い物が握られていた。

「始めるぞ。動くなよ」

左手の物が震えて音を発し始める。この音は耳にしたことがある。この音は……。

私たちの前をオモチャの飛行機を持って走る少年のようにグレイが通り過ぎていく。

エンジン音の真似は必要なかった。手にした機械の音がそれにそっくりだったのだ。

## 17・サロン・ド・マステイマ（前編）（後書き）

次回予告：騒ぎの正体は半年に一回のグレイ演出のシヨ！。犠牲者五人のうち選ばれたミシエル。観客達に囲まれ、逃げ出すことも出来ない彼女の運命は……。

第18話「サロン・ド・マステイマ（後編）」

お話を気に入っていただけでしたら、下のランキングの文字をポチッと願います（ランキングの表示はPCのみです）

## 18・サロン・ド・マステイマ（後編）

心の中の悲鳴は誰にも届かない。

逃げ出したいが、できなかつた。後ろからジャズ隊長の手が肩を押さえているからだ。万力みたいにびくともしない。

周りを花びらのようなものが舞っている。

もちろん、これは花吹雪などではない。散っているのは髪の毛だつた。

右手に鋏、左手にバリカンを手にしたグレイが踊るように私たち五人の前を動いている。

今は一人がヘッドロックの体勢。バリカンを滑らす姿は、羊の毛刈りのようだ。

アイリッシュ音楽にぴつたりはまっている。

きっと本業の羊刈りの人もびつくりだ。スピードが半端ではない。飛び散る髪の毛が四方八方に舞い散る。

そうだ。私たちは哀れな生贄の子羊のようなものだ。

見世物に興じる観客達の歓声。

身動きの取れない私は観念して目を閉じた。

どんな悲惨な髪型になるうが、毛はまた生えてくる。いざとなれば帽子やスカーフでも被つてごまかせばいい。それに犠牲者が私だけでないのも救いだつた。

どれくらい時間が経つたか。十分か十五分くらいなものだろう。

不意に音楽が止まり、喝采に混じって盛大な拍手が聞こえてきた。恐る恐る目を開けてみる。私たちの前に立ったグレイは腕を組んでいる。満足げな笑顔だ。

そりゃ、あれだけ派手な催しをやり遂げた後だもの。気分だつて爽快だろう。

白衣の襟から入った髪がちくちくする。襟元をパタパタやりなが

ら、横にいる被害者の会の人たちを見やった。

あれ。皆笑顔だ。手鏡を片手に角度を変えて自分の姿を見やっ  
ている。

そこにいるのはJ・デップ。それにC・ロナウドではないか。少  
なくとも髪型は。

あと一人は綺麗な五分刈り。残る一人はファッション誌の表紙に  
出てきそうな伊達男ぶりだ。

びっくりして私の口は半開きだ。唇が開いたままのところへグレ  
イが近付いてきた。

「お前はリクエストねーから、伸びた分くらい切ってみた」  
手鏡を渡しながら言う。

鏡を覗くと、すつきりだ。不ぞろいだった毛が見事に切りそろえ  
られている。プロも顔負けの仕事だ。あんな短時間にそれも五人一  
度でなんて。

「凄い」

本音が思わずポロリと出た。

「グレイの器用さは折り紙付きだからな。それに年に二度だけ。な  
かなか見れねえんだぞ」

ジャズ隊長の声は興奮しているようで大きい。

グレイは肩をすくめた。

「年中やってるショーなんかつまんねーの。面白くねーもん」

この人の基準ってやっぱ面白いかそうでないかみたいだ。だけ  
ど、それに腕が付いてくるなんて。まだ若いのに未恐ろしい人だ。

「隊長も切ってやるーか。少し伸びすぎじゃねーの？」

「いやあ。おれは美容師決めてっから」

鏡を取り出したグレイに隊長は慌てたようだ。ふさふさした赤毛  
を撫でながら退散した。

「隊長は自分の髪、こだわってるもんな」

腕を知っていながら、あの態度。グレイの言葉に納得した。そう  
いえばジャズ隊長ってよく自分の髪を触っている気がする。

姉であるアビゲイルも同じだが、パーマをかけたかのように巻く赤毛。その鮮やかな色は今まで見たこともないほどだ。大事に思う気持ちも分かる。

いつも一つに束ねた髪はジャザナイア隊長のトレードマークでもあった。どんなに遠くからでも彼だと分かる。

現に城に入って廊下を抜けていく姿が窓越しに判別できるくらいだ。

「リミットまであと三分。さっさと片付けて仕事に戻れ。ボスにどやされっぞ」

グレイが腕時計を見ながら皆を急かしている。

ボスとの言葉を聞いて、隊員たちの動きが格段に早くなった。あとという間にブルーシートは丸められ、パイプ椅子も撤去された。

城の二階の部屋を見上げたグレイは、もう一度腕時計にちらりと目をやった。

一般の建築物よりも高い位置。三階から四階に当たるくらい。あの辺りはボスの執務室だ。窓ガラスに日の光が反射して中は見えなかったが。

「グレイ、今回のことってボスは……」

グレイはいつもの調子でにやりと笑う。

「報告済。年二回の恒例行事だもん。内緒なんかにできねー」

「よく許可が下りましたね」

「実益を兼ねるしな。けど、時間制限の条件付。今頃、上から様子を見てるんじゃないか」

十分ありえる話だ。

再びボスの部屋を見上げようとした私だったが、できなかった。グレイに頭を押さえられていたからだ。

「不用意に顔を上げるな。何が降って来るか分かんねーぞ」

これもまたありえそうな話だ。ぞつとしながらも頷く。

「よし」

グレイが周りを見回して、声を上げたときには中庭には私たち二

人しかいなかった。

たくさんいた野次馬も嘘のよう。お祭り後の静けさだ。

「置いてくぞ」

あまりにも早い撤収。茫然としていると声をかけられた。

当のグレイはすでになぎを脱いでいた。腕にかけて、その上コートまで着ている。一体いつの間に。

一人突っ立っている私は阿呆のようだ。城の入り口に消える彼の後ろ姿を走って追いかけた。

## 18・サロン・ド・マスティマ（後編）（後書き）

次回予告：突然、緊急連絡用のプレスレットにAnggieの文字。食堂に現れた少女。この二つのことには一体どんなつながりが……？  
第19話「コードAnggie（前編）」

話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）



## 19・コード Angel (前編)

時は昼下がり。今日のお菓子、クッキーをオープンで焼いていた頃だった。

昼時の混雑を終えたばかりで、誰もいない食堂で私は遅い昼食を食べていた。

残ったサンドイッチを頬張る。ゆっくりと出来る貴重な時間だ。

コーヒーに手をやったとき、プレスレットが震えた。何かと表示を見やる。

黒い液晶に青コード ということは緊急業務連絡。続く文字は Angel だ。業務連絡で天使？

まるで訳が分からない。だが、すぐに城内が騒がしいことに気付いた。廊下を隊員たちが走り回っている。

声をかけようとしたとき、ひときわ大きな人影が近付いてきた。

レイバンだ。黒いコートを翻して走ってくる様は鬼気に満ちている。彼は立ち止まると、私の肩越しに食堂を見渡した。

「何があつたんですか？」

私の問いかけにも答えようとせず、辺りに目を光らせている。こんな厳しい目をした彼は初めて見る。

「誰か入ってこなかったか？ 自分たち以外に」  
「やっとな私を見て尋ねた。」

だが首を横に振ると、彼は毒づいて、他には何も言わずに走って行ってしまった。

一体何が起こっているんだろう。また私は蚊帳の外だ。

と、いけない。オープンの時間がそろそろだ。厨房へ戻ろうとした私の前に、それは現れた。

真っ白いふわふわとした素材の白いワンピースを着た少女。肩までのストレートの金髪は、艶のリングを作り出している。大きな青い瞳は私を真っ直ぐに見上げる。年は三、四歳くらいでふっくらと

した頬が愛らしい。

彼女はテールブルの影から出てきた。レイバンが見渡したときは隠れていたのだろう。

「いい匂いがする」

彼女は胸いっぱいにくっキーの匂いを吸い込む。

「くっキーが焼けたから。食べてみる？」

頷くその子は本当に可愛らしかった。

私はもうレイバンの言葉はもちろん、何故こんな所に子供がいるかの疑問さえどうでも良くなってしまった。いそいそと厨房に戻り、くっキーを皿に載せる。

「飲み物はカフェオレがいいかな。コーヒーにミルクとお砂糖入れたの」

「温かいミルクがいい」

この子の言うことなら何でも聞いてあげたくなってしまふ。牛乳をカップに入れてレンジで温め、彼女の前に置いた。

「美味しい。プリシラ、こんな美味しいの初めて食べたよ」

こぼしながらも一生懸命に食べて、そんなことを言ってくれる。

私は本当に嬉しくなってしまった。

「プリシラちゃんって言うんだね。私はミシエルよ。よろしくね」

言ってしまうってから気付く。本当の名前を口にしてしまった。明らかにのぼせている。

私は冷静を取り戻そうと右手で頬を叩いた。一度言ってしまった言葉までは取り返せないが、子供だし、なんとかごまかせるだろう。

「プリシラちゃんはどうしてここに来たのかな」

レイバンが誰か来なかったかと言っていたのを思い出して、尋ねる。それにコード Anger 　この子のことではないかと考えをめぐらせる。

「いい匂いがしたから。それに怖い顔のお化けが追いかけてくるんだもん。すっごく大きいの」

両手を広げて表現する。それはレイバンその人のことだろう。子

供とはいえ、こんな言われよう。気の毒だ。

「ここに来てよかった。美味しいお菓子食べれたもん」  
椅子で足をばたばたさせながら言う。

なんて可愛いことを言ってくれるんだろう。冷静な気持ちも吹っ飛んでしまいそうだ。

「そう？ だったら少し持って帰ったら……」

クッキーを詰める袋を取りに、厨房に行こうとしたときだった。

「プリシラ！」

息を切らせたアビゲイルが駆け込んできた。

相当に慌ててきたのだろう。いつもきちんと整えられている髪がほつれている。彼女は少女を抱きしめた。

「もう、この子ったら。ママかパパと一緒にないと来てはいけな  
いって言うてるでしょう」

私は豆鉄砲をくらった鳩の気持ちがなんとなく分かった。

ママ……ということとは、この子はアビゲイルの子供ということ？  
混乱する私をよそに二人は会話を続けている。

「だってママ、窓開けてたらね、すっごくいい匂いがしたんだよ？」

しかも話の流れがこっちに來ている。

私は恐る恐る尋ねた。

「その子、アビゲイルの子供ですか？」

「そうよ。私の子。プリシラよ」

なんだか力が抜ける。あのコードAngieは迷子探しのコード  
だったのか。

19・コード Angel (前編) (後書き)

次回予告：アビゲイルの娘プリシラ。ミシエルのクツキーを気に入ってくれたその子供。だが、彼女の好みはミシエルの度肝を抜かせるもので……。

第20話「コードAngel(後編)」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッと願います(ランキングの表示はPCのみです)

プリシラは私のクッキーがどんなに美味しいかアビゲイルに力説している。母親の口にクッキーを押し付けてまで。

アビゲイルは確か初めて私の料理を口にしたはずだ。彼女は驚いたように目を見張って、このクッキーのレシピを教えてほしいと言った。

レシピくらい御安い御用。私は席を立とうとした。だが、それより早くプリシラが椅子から飛び降りた。

「ボスー！」

彼女は叫んで、一直線に廊下を目指して駆けていく。

瞬間、アビゲイルの顔が青ざめた。彼女は慌てて立ち上がり、娘の後を追った。私も二人の後を追う。

廊下の先に、立ち止まって振り返るボスの姿と駆けつづけるプリシラの後ろ姿が見えた。

彼の顔は遠くからでもはっきりと分かるほど引きつっていた。眉間には深い皺。唇はへの字に歪んでいる。

「ボスー、抱っこー」

くるりと背を向けて足早に歩き出した彼を、叫びながら必死で追いかけている。

ボスの足取りは競歩かと思うほどだ。

当然、プリシラは追くことは出来ず、すぐにアビゲイルの腕に捕らえられた。

「抱っこー、ボスに抱っこがいいのー」

彼女は泣きわめいている。

アビゲイルは彼女の体を揺らすようにしてなだめる。

「ボスは忙しいのよ。無理を言っては駄目よ」とか言いながら。

食堂に戻ってからも泣き続けていた。クッキーでつろうとしても無駄だった。

どれくらい時間が経った頃か、散々泣きつくした彼女は疲れたのだろう、眠ってしまった。

「何故かボスに抱っこされることに執着しててね」

アビゲイルは腕の中の子供を見ながら、疲労の見える声で言った。「最初にパーティで会わせたときからそうだったもの。ボスに抱っこをせがんでね。あの人、固まっていたわ。後で私と夫が呼び出されて、えらく怒られたわ」

確かにボスは背が高いから見晴らしはよさげだけど。

それにしてもさっきのボスの反応。その時の状況が目には浮かぶようだ。こっちが冷や汗出てくる。

「プリシラちゃんはボスが怖くないんですかね」

レイバンはお化けだと言って怖がっていたのに、本当に不思議だ。ボスの方が何倍も目つき悪いし、声だつて低くて迫力あるのに。

「不思議とね。逆にボスがこの子を怖がってるみたいよ」

確かにそうみたいだった。あんな引きつったボスの顔、そう見れるものではないだろう。こんな可愛い子の何が怖いのか分からないけれど。

すやすやと眠っているこの子は本当に天使のようだ。

「それで緊急連絡で来たんですね」

レイバンが必死で探していた本当の訳。あれはボスとプリシラの接触を防ぐためだったのかと、今さらながらに理解する。

「マイケル、悪いのだけど今度お菓子を作ったら……」

遠慮がちなアビゲイルの声。私は頷いた。

「お届けしますよ。僕の作ったものをあれだけ美味しそうに食べてくれるなら喜んで」

私はビニール袋にクッキーを詰めると、眠る彼女の手に握らせた。ぎゅっと握りこむ手はまだ小さく、柔らかい。

私を支えてくれる人がまた一人増えた。温かい気持ちになりながら、そう思った。

これほど心強いことはない。こんな可愛らしい天使の加護を受け

るなんて。

私はまた新たにボスと対決する勇気をもらい、どんな仕打ちを受けようと耐えられる自信ができた。

20・コード Angel (後編) (後書き)

次回予告：勤務明けの隊員と親睦を深めるジャザナイア隊長。酒のつまみを頼まれ、届けるミシエル。隊長の笑い声が思わぬものを引き寄せることに……。

第21話「ジャズ隊長のお楽しみ」

お話を気に入っていただけでしたら、下のランキングの文字をポチッと願います(ランキングの表示はPCのみです)



## 21 ジャズ隊長のお楽しみ

コックの仕事は三食を作るだけではない。他にも沢山あるということを知った。

お菓子作りは今や毎日のことだったし、会議があれば休憩時間にコーヒーの差し入れもした。あとはお酒の用意、つまみなんかも準備することもあった。

要するに食に関するものなら何でもありだ。

お酒に関してだけ言うなら、ボスは手がからない。

毎晩、トレーにワインを一本用意して執務室に置いておく。つまみも適当でいい。ナッツだろうがチーズだろうが文句を言われることはない。翌朝空になった瓶と皿をトレーごと回収するだけだ。

ちなみに執務室とはボスの私室と続きになっている、例の目覚まし係の恐ろしい結末を目にしたあの場所のこと。

ボスより手がかかるのはジャザナイア隊長だ。

彼は賭けカードが趣味らしい。会議室の横の小部屋を貸し切り状態。勤務を終えた隊員とお酒を飲みながら、よく朝まで騒いでいる。お酒の種類によってつまみの内容も毎回変えてほしいなどと言うから、困ったものだ。

一晩に何種類も手を付けるものだから、予測がまったく不能なのだ。催促されたときに作るしかない。

今晚は、ビールに合うものをと要望されたので、チーズ乗せクラッカーにフライドポテト、生ハムの野菜サンドを用意してみた。

丁度二皿なので、ワゴンを使うこともないと思い、両手に持って運ぶ。

相当盛り上がっているようだ。廊下の随分手前から騒いでいる声が聞こえる。

この大きな笑い声は隊長だ。話し声は普通なのに、この人の笑い声ときたら通りが良く、三軒先の家にも届くくらいだ。特に酔っ

ているときはさらに大きくなる。

両手が塞がっているとノックが辛い。ワゴンを使うべきだったと思うも、後の祭りだ。

仕方なく、片手に二皿載せて、胸との間に落ちないように挟んでノックをした。

騒々しさに消され、返事があつたのかさえ分からない。少し待って、ドアノブを回して扉を開けた。

丁度カードの決着が着いたらしく、隊長がガッツポーズをしていた。

歓喜の叫びを上げている。ドアの間から見えるのは彼の背中だけだったけども。

「やったぜ、今夜はおれが三連勝だあ！」

続くのは恐ろしいほど鼓膜を刺激する笑い声だ。お酒も相当に入っているのだろう。両手が自由なら耳を塞ぎなくなるほどだ。

いつものごとく散らかった部屋。床にはビールの空き缶に混じってワインの瓶が転がっている。ゴミ箱が役目を果たしていない。

中央には、テーブル四方を取り囲んでいつものメンバーがそろっている。いや、一人は席にいない。トイレにでも行っているのだろうか。

肩で押しやっていた扉の重さがふっと軽くなった。誰かが持ってくれた。もう一人が戻ってきたのだろう。

「あ、ありがとうございます……」

お礼を言いながら振り返り、その誰かを見て言葉を失う。

それは賭けカードのメンバーではなかった。よりにもよってあの人だった。

濃いグレーの寝巻きの上にマステイマのコートを羽織っている。足元は素足にスリッパだ。明らかに場違いだが、みなぎる迫力が全てを圧倒していた。

目つきの悪さが半端ではない。いつもにも増している。不愉快そうな唸り声を上げて、彼は部屋の中に入っていった。

「次もいくからな。カードよこせ」

背を向けているジャズ隊長はまだ気付いていない。両側の二人は気付いた。彼らはあまりの恐怖に凍り付いている。

「なんだ、ノリが悪რიいぞ」

持っていたビール缶を空けた隊長は、肩越しに後ろに放り投げる。床に落ちるはずの缶は壁に当たって高い音を立てた。彼の背後にいる人物に手で弾き飛ばされたからだ。

振り向いた隊長は、ようやくボスの存在に気付いた。

「おうボス、なにしてんだあ！」

テンションがマックスだ。片手を振りかざして挨拶しているこの人は、状況が分かっているのだろうか。周りの部下の人はドン引きしているのに。

誰も何も話さない時間が数秒続く。

「うるさくて眠れねえ」

静まり返った部屋にボスの低い声だけが響いた。彼は上着の内側から大型の黒い拳銃リボルバーを取り出した。まさかあんなものをここで？

銃声が鳴り響く。

ジャズ隊長の頬からは血が流れた。弾丸は壁にめり込んでいる。

「何しやがる？」

隊長はくっつかかる。

「次は口をそぎ落とす」

ボスはそれだけ言うと、拳銃をしまった。啞然と立ち尽くす私の目の前を通って、去って行く。

しばらく唖っていた隊長だったが、傷口に触れると顔をしかめた。

「こりや顔洗うときに沁みそーだな」

いや、心配するところが違う気がするんですけど。

彼は扉のところ立つ私に気づいた。こちらに来るようにと手招きする。それに応じて行くと、つまみの皿を置くように指示した。

傍の保冷庫から取り出した缶ビールの蓋を開け、ひと飲み。それからクラッカーを齧ると、爽やかに笑った。

「さあ、もう一勝負やるか」

二人とも怖気づいて、とてもそんなノリではないのだけど。

「そんなことじゃマステイマの幹部にはなれねえぞ」

笑いながら言う。

彼の笑い声はいい意味でも悪い意味でも状況を変えてしまう。

部下の二人は顔を見合わせた。そして、そのうち一人がおずおずと言った。

「僕、やります」

異口同音。もう一人も同じように言い出した。ジャズ隊長はしてやったりと笑みを浮かべる。

私は巻き添えを食わないようにそつと部屋を後にする。

廊下に出たとき、「その配り方はねえぞ」と隊長の突っ込む声が聞こえてきた。

くわばらくわばら。つまみが切れたなんて、もう呼び出しがきませんように。そして、ボスの眠りが安らかなものでありますように。早めに切り上げて上がってしまおうと私はその日、大急ぎで片付けを済ませた。

## 21・ジャズ隊長のお楽しみ(後書き)

次回予告：マステイマに入ってから休みを取っていないミシエル。彼女を外食に誘ったアビゲイルは真の目的を明かし、彼女を説得するのだが……。

第22話「ミシエルの休暇」

お話を気に入っていただけでしたら、下のランキングの文字をポチッと願います(ランキングの表示はPCのみです)

## 22・ミシエルの休暇

城住まいも月日が経つてくるといろいろなことが分かってくる。ここに住んでいるのはボスだけではない。他の人たちもいる。

私の部屋のある区画は、一般の隊員たちの住居スペースだ。彼らは任務につくのはもちろん、交替で城の警備にあたっている。そして、ディケンスズ本社の要請で他の場所や人の警備に出向くこともある。

ジャザナイア隊長を始めとする幹部はというと、私たちとは別の場所に自分のスペースを持っているらしい。こう仮定形なのは覗いたことはないからだ。噂で聞いただけのこと。

プライベートについては、自分からは踏み込まないことを心がけていた。相手の領域に関わることは、自分自身もさらけ出さなければならぬ危険性を含んでいる。

家族や出身地、個人を特定できることはベールに包んでいなければならぬ。私が女であること。知られてはならない事実に繋がりをえる全てを。

だから、隊員から伝え聞く話は貴重なものだった。彼らは様々な情報をもたらしてくれる。

例えば、幹部達の部屋は私たちの部屋とは比べ物にならない広さだということ。ホテルのシングルルームに対し、スイート並らしい報酬の桁は違つし、城にいれば使うこともないから貯まる一方。そうとうな財産持ち、豪邸だって買えるはずとは食事に来ていた隊員からの情報。

幹部特権の一つが住居を城に縛られないことだというのが。現実には皆城で暮らしている。

そういえば、アビゲイルはプリシラが大きくなったら、新たに家を持つのが夢だと話していた。子供が小さいから、現在は保安面を考えて城住まいをしているらしい。

グレイはわざわざ遠くから出てくるのは面倒だと言っていたし、ジャザナイア隊長は皆でわいわいやっているのが好きだからという理由だった。レイバンがいるのはもちろん、ボスと同じ屋根の下で生活したいからということだ。

結局、城は大所帯。皆家族みたいなものだ。

そう思うと、不思議と普段は遠いあの人にも親近感が湧いてくる。これだけ人が多ければ、一人くらいちよつとひねくれた人もいて当然。

皆の顔を覚えつつあった私は、ますます楽しく仕事をこなす。

あの人こと、ボスとのやりとりに恐々としながらも充実した日々を送っていた。

そんなある時、厨房を訪れたのがアビゲイルだった。

昼食と夕食の合間の時間。静かな食堂に差し込む柔らかい午後の光。テーブルで背中にその温もりを感じながら、私はジャガイモの皮むきをしていた。

「晩御飯の準備ね」

彼女は、私の前の丸椅子に座りながら言った。

「いい天気ね。部屋の中にいるのがもつたないくらいだわ」

視線が窓へと向く。私も振り返ると、ちょうど窓の外をヒバリが飛んでいくのが見えた。

白い雲の浮かぶ空。イギリスの地では珍しいほどのめったにない快晴だ。

そういえば最近外には出ていない。最後に出たのはいつだったんだろう。

意に沿わず、グレイのヘアカットショーに参加したときだっただろうか。あれを外出に含めるなら。

「マイケル、あなた明日休暇を取る気はない？」

アビゲイルの申し出は急で、驚いた私はナイフの手を止めた。

「ここへ来てからずっと休んでいないでしょう？」

思い返してみれば確かにそうだ。

本社から面接官のアーロンに連れてこられて以来、一日も休暇はもらっていない。あまりにも毎日が早く過ぎ去っていき、今まで気にするどころじゃなかった。

休みか。とても魅力的な申し出だ。だけど……。

「でも、皆さんの食事の用意もありますし」

「そんなこと言ったら、いつまでも休みなんて取れないわよ」  
くすりと笑って彼女は言う。もっともだ。

「それに明日ならボスが一日出かけるし。ディケンスズ本社に出向く予定だから。朝食をとりながらの会議で、夜もご飯食べてから帰ってくるはずよ」

ボスのことももちろんそうだけれど、私の後ろ髪を引っ張るのは隊の皆で。

ここに来た初日に目にした光景。ゴミ箱から溢れていたインスタント食品の容器。あんな食事を二度と繰り返してもらいたくはない。「部下の食事は作りおきして、温めて食べてもらえばいいじゃない。ねえマイケル、気にはならない？　ボスがよく行くお店。一緒に食べに行ってみない？」

アビゲイルの強烈な一押し。

「行きます」と即答してしまった。

ボスを通う店。それを聞いただけで私の迷いはすっかり消えた。皆には悪いけれど、一日くらい我慢してもらおう。

ボスの馴染みの料理店がどんなところか、正直ずっと気になっていた。行ってみれば勉強になるはずだ。うまくすれば、コックと話したり、厨房だって覗かせてもらえるかもしれない。

わくわくしてきた。料理人としての血が騒ぐ。

「じゃあ決まりね。休暇のこと、ボスには私から話しておくわ」

私は喜んでその言葉に乗った。

明日の朝九時に玄関に集合を約束して、彼女は出て行った。

ありがたい。その時間なら朝食の準備までは完璧だ。

明日の朝と昼はサンドイッチとスープ、夜はカレーライスとサラ



ダの予定。朝と昼では挟む具材を変えて、パンも違うものを用意する。スープも朝はポタージユで、昼はトマトベース。

朝食を食べるのは夜勤明けの人たちだけだし、彼らは昼間は休んでいる。だから、朝と昼を同じメニューにしたとしても、誰も同じものを食べることはないのだが。いくら休暇を取っていようと、コックとしてできることはしておきたい。

私はジャガイモの皮むきを再開した。明日の分までむいて備えよう。カレーは今晚の料理と合わせて作り置きすればいい。

ナイフを滑らせながらも、私の心はすでに明日へ。ボスの心を掴んで離さないという伝説の店へと向いていた。

## 22・ミシエルの休暇（後書き）

次回予告：ボスの行きつけへと向うミシエルとアビゲイル。店に着くまでの彼女達の珍道中。

第23話「跳ね馬ひとの女」

お話を気に入っていただけでしたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

### 23・跳ね馬の女(ひと)

翌朝の早い時間、ヘリコプターの飛び立つ音が聞こえてきた。

ボスが出発したのだらう。

いつもより早めに食事の準備に厨房まで来ていた私は、食堂へと出た。遠ざかっていくヘリの姿を見送る。

それから、朝食の準備開始。具材を挟んだパンをスライスして切り分け、皿の上に並べていく。乾かないようにラッピングして、ポタージュスープの鍋は保温機能のあるワゴンの上に置く。スープ皿と取り皿、スプーンも用意してこれで完了だ。

昼の分のサンドイッチは冷蔵庫へ。夜のサラダもそこに入れて。

トマトスープとカレーの鍋はコンロの上だ。温めてもらえばすぐに食べられる。

それから炊飯器をセット。保温時間が長くなれば味は落ちてくるだろうけれど、勘弁してもらえないだろう。

あとは、食堂の入り口に書置きを貼っておく。謝罪の言葉とセルフサービスでお願いしますと一言。

よし全て終了。部屋に戻って着替えてこよう。

クローゼットを開けて、とんでもないことに気付く。

ハンガーにかかっているのは女物の洋服。実家から送ってもらった数枚の物だ。男物であるのは、ここに来たときに着ていた紺色のスーツだけ。堅苦しい。

でも、目的は食事だし、ボスが行く店にドレスコードがないとも考えにくい。またネクタイをするのは嫌だけど、他に着る服がないから仕方ない。

私は観念してスーツの上着に腕を通した。

「スーツで来たわね」

玄関で会って早々、アビゲイルにそう言われた。

「これしか持っていないもので」

私は肩を落としながらも彼女の服に目を見張る。

黒いワンピース。大きく開いた襟元と裾にあしらわれたフリルが華やかだ。腕には金ブレスレット。いつもはアップにしている髪も下していて、長い赤毛が大きくうねっている。ゴージャスだ。

「良かったわ。今日行くお店は二つよ。そのうち一つは五つ星レストランだもの。昨日服のこと言わなかったから、ジーンズとかで来たらどうしようかと心配してたの」

ビンゴだ。やっぱりボスは高級店志向のようだ。

とは言っても、どちらにしても私にはこの服しかないのだけど。

腕に手を回され、どきりとする。普段は匂わないエレガントな香水がふわりと漂う。

「運転は私にさせてね。街まですぐよ」

車のキーを見せながら言う。私は車の運転なんてしたことがないから、その申し出は都合がいい。

彼女の嬉しそうな笑顔。男だったらきつと誰だつてぐらりとくるだろう。

腕を引かれて外へ出て、城の西側に当たる車庫へと着く。

大きな車庫だ。港とかにある倉庫のようだ。何台もの車が並んでいる。軍用車両のようなジープやトラックから、大型の四駆、誰もが知る高級車までずらりだ。バイクもある。

車庫の前で待っていると、アビゲイルが出してきたのは赤いフェラーリのオープンカーだった。彼女は黒いサングラスをかけている。助手席のドアを開けて、私が乗り込むと出発だった。

アクセルが踏み込まれ、わが国屈指の暴れ馬が走り出す。操るアビゲイルの顔にも笑みが浮かぶ。彼女の声が私の顔を余計に引きつらせる。

運転すると人格が変わってしまうタイプ。彼女もまたそうだったようだ。

「行っけー！」

踏み込みつぱなしのアクセル。  
渦巻く風に揉まれながら「街まですぐ」の言葉の本当の意味を知った。

城から一番近い街。

アビゲイルの運転により一時間足らずで着いた。

周りの景色なんて見る余裕がなかった。緑の丘が続いていたような気がするけど。

体中の力が入っていたせいか、肩や首が痛い。それになんだか凄く疲れた。

アビゲイルは運転席で伸びをした。ご満悦だ。彼女はサングラスをとり、腕時計を見た。

「まだランチには早いわね。少し辺りを見てみる？」

そのほうがいい。今何か食べたって味なんて分からないだろうし、悪くしたら戻しちゃうかも。私は頷いて車を降りた。

開けているが、昔の風情が残っている街だ。私が生まれ育った街をほうふつとさせる。

イタリアとイギリスでは、もちろん建物の形や生えている木々、空の色まで違っているが、なんだか思い出してしまふ。もしかしてホームシックだろうか。

私はアビゲイルと一緒に街を散策した。ボスの通う店の前を通りかかったが、まだ準備中の札がかかっていた。立ち止まって中を覗き込む私の腕を引っ張って、彼女は歩き続ける。

「今のが五つ星レストラン。お昼はここで食べて、夕食は別の店よ」私の目はさっきのお店に止まったままだ。どんな料理が出るんだろう。どんな調理をするんだろう。厨房はどんなでシェフはどんな人だろう。

店が見えなくなっても私の心はその店にあった。

辺りをぐるりと回って、たどり着いたのが公園だった。何人もの人が集まっている。

散歩中の人やベンチで日光浴をする人。今日もいい天気だし。

老人もいたが、親に連れられた小さな子供もいる。噴水の水に触ろうとしていたり、他の子と遊んでいたり楽しそうだ。

そして、地面に座り込んだ子供を見たとき、私の手はポケットに伸びた。地面を覆うのは沢山の鳩だ。子供が手にした餌を目当てに群がっている。

動物好きの血が騒ぐ。足が多いものと足がないもの以外は皆大好きだ。

辺りを見回すと餌売の人がいた。よし、買って来よう。財布を手につきつきと近付く。

だが、餌を買うことは出来ず、ベンチで待つアビゲイルの元に戻ってきた。

「どうしたの？」

彼女は怪訝そうだ。

我ながら自分の馬鹿さ加減には呆れてくる。私は一ポンドも持っていないかった。財布の中にあるのはユーロ札とユーロ硬貨のみだ。

訳を話すと彼女はお金を貸してくれた。

「あなたって動物が好きなのね」

餌を目当てに集まってきた鳩を肩や頭に乗せたばかりか、散歩中の犬にまでちょっかいを出す私を楽しそうに見ている。

「うちの猛獣もそうやって懐いてくれたらいいのにな」

ぼそりと言う。それってボスのことだろうか。猛獣って……当てはまってるかも。

犬の尻尾にパタパタと足を叩かれながら、私の背に小さい震えが走った。ああ嫌だ。休みのときまであの人のことは考えたくない。

撫でる手を止めてしまった私を不思議そうに見上げる黒い瞳。優しい顔をしたラブラドルに心癒される。動物って本当に可愛い。

公園で昼時を迎え、私たちはレストランまで引き返すことにした。

### 23・跳ね馬の女(ひと)(後書き)

次回予告：まずは一軒目。ボスをひきつける秘密を探るミシエルだったが、出てきたのはその店のシェフとアビゲイルの微妙な関係で……。

第24話「ボスの行きつけ」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッと願います(ランキングの表示はPCのみです)

## 24 . ボスの行きつけ

扉をくぐる前からいい匂いが通りに流れていた。

店の席に通された私たちの前に最初にやってきたのは、店の支配人と思われる白い上着を着た恰幅のいい中年の男だった。

「いつもご利用いただきありがとうございます。どうぞございます。それで……」

彼の視線が席を見渡す。

「今日はあの人は来ないわ。ロンドンに出ているから」

アビゲイルの言葉にあからさまにほっとした表情。この人もきつとボスの被害者に違いない。

「この子はうちのコックなの。勉強をしたいというから連れてきたのよ。後で厨房を見せてくれないかしら」

男はぶしつけに私を見つめる。値踏みされているようだ。なんだが居心地が悪い。

「ほら、うちのコックの料理をボスが食べてくれるようになれば、ここに来るのも減るんじゃないかしら」

アビゲイルの一言は決定的だった。男は両手を合わせて握りしめると、何度も同意の言葉を口にした。

組織以外の人まで巻き込むなんてボスは罪深い。でも、このお店のお陰で私も助かっている部分があるのだし。複雑な思いでその人の背中を見送った。

やがてウェイターが現れて次々に料理を運んでくる。

ランチなのでそう沢山は出てこないと思っていたが、想像を超える量だ。

内容も何料理なのか判断の困る感じだ。ベースになっているのはフランス料理のようだが、色々な要素が入り混じっている。創作料理と言っているのだろう。

味は最高。さすが五つ星を掲げているだけはある。だけど、ボスの嗜好とは違う気がする。あの人はもつと濃い味が好みのはずだ。



最後の料理を持ってきたのは、コック帽をかぶった白衣の背の高い男だった。

「まあ、アントン。また白髪が増えたわね」

アビゲイルが立ち上がる。男はテーブルに料理を置いて苦笑した。

「君のボスのお陰さ、アビゲイル」

そう言う彼の頭には、なるほど白いものが目立っている。アビゲイルより少し年上くらいなのに。黒みがかかった栗色の髪だ。余計目立つ。彼は私へと目をやった。

「味はどうか、同業者」

「とても美味しいです。でも、ボスの好みとは……」

「ああ」

彼は笑いながら頷く。温かみのある笑顔だ。

「彼が来たときには調整している。なかなか加減が難しいがね。見極めるまで何度呼び出しをくらったり、厨房に押しかけられたりされたかしのれない。遠慮なしに言わせてもらえるなら迷惑な客だ」

それはそうだろう。大いに同意だ。

「この店はディケンズ本社が出資していてね。断れない立場なのよアビゲイルの耳打ちに納得する。五つ星を掲げるなら、本来であれば客を選ぶことだってできるはずだ。

「お世話をかけるわね、アントン」

すまなそうに彼女は詫げる。

「君のボスだから我慢してるんだよ」

彼の声はひどく真面目だ。この雰囲気はなんだか……。二人の間に微妙な空気が流れている。続く沈黙は耐えられないものだった。私は席から立ちあがった。

「あ、あの、厨房を見せてはもらえませんか」

申し出に彼は無言で私を振り返る。

「私からもお願いするわ」

アビゲイルの言葉に黙って頷く。そして「ついて来い」と背を向

けた。

私は大急ぎで彼の背中を追った。

店の厨房は大きかった。彼はシェフであり、五人のコックをかかえていた。

解説つきで調理を見せてもらう。実に興味深かった。だが、実用となると疑問が残る。

料理そのものも彼が独自に作り上げたもので、私の料理とは殆ど接点がなかったこともある。そして、肝心な調味料の量については、彼は首を横に振るばかりだった。

「まったく同じ料理を作るなら教えてやれる。だけど、そうでないなら目安なんてないんだ。作るものによって違ってくるから。出来上がった味を想像して、加えていくしかない。彼と同じ舌を持ったつもりでね」

同じ物なんて作って、あの人が納得するだろうか。猿真似だなんてかえって怒りそうな気がする。メモを取らせてもらいながら、溜め息をつく。

「同じ料理じゃ気に入らないんじゃないか。それならうちに食べに来ればいいんだから」

アントンさんも同じことを言った。

やっぱりそうだよ。自分で探っていくしかないか。私はメモを閉じた。

コックたちに礼を言って、厨房を出る。

「アビゲイルによるしく言ってくれ。彼女の助けになればと思ったんだが」

最後に彼はそう言った。

二人の関係はどうも怪しい。テーブルに戻った私を待っていたアビゲイルは、彼が何か言っていないかと思ったかと尋ねた。私は言われたとおりのことを答える。彼女は席を立ち上がった。

「あの人はずっと昔にお付き合いしてたのよ。今はどちらとも別

のパートナーを見つけたんだけどね」

別のパートナー？ 私が感じた限り、あの人のほうは未練たらたらようだったけれど。

なんて言葉を返していいか戸惑う私を置いて、彼女は歩いていく。支配人に近付いてツケにしてくれと言うと、後ろを振り返りもしないで外に出た。

こんな時、なんて言えばいいのだろう。頭の中はぐるぐる回っているが、気のきいた言葉は出てこない。

「マイケル、次のお店に行きましょう」

遅れて店から出た私を笑顔で迎える。二人で肩を並べて駐車場を指す。

いつものアビゲイルだ。表情を窺いながらもほっとする。

車を見て私は思い出した。またあのスピードと恐怖に耐えなければいけない。

横を見るとアビゲイルの姿はすでになく、意気揚々と車のシートに身を沈めるところだった。

## 24 ポスの行きつけ（後書き）

次回予告：真打登場？ 二件目の店でミシエルは確信する。この店の人にこそ学ぶべきことがあると。ポスの心を掴むその秘密とは…。

第25話「ポスの気に入り」

お話を気に入っていただけでしたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

## 25 . ポスの気に入り

次の街までは、ほぼ二時間かった。

地図にすれば、マステイマの城とさっきのレストランとこれから向かう店は三角形の位置になるらしい。

さすがにまだお腹は減っていない。

こういうことなら、もっとゆっくりとドライブに浸ればいいと思うのだが、アビゲイルにはそんなつもりはさらさらないうだった。「すつきりするわ」

輝くような笑顔で言う。彼女もそうとうストレスを溜めているのかも知れない。まあ、上司があんなのでは仕方ないか。

はっと気付く。またポスのことを考えてしまった。なんだか時間を損じた気分だ。

気を取り直してまた街を巡る。さっきの街とは違い、こぢんまりとしている。居心地がよさそうなところだ。こんなところにポスの行きつけがあるのだろうか。

私たちは住宅地に差しかかり、各家の庭の素晴らしさに見入る。イングリッシュ・ガーデンというやつだ。それぞれに個性があり、美しい。

アビゲイルは庭に出ていた奥さんに話しかけられ、バラを切り分けてもらっていた。

いいなあ。美人って得だと思いつつ見ていると、彼女は一輪手折り、私の上着の胸ポケットに入れてくれた。なんだか照れくさい。そうして、私たちは時間を潰してから店へとやってきた。

「ここですか？」

思わずアビゲイルに問う。

そこは一軒の民家のようなだった。店らしいものは何一つ見て取れない。もちろん看板もない。彼女は笑って頷いた。

「まさに隠れ家よね」

扉を開けながら言う。

中に入ると確かに店だった。テーブルと椅子が並べられ、中には数人の客がいた。程よく薄暗く、なんだか落ち着くところだ。そう広くないのもいい。

カウンターから太った中年の女が出てきた。かなり背丈もある。迫力からしてレイバンといい勝負じゃないだろうか。

エプロンを身に着けた彼女は、私たちを見て白い歯を見せた。

「久しぶりに会うじゃないか、嬢ちゃん」

アビゲイルを抱き寄せる。

「ええ、アンナ。本当に」

そう言う彼女は大きい体に包まれ、今にも押しつぶされそうだ。体を離してから店の女は周りを見回した。

「今日は目つきの悪い坊やは来てないのかい？」

「私たち二人だけよ」

「そうだよ。三日前にも来たばかりだもんねえ」

二人の会話は続いていくが、私は付いて行っていなかった。目つきの悪い坊やって……やっぱりボスのことなんだろうな。

女の視線を感じて、彼女を見やる。

「これまたちつこいのを連れてきたね」

「うちのコックよ。あなたの料理を習いに来たの」

アビゲイルの言葉に、彼女は私の肩を掴むと、じっと顔を覗きこんだ。

そして、豪快に笑い出す。

「うちから学ぶものなんて何もないよ」

「そんなことはありません。お願いします」

私はそう言っただけで食い下がる。ボスが通い続けるのには訳があるはずだ。あの人が満足のいかない料理を許すなんてわけがない。

彼女はぴたりと笑うのを止めた。

「あんたもあの目つき悪いのと同じで無理を言うね」  
不機嫌そうに言う。

そうして、太い腕の中に私の肩を包み込み、意思に関係なく、カウターの内側に引つ張つていった。

「あの坊やはね、初めてここに来たとき、随分無茶を言ったんだよ。だからつまみだしてやった。あんたもそうされたいかい？」

ものすごい迫力だ。体が大きいからだけじゃない。太い声のせいだけでもない。なんかこうオーラがあるのだ。それにボスをつまみ出したって？ 只者じゃない。

「嫌です。教えていただくまでは」

彼女は私の顔を覗きこんだ。顔そのものもとても大きい。黒い髪に太い眉。目力もある。

「頑固だね。さてはあんたのせいだね、最近あの坊やがここへ来るのが減つたのは」

営業妨害だとか怒られるのだろうか。どうもそんな雰囲気だ。

私が縮こまると彼女は笑い出した。

「大したもんじゃないか」

私の背中を大きな手で叩く。あまりの痛さに飛び上がる。そんなことはお構い無しに、彼女は私の腕をとり、厨房へと引きずって行った。

「ご覧、あれがうちの秘密兵器だよ」

痛みからつぶっていた目を開ける前から、分かっていた。お腹を刺激するいい匂い。

目の前にあったのは丸いドーム型の石釜。これはピッツアの匂いだ。

「イタリアの職人に作ってもらったもんだ。うちの宝だよ」

腰に手を当て、彼女は得意げだ。

「もしかして、あなたもイタリアの方なんですか？」

「も……って、あんたもかい？」

私は自分のことを説明した。

私の父親はイギリス人だが、住んでいたのは母の実家であるイタリアであることを。

たった一つの共通点だったが、効果は大だった。彼女は一気に打ち解けてくれた。

「うちも旦那がイギリス人で、あたしがイタリア人なんだ。あなたの両親と同じだね」と。

また新たな共通点を見出し、彼女はにっと笑う。

石釜からピッツアを出してきて、味見までさせてくれた。

懐かしい味。とても美味しい。ソーセージからして違う。きっとトマトも。

案の定、彼女は特製のホールトマトを見せてくれた。やっぱりイタリア産のトマトだ。

使っているサラミもソーセージもイタリア製だ。嬉しくなってしまう。

「たくさんあるから持ってお行き」

袋に次々詰めてくれる。

ピザ生地材料も分量まで細かく教えてくれた。生地を作るとき  
の注意点も。企業秘密も何もない。

「あの坊やもイタリアにはゆかりがあるようだね」

初耳だった。思わずメモをとる手を止める。彼女の話は続いた。

「色々と詳しくかったしね。だけど、うるさい子だよ。初めて来たとき、つまみ出したって話しただろう。このピッツアの味にいちやもんをつけたんでね。うちにはうちのやり方がある、文句を言うなら帰れって言ってやったんだ」

両拳を腰に当てて笑う。全てが大きい人だが笑顔は可愛らしい。

「それでももう来ないと思ってたんだけど、一週間もしないうちに「来てやったぞ」って偉い顔なんだ。もう呆れてね。うちは味を変えたりしないよって言ってやった。最初は何かいる文句を言っていたけど、聞いている暇なんかはないよ。うちはあたし一人できりもりしてて忙しいからね。そしたら、いつの間にか、ちゃっかり常連客さ」

彼女は本当に凄い人だ。



いろいろ文句を言っていたって、普通ならそこでボスの迫力に負けているはずだ。忙しいって袖にするなんてどうやってやったんだろう。

でも、知ったところで彼女にしか出来ないやり方なんだろうな、きつと。

「あの坊や相手に苦勞してんだろ。でも大丈夫さ。あんたにはあたと同じ、イタリアの血が流れてるんだから」

よく分からない励まされ方だ。また背中を叩かれた。今度は手加減して軽くだ。

なんだか腑には落ちないが、大いに元気はもらった。

重くなった袋をようやく持って席に戻ると、アビゲイルが他の客からパンとワインのおすそ分けに預かっていた。

「あんたたち、うちのピッツア食べていきな」

嬉しい。さっきはちょっとしか食べなかつたし。ワインも頂いちゃおうかな。

私たちはアンナさんの極上ピッツアをすっかり堪能して、おいしいイタリアワインもゆっくりと味わった。

ああ、休日って最高。ずっとこんな日が続いたらいいのにと一瞬ではあるが、確実に思ってしまった。

## 25 .ボスの気に入り（後書き）

次回予告：マステイマの城へ戻ったミシエルとアビゲイル。だが、そこには激昂する、いるはずのない人が。一体何故こんなことに…。

第26話「怒りのボス（前編）」

お話を気に入っていただけでしたら、下のランキングの文字をポチッと願います（ランキングの表示はPCのみです）

## 26・怒りのボス（前編）

店の常連さんたちと打ち解けての夕食。

店主に学んでか気のいい人たちだった。話は途切れることなく、笑いも絶えることがない。

ついにはアンナさんまでテーブルに呼んで、皆でワインの瓶を開けた。

古くからの知り合いのような気分になる。店を出る頃には一抹の寂しささえおぼえた。

最後にアンナさんは私を抱きしめると頑張れとエールを送ってくれた。また来ることを約束して扉を閉じる。

あの人はまさに伝説のマンマだ。故郷のイタリアを思い出させてくれる。

とても寛げて、リフレッシュできた。気力も満ち足りている。

今からすぐにでも、貰った素材で料理を作りたいとさえ思っていた。

そして、帰り道は二人ともほろ酔い気分。

アビゲイルはお酒に強いらしく、ほとんど顔色も変わっていないが、私の顔は真っ赤だ。鏡で確認するまでもない。顔が火照るんだもの。

オープンカーの中で、荒々しく渦を巻く風が心地よく感じられる。城に着く頃には少しはましになっているだろう。

危ないからとの忠告も上の空。私は席から立ち上がり、風に髪を梳かせるままだった。頭上に広がる満天の星空を眺める。

一時間ほどかかり、見え始めた城からは光が漏れている。月の光に照らされて、お化け屋敷のような趣きは初めて見たときと変わらない。

城に戻った私たちに気づき、早々と駆けつけたのはマスティマの

隊員の一人だった。

「姐さん。マイケルも。早く来てください」

息を弾ませている。ただ事ではない様子に私の酔いも一気に醒めた。とりあえず、傍の椅子にアンナさんからもらった食材の袋を置く。

彼の案内で走って向かった先は……。まさか、そんな。

ボスの食堂だった。

「申し訳ありません、ボス」

悲鳴のような声が廊下にまで聞こえてくる。

「許してやれって言ってんだろうが。おれの部下に何てことさせてんだ」

続いての声はジャザナイア隊長だ。

「こいつは俺を騙した」

聞き違えるはずもない。これはボスの声だ。なんで食堂なんかにいるんだろう。今日は夕食を済ませてから戻ってくるはずなのに。

こっそりとドアの隙間から中を覗くと、若い隊員が土下座させられていた。その背中を踏みつけているのはボスその人だ。

「それは、おれにも責任があるって言ってるだろうが」

隊長はなんとかなだめようと必死だ。ボスは彼へと振り向く。

「その責任はどう取るつもりだ、部隊長」

「だから、部下の失敗は上の責任だろ」

二人の間のしばしの沈黙。聞こえるのは床ですすり泣く声だけ。

「てめえ、俺にも責任があるって言いてえのか」

明らかに火に油を注いだ。

ボスは脇に置かれていたワゴンを蹴りとばした。鈍い音を立てて、ワゴンは五十センチと離れていないテーブルに激突した。

「夜中に大声出すなって。近所迷惑だろうが」

「そんなもんあるか。お前の笑い声のほうがよく迷惑だ」

ボスは怒り心頭だ。いつもより口数も増えている気がする。

だが、ジャズ隊長は事態を收拾するどころか広げているようだ。こんな酷い状態なのに、飄々ヒョウハクとしていて、まるで動じていないように見える。

こんなのを聞いているのは心臓に悪い。私たちを連れてきた隊員は後ろでがたがた震えているし。

「まあまあ。落ち着いて、ボス」

アビゲイルが扉を開けて入って行った。この修羅場に入っているなんて、さすがだ。

ボスは彼女を一度見ると、悪態をついてそっぽを向いた。

「一体何があったのよ」

彼女がそう言うのが早いか、ボスはひれ伏す男に向かってワゴンを蹴り出した。衝突したワゴンは倒れ、横滑りした。男は呻いて身を丸めている。酷い。

「おい、ボス」

ジャザナイア隊長の呼びかけにも答ええない。憤然とこちらに向かってやってくる。

私より後ろの隊員のほうが慌てていた。私の上着を引っ張って隣の部屋に押し込み、隠れる。

大きな音が立って扉が開き、ボスの足音が遠ざかっていった。足音にまで怒りが含まれている。

安堵に力が抜けたように座り込む隊員をそこに残して、私はボスの食堂に入って行った。

「大丈夫？」

アビゲイルが床にうずくまる隊員を気遣っている。幸い大きな怪我にはなっていないようだ。

シヨックで声は出ていないが、手を上げて問題ないと示している。

「何があつたんですか」

私は隊長に尋ねた。

「ああ、マイケルか。実は連絡に手違いがあつてな。晩飯を食わずにあいつが戻ってきたんだ」

彼は参ったというように両手を上げる。

「んで、帰ってくるなり、腹が減った、飯を用意しろって。おれたち慌てたぜ。何しろ、部下の一人が先に分かりましたなんて答えちゃったもんだからな。それで思いついたんだ。冷蔵庫に何かあるかもしれないって」

話が見えてきた。思わずぞつとする。

「まさか、それをボスに出したんですか？」

「それしかねえだろ。美味そうなのが色々あつて困ったくらいだぜ」

それはボスへ出す料理の試作品だ。昨日作ったもので賞味期限はまだ先だが。いや、そもそもそんなことが問題ではない。

ジャズ隊長は頭を掻いた。

「それで温めて用意したんだ。そこまでは良かったんだがな。お前の代わりに給仕をしたこいつが経験不足でな。問いに正直に答えちゃったんだ」

「と言うと？」

「コックはまだ帰っていない。じゃ飯はどうやって用意したかというと、冷蔵庫の中の物を温めたってな」

最悪だ。そんなことをボスが許すわけがない。

「それで、あいつは「温めなおしを食わすのか。騙しやがったな」って怒り出してな。参ったぜ」

案の定だ。それでさっきの騒動になるのか。

「でもまあ過ぎたことだし。仕方ないよな」

両手を広げてあつげらんかんと言う。ぜんぜん参ってなんかいない。数分前のやりとりを覚えていないかのようだ。だけど、きつところいう隊長だからこそボスの下で働けるんだろう。

「なぜボスは急に戻ってきた訳？」

今度はアビゲイルが尋ねる。ジャズ隊長は笑った。

「おれも聞いたんだが、本社の上役なんかと三食食えるかってイラつとしてたぜ」

ああその様子が目に浮かぶようだ。

本社の人たちに囲まれて、にこやかに会食なんてボスには似合わない。

同席した見ず知らずの人に思いを馳せる。

あの人と食事なんて、仕事のうちとは言え、気の毒だ。いかにも消化に悪そうだし。考えただけでお腹が痛くなってくる。

## 26・怒りのボス（前編）（後書き）

次回予告：ボスに壊されたワゴン。直してもらおうと技術情報部へ。現れたのは疲れ切った風体の男。いきなり切り出されたプリシラの話にミシエルは驚くのだが……。

第27話「怒りのボス（後編）」

お話を気に入っていただけでしたら、下のランキングの文字をポチッと願います（ランキングの表示はPCのみです）



## 27・怒りのボス（後編）

私は横倒しになったワゴンを見やった。

ようやく立ち上がったのはボスの犠牲者である若い男だ。まだ顔色は悪いから無理しないように、気分が悪くなったらすぐに医務室に来るようにとアビゲイルが声をかけていた。

彼ももちろん可哀想だが、二度も蹴りを入れられたこのワゴンも被害者だ。

しゃがんで傷に触れる。脇のアルミの板がぼっこり凹んでいる。修理に出さなくちゃいけない。

「大丈夫よ、マイケル。技術情報部に頼んでおくから。明日の朝には直って返ってくるわ」

アビゲイルはそう言ってくれたけれど。

私はこの時ほど強くなりたいたと思ったことはなかった。ボスをつまみ出したというあのアンナさんのように。

彼女から学ぶべきだったのは料理などではなくて、ボスに対抗できる強さだったのではないだろうか。

私は立ち上がり、ワゴンを起こした。今はできることをするしかない。

「僕、出してきました。技術情報部って何処ですか」

お願いして急いで直してもらうのに、人づてで頼むのはおかしいだろう。

私は場所を聞いて、ワゴンを押して部屋を出た。タイヤの軸もおかしくなっているのか、なかなか真っ直ぐには進んでくれなくて、大変だったけれど。

技術情報部には今まで出入りしたことはない。それは西棟端の一階にあった。

まさに外れと言って過言ではない場所。廊下のカーペットはくすんだ色をしていたし、壁紙も古ぼけている。窓ガラスまで曇って見

えた。

部署として名前は耳にしたことはある。あの不吉なボスの武器、衝撃銃ことシヨック・パルス・ランチャーの話のときだ。

それから、ワゴンに保温機能をつけてくれたのも確か技術情報部だ。アビゲイルを通してだったので詳しくは分からないけど。

もつとも、それ以外は何も知らなかったし、他に耳にすることもなかった。

考えてみれば、ジャザナイア隊長が率いているのは実行部隊なのだから、他に部があってもおかしくはない。

だけど、これだけ話題に上らないということは、秘密の部署ということだろうか。或いは単なる開かずの間だったりして。

目的の入り口である扉を見つけて、立ち止まる。両開きのドアだ。

ノックしようと拳を上げる。だが、そうする前に片方の扉が脇にスライドした。自動ドアだ。ノブのあるそのデザインからは想像もできなかったが。

照明のある廊下よりも薄暗い室内。いくつもの光が点滅している。不意に扉の縁に白い指が現れた。

内側から出てきたのは男だった。足元はふらつき、怪しげだ。ちよつとつっつけば倒れそうな感じだ。

襟に届くほどの金髪はぼさぼさに乱れている。ボタンを三個ほど外して前を開いた、しわくちやのシャツにサスペンダー。背が高く痩せ気味で、顎と鼻の下には薄っすらと無精ひげ。

目をしょぼしょぼさせながら、私に近寄ってきた。顔を寄せてきて、しばたくこと三回。

「ああ来たね。コックのマイケルだっけ？」

疲れているのか、地声なのか。男の声はかすれていた。

胸ポケットに突っ込んだ丸眼鏡を取り出してかける。瓶底並の厚さだ。それでも目の下のくままでは隠しきれていない。

彼はもつれた金髪を掻いた。まだ若そうなのに、かなり老けて見

える。

「アビーから聞いてるよ。ちょっと待ってて。おい、工具箱とつてくれ」

肩越しに室内に声をかける。

部屋の中には何人もいるようだ。彼より若い青白い顔をした男が、金属の長細いボックスを持ってきて差し出す。

両袖をたくし上げた彼は、早速修理にとりかかった。ワゴンを横に倒して、板を止めている螺子をドライバーで外し始める。

「プリシラがお世話になったそうだね。ありがとう」

彼は作業を続けながら言う。

私は話についていけず、固まる。

プリシラはアビゲイルの娘だ。お世話になったそうだねって、そんな言葉をかけるとしたら。

「あなたはアビゲイルの……」

「アビーは僕の妻だよ、マイケル。僕はオスカー。技術情報部の部長だ」

丁度螺子を外し終えた彼は、下がってきた眼鏡を押しやった。それから右手を差し出す。私は慌てて彼の手を握った。

「こちらこそ、彼女にはとてもお世話になっています」

私の言葉に笑顔を返す。疲れ切った顔に束の間精気が戻る。優しげで気持ちがほんわりとする笑みだ。

「君のことは聞いてるよ。頑張り屋だって。彼女は君を気に入っているみたいだ」

それは嬉しい言葉だけど。

手元に目を戻した彼は作業を続ける。アルミ板を取り外し、内側からハンマーで叩いて凹みを伸ばす。実に手際がいい。車軸の歪みまで直して、元通りになるには十五分くらいで足りた。

私は前後にワゴンを揺らして確認する。完璧な仕事だ。

「ありがとうございます。おかげで助かります」

「いや大したことではないよ。それより、君のコーヒーをうちの奴

らにも届けてもらえないかな。ここ三日ずつともりっぱなしで徹夜なんだ」

それでこの人はこんな風貌なのだと思得する。そういえば、工具を持ってきた人も若いのになんだか元気がなかった。

「部長、本社からデータが転送されました。解析始めます」

扉から顔を覗かせて、さっきの男が言う。

手を上げてそれに答えたオズカーは、私に背を向けると部屋に入って行った。

「コーヒー、すぐにお届けしますから」

私のその声に振り返ってにつこりと笑う。彼の笑みは心に染み渡る感じがする。きつとアビゲイルもこの笑顔で彼を選んだのだと思う。

自動扉が閉まると、私は大急ぎで厨房に戻った。

煮立ったコーヒーを捨て、新しく入れなおす。そして、出来上がったコーヒーを保温用サーバーに入れ、作り置きしていたクッキーと一緒にワゴンに載せた。

それからもと来た道を引き返す。技術情報部の人たちは喜んで受け取ってくれた。

## 27・怒りのボス（後編）（後書き）

次回予告：仮契約から三ヶ月経過し、いよいよ本採用に。ミシエルの胸は高鳴る。だが、言い渡されたのは予想外の辞令。彼女の決断は……。

### 第28話「辞令交付」

お話を気に入っていただけでしたら、下のランキングの文字をポチッと願います（ランキングの表示はPCのみです）

## 28・辞令交付

マステイマに入ってもうすぐ三ヶ月。まもなく仮契約は終わりだ。我ながら、よく頑張ったと思う。ボスに酷い目に合わされながらも。

ようやく最近では、何回かに一回は完食してもらえるようになった。ボスの行きつけのお店に行ったことが良かったのかもしれない。なによりもピッツアのお店のアンナさんからもらった食材は大いに役立たせてもらった。

だけど、もちろん、外したときは制裁が待っているのは変わらない。

だいたいあの人は全部食べたときも感想なんてないのだから、本当に満足したのか、それとも気まぐれなのかの判断がつかない。

それでも初めて白衣を汚さずに食堂に戻ってきた日のことは、一生忘れないだろう。廊下ですれ違う人まで、拍手を贈ってくれたのだから。思わず感動して不覚にも涙が出そうになった。翌日にはまた、汚して帰ってきたのだけ。

アビゲイルも本当に喜んでくれた。ボスが出て行った食堂で私を抱きしめてくれた。

男でなくって良かった。こんなことされたら嬉しすぎて勘違いしそうだ。

彼女はマステイマの経理も担当していて、よく「うちのエンゲル係数は異様に高いのよ」とぼやいていたから、そういった意味もあったんだろうと思う。

なんて言っても、私の料理を木っ端みじんにした後のボスは外食に繰り出すのだから。時に五つ星のレストランを一人で貸切にしているらしいから、必然的に高くなるだろう。

三ヶ月目を迎える前日、アビゲイルがうきうきとした足取りで食堂へやってきた。手に丸めた雑誌のようなものを握って。

彼女は私を招いて、テーブルの上にそれを広げた。  
マステイマの制服のカタログだった。

私はコックだからいつもは白衣だが、式典のときなどに着ることになるらしい。色々な丈の上着、形のズボンがあった。  
なるほど。カスタマイズできるんだ。

一番印象的なのはボスのロングコートだが、幹部の制服には他にも色々なデザインがある。

ジャザナイア隊長のは胸の切り替え部分にフリンジが付いている。グレイのは脇や袖に銀のバツクルの飾りが付いているし、レイバンのは軍用コートのように襟を詰めることができるようになっていて、個性のある仕様だ。

「へー、ペーパー共とは違うんだ」

例のごとくコーヒーを飲みを訪れていたグレイが横から覗き込む。彼女はにっこりとする。

「さあ、マイケル。どれがいい？ 自分の好きなものでいいのよ」  
私は背が高くないから、丈の長いコートは似合わないだろうな。グレイと同じ短めの丈でいいかも。襟は立てるのも寝かせるのも出来るので、ボタンはダブルがいいかな。あつ、フードつきでファーがついたのもあるんだ。袖口にも取り付けられるタイプのものもある。カタログを見て、悩みながらも選ぶのは楽しい。いつもの白衣も好きだけど、マステイマの制服は特別だから。

全てを決め終わると、付箋をはさんだそのカタログを持って、アビゲイルは席を立った。

「明日、幹部会議に出てもらうわよ。十時からいつもの会議室だから遅れないようにね」

いよいよ本採用なのだ。私は胸を躍らせながら返事をした。

翌日の十時十分前。私は会議室の扉の前にいた。

白衣からスーツに着替えた私は、その時を今か今かと待ちわびる。廊下を落ち着かなく行ったり来たりしている自分がいた。ネクタイ

の窮屈さも気持ちの外だ。

やっと三分前。そろそろいいかな。ノックをする。少し待つと、アビゲイルが開けてくれた。

「……の実施は来月の第二週だ」

ジャザナイア隊長の声が最初に聞こえた。

「またきたか。気が重いな」

レイバンの声は本当に憂鬱そうだ。

「オレは待ってたもんね。楽ししみー」

対照的なグレイの声。

ボスは奥の正面の椅子に座っている。さすがに今日は眠っていない。

彼は私に目をとめた。その斜め横の席に座っていた隊長も入ってきた私に気付く。

「お、来たか。さっき言ったんだけど……」

「そのことは後で俺から話す」

彼の言葉を遮ったのはボスだ。ジャズ隊長は頷いた。

「じゃあ始めるか。辞令交付式だ」

私を傍に招き、立ち上がると彼は笑顔で言った。

「マイケル、本日付で君を正式なマステイマのコックとして任命する」

「ありがとうございます」

差し出された手を握る。

「これからも頑張ってくれ」

彼もぎゅっと握り返してきた。

私の感激もピークになる。やばい、感涙してしまいそうだ。

「おい、ジャザナイア」

黙って見ていたボスが隊長を睨みつける。すると、彼は分かっているという風に片手を挙げた。再び私に視線を戻す。

「それからもう一つ辞令がある。君をボス付けのコックとする」

耳にした後も意味が分からなかった。コックはコックでもボス付



けって一体……。

「ボス専属のコックってことよ」

アビゲイルが背後に立つ私を振り返って補足してくれる。

そうか、なるほど。ボス専属の。

……って、え？ それはどういう意味？

「それはボスの食事だけを作るコックってことですか？」

外れてほしいと思いつつも確認してみる。

「今までなかったことだ。凄いことだぞ、マイケル」

私なんかよりジャザナイア隊長の方が興奮気味だ。だけど、納得がいかない。愕然としながらボスを見やる。

「光栄に思え」

ボスは私を見上げて言った。テーブルに両肘を付き、両手を組んでその上に顎を乗せている。

光栄に思え？ そんなこと思えるもんですか。

「……お断りします」

私の言葉に皆が唾然とした。レイバンが激しい目つきで睨んだ。

「僕はマステイマのコックとして、ここに来たんです。ボスの専属コックになりました。わいわいありません」

「おいマイケル。ものすごい昇進なんだぞ」

ジャザナイア隊長は私を考え直させようとしている。私の肩に手をかけ、揺さぶるようにして。

「あなたは私たちと同じ幹部になるわ。私の部下じゃなくて、ボス直属の部下になるのよ」

アビゲイルまでも私を思い留まらせようとする。彼女は席を立ち、私の傍に寄った。

「ボスの申し出を断るとは許されんぞ」

レイバンもまた立ち上がった。怒りがふつふつとたぎっているのが分かる。

ボスとグレイだけが席に着いたままだった。グレイの顔には薄っすらとだが笑みが浮かんでいるように見える。椅子の背もたれに寄

りかかり、彼は私を見上げていた。

「おい、分かつてるのか、コック」

レイバンが私の前で仁王立ちになり、凄む。それでも私の思いを変えることなんてできない。

昔、命を助けてくれたボスへの恩を忘れたわけじゃない。だけど、今の私を支えてくれているのはマステイマの隊員たちなのだ。彼らへ報いずしてコックとして務める意味があるだろうか。私は真っ直ぐにボスを見つめた。

「貴様」

レイバンが私の襟元をめがけて手をのばしてくる。

その時、ボスが両手でテーブルを叩き、立ち上がった。皆が彼を見た。

「もついい。好きにしろ」

彼は吐き捨てるように言う。そして席を離れて歩き出した。

「だが、二度とチャンスはないと思え」

傍を通り過ぎるときに言い放つ。そんなことはこちらの望むところだ。

私は彼の背中に向って大きな声で言った。

「これからもマステイマのコックとしてお世話になります」

答えはもちろんなく、勢いのついた扉が大きな音を立てて閉まった。

## 28・辞令交付（後書き）

次回予告：ボスの専属コツクの辞令を撥ね付けたミシエル。心配するアビゲイルたちだったが、彼女の信念は変わることなく……。

第29話「コツクの心意気」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

## 29・コックの心意気

ボスが出て行くことで、会議室の緊迫した空気は一気に和らいだ。「お前、本当にこれで良かったのか」

ジャザナイア隊長は、私の頭に手を乗せながら尋ねる。

「はい。僕は幹部を望んでいるわけでも昇進を望んでいるわけでもないんです。マステイマの人たち皆に料理を作りたいんですよ」

私の代わりに溜め息をついたのは、アビゲイルだ。

「でも、惜しいことをしたんじゃない？ あれだけボスの満足の良い料理を作ろうと頑張っていたのに。だいたいボスがこんな申し出をするなんて、ありえないことよ。たとえ気まぐれだってね」

「僕は、皆さんに満足のいく食事をしてもらいたいだけです」

私は胸を張る。そう、それこそが私が目指すところだ。

「お前らしーな。オレは読めてたぜ。ボスの機嫌を伺って昇進を狙っていく奴なんかじゃねーってな」

グレイが席を立ち、私の傍までやってくる。

「やっぱりお前は面白れーな、ミック」

彼は、銀髪から覗いた左目を細めて、楽しそうに笑った。

「自分は認めんぞ」

レイバンの怒りは収まっていない。脇に下した両拳を握り締めている。惘然とした表情のまま、会議室を後にしようとしていた。

「お前はボスの期待を裏切った。ボスが許しても自分が許さん」

最後に言葉を残して去っていく。

彼の気持ちはなんとなく分かったし、私に対する怒りも理解できた。だが、もちろん、それで自らの考えを変えようとは思わない。

「気にしなくていいからな。あいつはボスが全てなんだから」

グレイの気遣いには感謝だ。気持ちが少しだけ楽になる。

私は三人に改めて挨拶をする。

「これからよろしくお願いします」

「ああ」と隊長。「こちらこそ」とアビゲイル。「またコーヒー頼むな」とグレイ。

今日からまた、本当のマスティマのコックとして頑張って働かなければ。

「そうそう、マイケル」

決意を新たにしているところへアビゲイルが声をかける。

「あの制服の件だけど白紙に戻るから。他の隊員たちと同じになっちゃうけどいい？」

他の隊員たちといえば、幹部のコートとは違う一様に揃いの黒いジャケットだ。

あれだけ迷ってカタログから選んだのに。私は肩を落としたが、決意には変えられない。

「そんなに着たけりゃ、おれのお古やるうか？」

ジャザナイア隊長が見かねたのか、そんなことを言い出す。隊長としての慈悲って奴だろうか。いや、違う気がする。

「そんなの貰ったって嬉しくねーよな。サイズだって合わねーだろーし」

グレイが突っ込む。

「だったらお前がやれ」

「オレの上着には色々仕掛けがあんの。タネバレ嫌だもん」

グレイがポケットに突っ込んだ手を出すと、そこには逆さ吊るしのトカゲが握られていた。ジャズ隊長は息を飲み、アビゲイルが声もなく隊長の陰に隠れる。

「オモチャだよん」

グレイはトカゲを揺らして笑った。

「制服にそんなもん入れるな。大事な物出すとき一緒に出てくるぞ。また少しいが外れたことを隊長が言っている。

アビゲイルは気持ち悪そうに腕を擦っている。苦手なようだ。私は爬虫類でも手足四本なら平気だ。

「マイケル、あなた大丈夫？ これからお昼だし、すぐにポストと会

わなきやいけないけど」

アビゲイルが気を取り直して言った。私のことを心配してくれるなんて優しい人だ。

「大丈夫です。ボスと戦うことに関してももう三ヶ月目ですよ」

怖いのも痛いのも変わらない。苦しいのも辛いのも変わらない。だけど、今でこそ分かってきたこともある。ボスが何に怒ってどう反応してくるか、ある程度考えることができる。対処だって大分できるところになってきた。

三ヶ月前の私とは違うのだ。私の浮かべた笑顔に彼女はほっとしたようだった。

そして、ボスの食堂で。

今日の昼食である、チーズ入り冷製パスタは私の頭の上に乗っている。

“カベッリーニ 天使の髪の毛” が垂れ下がってくる。そして、帽子のように引っかかっているのは皿だ。

「俺を窒息させる気か」

チーズの匂いのことを言っているのか、あるいは形状なのか。どちらか或いは両方でボスはお冠だ。そういえば、一回むせていた。大丈夫ですかと近寄ったらこの様だ。

でも、なんだかほっとした。ボスは変わらない。専属コックを断ったことを根に持って、難癖つけて暴力を振るう人ではないことは分かった。

いや、変わらないと感じるのは、最初からそういうことをやっていただけなのか。

私は手早く頭のパスタを用意してきた袋の中に落とした。床にこぼれた分も拾って入れる。

雑巾と絨毯の染み抜き剤、大活躍が決定だ。すぐに拭えば、ほぼ百パーセント汚れは落ちる。

ボスが壊しと汚しの専門なら、こっちは今や掃除と片付けのエキ

スパートだ。三ヶ月間で技術もかなり身についた。この汚れにはこれが最適だと人にアドバイスできるほどだ。

今日は、運が良いことに皿は無事で済んだ。洗うだけでいい。

厨房に帰ればタオルと替えの白衣も準備している。洗面所で頭まで洗えば問題ない。短い髪のおかげでドライヤー要らずだ。

ボスが去っていく。床で四つん這いになり、雑巾を片手に、私は密かに拳を握り締める。

あなたには負けません。これからどんな無理難題を突きつけられようとも。

正式なマステイマ隊員となったその日、私はそのことを改めて心に刻んだ。

## 29・コックの心意気（後書き）

次回予告：突然起こった停電。聞こえてくる、いくつもの銃声。何が起こったのかと混乱するミシエルの前に現れたグレイ。彼は肩に傷を負っていて……。

第30話「迫り来る敵（前編）」

お話を気に入っていただけでしたら、下のランキングの文字をポチッと願います（ランキングの表示はPCのみです）



### 30・迫り来る敵（前編）

その夜、私は厨房で晩御飯の片付けをしていた。

流しに置いた食器を洗う。その中にはボスのものも含まれていた。今夜は幸いにも欠けた皿はなく、私自身も無事に帰って来られた。

洗剤で汚れを落とした後、水洗いする。水切りのトレイにおいていき、あとは拭いて食器棚に戻すと終わりだ。

今夜はジャザナイア隊長からの酒のつまみの催促もない。あとでボスのワインを用意するだけの予定だ。いつもよりは少し早く上がれそうだ。

布巾を手にして皿を取ったときだった。

一瞬のうちに照明が消え、辺りが暗闇に包まれた。停電らしい。

私は皿を置いて手探りで、食堂へ出て廊下を覗いた。だが、何処まで見ても暗かった。窓から月明かりが入ってくるだけだ。

しばらくすると、非常用の電源に切り替わったようで、足元を照らす淡い照明だけが点った。ほっとする間もなく、遠くから人の悲鳴が聞こえ、発砲音がした。

ボスがまた誰かに怒りをぶつけているのだろうか。

聞き耳を立てていると、廊下を走り回る足音と、叫んでいる声、さらに重なった銃声が聞こえてくる。

誰かが、それも何人もが銃を撃ち合っている。

私は廊下へと踏み出し、何が起こっているのか見極めようと、歩いていこうとした。

すると、誰か人影がこちらへよろめきながら走ってくるのが見えた。その人は後ろから銃弾を受けたようで、音と共に床に倒れ伏した。制服の黒い背中が、艶のある液体で濡れている。ぼんやりとした光でよくは見えなかったが、あれは血だ。

「ちよつと……」

大丈夫ですか、そう言つて男の元へ駆け寄ろうとする。手を動か

しているから、まだ意識はあるはずだ。

だが、走りだす前に私の肩を背後から掴むものがいた。

「よせ」

振り返ると、そこにいたのはグレイだった。彼は私の腕を掴むと食堂に引つ張って行った。

「何があつたんですか。あの人は……」

「動けない奴はあれ以上攻撃は受けない。大丈夫だ」

彼は壁に背をつけて、荒い息で言った。

「グレイ、あなた……」

私ははっとする。

彼が自らの右肩に乗せている手は濃い色に染まっていた。黒いコートと薄暗さのせいによく見えないが、傷を負っているようだ。

「それよりもっと奥へ。敵が来るぞ」

私を急かし、厨房まで下がる。

流し台の前に座り込んで、彼は悪態をついた。

「トラップも全て回避か。かかったのは別の奴。意味ねーし」

右肩に触れていた手にぎゅっと力が入る。呻き声を漏らし、顔をしかめた。

「こんなに痛てーとはな。面白ねーなんて言つてらんねー。腕が痛いところなるってか」

「大丈夫ですか」

「ああ」

返ってきたのは唸りにも似た低い相槌。

「一体何が起こっているんですか？」

躊躇いながらの問いに、彼は不審げに顔を見上げた。

「知らねーのか？」

何も知らない。緊急連絡用のブレスレットにだって何の反応もないし。

また蚊帳の外ということだろうか。仮契約時ならともかく、私はもう正真正銘マスティマの隊員のはずなのに。

「そうか、これはな……」

彼が説明を始めようとした時だった。銃声が近くに聞こえた。誰かの悲鳴も。

乱れた足音。ほんのすぐ傍。その廊下ぐらいだ。

「くそ、もう来たか」

グレイは左手で上着の下から銃を取り出す。カウンターに仕切られて廊下までは見えないが、一つだけクリアな足音が響く。

どうか通り過ぎて行ってくれますようにとの願いも、むなしく終わる。次第にこちらに近付いてくる。

肘と膝を付いて、グレイは静かに食堂のほうへ這って行く。私も腰を落として彼の後に続いた。

物陰から食堂に入ってきた侵入者を見つけた。

足元を照らす非常灯の光しかなかったため、この距離で見えるのはシルエットくらいなもの。目を細めて見極めようとする。相手は背の高い男だ。

こちらへと歩きながら、男は下していた右手を上げた。鈍い光に銀色に煌くものが握られている。あれはおそらく拳銃だ。

これほど薄暗くて視界が悪い場所では、武器のない私にはどうすることもできない。傷を負ったグレイに頼ってしまうことになるのが腹立たしい。

当のグレイはさすがの落ち着きを見せている。長い前髪から覗く左目がじつと男を見つめる。相手の出方を考え、自分との距離を測っているようだ。

射程範囲内に入ったと判断したらしい。カウンターが途切れた場所から、床を転がりながら発砲する。

駄目だ、外れた。男は避けてもいない。銃を構えると、グレイへと狙いを定めている。

やらせてはならない。

私は床に置いていたビニールをかぶせたダンボールを引き寄せた。そこからつかみ出したものを投げつける。

男は唸り声を上げた。腕でそれらを叩き落す。

床に落ちたのは、野菜の切れ端、傷んだ林檎だ。それを見下ろした男は、さらに怒りを高まらせたようだった。足を早めてこちらに近付いてくる。

グレイが銃をいじっているのが聞こえた。装填が完了したようだ。男が狙いを定めるべく上げたのは先ほどとは違う手。もう一挺の銃だ。装備は向こうのほうが上だ。

私はダンボールの中を探った。こんなものでは痛手は与えられないが、相手の気を少しでもそらすことができれば、上出来だ。あとはグレイがきつとうまくやってくれる。

取り出したのは更なる手榴弾。手の感触からしてまさにそう呼ぶにふさわしいものだ。

グレイが中腰になって、カウンターの向こうに置かれている棚を相手に向かって倒した。

後退する男に向かって銃を向ける。私も手の内の物を投げつけた。銃声に応えて、相手もまた銃を撃った。倒れる棚の間をすり抜けた弾が、グレイの胸に吸い込まれる。

「グレイ！」

私は叫んでいた。

### 30・迫り来る敵（前編）（後書き）

次回予告：厨房に隠れる二人に迫る敵。応戦するグレイに加勢しようとするミシエル。やがて復旧した明かりに照らし出されたものの正体は……。

第31話「迫り来る敵（後編）」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします

### 31・迫り来る敵（後編）

「技術部、照明！」

男の低く鋭い声が響く。そして、同時に何かが潰れたような音も。辺りの照明が一気に回復した。

私は眩しさに目をしばたきながらも、グレイの姿を捜す。

彼は床に倒れこんでいた。体をくの字に曲げて呻き声を上げている。押さえているのは右胸。にじみ出てくるのは血だ。だけど、なんだか様子がおかしい。掌を汚している色って……。

「なんだ、これは！」

後ろから聞こえる男の怒声。でも、なんだかこの声は聞き覚えがある。恐る恐る振り返ってみると、やっぱりだ。

そこにいたのはボスだった。

いつもの黒いロングコートのボタンを全てとめて、小型無線機と思われるものを耳につけている。

私は混乱する。何が起こっているか分からない。ボスがグレイを撃った。何がどうなっているんだろう。

しかも、ボスの黒い髪にはどろっとした物がかかっている。彼はそれを掴んで見る。革手袋の指の間から垂れ落ちていくのを目にして、その手がわなわなと震えだした。

私は心の中で声にならない悲鳴を上げる。

見なくても分かっている。それは消費期限切れの卵だ。廃棄処分する予定のものだった。

ボスがこちらを睨みつける。突き刺すような視線が痛い。私はなんとか彼の目から逃れようと、再びグレイに目を向ける。

「くっそー、また負けた」

グレイは後ろ手を付いて、半身を起こした。

「一発ハンデもあるっていうのに」

悔しそう床を掌で叩いている。

その肩には赤い色、胸には黄色が付いていた。ペイント弾だ。食堂の壁に付いている赤い色、放ちながらも標的に当たらなかつたものと同じものだ。

「それにしてもボスの弾は痛いんだよ」

そう言いながら、食堂を振り返ったグレイは言葉を無くした。

怒りをくすぶらせているボスと目が合ってしまったのだらう。彼は小さく呻いて、腰を床につけたまま、後退りした。

「おいお前、さっさと出て来い。何のつもりか言え」

ボスの声は殺気立っている。

ここでじつとしていても仕方ない。時間が経てば経つほど彼の怒りは増していけただらう。私はゆっくりと立ち上がり、食堂へと出た。

と、廊下が騒がしい。

「どつちが勝ったんだ？」

「それはボスに決まっている」

食堂の入り口に現れたのは、ジャザナイア隊長とレイバンだった。彼らもまたペイント弾をその身に受けていた。

ノーネクタイでシャツ姿のジャザナイア隊長。その胸に付いた黄色、腹の赤色が鮮やかだ。レイバンの広い額は、二色混じったオレンジ色に染まっている。

彼らは、生卵弾の洗礼を受けたボスを見て一瞬声を失った。

「ボス、それはどうされたんです。何があつたんですか」

最初に金縛りを解いて近付いたのはレイバンだった。ボスは彼を一睨みするなり、横蹴りを食らわせた。

「うるせえ」

とんだとばっちりだ。膝を付いたレイバンは、腹を押さえて呻いている。

ジャズ隊長はというと、ボスの頭を指差してこぼれ出る笑いをこらえていた。ボスの殺気に満ちた視線が向く。

「うるせえぞ」

隊長は口を押さえて、分かった分かったと、もう片方の手を押し出している。

「申し訳ありません」

私はボスの前に踏み出した。

これ以上、他にボスの犠牲者を出すわけには行かない。私が投げた卵のせいなのだから。

「ボスが敵に扮しているなんて知らなくて。こんなゲームみたいなのがあってるなんて」

「ゲームじゃねえ。非常時訓練だ」

前に立っているだけでも怖い。凄く腹を立てている。

それはそうだろう。私は何度もこういう目に合っているけれど、ボスはおそらく初めてだろう。しかも部下にこんなことされるなんて、夢にも思わなかったはずだ。

私は怒りを受け止めるつもりで、首を垂れた。

「まあまあ。非常時の訓練なんだから、ある意味なんでもアリだろ。銃を持っている相手に、こんなもので応戦するなんて大した勇気じゃねえか」

「お前は黙ってる」

ジャザナイア隊長の言葉にも、もちろん聞く耳を持っていない。

ボスは傍までやって来た。ちよっと手を伸ばせば、簡単に捕まってしまう位置だ。怒りを帯びた声から降ってくる。

「おい、落とし前はどう付ける気だ？」

「僕は……」

私はうなだれたままだった。

「オレはボスも悪リーと思うけどな」

突然、思わぬところから助け舟が来た。グレイだ。

彼はいつものコートのポケットに両手をつ突っ込んだ姿で、ボスの傍に近寄った。

「なんだと？」

凄んだボスにも動じない。



「この非常時訓練のこと、発表したのは彼の辞令交付の日だったよね。部屋に入ってくるくらいに隊長が言っていて、ボスが後から伝えるって言ったのを覚えてるよ。あれ、ちゃんとこの子に話してんの？」

ボスは沈黙した。

話していないのが故意なのかそうでないのかは分からない。だが、ここで突っ込まれるとは思っていなかったようだ。

「だから、部下の失敗は上の責任で……」

ジャズ隊長がいつか聞いたフレーズを繰り返す。

ボスの睨みは彼に移った。私は細い溜め息をつく。

「ボスは何も悪くない」

その時ぼそりと呟いたのは、床にうずくまるレイバンだった。

「ボスこそ全てなのだ。ボスは偉大なのだ。誰もボスに逆らうなど許されんのだ！」

「うるせえんだよ」

腹を押さえながら膝立ちになり、叫ぶレイバンを後ろからボスの足が押し倒す。肩の辺りを直撃している。足の長いボスだからこそなせる業だ。

レイバンは床に前のめりに崩れた。二度もとばっちりを食らうなんて、つくづく不運な人だ。

ボスは踵を返して、廊下へと向かった。

「ボス」

私は追いつがる。こんな禍根のようなものを残して、終わりにしたくなどなかった。

ボスは腕で払いのけた。もろに食らった私はバランスを崩し、背後にあった丸椅子を道連れに倒れこんだ。

「次の訓練の時には覚悟しておけ」

頭まで打ってしまったのか、くらくらしているところへボスの捨て台詞。

私はもう止めることができず、頭を押さえたまま、座り込んで

いた。

「大丈夫か？」

グレイが覗き込んでくる。

私は頭を抱えながらも、大丈夫だと答えようとするが、できなかつた。

乱れた息に涙が滲んで視界がぼやけた。その上、ぶつけた腰が痛い。手でさすっている間に、なんとか過呼吸もおさまってきた。

「次の訓練は半年後だ。それまでにあいつの機嫌が直るか、忘れるかどちらか祈るしかねえな」

ジャズ隊長の言葉に、妙な汗が噴き出す。半年後って、もしかして年二回もあるってことなんだろうか。

「ボスは忘れはせん。自分も忘れんぞ」

レイバンが呻きながらそう言った。腹に手をやったまま、やつとという感じで立ち上がる。それから廊下を目指して足取りも怪しく歩いていった。

「あー、やつとうぜーのがいなくなつたぜ」

それはちよつと、グレイは言い過ぎなのではと思う。

レイバンのあのボスへの忠誠心には驚くと共に少し羨ましく思う。あれだけ心に決めた人がいてそれを貫けるなんて。彼の律儀さには頭が下がる。

「立てるか。アビーに来てもらうか？」

ジャザナイア隊長の言葉に、私は立ち上がりながら大丈夫だと答ええた。ここで彼女を呼んだら、また心配させてしまふに違いない。

散々な一日の終わりだった。

皆が帰っていった食堂で、色の付いた壁の掃除をしながら、打ち身で痛む腰をさする。

今さらながら半年後が怖い。

だけど、きつとここはジャズ隊長のように、「そんな時が来れば何とかなるさ」で行くしかない。あの人の楽天的なところは学ぶべきところも多いのかもしれない。

とりあえず明日のことをだけを考えて、私は片づけを続けた。

### 31・迫り来る敵（後編）（後書き）

次回予告：本社との合同会議のため、休憩用のコーヒーを用意する  
ミシエル。会議室から聞こえてきた悲鳴。何事かと驚く彼女が目  
にした、倒れた人物とは……。

第32話：「髪は男の命です」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチ  
ットお願いします

### 32・髪は男の命です

その日の午後、私は厨房で焼き上がって間もないマドレーヌを皿に並べていた。

いい感じの仕上がりだ。粗熱が取れたばかりで甘い香りをまとっている。

それをワゴンに乗せる。コーヒーカップやソーサー、スプーンもだ。

特に甘党のレイバンがたくさん使うミルクは大型のピッチャー入り。砂糖のポットも大きい物を用意した。それから保温機能付きコーヒーサーバー。

準備は万端。

今日は本社から来ている情報管理部の人との合同の会議。ボスを始めとして幹部皆が出席している。

本来ならボスは出席しないものだが、今回は特別らしい。統括長とかいう肩書きの人が一緒だからだそうだ。

腕時計を見やる。間もなく十五時。予定ではそろそろ休憩の時間になる。

ワゴンを押して会議室へと向う。

通い慣れたルートだ。目をつぶってだつてたどり着ける。

すでに扉は目と鼻の先。あと十歩足らずの所まで来ていた。

突然、凄まじい悲鳴が聞こえてくる。この方向、間違いなく会議室からだ。

足を早めようとしたところへ扉が内側からぱたんと開いた。

「しっ、失礼しましたー」

そう言いながら、男二人が飛び出してきた。

禿げかかった頭の太目で年配の人と痩せ型の若い人。スーツを着ているから本社の人たちだ。無造作に資料を抱えて、慌てふためいた様子だ。

「あの、今コーヒーが……」

呼びかけに、びくりと振り返った彼らは私に目をとめて、若干気を緩めたようだった。

だが、それも一瞬のことだった。

続く扉の開く音に、後ろを振り返ることもせず、二人は駆け出した。

「ご馳走様でしたー」

紙の資料を撒き散らしながら走り去っていく。ご馳走様ってまだ何も出していないのに。

続いて会議室から出てきた存在を知って、彼らの慌てようの意味を知った。

今度は私が焦る番だ。

「本社の犬が」

低い声で罵りながら、小さくなっていく二人の背中を睨みつけるのはボスだ。

彼は私を一瞥しただけで、存在しないものと決め込んだようだ。

横を通り過ぎていくボスを見ないようにする。怒りの炎がオーラのように燃え上がっているのを感じる。こんなときは関わらないほうがいい。

マステイマのコックとなって獲得した、もつとも役立つ知恵だ。

足音に耳を澄ませながら、角を曲がったことを確認する。

それから、会議室の扉を開いた。

テーブルにうずたかく積み重ねられた資料の山。だが、席には誰もいなかった。

用意したコーヒーと菓子が無駄になってしまったのではと思う前、続きの小部屋の扉が開いていることに気付いた。

そつと中を覗く。傍にレイバンの大きな背中があった。邪魔になって部屋の中を見渡せない。だが、アビゲイルの声を聞き取ることができた。

「しっかりしなさい。気を確かにして」

ボスの被害者がいるようだ。

さっきの本社の人たちはボスの怒りを目の当たりにして、逃げ出したのだろう。

「どうしたんですか」

足音を忍ばせて中に入ると、レイバンに尋ねる。

彼の視線の先、床にいる人物を見つけて私は思わず声を上げた。

「ジャズ隊長！」

まるで尺取虫のようだ。

頬を床につけ、腰を宙に浮かして、膝を付くという器用というか無理な姿勢。

ジャザナイア隊長はアビゲイルの声に反応していない。唇は半開き、目は虚ろ。魂はどこかに行ってしまった、抜け殻のようだ。

「哀れだ」

レイバンが神妙な顔つきで呟いた。

床が赤色に染まっている。傷を負っているのかときくりとするが、そうでないことはすぐに分かった。

「大丈夫だって、隊長。髪なんかすぐに伸びるって」

腰を落とし、力づけているのはグレイだ。

そう、散らばっているのは赤い髪の毛だった。隊長の髪が無残に刈られていた。肩甲骨ほどまでであった巻き髪は、今や首の辺りの長さだ。

レイバンの言葉どおり、哀れを誘うばらばらの髪。こんなことを誰がやるって答えは決まっている。

「オレが格好よく揃えてやつから」

グレイが鋏を手を取った。

さっきまで床に転がっていたものだ。髪を刈るためのものではない。あれは文具の鋏だ。

ボスが使ったものだろう。会議室に常備している文房具の一つだ。ようやく隊長は起き上がった。肩を震わせながら、皆の視線を振り切って会議室のほうへ歩いていく。

私の横を通り過ぎる顔は、俯いたままで青白い。

彼は戸口の前に立つと背を向けたまま立ち止まった。涙をこらえるかのように顔を上に向ける。

「隊則第二章第一項。心に刻めよ、お前たち」

言葉だけではない。猛烈に背中で語っている。

そうして隊長は去っていった。



### 32・髪は男の命です（後書き）

次回予告：全ての始まりはアンチマスティマの姑息な陰謀？ アビゲイル、グレイ、レイバンが語る、ジャザナイア隊長がボスに髪を切られたわけとは……。

第33話：「アンチマスティマ」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします

### 33・アンチマスティマ

「隊則第二章第一項？」

ジャザナイア隊長の残していった言葉を反芻し、私は首をかしげる。記憶の欠片が掠めるが思い出せない。するとアビゲイルが暗唱した。

「髪型は問わないが、長いものは結ぶ、とめるなどして勤務に差し支えないようにすること……よね」

確かにそんなのがあったような。短く髪を切った時点で、私には関係ないと思つて気にもとめていなかった。

「それつてボスの犠牲者を減らすために、昔、隊長が作ったんだよな。それが自分でハマるなんてな」

グレイは腰を落としたままで、床に散らばった赤い髪を一房手に取った。

「これ、エクステに使えねーかな」

冗談かと思つたが、髪をかき集めている。本気のような。

「ぬおお！」

突然、レイバンが右拳を握り締め、雄たけびを上げた。

「隊長はマスティマとしての規範を身をもって示されたということか！」

「反面教師つてやつか。違うんじゃないか？」

グレイは呆れたように、見上げて言う。

床に目を落としたアビゲイルは深い溜め息をついた。

「だいたい本社の連中が悪いのよ。嫌がらせにも程があるわ」

「八つ当たりで、ボスが隊長の髪を切つたってことですか？」

本社の人と今回の件とどう関係があるのだろう。疑問に思った私は尋ねた。

「イエスでもあり、ノーでもあるわね」

肩をすくめたアビゲイルは、事の次第を話してくれた。

ディケンス警備会社の人間の中にはマステイマを毛嫌いしている者がいるのだそうだ。

上層部にも何人かいて、時々ちょっかいを出してくるらしい。もっとも本社のトップが容認派なので、表立っての動きはないのだが。今回の会議もそうだという。

システム関係の会議と銘打っておきながら、技術情報部長のオスカーがディケンス支社へ出張中に開催を決める。統括長を担ぎ出してボスの出席を求める。これだけでも火種は十分だ。

その上、持ってきたのは膨大な紙の資料。プロジエクターやディスプレイなんて使わない。情報管理の名前が泣きそうだ。

これだけでは終わらない。

流行りのエコだとかで、枚数を減らしたという資料の文字は豆粒のよう。皆資料に顔を突っ込んで、何ページの何項を参照とかで会議は進められたらしい。

なんとという陰湿でセコイやり方だろう。大の大人が仕事でやるようなことだろうか。

ボスがあんな風だから、マステイマがディケンス本社の人たちから良く思われていないのは、想像に難くないけれど。

アビゲイルによると、昔のボスなら会議が始まる前にテーブルでもひっくり返して、おじゃんにしていただろうとのこと。年月は偉大ねと感じ入っていた。

だけど、結局本社の人たちは途中で帰ってしまったのだ。結果は同じだと思っ。

それに、まだ何故隊長が髪を切られたのか、教えてもらっていない。

会議室に場所を移して話は続いた。

アビゲイルは、コーヒーを傍に置いて椅子に腰掛けている。ちぎったマドレーヌを口に入れ、一息ついた。

「ジャズも運がなかったのよ。髪を縛っていた紐が切れちゃって。すぐに替えを用意すればよかったんだけど、会議が始まる直前だっ

たから、それもできなくて」

「ボス、すつげー嫌な顔で見てたもんなー」

ワゴンの横に椅子を引つ張ってきたグレイは、コーヒーを嚙りながら口をはさむ。

アビゲイルの隣の席でレイバンが頷いた。

「髪をかき上げ、かき上げ、資料を覗き込んで。それは鬱陶しかった」

「連中が新しい情報管理システムの説明に入った頃ね。図解なんだけど、印字が潰れて文字が読み取れないのよ。皆さらに資料に目を近づけて。ジャズは髪をまたかき上げてた。その時だったわ、ボスの堪忍袋の緒が切れたのは。隣の部屋に引きずって、いきなり鉄でチョコキンよ」

指で鉄を形作りながら、アビゲイルは呆れたような笑いを浮かべた。

「不運だ」

マドレーヌを丸ごと一個頬張ったレイバンが、口をもごもごさせながら呟く。

彼の気持ちは隊長よりマドレーヌに向いているようだ。アビゲイルとの間に皿を置いてあるのにまるで遠慮がない。

ミルクと砂糖たっぷりのコピーで流し込み、さらに両手に取る。一人で全部食べてしまいそうな勢いだ。まあ、お客様の分が必要ななくなったから、それでもいいか。

「立ち直れるかしら。あんなに気を落として」

姉らしい気遣いに満ちた言葉。

確かに落ち込んだジャズ隊長なんて今まで見たことがない。いつも元気で笑顔いっぱいイメージだ。

それに部下たちから好かれていて。私にも気軽に声をかけてくれる。「元気か」とか「あんまり頑張りすぎるなよ」とか。上に立つ者の鑑のような人だ。

なのに、あんな仕打ち。いくらなんでも酷すぎると思う。

「オレ、覗いて来っから。なんか面白そーだし」

カップを空にしたグレイが椅子から立ち上がった。

アビゲイルが礼を言つと、彼は背中を向けたまま片手を上げて応えた。

どうやらグレイなりに気遣った言葉だったらしい。いつものようには、ちっとも笑っていないかったし。面白いことをずっと捜している彼だからこそ、洒落になる所とそうでない所の線引きははっきりしているようだ。

実際のところ、隊長の髪をきちんと整えることができるのは彼だけなのだ。

今日のところは任せて、今度会ったときに隊長に声をかけよう。ボスに沈められた気持ちを何とかしてあげたい。

だって、ジャズ隊長は落ち込んだ気持ちを前向きにさせてくれる人なのだ。あの明るさで暗い雰囲気吹き飛ばして、希望を見せてくれる。

今度は私が隊長を慰めてあげなければ。あの人が再び笑顔を取り戻せるように。

私はそう心に決めた。

### 33・アンチマステイマ（後書き）

次回予告：ひどい落ち込みだったジャザナイア隊長にどう声をかけるべきか迷うミシエル。ところが、彼の様子はいつもと同じ。その心を救った存在とは……。

第34話：「表裏一体」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします

### 34・表裏一体

ジャザナイア隊長を目にしたのは、次の日のこと。玄関のホールでだった。

腰を落とした姿。ちょうど座り込んで靴の紐を結んでいるところだ。

あつと声上がる。片手に中途半端な長さの紐が握られていた。切れたらしい。なんだか不吉な感じだ。

嫌なところに通りがかかってしまった。こんなときにはなんて声をかけるんだっけ。

「ご愁傷様でした？ いや、きつと違う。」

傍にいた隊員が気付いた。新しい靴紐を持って来ようとして隊長に止められる。

「とりあえず、一日もてばいいもんな」

そう言っつて、千切れた紐を結び合わせて使っている。大胆だ。

「だけど、あれ？ いつもの隊長だ。昨日のことなんてなかったかのようにだ。」

髪はもちろん短い。ポニーくらいあったのがウサギの尻尾になっている。辛うじてゴムで束にしているといった様子だった。

「そんなところで何やってんだ、ミック」

不意に声をかけられる。

振り返ると、グレイがいた。黒いハーフコートのポケットに両手を突っ込んだ、いつものいでたち。

角に隠れるようにして覗いていた私は不審者のようだったのだから。

「ジャズ隊長、立ち直ったみたいですね。さすがグレイ」

「オレはなんにもやってねーよ。髪は揃えたけど」

グレイは隊長を見やった。

「付け毛も無駄になっちまったし」

いるかとポケットから取り出す。その赤い色、ウェーブした形。見事なエクステだけど、私のもらってもどうしようもない。一発で隊長の髪だと分かるものだ。そんなのを付けていて、ボスの目に触れたりしたら。考えただけで悪い夢でも見そうだ。私は首を横に振った。

当の隊長はしゃがみこんだまま、笑い声を上げている。

靴紐の結び方が左右違おうと突っ込まれて、「本当だ」と部下の尻をぼんと叩いていた。

「飲み屋のねーちゃんだよ」

グレイが言う、隊長を救った正体。

昨日、隊長の部屋を訪れたグレイは、髪を揃えた後、街へと飲みに誘ったらしい。

その飲み屋は隊長もよく行っていて、たちまち彼の髪型はおねえさんたちの話題になった。

あれだけ短くなっているのだから、そりゃ誰だっけ気付くだろう。派手な色だし。

そこで絶賛されたのだそうだ。

今のも素敵だとか、男ぶりが増しただとか、どんな髪型でも似合うのねとか。

気持ちよくお酒を飲ませるのは彼女達の仕事のうちだ。お世辞も入っているとは思っただけ、隊長のテンションは一気に回復したらしい。

「あーいうシンプルさ、オレは好きだぜ」

彼の言葉にぎょっとする。上司を単純だと言っただけ、グレイもまた大胆だ。

そして、私をさらに驚かせる存在がやってきた。廊下に響く足音が聞こえてくる。

ボスだ。

二人の隊員を従えて近付いてくる。マスティマの制服である黒いロングコートを翻して歩く様は存在感抜群だ。たちまち雰囲気塗



り替えられる。

両脇の二人は荷物持ち。段ボール一箱ずつ。

上を開けたままのダンボールからは、ひらひらと紙が揺らめいているのが見える。持ち手が顎で押さえて何とか落ちるのを免れている状態だった。

あれはおそらく昨日の資料だ。

本社に向くのだろう。嫌味の一つでも言いに行くに違いない。嫌味だけで済んだらいいのだけど。

ボスは隊長へと目をやった。

隊長は気付いて、結び終えた靴紐から手を離して立ち上がる。

「本社に挨拶に行ってくる」

すれ違い様のボスの言葉に、隊長は頷いた。

「気をつけてな。連中に食われるんじゃないぞ」

眼光鋭く横目で睨みつけるボスに気付いていないようだ。

「ボスにエール！」

大声で言っ、宙に拳を突き出す。

すると申し合わせたかのようにホールにいた隊員たちが集まってきた。隊長を中心にして菱形の陣形を作り出す。なんだろう、このノリは。

「そおれ、頑張れ、頑張れ、ボース！ 負けるな、負けるな、ボース！」

交互に拳を突き出しながら連呼する。他の隊員たちとも息がぴつたりだ。意味が分からないが、見事だ。

玄関の扉を目の前にして、ボスは足を止めた。振り返った目つきの恐ろしいこと。

木製の一人掛け用の椅子を引っつかんで、戻ってくる。扉の傍に置かれていたものだ。

ストレートで飛んでくる椅子を身をそらして避けたのは隊長だ。

拳を突き出すリズムも狂っていない。後ろの隊員に当たった。痛そうだ。後ろ向きに倒れこんでいる。

ボスの舌打ちが聞こえてきた。彼は忌々しそつに腕時計を見やると、応援のコールを背にして去っていった。

「あーいう意味のねー情熱も好きなんだよな」

グレイの言葉は褒め言葉なんだろうか。

あの左右対称の陣形、そろつた拍子はおそらく練習の成果だろう。その場でできることではないのは確かだ。

ジャザナイア隊長とボス。二人の関係はやっぱりよく分からない。まったく性格が違うのに、やっていけているのが信じられない。

凸と凹、陰と陽、プラスとマイナス。互いを補ってバランスを取っているのだろう。

つまるところ、共通点があるとしたら、バイタリテイが溢れているということだけなのだろうか。

そんな上司に付いて行くのは大変だ。こつちの身にもなつて欲しい。

だが、二人ともその気がないことは明白だった。

### 34・表裏一体（後書き）

次回予告：城で見かけた、アビゲイルとは別の女の人。マステイマには他に女性はいないはず。アビゲイルに問うミシエル。その答えは彼女の想像を超えたもので……。

第35話「ボスの秘密」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします

### 35 . ポスの秘密

マステイマには、女はアビゲイルしかないことになっている。私も女だが、働いているのは男としてだ。控えめな胸を伸縮性のあるサポーターでぐるぐる巻きにして。それから、髪は常に短く刈り、声も低めに落とす。

変えられるのなら背丈も欲しいところだ。なんといってもマステイマで一番背が低いのだから。体格のいい隊員たちの中に混じると、余計にそれを感じる。

女であることを理由にもできない。アビゲイルと比べたって差がある。日本人である祖母の血を濃く引いてしまったのだろう。イタリア人女性の平均を下回る、百五十八センチが私の身長。成長期を過ぎた今、これ以上伸びる可能性はゼロに均しい。

この話をする、気分が重くなるので話を戻そう。マステイマに入る時の第一条件、それが男であることだった。女が男の真似をするのだ。少々の犠牲や努力もやむをえない。そう思っていた。

だから、初めてアビゲイルとは別の女の人を見かけたとき、とても驚いた。

それも夜遅く。城の廊下で。

一日の仕事を終えて、部屋に戻るときだった。ジャザナイア隊長のお酒とつまみを用意してから上がったから、午後十時は過ぎていた頃だ。

ミニスカートに網タイツ、上着も胸が大きく開いたもの。私と同じくらいの年頃の人だった。

ハイヒールを鳴らしながら廊下を歩いている。赤く塗られた唇やふくよかな胸にかかる長い砂色の髪が艶めかしさを強調している。

合いそうになった視線を慌てて外す。不自然極まりないだろうが、うまく誤魔化す余裕さえなかった。

くすりと笑い声が聞こえる。私は廊下の隅に寄り、頭を下げた彼女をやり過ごした。

顔が熱い。それにひどく胸がドキドキしていた。なにか見てはならないものを見てしまったような気がした。

翌日、アビゲイルに尋ねたとき、その感覚は間違っていないことを知った。

「それはボスの愛人の一人よ」  
こともなげに言う。

彼女の仕事場である医務室で、私たちは向かい合って座っていた。もつとも医者と患者としてではない。彼女の娘、プリシラのために作ったお菓子を届けようと持ってきただけだ。

「恋人じゃなくて？ それもその一人って……」  
私は言葉に詰まる。

「恋愛関係にはないから。シェリー、アーリヤ、ミリアム、三人いるわ。あなたが見たのはアーリヤね」

指を折る彼女に目を見張る。愛人という言葉も信じられないのに三人もいるなんて。何でそんなに必要なんだろう。それが普通なんだろうか。

そういう話に疎い方だと自覚はあるが、三人なんて人数、とても常識的だとは思えない。

それに恋愛関係にない愛人って一体……。  
言葉の意味を悟るのに数秒は要したはずだ。

私はきつと瀕死の金魚みたいな顔をしていたのだと思う。アビゲイルは笑みを漏らした。

「考えられないわよね、普通。あの人は好みがうるさいし、集めてくるのも大変なのよ。頭の悪い女は嫌いだとか、喋りすぎる女も嫌だとか文句が多いんだから。だいたい皆長く続かないし。だから、いざという時のための三人なんだけど」

私の思考の域を完全に脱している。ボスを見る目が変わってしまっそうだ。しかも、集めてくるって、どうということなんだろう。

「もしかして、アビゲイルが捜してくるんですか？」

まさかと思いなから尋ねる。すると彼女は肩をすくめた。

「相手をするのはマステイマのボスよ。変なのが紛れていたら困るじゃない。暗殺者とかスパイだとか。だから、私が身元まで洗ってお願ひするのよ。もう大変なんだから」

同性に頼まれる愛人の気持ちってどんなだろう。私には想像もつかない。

「誰がどれくらい深い関係かなんて分からないんだけどね。どうも彼女達に諜報活動をさせてることもあるようだし。チャーリーズ・エンジェルみたいよね」

アビゲイルの言葉に頭をひねって思い出す。

それって見たことがある。ありえない美女三人がスパイ活動みたいなことをやって大活躍する映画だ。

デイヴィッツ・エンジェルか。語呂がちよつと悪い気がするけど。「まあ、あなたには関係ないことね。すれ違ったら挨拶でもしとけば良いんじゃない？」

アビゲイルはさらっとそう言うが、次に会ったとき出来るだろうか。不安になってくる。

だって、愛人ってことは、深くも浅くもボスとはそういう関係なんだろうし。ああ、もう想像どころか妄想の領域だ。

気が付くと、アビゲイルが私の顔を覗きこんで、微笑んでいた。

「あなたも若いものね。彼女でも作ったら？ 何なら私が紹介してあげるわよ」

「結構ですっ。失礼します」

慌てて立ち上がったせいで、丸椅子がくるくると回った。

乱れた足音を残して部屋を後にする私を、驚いたように見つめているアビゲイルがいた。

歩き方までぎこちない。自分でも分かる。右手と右足が一緒に出てるんじゃないだろうか。目を落として確認してみるが、さすがにそれはなかった。

廊下に出てほっとする。力が抜けると共に不自然さも消えていった。

彼女を紹介って私、女だし。

ああもう、ボスの愛人なんて見つけるんじゃないなかつた。

頭に当たった手で髪をかき乱した。

分からないし、考えたくもない。あの人のことで頭を悩ませるなんてごめんだ。私は想像したボスに八つ当たりしながら、廊下を足早に歩いて行った。

### 35 ポスの秘密（後書き）

次回予告：なんだかいつもと違う今日のマスティマの昼食時風景。

その原因はポス？ グレイが言う、ホーリー・デー聖なる日の意味とは……。

第36話「聖なる日」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチ  
ッとお願ひします



### 36・聖なる日

マスティマは機密管理に力を入れている。

例を持ち出すなら、城には住所が存在しない。物品の授受など、全ては表のディケンス警備会社本社を介してやりとりをしている。

電話もネットも回線が特別なもの。複数の防御策を講じて、招かれざる外部との接触を遮断しているらしい。

情報漏れを防ぐことこそ最大の防御。手段は他にも色々あるよ  
うだが、あとは私が気付いていないだけの話。

主となるのは技術情報部。マスティマのテクニカルチームの能力が発揮されるところだ。その機能はディケンス本社の同様の部署をしのごとく噂。

表に出ることはない重要な存在だ。

「功績を挙げて目立てばいいのは実行部隊。縁の下の力持ちになってこそが仕事だからね」と言い切るのは技術情報部、部長のオスカー。是非、ボスにも聞いてもらいたい言葉だ。

ボスといえば、彼を始めとして幹部達の移動の情報もまた秘密扱い。

誰が何処でどんな仕事をしているか、或いは休みを取っているかなどは前もって知らされることはない。

それでも、いないことが分かりやすいのはジャザナイア隊長だ。彼がいないと皆がさらにきびきびと働き出す。廊下を歩く速度から違ってくる。立ち止まって雑談なんてとんでもない。ボスからかばってくれる唯一の存在がいないということが、皆の気を引き締めるらしい。

当のボスもまた城を空けることはある。もちろん日時の予告なし。食事を用意しなければならぬコックである私にさえ。アビゲイル  
づつで情報をもたらるのは良くて二時間前だ。

ボスの不在の日を知るのはジャズ隊長よりもっと簡単だ。朝、自

分の部屋を出たとたんに分かる。空気が違つたのだ。食堂ではそれが顕著だ。

それはマステイマの食堂が一番賑わうお昼時。もつとも隊の全員が集まることはない。

隊の隠語である“雑用”、これはディケンス本社からの依頼の仕事のことなのだが、警備の人数補填のために外に出ている者も多い。それに城の警備は交代制。昼休みもちよつとずつ時間をずらしてとっているようだ。

掻きこむように急いで食べて、各自の持ち場に戻っていく。だから、賑やかなのもひと時の間だけだった。今日までは。

「やたら多いな」

コーヒーを飲みに来た 그레이が、げんなりとした表情で食堂を見渡して言う。

そうなのだ。今日に限って皆寛いでいる。もうすぐ一時を過ぎるというのに。席を立たない隊員が多く、食後のコーヒーまで楽しんでいる。

お陰で 그레이の分のコーヒーは、新たにできるまで待たなければならなかった。

「迷惑だよなー、ホーリーデイ 聖なる日 なんか」

不満げな声だ。だけど、意味が分からない。聖なる日ってクリスマスはまだ先だ。首を傾げる私に、 그레이はにやつと笑った。

「任務以外でボスがいない日だよ。皆そう言ってるんだ。そういえばお前、前のときはいなかったな」

ああ、なるほど。悪魔がいない聖なる日か。それでリラックスモードなんだ。前の時はアビゲイルと一緒に、ボスの嗜好調査に出かけてたから知らなかった。

「今日はなんでも新型のへりを見に行くって言っていたぜ」  
そうか。任務ではないから隊員たちも城の警備が主な通常勤務。食堂が賑わうわけだ。

ようやく新しいコーヒーが出来上がった。

グレイはカップに注いで早速飲み始める。立ったままの姿に部下の人たちが席を勧めたが、彼は断った。

「グレイはボスがいた方がいってわけですか？」

最初にひどく不服そうだったのを思い出して尋ねる。

「オレはどっちでもいいんだ。ボスに怒られるなんてへましねーし」  
そんな答えが出来るのはきつと彼だけだ。

私たちのやりとりを耳にしていたのだろう。隊員たちが信じられないという顔でこちらを見ている。壁に背を付けて、グレイはコーヒーを飲み続けるだけだ。

「それに、こういう時はだいたい……」

声を遮る物音。天井の方から甲高いキーンという音が聞こえてきた。それが消えたかと思うと、流れてきたのはちょっとエコーのなかった覚えのある声。

「テス、テス、テス。これ聞こえてんのかあ？」

この声はジャナナイア隊長だ。

後ろで「隊長、聞こえてます」と言う声が出ている。食堂の隊員たちは笑いをもらした。

ジャズ隊長は咳払いをして声を整える。

「今から臨時の体力強化訓練を始める。手が空く者は中庭に集合のこと」

続いての言葉に、グレイは顔をしかめて天井を仰いだ。

私もつられて見上げる。城内放送の装置があるなんて知らなかった。天井には、灰色で穴のいつぱい開いた円形のもの埋め込まれていた。あれがスピーカーなのだろう。今まで気にしたことなかった。

それまで和んでいた隊員たちが、席を立ち始める。

せつかくボスがいなくて羽を伸ばしているところだ。こんなときに訓練だなんて、きつと嫌だろうなと思いつつ、彼らの表情を見てみると大外れ。皆にこにこしている。

体を伸ばしてストレッチをする人もいて、やる気だ。

次々と食堂を後にする隊員たちとは反対の人物が約一名。二杯目のコーヒ―を片手に食堂の奥へと下がっている。

「オレは行かねーから。オレのことは見なかったことにしてくれ」  
腰がひけているのはグレイだけだ。

私は廊下へ出て、窓から中庭を覗いた。ぞろぞろ人が集まっ  
てきている。何処からか姿は見えないが、指示を与えているのはジャ  
ザニア隊長の大きな声だ。

「僕、ちよつと様子を見てきます」

グレイにそう言つと、返ってきた言葉は「気をつけるよ」だった。  
体力強化訓練だから、きつと参加するなら怪我をしないようにと  
いうことだろう。

私は中庭へと向つた。

### 36・聖なる日（後書き）

次回予告：ジャズ隊長が始めた訓練。隊員たちは楽しそうだけど、目的は本当に体力強化なのだろうか。ミシエルの目の前で起こった衝撃の結末は……。

第37話「ダークホースは誰だ」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします

### 37・ダークホースは誰だ

中庭を目の前にして、ジャズ隊長の声が聞こえてくる。

「今日のテーマは脚力の強化だ。下半身がしっかりしていれば、瞬発力にも繋がるし、蹴りを入れるなど攻撃力アップにもなる。気合を入れていけよ」

城の出入り口から、集まった隊員たちを盾にして様子を覗く。

歩き回りながら喋り続ける隊長の姿が合間から見える。思わず目が点になる。

何だろう、あの格好。

黒い短パンに赤いポロシャツ、ハイソックスにスニーカー。そして手に持っているのはサッカーボールだ。ホイッスルまで首に下げている。

「今日の日のために、おれの給料で買ったサッカーゴールだ。皆にはここでフリーキックをしてもらう。キーパーはこいつだ」

隊長が指し示したのはぴかぴかのサッカーゴール。そして、その前に立つレイバンだ。

かなり不満そうな顔つきで、突っ立っている。それでも、キーパーらしい格好はしていた。ちゃんとジャージを着て手袋をつけてるし。

きつと命令だとか言って、隊長が無理やり引っ張り出して来たに違いない。

「ボール置くから順番に蹴っていけよ」  
早速開始だ。

「この間は先読みの能力を養うとかでパットゴルフだったよな」

「その前は腕と腰を鍛えるってフリーバッティングだったし」

「俊敏さをアップさせるとかで卓球もあったっけ。よく考えるよな」  
隊員たちは、こそこそ言い合いながらも楽しげだ。ボールの後ろに列が出来、次々に蹴っていく。

ところが隊長はというと、ホイッスルを他の隊員に渡して、お構いなし。私も顔を知っている三人の男と集まってなにやら喋っている。

「オッズは……」とか「ダークホースは……」とか、フリーキックには関係なさそうなことを言っている。これはもしかして。

レイバンが横に飛んでボールを防ぐ。四人は見やって、おおっと歓声を上げる。

この人たちは賭けカード仲間だ。ということはさっき喋っていたのも、きつと賭け事のことだ。

「おい、隅を突いていけ」

一人がキツカーに叫ぶと、隊長が「余計なこと言うな」と突っ込む。

まさに駆け引き。賭博だ。

隊員たちを巻き込んでこんなことをするなんて、間違っていると思う。ボスがいたらどうなることやら。だから、留守のときを狙ってやっってるんだろうけど。

レイバンは好セーブを連発している。大きな体格だが、素早い動き。いまだゴールネットは揺れていない。

「やっぱりあいつは凄いな。選んで正解だ」

ジャズ隊長は楽しそうに言う。

「でも隊長。隊長が賭けているのは完封じゃなくて一ゴールですよ。このまま行けば僕の勝ちです」

水を差すのは顔にそばかすの残る一番若い男。

隊長はにっと笑って、その男の髪を片手でくしゃくしゃにした。

「おれが出るんだよ」

道理で気合の入った格好だ。

列の最後尾に並んだ彼は、屈伸や足を伸ばす体操なんかやっていて、意欲満々だ。順番まであと五人。

レイバンのセーブは続く。パンチングもありだ。

跳ね返ったボールはキツカーを直撃する。こうなれば、サッカー

ボールも凶器だ。

顔面に受けたその人は仲間を抱えられて、退場になった。本当の試合以上に過酷になってきているみたいだ。

とうとう隊長の順番だ。皆取り巻いて応援している。声を出していないのは、ノーゴールに賭けたらしい若い男だけだ。

ボールを置きなおし、隊長はレイバンへと目を向ける。

「隊長とはいえ通しませんぞ」

レイバンは隊長をきつと睨んで言う。最初は嫌そうだったのに、今となってはゴールキーパーの鬼だ。

隊長は助走に入る。

そして、一回目はフェイント。ボールには触らず、くると回って元の位置に戻る。

踏み出したレイバンは慌てて足を引つ込めた。

二回目。今度は間違いなく蹴るはずだ。その場の全員が息を詰めて見守る。

「お前ら何やってんだ」

と、突然拡声された大声。

皆ぎこちなくその声が聞こえてきた方向を見やる。高い壁の向こうから真っ黒いヘリが現れた。そのコクピット、操縦士の横にはマイクを持ったボスの姿がある。

危険を察知したのだらう。隊員たちは散り散りになって逃げ出し始めた。

「ボス、そんなの無茶です」

「いいから貸せ」

マイク越しに操縦士と言い合っている声が筒抜けに聞こえる。への機首が下がった。

「嘘だろ、おい」

ジャズ隊長が啞然としながら言い、城のほうに向かって駆け出す。

「ボスがお戻りだ」

「レイバン、お前も逃げろ」



感慨深げな様子でヘリを見上げるレイバンに、走りながら隊長が叫ぶ。

ヘリから何かかものすごい勢いで飛び出してきた。一直線にレイバンに向って飛んでいく。おそらくあれは対戦車用のミサイルだ。ようやく気付いたレイバンは、大股でゴールから飛び出した。

ゴールポストの間を通り抜けたミサイルはゴールネットを突っ切り、地面に着弾して爆発した。

恐怖の一ゴールだ。

爆煙が上がり、土が飛び散る。伏せるレイバンの体を覆う土埃。

運良くも彼は無事のように。咳をしながらも、立ち上がってサッカーゴールを振り返っている。

地面には大穴が開き、それは無残にも大破していた。

「ああ、おれの新品のサッカーゴールがあー！」

頭を抱えて悲鳴を上げるのはジャズ隊長だ。

彼は胸のポケットから何やら取り出して空に掲げている。よく見ると、それはレッドカードだった。なんでこの人はこういう小物を持つてくるのだろう。会議のときの飴玉といい……。

「勘弁してくれ。この間もおれのバットを折ったし、おれの卓球台壊したろうが」

ヘリに向って大声で叫んでいる。

何度もやられているのに、またサッカーゴールなんか買って来る隊長は懲りない人だ。

「お前らが俺のいない間に遊んでいるからだ」

マイク越しにボスが返す。

ヘリコプターは旋回してポートへ戻ろうとしている。おそらく操縦士がこれ以上ここにおいては危険だと判断したのだろう。これewithとまずは安心だ。

がっくりと肩を落とす隊長は別にして。

### 37・ダークホースは誰だ（後書き）

次回予告：ボスの介入で体力強化訓練は中止に。肩を落とすジャザナイア隊長。だが、隊長は懲りることなく、最大の被害者さえも巻き込んで……。

第38話「連名プラン」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします

### 38・連名プラン

「ギネス三点。ハーレイ十点。キーツは零点だな」

ぼそぼそと背後から聞こえてきた声。振り返ると、そこにいたのはグレイだった。

手にしていたペンとメモ帳のようなものが消える。ポケットに入れた様子もない。異空間に飲み込まれたように一瞬で見えなくなったのだ。

さつき見たのは幻だったのだろうか。自分を信じらなくなった私の傍に寄ってくる。

「やっぱこうなったか」

隣に来た彼は、私の肩に肘を置いて空を仰いだ。降下していくヘリコプターの姿が見える。

「ボスの新しいオモチャ、ステルスヘリか。とんでもねー」

ステルスヘリ。私もテレビとかで見たことがある。たしかレーダーにも引つかからない特殊な装甲で、飛行時の騒音も抑えられているヘリコプターだ。

それで近くを飛んでいても気付かなかっただろう。隊長たちを奇襲するには一番の乗り物だ。そんな理由でボスはあるものまで帰ってきたのだろうか。

「任務には必要だった、ずっと本社とかけあってたもんな。ボスとしては試し撃ちも出来てご満悦だろー」

部下を的にしてですか。

突っ込みたいが、あの人なら十分ありえそうだ。

「面白そー。オレも乗ってみてー」

グレイはいつもこんな感じだ。

ボスやジャズ隊長の信じられないような行動に、普通に対応している。もともと肝が据わっているから幹部になれるのか、幹部になる頃には肝が据わってくるのかは謎だ。

私は塀の向こうに降りていくへりを見やった。あんなものの的になるのはもちろん、乗るのだから遠慮したい。

庭を風が吹き抜けていく。たち上った土煙が渦を巻く。

鉄くずとなつてしまったサッカーゴール。それを背景に、隊長がとぼとぼとこちらに歩いてきた。あの肩の落としよう、なんだか可哀想になつていく。赤い髪はほつれ、握り締めた拳の中のレッドカードにいたつては、しわくちゃだ。

「ジャズ隊長、次は何すんだ？」

よせばいいのにグレイが声をかける。うなだれていた隊長は顔を上げた。生気を失つた表情だ。

「次か……」

大きな溜め息を吐ききる。幸せがどころか魂が抜けていきそうな感じだ。

こんな弱りきつた彼を見るのは、ボスに髪を切られたとき以来だ。声にも張りが無い。

「次はなあ……」

考え込むように俯く。

「あつ！」

と、突然何かを思いついたように顔を上げる。両手をぱんと打ち鳴らした。

「背筋強化訓練でもやるかあ？」

声が大きくなり、テンションが尻上がり一気に上がった。追い詰められて、開き直ってしまったのだろうか。

「場所を移してだな。カヌー競争とかいいんじゃないか」

さつきまでの落ち込みようは何処へやら。瞳にきらきらと星が見えるようだ。

「……自分はもう二度とご免だ」

隊長の後ろを通りかかったレイバンが呟いた。

彼の体はほこりに塗れ、灰色一色になっている。遺跡とかにある巨大な石像のようだ。咳をすると全身から粉が舞い散っている。

一番割を食ったのは彼だ。それなのに、ジャズ隊長は、肩に手をやって思いつきり引き止めていた。

「そう言うなって。訓練の意義さえ分かれば、あいつだって納得するぞ」

とても真面目な訓練には思えないけれど。

隊長はレイバンにカヌー漕ぎの極意を熱心に語り始めた。何処の筋肉を使い、続けていけばどう体が変わっていくかを。

「背筋を鍛えるだけじゃないぞ。全身運動になるからな」

「三角筋や大腿四頭筋もだな」

筋肉の話になると、レイバンの顔つきが変わった。隊長と二人、筋肉を指し示しながら、カヌーを漕ぐ真似までして。これってエア・カヌーとか言うんだらうか。

彼らの話は盛り上がりを見せる。カヌーって一隻幾らするんだと費用まで計算中。ついには、川がいい、海がいい、湖がいいなど場所決めの話が始まった。

ボスに提案書を出して許可を取るんだと、今やすっかり意気投合。互いの背に手を回して作戦を話し込みながら去って行った。

「今度は沈められて、溺死者が出るんじゃないかねーか」

グレイの最後の呟きは縁起でもないものだった。

私はヘリでカヌーを狙い撃ちにするボスの姿を想像した。

悪魔だ。極悪人だ。ボスは本当はそんな人ではないと信じたい。

さっきの事を見てなければ冗談で済んでいただろうけど。今となっては笑ってなんかいられない。

私は訓練が行われないことを願った。だがそうすると、隊長とレイバンがボスの犠牲になることを意味するのに気付く。また隠れてやるなんて気にはならないくらいに、こてんぱんに。

隊長とレイバンは尊い犠牲だ。だけど、大きな怪我にはなりませんように。

二つの思いは相反するものだったが、心からの祈りだった。

私は思わず二人の小さくなっていく背中に向って、手を合わせた。



### 38・連名プラン（後書き）

次回予告：医務室で話すアビゲイルとジャズ隊長。雲行きは怪しそうですね。コックであるミシエルには関わりないことのはず。だが、彼女の思わぬ形でそれは降りかかって……。

第39話「アクシデント1」 発端 〳

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします

マステイマの組織は二重構造になっている。

ジャザナイア隊長率いる実行部隊。アビゲイルの夫であるオスカ―が部長を務める技術情報部。

本来なら幹部扱いのはずのオスカ―だが、実際は実行部の中に組み込まれている。技術情報部は創設から間がなく、部へと拡大されたのもつい最近らしい。

ディケンス本社の技術開発と情報管理セクションのいいとこ取り。後付で作られたマステイマの技術情報部は何かと肩身が狭いようだ。私は、実行部隊に属するアビゲイルの部下だ。彼女はマステイマの総務を仕切っている。つまり、分かりやすく言えば、実行部総務課長がアビゲイルでその係員が私という形。

彼女にしても、グレイやレイバンにしても幹部は組織図ではジャザナイア隊長の下になる。だが、実際はジャズ隊長とほぼ同列扱いになっている。この辺りは内部の人間でないと分からないものだろう。

もちろん、私は料理を作る人間であり、ミツシヨンには関わりを持たない。

だから、今日、アビゲイルやジャズ隊長が騒いでいるときもあまり気にはしていなかった。

それはボスの夕食が終わってすぐの後のこと。

「スイスの空港？ 飛行機が飛ばないって、それはどういうこと？」  
医務室の開放しの扉から、動揺するアビゲイルの声が漏れている。受話器を片手にしているから、電話口の相手に言っているようだ。

「おい、どうすんだ。他の二人も駄目なんだから」

隊長の声も少し慌てている。

「今考えてるわ。少し待って」



私はワゴンを押しながら、何の気なしに部屋を覗いた。アビゲイルと目が合ったので、目礼して通り過ぎる。

今から技術情報部にコーヒーを届けるのだ。

コーヒーサーバーの保温機は向こうにもあるので、新しくできたコーヒーを持っていくだけだ。今日作ったお菓子を添えて。

仕事の内容上、閉じこもりがちな技術情報部。

何日まともに寝てないとか言うのは部隊員たちの挨拶代わりのようだ。彼らが食堂に現れることは滅多にないようなので、このコーヒーの配達が唯一の接点といってもいい。

部は違えど、あつちもマステイマの隊員なのだから、出来るだけのこととはしてあげたい。その思いから始めた一日三度のこの往復は、今や日課になっていた。

私はサーバーを取り替え、菓子を置くと、もと来た道に戻る。

再びアビゲイルとジャズ隊長がいた部屋を通りかかったが、扉は閉まっており、何の声もれ聞こえては来なかった。問題は解決したか、手を打ったのだろうか。どちらにしても私が首を突っ込むようなことではないはずだ。

厨房に戻って、夕食の食器の片付けを始める。

全てが終わって、ひと一休み。余った料理で自分の夕食にありついたり頃だった。プレスレットが震え、黒い液晶に黄色の文字が浮かび上がる。

前にグレイからもらった緊急連絡用のものだ。前に反応したのはアビゲイルの娘のプシシラが現れたときだっけ。

私は表示の説明をしてくれたグレイの言葉を思い返す。黄色は確か召集だったはず。

文字が流れていく。Dispensary 医務室へ。

ということはアビゲイルの関係だろう。何かあったんだろうか。

私は食事を途中にして席を立つ。廊下へ出ると足早に向った。

医務室の扉をノックしてみる。

だが、返事はない。迷いながらもそつと開ける。鼻をつくのは病院を思わせる消毒薬の匂い。

いつものデスクにアビゲイルの姿は見えなかった。部屋の奥半分を隠す白い布のついたて。その向こうには患者用のベッドがある。そこにいるのだろうか。私は近付いていった。

「ミシエル・ロレンツイ」

「あつ、はい」

突然背後から名前を呼ばれ、思わず返事をしてしまう。私は慌てて口を塞いだ。耳にしたのは私の本当の名前だ。

恐る恐る振り返ると、入り口の扉の影にいたのは、にっこりと笑うアビゲイルだった。

「やっぱり、あなた女だったのね」

私は動揺して後退りする。肩をついたてにぶつけ、倒してしまった。その音に再びびくりとする。

「アビゲイル、どうして」

女であることがばれてしまった。それが意味することを悟り、私のシヨックは隠せない。

「私の捜査能力を舐めてもらっては困るわ。それに、あなたが女である疑惑は初日からあったのよ。健康診断はいらなと言ったセオの言葉、食堂から聞こえてきた悲鳴、それからプリシラがあなたの名はミシエルだとゆずらなかつたこと」

初日の食堂にアレが出たときの悲鳴、聞こえていたのか。

それにプリシラに本当の名前を言ったのは私の失敗だった。子供だからと思って油断していた。

「私だつて疑つたんだもの。ボスが勘付くのは時間の問題よね。そうなれば、あなたの希望だつて通らなくなるわ。マステイマのコックとしていらなくなるでしょうね」

アビゲイルの言葉は一番危惧していたことだ。掌が汗ばみ、呼吸が速くなる。そんなことは嫌だ。絶対に。せつかく今まで頑張ってきたのに。

「大丈夫よ、マイケル。いえ、ミシエル。私の考えに乗ってくれるのなら力になるわ」

何でもやります。やらせてください。そう答えた私の前に彼女が差し出したのは、鬘だった。私の髪の色とそっくりだが、まったく違う質感。艶々としたストレートの長い髪の毛だ。

それから次に差し出されたのは紙袋だった。ワンピースに、ストッキングやハイヒールまで中に入っている。

訳が分からない。アビゲイルは、混乱して後退りする私に寄って白衣のボタンを外し始めた。

「な……？」

下の黒いＴシャツもめくりあげられて、私は素っ頓狂な悲鳴を上げる。

「ミシエル、あなた……」

難しい顔をして彼女は私を見上げた。

「こんなことしてたら、バストライン崩れちゃうわよ」

サポーターでぐるぐる巻きにした胸のことだ。私は彼女から体を遠ざけ、下したＴシャツの裾を握り締める。きつと顔が真っ赤になっっている。体中の血が脈打っているのが分かる。

「これに着替えて鬘をかぶって。何でもやるって言っただでしょ」

彼女の言っていることはめっちゃくちゃだと思う。女であることがばれないための考えの筈なのに、女らしい格好をするなんて。

だが、アビゲイルの顔は真面目だ。ふざけている感じなんてみじんもない。彼女は腕を組んで私の出方を待っている。こうなれば、腹をくくるしかない。私は覚悟を決めた。

39・アクシデント1 〳 発端 〳 (後書き)

次回予告：ついに女であることがばれてしまった。秘密を守る交換条件にアビゲイルが提示したのは女らしい格好をすること。そして、ミシエルの災難はそれだけでは終わらず……。第40話「アクシデント2 〳 変身 〳」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします

床に置かれた紙袋を手にし、倒れたついたてを起こす。アビゲイルから鬘を受け取って、その後ろに回りこむ。

取り出したワンピースを前に、出てくるのは溜め息ばかりだ。

こういう服は久しく着ていない。よく考えてみるとここに来る前から……。いやもっと前。中国で料理の修行を始める時からだから、一年近く前からだ。

これって頭からかぶるんだっけ。それとも足から入れるんだっけ。基本的なところから迷ってしまう。

やっと身に着けたワンピースは、なんだか風通しが良くて心もとない。ストッキングは記憶していた以上の締め付け。ハイヒールにいたっては足元がぐらぐらだ。こんな高くて細いヒール、一年どころか今まで履いたことがない。

私はほとんどすり足の状態で、アビゲイルの前へと戻った。

彼女は椅子に腰掛けるように言うと、デスクの引き出しからポーチを取り出した。この状態、遠くから見れば、医者が患者を診察しているように見えなくもないだろう。

実際は私の顔に粉がはたかれ、睫毛の際には線が引かれ、唇は赤く縁取られている。彼女は手際よく私に化粧を施す。顔に浮かんでいた微笑みがだんだんと広がっていく。

彼女は数歩後ろに下がって私の顔を見つめる。

「いいわ、素敵。可愛いじゃない」

アビゲイルはそう言うが、自分ではどんな顔になっているのかわからない。鏡さえ見せてもらっていないから。

「それで、これからどうするんです？」

私は半ば投げやりな気分ですら尋ねた。彼女は白衣の内側、上着のポケットからなにやら取り出しながら、私の背後へと回った。

「ちょっとじっとしていてね」

声と共に腕を取られて後ろに回される。手首に目の粗く硬い何か  
が押し付けられる感触がして、動けなくなった。拘束されたのだ。  
戻せない腕にようやくそれに気付く。

啞然として声も出ない。それを幸いとしてか、彼女は私の口にテ  
ープを貼り付けた。

これで声を出そうとしても、くぐもった呻き声しか出ない。ぞつ  
とする間もなく、視界が黒いものに覆われた。黒い布の袋をかぶせ  
られたのだ。

アビゲイルの足音が遠ざかり、扉を開ける音が聞こえる。

「ジャズ」

彼女はそう呼んだ。

ジャザナイア隊長もグルなのか。真っ白になった頭で一生懸命に  
考えようとする。彼らがどうするつもりなのか。私がどうなるのか。

「もうミリアムの代わりが見つかったのか」

隊長の声だ。女の人の名を言った。どこかで聞いた名だ。

「ええ。急いでこの子を担いで連れて行って。時間が随分と押して  
いるわ」

アビゲイルの言葉に、彼は私を見たはずだ。黒い袋をかぶされた  
人間。誰だつて不審に思うこと間違いなし。

お願いだから隊長気付いて。そう思ってからはずとす。ここで  
見つかったらまずいことになるのだろうか。私がマイケルであるこ  
とがばれたなら。

「何だこれ。布なんかかぶせて秘密のプレゼントか」

隊長の声は訝しげだ。

「そう、歴史にあったわね。解かれた絨毯の中から現れる女性って  
さすがアビゲイル。昔話なんか引用して、彼の関心を都合のいい  
ようにそらしている。」

「ナイチンゲールだっけか」

それを言うなら、クレオパトラ！ こういう状態だというのに、  
私は思わず心の中で隊長に突っ込んでしまった。

「クレオパトラでしょ」

アビゲイルの声も少し呆れている。

ジャズ隊長の肩に担がれたようだ。胃の辺りが圧迫されて苦しい。ここで暴れてもいいが、隊長や集まってきた他の隊員にばれるのは、やはりまずいだらう。

行く先を考えて、着いたところでどうにかするしかない。

頭に血が上ってくる。なんだか気分も悪い。人に担がれて、乗り物酔いってあるだらうか。

そうこう考えてるうちに目的の場所に着いたようだ。隊長の足が止まり、肩から下ろされる。そして、聞こえるノックの音。

扉を開ける音と共に私は背中を押しやられた。

よろめきながら数歩前に行つて、そのまま倒れる。両手をつけないから肩から床に落ちた。幸いなのは床に厚い絨毯が敷かれていたことだ。

音がして首をひねると、扉が閉まる場所だった。いつの間にか視界を遮っていた布も外されている。

何処の部屋だらう。薄暗い。体を起こそうともがく。

絨毯に吸収されてはいるが、近付いてくる足音を聞きつけ、私は顔だけを上げた。シルエツトだけが見える。その向こうにぼんやりとした明かりが付いているからだ。

私は体をねじって、ようやく上半身を起こした。背を壁に預けて何とか姿勢を保つ。

黒い人影が私の前まで来て、腕の付け根を取ると、立ち上がらせてくれる。

誰だか分からないけど、ありがとう。口を塞ぐこのテープもとって欲しい。そう訴えようとする私だったが、最初に出たのは押し込められた悲鳴だった。

テープがなければ、響き渡っていたらう。

この人が、この暗くて顔もよく見えない人の手がまさぐっているのは私の胸だ。

「奇妙な遊びを考え付くな、ミリアム」

声を認識する間もなく、私は足を相手の股間目がけて蹴りだしていた。

その人は後ろに体をずらした。蹴りは空振りに終わる。突き飛ばされて、再び床に倒れこむ。

硬い音がして、何か金属のようなものが頭に押し当てられるのを感じた。

「何者だ」

低く鋭い声。

私は恐る恐る顔を上げた。最初に浮かび上がったのは白い色。目をしばたいてようやく認識する。これはシャツの色だ。やがて闇に慣れてきた目にその人の顔が映りんできた。



## 40・アクシデント2 変身 (後書き)

次回予告：目隠しされ、体の自由を奪われたミシエル。アビゲイルとジャズ隊長に運ばれ、放り込まれた場所には、あの人が……？

第41話「アクシデント3 発覚」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします

#### 41・アクシデント3 〳 発覚 〵

私は誤解を解こうとして話しかける。呻き声がもれるだけに貼られた忌々しいテープのせいだ。口

その人はそれに気付いて、テープを一気に引き剥がした。

第一声は痛みから来る悲鳴。私は涙目になって訴えた。

「酷いです、ボス」

私の声には彼は酷く顔をしかめた。

「その声、チビコックか」

初めて「おい」とか「お前」とかでない呼ばれ方だ。しかもチビまで付いている。

名前を覚えていないか、出てこなかったのか、どちらからだ。そんなに存在感が薄いのだろうか。私はこんな状況なのに落ち込んだ気分になった。

「女装なんかしてどういうつもりだ？」

頭に押し付けられた銃が痛い。それに女装って、ばれていないという事だろうか。

なんだか少しショックだが、その線で切り抜けてみよう。そう思った私の目の前で、ボスははっと気づいたように、黒い革に包まれた自分の手のひらを見やった。

「女か！」

銃口が捻られ、さらに痛みが強くなる。鬘でなければ、悲鳴を上げているところだ。

それにボスの手の緩い曲げ方。あれって私のバストサイズなんだろうか。痛いのと恥ずかしいのと女であることがばれてしまったショックで、気が遠くなりそうだ。

「勘弁してください。抵抗したりしませんから」

苦痛を少しでも取り除きたい一心で言う。彼は手を引っ込めると立ち上がった。銃をむき出しのシオルダーホルスターに戻している。

「さつさと出て行け」

鋭い眼光が降り注ぐ。

「無理ですよ」

私は体を捻って、縛られた手首を見せる。彼は舌打ちをすると、かがみ込んで縄を解いてくれた。

「アビゲイルだな」

立ち上がりざまに吐き捨てるように言う。型の付いた手首をさする私を睨みつけて。

部屋を大股で横切ると、隅に置かれた電話の受話器を取った。内線番号を押しているようだ。

今のうちに逃げ出したほうがいいのだろうか。だが、そんなことをすればボスをさらに怒らせそうだし。それに外には隊員たちがいる。今頃は警備の交替時間だから、いつも以上に人が増えているはずだ。

私は立ち上がると、部屋を見渡した。目が慣れてきたお陰で、今ははっきりと映る。

広い部屋だ。付けられているのは奥の明かり。それも壁に取り付けられたものとライトスタンド。間接照明だけだ。

ソファとテレビが置かれているからリビングに違いない。それにしても大きなテレビだ。脇にはスピーカーまである。

そして、存在感のある石の暖炉。白っぽく見えるのは大理石だろうか。明かりに惹かれる虫のようにふらふらと近づく。その他の家具の色は黒でいかにも高級そうだ。

電話にかかりきりのボスは苛立ったようにフックを押している。

どうやら、呼び出し音を鳴らしても相手が出なかつたらしい。

私は足を止めた。壁に埋め込まれた大きな本棚を見つけて。

さまざまなジャンルの本が収まっている。背表紙から見てもまだ新しいものが殆どだ。

ボスが読書なんかするんだろうか。タイトルを見て行く私は、思わず目を疑った。

最下段の隅に置かれた本。

これは伝説の本ではないか。『世界の料理とその起源』 初版のみで増刷はされなかった幻の一冊だ。料理人でこの存在を知らないものはいないくらいだ。

ボスはまだ電話のところにいる。アビゲイルのことを尋ねているから、空振りだったのだろう。姿を見かけたら来るように伝えろと脅している。

受話器を片手のしかめっ面。普段から十分なのに怖さ倍増だ。

私はそつと本を取り出した。少しだけ。少しだけ読ませてもらう。ボスが受話器を置くまでの間。

床に座り込んで、本を手取る。ずっしりとした重み。ページを開くと広がるカラー写真。分かりやすく見やすい調理の解説。その一品の由来や歴史。食材のルーツまで書かれている。

トマトの起源は南米アンデス高原か。ジャガイモと同じだ。

ふむ、ヨーロッパに伝わった当初は観賞用でしかなかった。それどころか毒草だと思われていたと。確かに知らなければ、あの赤い色は敬遠されるものかもしれない。

「飢饉に見舞われたイタリアで食用となった」

イタリア人ならトマトに足を向けて寝られないな。トマト様々だ。「他にアンデスを起源とするものは、ジャガイモ、ピーナッツ、カボチャ、トウモロコシ、トウガラシなどがある」

色々あるんだな。南米がなかったら、どれだけの料理の発展が望めなかっただろうか。

「ジャガイモの食用は約一万年前から始まっていたといわれており……」

読みかけ、背後の気配にはっとする。

ボスだ。いつの間にか電話を終えていたのだ。今、彼は本棚に右肩を預けている。額に手を当てたまま眉を寄せ、目をつぶっていた。「すみません。私、集中すると声を出して読んでしまう癖があった。私は慌てて立ち上がる。頭痛を招く声だったんだろうか。言っ

しまつてから気付く。それよりもまず、本を勝手に手にしたことを謝るべきだった。

彼は目を開けると、私の全身を眺め回した。

「来い」

そう言つて、手首を取つて引つ張つていく。片手で緩めたネクタイを外し、シャツの襟を寛げる。引き抜いたベルトを床へと放る。

そして、黒い革のソファに身を投げ出した。私があっけに取られて見下ろしていると、彼は人差し指で招く。これって……。

41・アクシデント3 〉 発覚 〉 (後書き)

次回予告：ミシエルはボスの部屋で一晩を明かすことに。明け方を迎え、ようやく抜け出す彼女だったが……。

第42話「アクシデント4 〉 結末 〉」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします

## 42・アクシデント4 〳 結末 〵

ソファの上でボスは、じつと私を見上げている。

私はいえ、冷や汗をだらだらと流し、突っ立っているだけだ。業を煮やしたように彼は体を起こすと、私の手首を取り、引き寄せた。

「読め」

床に崩れて座り込む私にそう命令する。訳が分からずに、手の本をじつと見つめる私を冷たい視線で射抜く。観念して本を開くと彼はソファに横たわった。

「……えっと、ジャガイモは芽に含まれる物質、ソラニンから食中毒を起こすことがある。それゆえに、毒があるということで長い間ヨーロッパでは食用とされていなかった」

私はそつと本の影からボスの様子を窺う。

彼の視線とかち合いそうになり、慌てて本に目を戻した。

「フランスの宮廷では観賞用に栽培され、その花はマリーアントワネットの帽子の飾りになることもあった」

読んでいれば、ボスと目が合わなくて済む。私はどんどん本を読み進めた。

「食用として広めたのはプロシア、当時のドイツの大王であり……」

静かな部屋の中、私の本を読む声だけが響く。一ページ、二ページ、三ページと進む。ボスがあまりに静かなので、気になって再び本を盾にそつと覗く。

なんと彼は寝ていた。黒い革手袋の手を腹に置き、もう片方の手は腕枕にしている。目は閉じられていて、少なくともそう見える。私は確かめようと顔を寄せた。

静かで深い息。こんな風に彼の顔を見るのは初めてだ。通った鼻筋に男らしい上がり気味の眉。色の濃い肌。

そういえば、前にボスの嗜好を探るためにいった料理店のアンナ

さんが言っていた。この人はイタリアにゆかりがあるようだった。

だけど、顔立ちや骨格をみると、純粋なイタリア人とも違う気がする。じゃあ、なに人かと聞かれても、私には答えられないけれど、こうしてみると、ボスはハンサムだと思う。

艶やかでこしのある黒髪。閉じられた切れ長の瞳。目は口ほどにものを言うというが、本当だ。いつもは迫力に圧倒されて、顔全体にまで目がいかない。起きているボスの顔をこんな風にじっと見つめるなんて、不可能だ。

男なのに長い睫毛だ。私より長いかもしれない。

そして、なにより、ほのかにいい匂いがする。ずっと嗅いでいたくなるような感じた。シャンプーだろうか、香水だろうか。私は目をつぶり、深々と吸い込んで確認しようとする。

シャープでいながらとげとげしくない、そんな香り。

「おい」

不意に声をかけられて、はっと目を開ける。

超近い。近すぎる。間近で見たボスの瞳の色は多分濃いグレーだ。飛び退いたためによく見てはいないが。

ボスはぶしつけに目を凝らす。まさか私が襲うつもりだったとか誤解していないですよ、ボス。

「続きを読め」

はい、もちろん。その視線にさらされないのなら、なんだった喜んで読みます。

私は慌てて本を開き、続きを朗読し始めた。

どうやらボスは私の声を聞いていると眠れるらしい。

ところが、読むのをやめるとすぐに起きてしまう。それほどでもないのだ。

催促を繰り返され、私の喉はからからだ。それに眠い、休みたい。だけど、そんなことは許されるはずもなく。

部屋の時計で確認すると、すでに夜明け前。ようやくボスの眠り



は深くなつたようだ。読むのをやめても起きる様子がない。

私はそつと立ち上がる。恐ろしいほどの倦怠感だ。緊張の名残と睡眠不足で足元はおぼつかない。それに嘔れかけの喉。

部屋に戻って一時間ほど眠らせてもらおう。私はほうほうの体でボスの部屋を後にした。

廊下へ出るとありがたいことに人はいなかった。

急ぎたいが、走る気にはならない。高いヒールのせいで思つても出来ないこともある。それ以上に疲れが私を支配していた。

角を曲がると、こちらに歩いてくる三人の男が目に入った。中央には小山のような男、レイバンだ。

隠れてしまおうとも思つたが、この一直線の道ではそれも不自然だ。それに何だかもうどうでもいい気分だ。それくらい疲労はピークに達している。

「おはようございます」

向こうの若い隊員が挨拶してきたので、私も同じ言葉を返した。声が掠れてハスキーボイスになっている。

「可愛い」

ぼそりと聞き覚えのある声。おそらくはレイバンだ。三人は立ち止まったようだ。足音が止まった。振り返ってみる気にもならない。

「ボスの新しい愛人かな」

「レイバンさんの好みってああいう人ですか」

部下の隊員たちの声。レイバンは黙っている。彼は一人で歩き出したらしい。

「待つてください」

二人の足音が後に続く。

なんだかともない言葉を聞いた気もするが、今は考えたくない。ただただ休みたいだけだ。

他にすれ違う人はおらず、私は無事に部屋へと戻ってきた。

目覚ましを時間差で五回分セットしてから、そのままベッドへ倒れこむ。アビゲイルに借りている服だけど、この際皺になっても仕

方ない。

散々な目に合ったと思いながら、私の意識はすぐに眠りに引き込まれていった。

42・アクシデント4　　～ 結末　　～（後書き）

次回予告：短編の番外編。シナリオ書式のコメディを予定しています

【番外編】「実録、幹部会議！」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチ  
ッとお願ひします

【番外編】 実録、幹部会議！

議題 【幹部を動物に例えたら……】

幹部が集まったの会議中。議長はもちろんジャザナイア隊長。ボスを除いた四人が席に着いている。

ジャズ隊長「今日のお題は、皆を動物に例えたとしたら何なのかだ」

アビゲイル「客観的な視点が必要よね。難しいわ」

レイバン 「ボスは考え付くが他は知らん。それより、ボスはいらっしやらないのか」

アビゲイル「先に本社の書類に目を通さないといけないって。後から来るって言っていたわ」

グレイ 「客観的って、あいつに聞いたらいーじゃん」

グレイの意見で、会議室の隅で休憩用のコーヒーを用意していたマイケルことミシエルが呼ばれる。

ミシエル 「動物？ 何かの任務と関係あるんですか？」

ジャズ隊長「部内報に載せるんだ。まあ、余ったスペースを埋めるための苦肉の策って奴だな。真面目な内容ばかりだと飽きるだろ」

ミシエル 「コミュニケーション・ツールになるってことですね。それじゃあ……」

レイバン 「ボスは百獣の王ライオンだ。それしか考えられん」  
ジャズ隊長、アビゲイル、グレイ（それちょっとイメージが違うよ）  
ような……）」

アビゲイル「レイバンの言葉は気にしなくていいから。あなたの考えを言ってみて」

ミシエル 「えっと……ジャズ隊長は虎で、アビゲイルは猫、グレイが豹でレイバンは猪でしょうか」

アビゲイル（皆猫科なのに、どうしてレイバンだけ猪になるのか

しら)

ジャズ隊長「猫科最大のシベリアトラだな。縞の派手さもいいもんなあ」(しみじみ)

レイバン「自分は納得いかんぞ」(怒)

グレイ「そうかー？ オレはしっくりいくと思うけどなー」

(笑)

ジャズ隊長「じゃ、ボスは何だと思う？」

首を左右に傾げてしばらく考え込むミシエル。何かを思いついたように掌を拳で叩く。

ミシエル「僕のイメージでは狼。それもはぐれ狼です」

ジャズ隊長、アビゲイル、グレイ(なんで、はぐれてんの？ でも、なんだか納得かも)

レイバン「そんなわけがない。ボスは王者ライオンなのだ」

会議室の扉が開き、はぐれ狼ことボスの登場。

ボス「なにを騒いでる？」

ジャズ隊長「部内報について話してんだ。幹部を動物に例えたらって記事を載せようと思って」

ボス「くだらねえ」

ジャズ隊長「たまには砕けたコーナーも入れないと。息が詰まるだろ」

アビゲイル「いいじゃない、ジャズ。ボスは関係ないって言うてるんだから。自分がどんな動物に例えられようとも構わないって。」

じゃあ、マイケルの意見で決定ね」

ボスの鋭い視線はマイケルことミシエルへ。息を詰める彼女。

レイバン「自分の意見はどうなっているのだ」

レイバンの言葉には誰も反応を見せない。

奥の自分の席に着いたボスは、いつものようにテーブルの上に組んだ足を乗せる。

ジャズ隊長「ボスは自分でどう思ってた？ どんな動物のイメージだと思う？」

隊長を睨みつけるボス。

グレイ 「オレもそこんとこ知りてー」

アビゲイル「そうよね。ボス本人の意見を載せてもいいんだし」  
グレイ、アビゲイルへと流れるボスの視線。やがて、目をそらして床を見つめた彼は、ぼそりと回答を口にする。

ボス 「……狼か」

固まる周囲。

アビゲイル「ねえジャズ、はぐれていない狼ってことかしら」

彼女の耳打ちに噴出しそうになるジャズ隊長。何笑ってんだと鬼気に満ちたボスの視線がとんでくる。唾を飲み込む隊長。

ジャズ隊長「そうだよな。ボスは狼だ。皆もそう思うだろ」

頷くアビゲイル、グレイ、ミシエル。

レイバン 「だから、自分は……」

抗議しかけるレイバンの口を塞ぐグレイ。

グレイ 「狼だって立派な猛獣だろー。それに狼の群れはボスに絶対服従なんだぜ。格好いいじゃん」

耳元で小声での説得。不承不承であるが、納得するレイバン。

こうして、ミニコーナーの記事は無事決定し、刷り上がりを待つだけになった。

数日後、出来上がった部内報を見てミシエルは絶句することになる。その内容は……

幹部を動物に例えたら

レイバン：猪　グレイ：豹　アビゲイル：猫　ジャザナイア隊長：

虎　ボス：狼（はぐれ狼）

【某コック談】

コックはマステイマには一人しかいないため、某なんて付けても差すのは一人だけ。

その後、ミシエルがボスに呼び出されたのは言うまでもない。

ボス 「なんで、はぐれた狼なんだ？」

ミシエル 「いえ、なんとなく……」 (汗)

ボス 「ああ？」

凄むボス。慌てるミシエル。

ミシエル 「ボスは孤高の人だってイメージがあつて。それで」

ボス 「それを言うなら一匹狼じゃねえのか」

ミシエル 「あつ、そう、それです！」

ボス 「ざけんな」 (怒)

衝撃銃の音は聞かなかったことにして。

仲良きことは美しきかな。マステイマではそれは夢のようで。

悪魔<sup>デビル</sup>なボスことデイヴィッド&大天使<sup>ミカエル</sup>ミシエルのせめぎ合いは、まだまだ続いていく模様であります。

【番外編】 実録、幹部会議！（後書き）

次回予告：翌朝、早々アビゲイルが厨房にやってくる。彼女から伝えられるボスの言葉に、ミシエルはある決意をするのだが……。

第43話「疲労困憊」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします



### 43・疲労困憊

目覚めたときから気分は最悪。

五回目のベルでやっと目が覚めた。ぎりぎりセーフだ。

ほっとしたせいか二度寝をしかかり、これではいけないと飛び起きる。予定よりも大分遅れてベッドから抜け出した。

遅番の警備の人たちへの食事、それからボスの朝食の用意をしなければ。

まずはバスルームに飛び込む。ワンピースを脱ぎ、シャワーを洗面台まで寄せて頭と顔を一気に洗う。化粧のせいで顔は二度洗い。時間がないのにと焦る。

髪の毛のタオルドライ完了。あとは自然乾燥だ。短いから、あつという間に乾く。

体も洗いたいたいところだが、とても間に合いそうにない。時間が空いたときを見つけて、部屋に戻ってくるしかないだろう。

手早くサポーターを胸に巻きつけ、黒いTシャツを身に着ける。

それからいつもの白衣に袖を通した。

厨房に駆けつけて、準備をしていると、アビゲイルが顔を覗かせた。

「おはよう。昨日はお疲れ様」

昨日は……って、私にとってはほんの一時間ほど前のことだ。いろいろ思うところがあるが、挨拶は人間関係の基本だ。返しておこう。まだ声は本調子でない。

食堂との仕切りのカウンターに手を付き、彼女は微笑んでいた。

「うまくいったみたいね。ボスからのお咎めはなしよ。さっき会ってきたの。今日の日程の打ち合わせと見せかけて様子見にね」

様子見って、もしボスが怒っていたらどうするつもりだったんだろう。でも彼女のことだ。きつと何か対策があったに違いないけれど。

厨房に入ってくるアビゲイルをよそに、私は朝食用に刻んでいるキャベツに目を戻した。彼女が傍に来たことをちらりと確認して、深呼吸してから尋ねる。

「ボスは何か言っていました？」

「あなたが女だったってこと？ いいえ。でもご機嫌だったみたいよ。私が挨拶したら、おうって言葉を返してきたわ」

何も言わないのと「おう」の一言。それで機嫌が良いかどうかの目安になるところがあの人らしい。

アビゲイルは私に顔を寄せた。

「ボスに可愛がってもらったんでしょ。良かったじゃない。これでコックの座は安泰ね」

こっそりと言う。

私は手にしている包丁を落としそうになった。

アビゲイルは明らかに誤解している。昨日の晩の私とあの人のことを。

「ボスとはそんな関係じゃありません」

大きくなりそうな声を抑えて、包丁を握り締めて震えを殺す。続けてキャベツを切る。アビゲイルの声は不思議そうだった。

「あら、ならどんな関係？ 朝まで一緒だったんでしょ。レイバンが話してたわよ。廊下でボスの新しい愛人とすれ違ったって」

「本を読んでただけです。僕の声の聞こえていると眠れるみたいで」

私は顔を上げることにもせず、切り続ける。刻んだ山がだんだん大きくなっていく。

「そうなの？ でも、いいんじゃない。愛人より続きやすい関係かもよ」

続きやすいってどういう意味だろう。手を止めて、アビゲイルを見やった。彼女は私の気持ちに気付いたようで、両掌を見せて肩をすくめた。

「あなたには月の半分来てもらうって言ったもの」

月の半分？ あんなことを二日に一回も？ 無理だ。絶対無理だ。

血の気の引いた私の顔色に、アビゲイルは申し訳なさそうに言う。  
「決定権はボスにあるから。直接言つて頂戴。私としては、あの人の機嫌が良くなつて、人件費もかからなくなるんだから、これ以上良いことはないんだけど」

おそらく愛人三人のうち一人か二人を首にするつもりなんだろう。彼女は微笑んでいる。

それは経理の担当だから、気持ちは分からなくもない。だけど、自分の身に降りかかってくるとなると話は別だ。

私は青ざめたまま、まな板に目を戻した。そして、一心不乱にキャベツを刻み始める。

これはもうボスに直接陳情するしかない。

頑張つてと言葉を残して、アビゲイルは去つていった。

結局勢いに任せて五玉もキャベツを刻んでしまった。残ったのはキャベツの千切りの大山。

これは朝昼晩とキャベツ尽くし決定だ。皆に頑張つて食べてもらおう。

おかしくもないのに笑い出している自分に気付く。

変なテンションだ。睡眠不足と疲労のダブルパンチを受けて。こつなつてしまつたら、とことん笑つてしまえ。

朝の厨房に響いたのは奇妙に高揚した不気味な笑い声だった。

「菜っ葉ばっかだな」

朝食の席でボスは言い出す。

スープにもサラダにももちろん、オムレツにも刻みキャベツたっぷりだ。だが、味はボスの舌に合わせてある。今朝の厨房でのやりとりを知らない彼は、それ以上何も言わなかった。

食事を終えて、席を立つ彼に思い切つて声をかける。

「あのボス、お話があるんですけど」

お馴染みの迫力のある視線が飛んできた。それでも言葉を続ける。一度止めてしまつたら負けの気がする。

「昨日の晩のことなんですけど……」

「一日おきに来い。次は明日だ。時間は昨日と同じでいい」

私の言葉など、はなから聞いていない。ハンガースタンドにかけていた制服のコートを取り、袖を通すと出て行こうとする。

「そんなの無理です。それに私はコックで、そんなことのためにいるわけじゃ……」

ボスは足を止めた。振り返った彼の目が言っている。何か文句があるかと。

ここでくじけてなるものかと、私は目をそらさないよう頑張った。彼は私の前に戻ってくると、襟首を掴んだ。

「できなきや首だ。マステイマの隊員が私なんか使うんじゃない。乱暴な言いようだ。だが、弱みを握られている。返す言葉が見つからず、悔しさに唇を噛んだ。

「お前はあくまで表向きは俺の愛人だ。女らしい格好をして来い。他の奴にはばれないようにな。口外は無用だ」

まるで筋が通っていない。夜は女の格好で、コックとしては男でいろなんて。

それにもうアビゲイルに話してしまった。今さら口外無用と言われても無理だ。

黙っている私に話をついたと思ったのだろう。彼は手を離すと、踵を返して食堂から出て行った。

私はテーブルにがつくりと片手を付く。

頭がうまく働かない。疲れと寝不足のせいでもあるが、それ以上に私は混乱していた。

どうしていいのか分からない。はっきりしているのは、ボスの言うとおりにしなければ、ここには居られなくなることだけだ。マステイマのコックの仕事を奪われるなんて、考えられない。最初は命を救ってくれた恩返しのもりで来たけれど、今はそれだけじゃない。最初に見た食堂の惨状が頭を掠める。皆があんな食事に逆戻りなんて、あってはならないことだ。

条件を呑むしかないのだろう。理不尽な理由で人の言いなりになるのは本当に悔しい。

あの人がボスだから。ここのトップだから仕方のないことなのだ。私は自分をそう説得する。それにあの方は若い私を救ってくれた恩人なのだ。

大きく息を吐き、心を決めた。できるだけのことはやろう。泣き言や文句はそれから言っても遅くはない。

辞めることなら、いつだってできるのだし。その時は、あの方の目の前で大声で宣言してやろう。

そう心を決めると、もやもやしていたものは次第に収まっていた。

そして、自分の置かれた状況もまた少し違って見える気がした。

### 43・疲労困憊（後書き）

次回予告：マステイマ隊員として必要な技術、射撃の訓練。前日の騒動で疲労のミシエルもかりだされて……。

#### 第44話「射撃訓練」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

#### 44・射撃訓練

コックはとてもやりがいのある仕事だ。

成果がすぐに出る。食事をした人の笑顔がなによりもの報酬だ。また頑張ろうと気持ちも新たになる。

だから、一品一品に心を込めたい。誰が口にするかは関わらず。そんな思いが変わったわけじゃない。ただ今日はあまりに疲れているのだ。

「目が死んでる」と何人に言われただろう。料理人が目利きする魚なら論外の言葉だ。食材としてはふさわしくない。もちろん、コックとしてもだ。

体調や気分は味覚にも関わる。そうすると料理の味も変わってくる。ダメダメだ。

時間を調整して、休憩を入れることにしよう。ボスと隊員たちのランチタイムが終わったら、部屋に戻って入浴と仮眠の時間を取る。そう決めた私は、スケジュールを考えて、はっと思いつく。

今日って、午後に何か予定が入っていたような。アビゲイルが前に話していたっけ。

肩の荷が重くなるが、気を落としていたって仕方ない。実行あるのみだ。

そして、私は午後の貴重な休憩時間を手に入れた。

部屋に戻る途中、廊下でアビゲイルに出会った。

彼女にまで言われてしまった。「ゾンビみたいよ」と。

「目が死んでる」とどっちがまじだろう。はあ、本当に生ける屍の気分だ。

彼女は虫の知らせでも感じたのか、丁寧に今日の予定の念を押し付けた。それから、手にしていた紙袋をくれる。ディケンス本社経由で送られてきた郵便物だ。

イタリアの実家から。それも母からの荷物。だけど心当たりがない。

部屋に入ってから中身を確認する。紙袋の中に紙袋が入っていた。これってマトリョーシカ？ さらに中から紙袋が……なんてことはなかった。

メモ紙のような小さな紙がはらりと落ちる。それを拾ってみると、見慣れたイタリア語が並んでいた。

『多分あなた宛の荷物なので転送します。母さんに見つからないよう、こっそりとね。出会いの多いあなたが羨ましいわ』

母の筆跡。らしい言葉の羅列だ。

多分なんかで送らないで欲しい。それに出会いが多いって、そりゃマステイマは言ってみれば逆ハー状態。異性ばかりだけど、一応私も男としているわけで。

……まあ、いいか。目の前にいるわけじゃないのに、突っ込むのもなんだかしんどいし。

祖母には、ディケンス警備会社のコックとして勤めていると伝えている。もちろん本当の性別で。

母が私宛に荷物を送るなんて知ったら、面倒なことになるに違いない。あれも入れる、これも入れると。

自家製梅干やら味噌やら、果てにはお腹を冷やさないように腹巻とか、毛系のパンツとか。心遣いは嬉しいが、困るものまで詰め込んでくるのだ。祖母に内緒にしてくれたのは、この手紙で唯一評価できる点だ。

さて、肝心な紙袋はというと、宛名書きはすべて漢字だ。これは多分中国語だろう。

話し言葉なら理解できるが、書いている物は分からない。だけど、送り主はぴんときた。紙袋の中身を見て確信する。

中国の師匠からだ。送られた物は男物の黒いカンフー着。サイズ特小。

最近、仕事にも慣れて時間配分もできるようになってきた。だか



ら、ご無沙汰にしていた鍛錬もできるんじゃないかと思った。

師匠に近況報告も兼ねて、そんな電話をしたのが約一ヶ月前。マステイマの事情も知っている師匠だけに、家に送ってくれたのだから。

気持ちは嬉しい。だけど、今やゆとりある時間は奪われた。誰かさんのせいだ。残念ながら、もう鍛錬なんて言っている場合ではないけれど。

まずはお風呂、そして仮眠。その後にお礼状を書いておこう。

私はカンフー着を袋に戻して、机の上に置くとバスルームに向った。

アビゲイルの第六感は当たっていた。お礼状なんて書く暇はなかった。

起きてみたら時間ぎりぎり。大急ぎで支度を済ませて部屋を飛び出る。

すると、目の前の廊下で彼女が待っていた。

「あと一分待って出てこなかったら、部屋に入るところよ」

そう言っつて、マスターキーをちらつかせている。

謝る私に彼女は微笑んだ。

「似合ってるわよ。サイズもぴったりね」

「そうですか？」

彼女の笑顔に頬を熱くしながらも、自信なく答える。

とりあえず着てしまえで出てきた。鏡なんて、とても見る暇はなかったのだ。

今、私が袖を通しているのは、いつもの白衣ではない。マステイマの制服だ。他の隊員たちと同じ黒いジャケットにズボン、黒い靴。アビゲイルが背中を向けて歩き出す。

続く私の足が重いのは、疲れのせいでも制服のせいでもない。実際、この服はすこぶる快適だ。軽くて伸縮性があって動きやすいし。初めて着るので、緊張しているからというわけでもない。

アビゲイルを追って階段を下る。地下へと伸びる道。向っている先が問題だった。

だいたい地下室があったこと自体も知らなかった。それだけマステイマの城は広く、私の行動範囲は狭いということなのだろう。

たどり着いた廊下の先の扉。途中で立ち止まった私をアビゲイルは振り返り、諭した。

「マステイマの隊員として必要なことよ」

彼女はそう言うが、私は納得してはいなかった。それでも戻ってきた彼女に手を引かれても、抵抗しなかった。

扉を開けた途端、耳障りな音が聞こえてきた。

幾つもの銃声。並んだブースにイヤーマフをつけた隊員たちの背中が見える。その向こうには標的。

射撃場だ。拳銃が標準装備となっているマステイマでは必要な設備だ。それは分かっている。だが、私は銃そのものはもちろん、その発砲音も好きじゃない。

ただ引き金を引く、それだけで命を奪ってしまう凶器。使い手によるのだ、例え、そうと知っていても。

女が男に勝てる唯一確実な手段だと、ブルーノさんからも技術の習得を促されたことがある。父親代わりをしてくれた人の言葉ではあるが、受け入れられなかった。

アビゲイルが振り返る。

私がまた途中で止まってしまったからだ。足が床に張り付いたように動かない。彼女の困った顔に気持ちだけが焦る。そんなところに声をかけられた。

「制服決まってるな。いよいよお前も練習か、ミック」

銀色の頭からイヤーマフを外しながら、近付いてきたのはグレイだ。

白いシャツ姿の彼の腰には、黒い革のホルスターがある。丁度、コートを着ていけば見えない位置だ。

味方を得たと思ったのだろう、アビゲイルは笑顔を見せた。

「グレイも言っちゃって。マステイマの隊員である以上、コックと  
はいつでも自己防衛の手段が必要だって」

「オレたちには敵も多いし。非常時訓練じゃねーけど、あーいうこ  
との可能性はゼロじゃねーもんな」

二人の言葉は良く分かる。だけど、理屈なんかじゃ、どうにもな  
らない。そんなものを持つなんて。まして撃つなんて考えられない。  
私<sup>が</sup>他に手段を求めたのも自然の流れなのだ。

グレイが差し出してくる拳銃を前に、拳をぎゅっと握り締める。  
私の体は強張るばかりだ。

そんな時、会場の空気が急変した。

#### 44・射撃訓練（後書き）

次回予告：射撃なんて嫌。銃なんて持ちたくない。そんなミシエルに射撃場に現れた人物は……。

第45話「シューティング・スター」

お話を気に入っていただけでしたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

## 45・シューティング・スター

銃を撃っていた人たちは、そうでない人に声をかけられ、後ろを振り返っている。

音という音が途絶えた射撃場。異様としか言いようがない。

やがて、ざわめきが起こった。

「ラッキー、ボスの射撃を見れるなんて。面白くなるぞ」

グレイが嬉しそうに呟く。

部屋に入ってきたボスは、辺りを見渡した。私はグレイの後ろに隠れた。そうする必要なんてなかったが、反射的に逃げてしまった。ボスは部下から差し出される道具を無言で受け取ると、一番の奥のブースへと向った。私たちの横を通り抜けて行ったが、こちらをまったく見ようともしなかった。

皆、距離を置きながらも近くまで寄っていく。私もグレイとアビゲイルに押され、野次馬の集団の中に入った。

「プログラムD」

彼は手元のイヤーマフに向かって言う。無線機が取り付けられているようだ。

マフを装着し、懐から拳銃を取り出した。例の大型の拳銃だ。黒い回転式拳銃。リボルバー

標的が動き出す。隊員たちが撃っていたのは静止した標的だったのに、ボスが狙っているのは左右に動くのだ。

リボルバーが火を噴く。

次々と真ん中に穴が開いていく。三発撃って今度は左手に持ち変える。また三発。全て真ん中に命中だ。

周りの人たちは息を飲んで見守っている。ボスの弾を装填しなすす音が聞こえるくらいに。

ボスはマフに付けられたゴーグルを下して、装着した。真っ黒な色の付いたゴーグルだ。

的の動きが変わった。前後と上下の動きも加わる。的までの距離がさらに伸びている。

ボスは何事もないように銃を構えると、弾を撃ち始めた。一発、二発、三発。左手に持ち替えてさらに三発。全ての弾丸が的の中央に吸い込まれて行った。

「すげえ」

「見えないのに全て命中だ」

隊員たちはざわめく。

だが、ボスはというと拳銃を下げるなり、片手でマフを取って無線機に向って怒鳴った。

「技術部、改良がなつてねえぞ」

苛立った声。

「標的の動きにパターンがある。それに動く際の音も大きすぎだ。これじゃあ遊びにもならねえ」

イヤーマフを床に投げつける。無線の相手は相当な耳のダメージだっただろう。もしかして、アビゲイルの旦那さんだったりして。

「音って聞こえた？ それにパターンって……」

アビゲイルが答えを求めてグレイを見やる。

「分かんねー。大体ボスは目でなんか見てねーからな」

グレイは唸つてからそう言った。

見ずに標的を狙えたりするんだろうか。それもど真ん中を。あっけにとられる私をよそにボスはブースを離れた。

こちらに歩いてくる。賞賛の眼差しが集まる。彼は私たちの傍で足を止めた。

じつとこちらを見つめている。手はいつもの黒い革手袋。そしてリボルバーがあった。

「マステイマとして失格だな。自分の身さえ守れねえ野郎は」

私へのあてつけだ。

彼は銃をこちらへ向けた。弾の入っていない銃で怖がらせようとしている。

なんでも脅せばいいと思っっているのだ、この人は。体が熱くなり、頭がたぎる。上司だとか命の恩人なのだとか、そんなことは一気に吹っ飛んでしまった。

考えるより先に体が動く。私は踏み出し、手刀を振るっていた。二打とも寸前で避けられた。続いて体をひねって膝を打ち込む。これも後ろに下がって避けられた。その場で回転して勢いをつけた私は、飛び上がって今度は足刀を叩き込んだ。

後ろの皆のどよめき。ボスは腕で私の攻撃を防いでいた。スピードなら自信があつたのに。さすがはマステイマのボスというべきか。格闘技にも通じているようだ。私は後ろへ跳んで元の位置に戻った。防御の腕を下げたボスは、信じられないといった様子で私を見下ろしている。

「守れます。自分の身くらい！」  
息巻いた私はそう言い切った。

中国で料理と共に学んだ拳法。銃は使えない私の自衛手段。マステイマへ入ることを決めたときから、祖母の知り合いから空手や柔道を習った。だけど、どれも芽が出なかった。今思うと覚悟が足りなかつたんだと思う。

それが必要に迫られた。師匠が出した、料理の修行をつける条件の一つでもあつたから。

拳法道場で、重い中華鍋を自在に扱う体力をつけること。こんな風に役に立つなんて。

ボスは拳銃を私に向けた。そんなの怖くない。空っぽの銃で何が出来るって言うの。

私の背後の人たちが一斉に左右に割れた。どうしたのだろうと振り返ったとき、すぐ傍でつんざく銃声を耳にした。

弾がまだあつたことに愕然とする。

「甘ちゃんか」

耳鳴りの中、聞こえてきた、それがボスの捨て台詞だった。

彼は懐に銃をしまつと、その場から去って行った。

姿が見えなくなると皆が私を取り囲んだ。

「すげーじゃん、お前」

グレイは本当に驚いた風だった。両手を広げて、唯一見える青い左目は見開かれている。

「そうよ。不意打ちとはいえ、ボスに防御させるなんて。凄いわ、マイケル」

アビゲイルは私を抱きしめた。苦しい。大きな胸で窒息しそうだ。周りの人たちも賛同の言葉を口に出している。「ちっこいのにやるなあ」とか「ボスの防御なんて初めて見た」とか。

ちっこいのは余計だが、ボスをあつと思わせられたのなら、嬉しい。それでなくても、こっちは色々と鬱憤が溜まっているのだ。これくらい、あの人には我慢してもらわなきゃ。割が合わない。

だけど、本当にあつと思わせられたのは私の方だった。

隊員の一人が気付いて指を差した。ボスの弾の行方を。弾はブースを貫き、奥の的まで飛んでいた。そして、当たっているだけでも信じられないのに、その場所は真ん中だったのだ。

「神業だな、こりゃ」

グレイは呻くように言った。

周りの皆もボスの技に感嘆していた。

私は少しだけ悔しさを感じた。確かにボスは凄いと思うが、なんだか負けた気分になる。

こんなことで競い合うのは馬鹿らしいとは思っただけだ。相手はプロなんだし、最初から相手になるわけがないことは分かっているのだけだ。

素直に「凄いです、ボス」ってならないのは、私の根性が曲がっているのだろうか。

私は考えるのをやめた。後ろ向きになるだけだ。それこそ私に似合わないじゃないか。

ありがたいことにこの事件のお陰で、銃の訓練の話はお流れになった。



身につけた拳法のお陰だ。これはもう粗末になんてできない。カ  
ンフー着で本格的には無理だとしても、少しの時間でもやれること  
はある。鍛錬を始めなくては。間が開いているから基礎からやり直  
しだ。

翌日、誰も居ない朝の食堂で型を練習する私。廊下を通りかかり、  
それを目にしたボスは、何も見なかったようにして去って行った。  
思いつきり目が合ったのに。

脅したって何もならないこともあるんですからね、ボス。  
呼吸を整えて、拳を突き出し、型を決める。

窓から入り込んだ凜とした空気が私の気を高めていった。

## 45・シューティング・スター（後書き）

次回予告：一日おきのボスの寝かしつけ役に疲労蓄積のミシエル。  
アビゲイルにすぎる彼女だったが……。

第46話「F分の1」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチ  
ッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

射撃場での一件の後、夜のボスの相手は気まずいなんてものじゃなかった。

枕を頭の上に乗せて布団の中に隠れてしまいたかった。

もっともそんなことできるわけがない。今晚の朗読場所は寝室。ベッドの中にいるのはボスで眠る気満々だ。今日はパジャマ姿だし、放られたナイトガウンを畳みながら、溜め息をつく。

彼の目が私を捉える。早く始めると言っている。

ベッドの横に据えられた椅子にしぶしぶ腰掛ける。不満は満載だ。だいたいベッドからして大きすぎる。キングサイズだろうか。今まで見たこともないから分からないけれど。私なら四人いても十分な広さ。

……そうか。この人は一人で寝るとは限らないんだ。

妄想へと進みそうな頭を切り替えるべく、慌てて手元の本へと目をやる。『世界の料理とその起源』のページを開く。

丸く照らし出すのは小さなスポットライト。それ以外の電気は消された。ボスは本来真っ暗でないと寝られない人らしい。

どっちにしたって寝ないんだから、電気を付けてくれたらいいのにと反発を込めて思う。

私は小さい明かりがないと寝られない質だ。それに真っ暗闇は嫌いだ。

はい、そんなに睨まなくても分かっています、ボス。

私は本を読み始めた。長い夜の始まりだった。

一日おきでの夜のボスの相手。

殆ど眠れないのだから、終わった頃には精も根も尽き果てる。

翌日のコックとしての仕事にも集中できない。自ずとミスも増えてくる。火の調節を忘れたり、計量スプーンが何杯目か確信がもて

なくなったり。

容器に入れて振った自家製ドレッシングを厨房に撒き散らしたこともあった。蓋をするのを忘れていたのだ。

反対に蓋を外しすぎて、鍋の中にコシヨウを盛ったこともあった。すぐにフオローはできたが、致命的なミスを犯すのも時間の問題の気がする。

両方の仕事をこなす覚悟はしていたが、体力が付いていかない。次第に溜まっていく、どんよりとした疲れ。慣れれば、ましになるかと思つたが、その見通しも甘いようだ。

たまりかねた私はアビゲイルに相談した。事情を知っているのは彼女だけなのだから、頼りになるのはこの人しかない。

ありがたいことに彼女は秘密を守ってくれていた。ボスに関することを口外するほど、愚かではないというのは彼女自身の言葉だ。

「あなたの声でボスは眠れるのよね」

二人っきりの医務室で、アビゲイルは考え込む。

なんだか不眠症の患者の相談に来た、その家族のようだ。私は疲れが抜けず、よく回らない頭で一生懸命考えていた。

「薬を渡すとか、治療は出来ないんですか？」

私の言葉に首を横に振る。

「私も何度も言ってるのよ。でも聞いてくれないの。薬での眠りの質が嫌なんですって。何かあった時にすぐ対応できないからって。

そう言われちゃあ、こっちも無理強いは出来ないわ。それに……」

「何です？」

言葉を止めて、じっと私を見つめる緑色の瞳に焦って問いかける。「もっと良い方法を見つけたって思っているに違いないもの。なおさら治療なんて受けないわよ」

彼女の言葉に、そのとおりだと思いつながら落ち込む。それって逃げようがないってことなんじゃないだろうか。

私の肩の落としように彼女は慌てたようだった。

「オスカーにも相談してみるわ。彼は技術屋だから、私たちとは別

の観点で解決方法を見つけてくれるかもしれないし」

私はその申し出に乗った。二人で考えても良い案が出なかったのだし。他の人の知恵を借りるしかない。私が女であることと相手がボスであることは内緒で、彼の協力を願うことにした。

技術情報部の前の廊下で、アビゲイルと口裏を合わせる。

不眠症なのはイタリアにいる家族、祖母の設定。私の声を聞いていたときにはよく眠れていたのを思い出して、私に戻ってきて欲しいと願っているということにして。

矛盾した不自然な部分がないことを確認してから、扉をくぐる。連絡を受けていたオスカーは私たちを待っていた。

彼がまず始めたのは音声解析。何が眠りを招くのかを調べるべきだとの意見だった。

「女の子みたいな声だね」

ヘッドフォンをしたオスカーは呟く。録音した音声を機械にかけて分析しながらの言葉に、私とアビゲイルはぎくりとする。

「きつ……緊張したので」

「そうそう。緊張すると声のトーンが上がっちゃうものよね」

二人で視線を交わして合わせる。掌にじわっと汗が滲んでくる。

オスカーの興味は、すでにそのことにはないようだ。

「そうだね」と笑みながらも、真剣な眼差しでグラフを刻む画面を見つめたままだ。

分析が完了した結果、ある二つのことが分かった。

一つ目はF分の一のゆらぎを持った特別な声であること。二つ目は、それは朗読の際のみに発生しているものであること。それがアルファー波を減少させ、睡眠を促しているのだろうと彼は推論した。「CDを作ったらどうだろう。そうすれば君自身がいなくても大丈夫だと思うけど」

オスカーは、機材の前の椅子を回して私たちを振り返る。

そうか。そうすればいつでも聞けるし、ボスだってわざわざ私を

招くこともないから、満足してくれるに違いない。

さすが技術情報部の部長だ。頼りになる人だ。今日の彼はこの前見たときとは大違いだし。

糊のきいたシャツにサスペンダー、エンジ色のネクタイ。髭はなく、くせのない金髪はきちんと整えられ、瓶底眼鏡もかけていない。だけど、当たりの柔らかい印象はこの前以上だ。始終浮かぶ笑みには余裕が見え、精気に溢れている。別人のようだ。

……って、これはこの人にもアビゲイルにも失礼かもしれないが。「是非お願いします」

私は喜んで彼の提案を受け入れた。

決まってしまうえば、あとは早いもの。オスカーの仕事の速さには舌を巻くほどだった。

技術情報部の部屋に入ってから二時間かからず、CDは完成した。「だけど不眠症か。うちのボスもそうだったよね。彼にもこれを渡してみたらどうだろう」

にこにこ笑いながらのオスカーの言葉。冗談だったのだろうか、私にとってはそうではなかった。

「やーね」

やっとといった感じで笑い返しながらも、アビゲイルの顔も引きつっていた。

礼もそこそこ、技術情報部を後にする。

アビゲイルが私の背中をどンドン押してくるからだ。部屋を出てから私たちはほっと息をついた。

すぐに彼女は再生用のCDプレイヤーを用意してくれた。

私にとっては、これからが正念場だ。ボスに渡さなければならぬ。だけど、それを乗り越えれば、今日からでもあの辛い仕事にさよならできる。

大きな期待と不安を胸に、ボスがいるはずの執務室へと足を向けた。

## 46・F分の一（後書き）

次回予告：CDを手にボスの元へ向うミシエル。これで、夜の仕事から解放されることができるのか。その結末は……。

第47話「希望の行方」

お話を気に入っていただけでしたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

## 47・希望の行方

執務室の扉を前にして立ち止まる。手には円盤型の薄いCDプレイヤー。

大きく息を吐き出して緊張をほぐす。プレイヤーを握り締め、決意の確認をする。

それから、ノックをして断りの言葉と共に部屋に入った。

正面に据えられたダークブラウンの大きなデスク。ボスは書類にサインをしているところだった。こういうデスクワークも彼の仕事のひとつなのだ。

近付いていっても書類に目を向けたままだ。念力で火でもつけそうな勢いだ。そして、万年筆を滑らせる。サインを終えた紙に吸い取り器<sup>ツタ</sup>を押し付けてから、横に置いた箱に入れる。重ねられた新たな書類を一枚手にして、彼は顔も上げずに言った。

「なんだ」

「あの……ボス、これを」

私はCDプレイヤーを両手で差し出す。ボスはちらりと上目遣いにそれを見ただけで、再び書類に目を落とした。

「なんだ、それは」

下を向いたまま言う。

「技術情報部に頼んで作ってもらったCDが入っています。僕の本を朗読する音声<sup>ボイス</sup>が記録されています。これを聞いてもらえば、きっと……」

私の説明にようやく顔を上げた。ぎろりと私を睨んでいる。背後の窓からの光が微妙な影をつけ、普段から十分な迫力を後押ししている。

無言でペンを置いて立ち上がった彼を見て、私は慌てた。

「あっ、ボスのためだということは言ってますし、僕が女だという<sup>ウツ</sup>ことも……」



言葉が終わらないうちに、いつもの黒手袋をした手を伸ばして、プレイヤーをひっ掴んだ。驚いた私は手を離してしまった。

彼はデスクを離れると、背後の窓に向かって歩き出す。錠が外されて窓が開く。何をするかと思えば、空に向かってフリスビーでも投げることができるようにそれを放った。

思わず短く悲鳴を上げてしまう。私が最後に見たのは、弧を描く放物線の頂点から落下するプレイヤーだった。

窓に駆けつける直前に、地面にぶつかる無残な音が聞こえていた。覗くと大破したプレイヤーと飛び出して割れたCDが見えた。

「なんてことを」

呟きを漏らさずにはいらなかった。せつかくアビゲイルにも知恵を借りて、オスカーにも協力してもらったのに。

それにプレイヤーは借り物なのにどうしよう。一瞬間の中が真っ白になる。

「壊れたな」

ボスは私の横で、いかにも自然に壊れましたと言わんばかりの口調だ。

城で最初に会ったとき、アビゲイルに銃床ストックが欠けたライフルを渡したときと同じだ。壊れたのではなくて壊したのに。

私の頭を後ろからど突く。反動でCDプレイヤー同様に窓の外へ落ちてしまいそうになる。それを踏ん張って何とか耐える。

彼はデスクに戻ると、再び書類を手に取った。

「今夜は外に出る」

後頭部を押さえて涙目で振り返る私を見もしない。

今日は夜のお勤めの日だ。外に出るということはキャンセルってことか。初めての二日空きだ。久しぶりにゆっくりできるかも。

なんだか休暇でも得たような浮かれた気分になる。だが、それはすぐに彼の言葉によって沈められた。

「俺が戻ってきたら部屋に來い」

それって、寝ずに帰るまで待ってってことでしょうか。

そんなことしてたら、明日の朝、起きられなくなってしまう。

「朝食はいらん」

そんなこと言ったって、誰もボスの朝食なんて心配していない。遅く帰ってきて食べないことなんて今までだっただってあったし。

「でも、遅番の人たちへの朝御飯の用意が……」

抗議の途中で何かが折れる音。首を僅かに回して、ボスが横目でこちらを見る。手にはペン先の折れた万年筆が握られていた。

「ああ？」

低い彼の声に体がぶるつと震える。この人の声にも目にも慣れるということがない。

先のない万年筆でも人は殺せるんだろうかと真面目にそんなことを考えてしまう。

「……分かりました」

結局気持ちを貫けなかった。ふがない自分が恨めしい。

ボスはすでに自分の仕事を再開している。引き出しから新しいペンを取り出していた。

受話器を取ると、番号を押して、出た相手に文句を言う。報告書を出しなおせと。それは多分ボスがさつきペン先を折って、インクを滲ませた書類のことだ。また理不尽な命令だ。

私のせいでもあるけれど、その人には許してもらいたい。もういっばいいっばいなだから。

頭は今日の段取りを考えるのにフル回転だ。

明日の朝食は今日のうちに出来るところまで用意して、朝は火を通すだけで済むようにしておこう。昼食もそんな感じにしておいて、途中で手の空いたとき、部屋で休ませてもらう。

そうか、私自身の日程を変更すれば不可能なことではない。

ボスのせいにして、本来の仕事である料理をおろそかにすることなんて出来ない。そんなことは私自身が納得できない。プロとして厨房に立つからには妥協は許されないことはもちろん、なによりもあの人に負けた気分になるのが嫌だった。

私は執務室から一目散に退出した。

そうと決まればやることは沢山ある。今から準備に取り掛かれば、皆に迷惑をかけることはないはずだ。

ここはマステイマ・コックの根性の見せ所だ。白衣の袖を捲り上げながら、私は厨房へと急いだ。

#### 47・希望の行方（後書き）

次回予告：冷暖房完備のマスティマの城。だが、それさえもボスには邪魔なことがあるようで……。

第48話「冬のボス」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

## 48・冬のボス

隊員たちのために格闘技のコーチになつてくれないか。

ある日、ジャザナイア隊長から打診された。どうも射撃場でのボスとの対決の噂が耳に入つたらしい。噂につきものの尾ひれが、隊長の判断を狂わせたようだ。

私の拳法は誰かに教えられるものではないと思う。

道場でいつも注意されていたっけ。ムラが多すぎるって。気合のムラ、スピードのムラ、攻撃力のムラ。板きれ一枚割れないときもあれば、厚い鉄板を凹ませても平気なときもあったし。あんまりムラムラ言われすぎて、ムラの意味が分からなくなつたくらいだ。

自分の仕事の手いっぱい時間で時間が取れないというのもある。こういうものは継続的な訓練が必要になってくるから、指導者としては致命的とも言える。

そして、最大の問題は、実戦でどれほど役に立つか私自身が分からないことだ。

そんな中途半端なものを人に伝えるわけにはいかない。プロ集団でなければならぬ、マステイマの隊員の足元をすくうことになりかねない。

私は丁重にお断りした。理解を示してくれたジャズ隊長にほつとする。

「お前もなんか最近お疲れみたいだもんな」

去り際の隊長の言葉にぎくりとする。顔に出ているんだろうか。

一応「そんなことないですよ」とごまかしてみる。彼は笑顔を浮かべただけだった。

「最近寒さが厳しくなってきたし、体壊さねえようにな」と私の肩を叩いて、隊長は厨房から出て行った。

心遣いにじんとくる。

私よりも外に出ることの多い隊長たちのほうが大変なはずなのに。

こんな言葉をかけてくれるなんて、誰かさんとは大違いだ。

厨房が仕事場の私には、暑さ寒さは問題にならない。マステイマの城には空調が完備されているからだ。温度、湿度がオートでコントロールされ、場所によって最適な環境に保たれている。

たとえ、外で雪が降るうが、風が強かるうが、城の中にいればまったく関係はない。

……そのはずだった。

「ボス、寒いんですけど」

「俺は丁度いい」

何回目のやりとりだろう。同じ言葉の繰り返しにボスは不機嫌になりかけている。

だって寒いんだもの。我慢や根性で乗り切るなんて無理だ。

ここはボスの寝室だ。当人はふかふかのベッドの中なんだから寒さなんて関係ない。むしろ暑くなるからとヒーターの電源を切ってしまった。私がいることなんてお構い無しだ。

最初はそれほどでもなかった。部屋が冷えてくるまでは。厚着をしてくれば良かったと思うも後の祭りだ。だいたい城の中でそんな装備が必要なんて考えもしないし。

我慢していたけれど、それも限界になって訴える。その答えが最初のボスの言葉。

風邪をひいてしまいそうだ。だけど、ヒーターを入れることは許されない。こうなったらボスに早めに寝てもらって、さっさとこの部屋を出るしかない。

私は片手で腕をさすりながら、膝の上の本のページをめくった。

眠っていても寒さは感じるものだ。

手を伸ばして、足に触れる肌触りのいいブランケットを引っ張った。

眠くて目は潰れているが、引き寄せることは出来る。それで体を

覆うと、うん、温かい。電気毛布っていうのだろうか。温もりが心地良い。

これでやっと温かくして眠れる。

私がより深い眠りに引き込まれる瞬間、それを狙っていたかのよう  
に声が聞こえてきた。

「おい、起きろ」

うるさいなあ。今が一番気持ちのいいときなのに。邪魔するなんていけずな人だ。

「おい」

声が大きくなって、頬をはたかれる。

私ははっと目を開けた。目の前にはボスの顔。彼は不機嫌そうに眉間に皺を寄せている。

何が起こっているのか分からない。それに頬がじんじんする。

「布団を返せ」

その一言でようやく状況が見えてきた。椅子で眠っていた私がボスの布団を握りしめていたのだ。彼の元にあるのは端っこだけ。私  
が殆どを奪っている。

謝りながら、慌ててベッドに布団を戻す。

だが、すぐに体が冷えてくる。夜も更けてきたからだろう。寒さ  
が増しているようだ。

眠気も酷くなってくる。冬山で遭難して凍死してしまう人ってこ  
んな感じだろうか。

本の字が霞む。読む声は寒さと睡魔で震えながら途切れ途切れ。

ボスもとうとう根負けしたようだ。

「上着を貸してやる。向こうからとって来い。明かりは付けるなよ」  
電気は私の手元を照らすものだけだ。寝室の隅にあるウォーク・  
イン・クローゼットの中まではとても届かない。

立ち上がるとめまいさえ感じる。ふらふらと歩いていって、手探  
りで上着を捜した。分からないから適当でいいや。

早速袖を通すと温かい。ぜんぜん違う。長い丈の上着の裾を持ち

上げながら歩く。足もすっぱり覆われるから快適だ。

私はベッドの中で目をつぶっているボスのそばまで戻った。

「最初から読め」

目を閉じたままの命令。

私は憂鬱になりながらも本を開く。そして、半分眠りながら本を朗読し始めた。ポテトとトマトが置き換わるうが、アンデスがアンデルセンになるうが、もう勘弁してもらおうしかない。

運良くもボスはそれから目覚めることはなかった。

私は自分の部屋に戻る。静かに音を立てずに。

そして温かい部屋でベッドに沈むようにして眠り込む。極楽だ。

また着替えもせず、シャワーも浴びないままだが、全ては明日だ。もう起きる力なんて残っていない。

束の間の休息。

私を叩き起こしたのは、目覚ましのベルではなく、何度も鳴り続ける電話のベルだった。

這うようにして受話器を掴む。

耳に押し当てても相手の声は遙か彼方だ。まさかあの世からの電話とか。私はまだ眠っている頭で考える。

「聞いてんのか」

小さく聞こえる声に耳を澄ます。この声はボスではないか。

瞬時に覚醒した。私の部屋にボスが直接電話をかけてくるなんてただ事ではない。

声が遠いのは当たり前だ。受話器を逆さに持っていたのだ。持ち替えて耳に当てると、ボスの怒りの声が鼓膜を打った。

「俺の制服のコート、どこにやった？」

制服なんて知るわけがない。そんなもの触ってもいないし……と、考えてはつとずる。私が借りた上着ってまさか。

不安の中だ。私が着ているのは王様のマントのように床に引きずったコート。ボスの背丈に合わせているのだから、合わないのは当然だ。裾のほうは汚れて白っぽくなっている。



部屋に戻つてくるときには殆ど眠りながら歩いてきたから、気にしていなかった。

おまけに着たまま寝たのでしわくちゃだ。かっこいい皺加工なんて程遠い、ただの不細工な皺だ。

「すみません、ボス。汚れて皺々になってます」

「なんだと？」

ボスは激昂した。朝から本社に出向く予定があったらしい。

アビゲイルを通じて、クリーニングに出した他のコートを何とか用意しろと命令された。出発が遅れたらどうなるか分かってるんだろうなどの脅しつきだ。

破壊音と共に電話がぶつぷりと切れた。おそらく床に投げつけてもしたのだろう。

私はすぐにアビゲイルに電話をかけて、指示を仰いだ。

彼女はことの次第に驚いたものの、すぐに手を打ってくれた。

ディケンス本社経由に出されたクリーニング。契約店はロンドンだ。ロンドンにボスが着いてからすぐにコートを届けてもらうよう手配をしたのだ。

「ヒーターを切らなければ良かったのに。自分の責任でもあるって分かってくれたら良いのだけどね」

落ち込む私に彼女はそう言ってくれたが、あの人がそんなことを思うはずがない。

寒いって言うから上着を貸してやったのに、確かめもせず、汚してしわくちゃにした。チビコツクの失態だ。そう彼は確信しているに違いない。

ああもう、いつとき帰ってこないで欲しい。

飛び立つへりを見送りながら、私はボスの怒りを思って憂鬱になった。

## 48・冬のボス（後書き）

次回予告：レイバンの元へ食事を届けることになったミシエル。そこには彼を慕う小さな守護者がいて……。

第49話「医食同源」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

## 49・医食同源

医療と食事というものは深い結びつきがある。

特に東洋ではその意識が根付いているように思う。医食同源という言葉は日本語で造語らしいが、中国でも薬食同源の思想が古くからある。

薬膳料理は中国の師匠が得意とする分野でもあった。だが、残念ながら、それを学んだことはない。とても複雑で奥深い世界だ。習得するには何年もかかるだろう。中途半端になるなら教える気はないと、師匠からもはっきり言われた。

だが、その考え方は新鮮で、料理人の可能性が広がって見えたものだ。

私はこのままでいいのだろうか。仕事を把握し、慣れてきた者が誰でも考えるだろう自問自答。夜のボスのせいで時間は狭まっているが、コックとしては常に追及者でいたい。

考えた末、出た結論はアビゲイルとの連携<sup>タッグ</sup>。私に知識と技術が足りないのなら、他に協力を求めるだけだ。

コックと医師として、隊員たちが健康であることを目指す。二人での話し合いも重ねた。

「疲れているみたいだけど、大丈夫？」

アビゲイルの言葉。弟のジャズ隊長からも言われたっけ。一人なら気のせいで済むが、二人目となると話は変わってくる。

「なんとかやってます」

私の答えに、無理をせずに辛いときはいつでも医務室に来なさいと言ってくれた。いくら彼女でもボスには逆らえないようだ。

こうなったら、ボスの夕食に睡眠薬でも盛るしかないか。……いや、これは冗談だ。本当にやる度胸なんてない。半ば真剣にこんなことを思うなんて、どうかしてる。深い溜め息が出る。

自分のことは触れないでおこう。どつと疲れが増す気がする。今、

私が考えるべきはマステイマの隊員たちのことなのだし。

彼らのほとんどが若者だから、治療食は今のところいらぬ。必要なのは予防のための食事だ。ビタミン、カルシウム、鉄分等の摂取。それに栄養バランスやカロリー。他にも頭を使うことは色々。

風邪などの病気をして寝込んだ隊員に提供することも始めた。高栄養で消化に良い療養食。ワゴンに乗せて届けるデリバリーだ。

病人のための、このサービスも次第に内容が変わりつつある。

時として、幹部の食事まで玄関先に運ぶようになったのだ。ジャザナイア隊長とグレイはお得意様だ。幹部特権というものだろうか。料理の内容とか、色々要望も多いから大変だ。ボスほどではないが気も遣う。

まあ、それはさておき、今日舞い込んで来た依頼は療養食だ。

アビゲイルから名前を聞いて、やはりと思う。食堂に一週間以上も姿を現さなかった。

グレイが一人でコーヒー目当てにやってくるだけだ。

食堂の入り口に置いたアンケートボックスの常連でもあった、その人。食べたい物はの問いへの回答は、チーズケーキやらアップルパイやらバームクーヘンやら。全部お菓子だ。

紙に並ぶ小さな丸みを帯びた文字。体に似合わない筆跡だ。それがレイバンのものだと知ったときは驚いたけれど。

なんだか嬉しくなって、作るのも自ずと気合が入った。

食堂では、グレイを盾にしてお菓子に手を伸ばしていた。もっとも体格差からぜんぜん隠れてはいないのだが。

黙々と頬張り、そそくさと立ち去っていく。私と目が合うとばつが悪そうなので、あえて気付かないふりをした。

いないと寂しいものだ。つい姿を捜してしまう。

任務で城を離れているのだろうか。それとも、もしかして体の調子を崩しているのだろうか。本人には余計なお世話だと言われそうだが、ちょっと気になっていた。

悪い方の予感的中。

療養食ならば一押しのもがある。それはおじやだ。日本人である祖母が、風邪の時によく作ってくれたもの。リゾットとはまた違う、優しい味。栄養もあって消化にも良い、まさに病気の時には絶好の食べ物だ。

アビゲイルから教えてもらった部屋の扉の前で立ち止まり、心を落ち着かせる。預かった鍵で扉を開け、ワゴンを押して中に入る。

「こんにちは。マイケルです。入ります」

入り口付近で声を大きくして、私は通路を歩いていった。

私の部屋とは全く違う間取り、そして内装。ボスの部屋ほどではないが、全てが大きくて広がった。

リビングには、パワーラックにセットされたトレーニングベンチ、バーベルやダンベルを始めとした筋肉トレーニング用の機器があった。ランニング・マシーンやエアロバイクが置かれた一画。あの隆々とした筋肉はここで維持されていたのかと納得する。

そして大きなテレビにゆったりとしたソファ。掃除は行き届いていて塵一つない。自分でやっているか、委託しているのかは分からないが、綺麗好きと見える。

私は足を止めた。奥の扉が僅かに開いている。その隙間からこちらを覗いているものがいた。黒くて丸い瞳。じっと私を見つめている。

私はワゴンの横に腰を落とし、口笛を吹いて手招きをした。小さな犬だ。確かイングリッシュ・トイ・テリアという種類だ。姿かたちは小さなドーベルマンと言ったところ。茶色の体毛に足先と鼻先は黒。大きさは私の膝にも満たない。

その小さな子は私を怪しんでいるようだ。侵入者、つまりは敵かどうかを窺っているように見える。どうやら決断を下したようだ。口笛を吹き続ける私の前に出てくる。赤い首輪が可愛い。

犬は私に向かって猛然と吠え始めた。牙をむき出しにしたところなんて、とても小型犬とは思えない迫力だ。

犬好きとしては悲しくなってくる。こんな風に吠えられるなんて

今まで一度もなかったのに。

「マリア、どうした？」

奥の扉が大きく開き、声の主が現れた。レイバンだ。ランニングシャツにグレーのスウェットのズボンを身につけた彼は私を見つめるなり、不愉快そうな顔つきをした。

「なんでお前がここにいるのだ？」

「御飯を持ってきたんです」

私はワゴンを示した。

「……お前の世話になどならん」

声に咳が混じった。よく見ると顔色もまだ悪い。熱があるようで赤みがさしている。声にもいつもの覇気がない。

レイバンは犬を呼んだ。一目散に駆けて、彼の腕の中にかくまわれたその子は、じつと私を見つめていた。

腰を落としていた彼の足がもつれた。

私はすぐに飛び出した。倒れそうになる彼の腕を必死で引っ張る。「ベッドに戻ってください。ここで倒れられても、僕ではあなたを運べませんから」

意地よりも現実が勝つたのだろう。彼はおとなしく奥の部屋に戻り始めた。

ベッドに座つたのを確認してから、ワゴンを取りにリビングに引き返した。

#### 49・医食同源（後書き）

次回予告：レイバンに食事を届けることで、その心に触れることになったミシエル。彼もまた、思うところがあったようで……。

第50話「レイバンの思い」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

## 50・レイバンの思い

私が寝室に入ると、レイバンはベッドの上で体を起こして待っていた。

辛そうだ。咳も続いている。丸めた肩が体を一回り小さく見せた。布団の上ではさっきの犬が寝そべっている。

「言っておくが、お前を許したわけではないぞ」

「分かっています。でも、ボスの命令でもあるんですから、レイバン」

アビゲイルに聞いた通りに答える。そう言えば、ごねなくなるだろうと。案の定、彼の顔つきが変わった。

「ボスのお言葉か！」

こんな風に具合が悪くても、ボスという言葉に反応する彼には、なんだか切なさを感じる。これほど思ってくれる部下。ボスはもっと大事にすべきだと思う。

レイバンは流行りの風邪にやられていた。熱に顔を上気させ、咳き込む彼を見て、ボスは自分の部屋での静養を言い渡したのだ。そう言えば聞こえはいいが、実際のボスの言葉はこんなだったそうだ。「お前の風邪なんぞうつされちゃかなわねえ。引っ込んでろ」

あの人らしいといえば、らしいが。病人に対して、上司はもっと気遣いを見せるべきじゃないだろうか。

顔を輝かせる彼を見て罪悪感に苛まれる。ボスの命令というのは真っ赤な嘘。私に食事を用意するように言ったのはアビゲイルだ。

「おじや作ってきました。僕の祖母が風邪の時よく作ってくれたものなんです」

私はワゴンの鍋から皿にすくって入れる。

スプーンを添えて渡すと、彼は疑わしげに皿の中を見やる。

「なんか、〇〇みたいだな」

食事中には言っではいけないカタカナ二文字だ。カレーのときの



〇〇〇と同じくらいに。

私は顔を引きつらせた。

「日本の料理らしいですよ。まあ食べてみてください」

慌ててそう付け足す。まあ彼の言いようも分からないでもない。

私も初めて見た時思ったのだから。さすがに食べる前には言わなかったけれど。

レイバンは恐る恐るスプーンを口に運んだ。疑わしげに顔に皺を寄せていたのが、すぐに嘘のように穏やかになる。ゆっくりとではあるが、食べ続ける。用意した水を飲みながら、やがて完食した。

良かった。後は寝ていれば風邪なんてすぐに治るだろう。

今日のお菓子である蒸しプリンをベッドのサイドテーブルに置く。これも栄養価の高い消化の良いものだ。後から食べてくださいと言葉を添え、スプーンをつける。

「やはりボスは偉大だ」

彼は感動したように言う。ボスが食事を持って行くように言ったからと誤解しているとはいえ、大げさな言いようだ。

「あなたにとってボスは特別なんですね」

思わずそう言ってしまった。

今までを見てきた限り、ボスに入れ込む理由は分からないけれど。時に二度も蹴られたこともあるというのに、一体何が彼を駆り立てるのだろう。

レイバンは私を睨み付けた。余計なことを口にしてしまったと気付く。

だが、言ってしまったことをないことに戻せるわけもない。私は気まずい沈黙を何とかしようと、ベッドに上の犬に手を伸ばした。

かわいいワンちゃんですねと言おうとしたができなかった。この子は牙をむき出しにして唸っているではないか。触ったなら噛み付いてやるといわんばかりだ。

「よせ。マリアは自分しか懐いていない」

レイバンのごつい手には嬉しそうに頭を摺り寄せているのに。彼

の目じりは下がりっぱなしだ。名前を連呼して、唇を舐めるがままにさせている。

マリアなんて女性の名前をつけてるところからして、思い入れの深さを感じる。

それにしても、でっかい人に小さい犬って、なんだか微笑ましい絵だ。

レイバンは仰向けになった犬の腹をなでている。

「ボスは自分の命を救ってくださった」

彼はぽつりと言った。愛犬の存在が彼の頑なな心を溶かしてしまつたようだった。

そして、ゆつくりとした口調で話し出したのは過去のこと。かつては世界中を渡り歩いたのだと。傭兵として各戦地に赴いた末、たどり着いたのがマステイマ。金を目的にしか働けなかつた彼を変えたのがボスだった。

任務でしくじり、敵に後ろを取られ、窮地に陥つた彼を救つたのだ。

「それなのにあの方は「野郎がどうなるうと知つたこつちやねえ。敵の後ろにお前がいただけだ」と謙遜されて。こんな格好のいい人見たことがあるか？ 絶対に付いていこうと思つたんだ」

謙遜だろうか。あの人が謙遜なんて口にするだろうか。

だが、レイバンは信じている。信念とは尊いものだ。私だってボスに、マステイマに命を救われたのだ。レイバンの気持ちは理解できる。彼への親近感は強まった。

「僕も昔ボスに救われたんです」

私の言葉に彼は驚いたようだった。彼もまた思うところがあったらしい。

ベッドサイドのテーブルの引き出しから、なにやら取り出す。写真のようだった。彼は大事そうにそれを手の中で広げると、その中の一枚を私に差し出した。

「今日の飯の礼だ。受け取れ。自分は借りを作りたくない」

私は言葉を失った。

写真に写っているのはボスではないか。首を返して、こちらを見つめるバストショット。写真でも、もちろん目つきは変わらず悪い。アップのボスの視線に思わず目をそらしてしまう。

「レイバン、これ……」

私は言いよどむ。

「他の奴には内緒で頼む。もちろんボスにもだ」

確かにこんな物の存在をボスに知られたら大変だ。ただではすまないだろう。

手の感触に思わず裏返して見る。ラミネート加工されている。落としたり少々濡れたりしても大丈夫だ。

「こういうのもあるが目立つからな。見られたらまずいと思ってさつき隠した」

彼がベッドのヘッドボードの後ろ、壁の隙間から取り出したのは、額に入った大判のポスターだ。まるでギャング映画の俳優のようだ。翻っている黒いロングコート。丸い月と建物の黒い影を背景にボスがこちらに銃を向けている。その足元には銀色の毛並みの狼。合戦まで使っているようだ。

これだけを見たらファンでもできそうだ。かっこいい感じに仕上がっている。

もらう写真もそっこのほうが良かったなって。……違う。そういう問題ではない。

「レイバン、困ります」

「何だ、二枚はやらんぞ」

私が他の写真まで欲しがっていると勘違いしている。手の写真を庇うようにして。彼は大真面目だ。どうやっても付き返せそうになり。

「……ありがとうございます」

とりあえず礼を言っ、白衣のポケットにしまった。

そして、逃げ出すようにして部屋を後にする。なんだか秘密を持

ったようで、気分があまり良くない。それにポケットの中の写真。どうしよう。

ワゴンを押して廊下を歩いていると、通りかかったアビゲイルと目が合った。

「マイケル、レイバンの様子はどうだった？」

「だ……大丈夫でしたよ」

私の言葉に形の良い眉をひそめる。そして、こちらに寄って来た。詰まった言葉に加え、ポケットの上から手を押し当てていたのがまぶしかったらしい。

「もしかして、アレをレイバンに貰ったとか？」

嘘が顔に出してしまうタイプであることは分かっているけど、治せない。それに彼女はその存在を知っているようだ。私の手を退け、写真を取り出す。

「やっぱり。またやったわね」

写真を見ると、呆れたように言った。

「前にボスに隠し撮りを見つけて怒られたのに。懲りないわね」  
怒られるのは当然だろう。しかし、またとは。それであんな風に内緒だと私に言ったわけか。でも、どうしよう。写真はここにある。私はアビゲイルにどうすればいいか尋ねた。

「証拠隠滅。燃やしちゃうのが一番いいんじゃない？」

写真を返しながら彼女は言う。けれど、人の写った写真を燃やすなんて、なんだか気が進まない。

それでなくとも、あのボスの写真だし。火をつけたりしたら何か悪いことが起こるんじゃないだろうか。祟りとか。

一旦自分の部屋に戻った私は、仕方なく封筒を取り出して、その中に写真を入れた。

これでとりあえずは見えることはない。解決したわけではないが、なんだかほっとした。

それから、私は仕事場である厨房に戻った。

しばらくの間、気になっていたが、何日か経つと忙しさに思い出

すことも多くはなくなった。元気になったレイバンが食堂に現れた時くらいだ。

彼は相変わらずグレイにくっついてやってくる。私への態度も変わらなかった。

変わったのは私の気持ちかもしれない。私のボスへの反発心を憎むレイバンの思いが分かったから。彼にはそれだけの理由があることを知ったから。

私は心から、彼の思いがボスに届く日が来ればいいのにと願わずにはいらなかった。

## 50・レイバンの思い（後書き）

次回予告：コックとボスの寝かしつけ役の両立は難しく、疲労をつ  
のらせたミシエルはついに……。

第51話「過労の末に」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチ  
ッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

## 51・過労の末に

疲れというものはある一線を越えてしまうと、自分では認識できなくなるもののようにだ。

感覚は蛇口の下に置いた鍋に似ている。いっぱい溜まった鍋。注ぎ込む水に目をつぶれば、どれほどの量がこぼれているか分からないのだから。

これはもうランニング・ハイならぬワーキング・ハイというべきか。手一杯なのに、新たな仕事を見つけてきてやろうとするなんて自分イジメもいいところだ。

アビゲイルとの話し合いの時間を取り、食事の栄養に気を配る。療養中の者ばかりか、幹部の食事を提供しようとする。

少なくとも客観的な視点を欠いていたことは確かだ。冷静な判断ができなくなっていたのだらう。

疲れすぎると誰もがこうなってしまうのか。それは分からないが私の場合はそうだった。

グレイは何度か私の顔を覗きこんでいた。

「何言ってるのか分かんねー、熱でもあんのか」と問われたこともあった。

レイバンからきたのはお菓子の苦情。シュークリームについてだった。

なんと私が皿に並べていたのは、カスタードクリームなしのただのシュー。最初に口にしたレイバンの表情は一生忘れられないだらう。目を白黒させてシューの中を覗き込んでいた。

他の隊員たちも、時として料理の味付けがいつもと違うと口にするようになった。

やったはずのことが、やったつもりになっていく。記憶の欠落と混乱。恐ろしいのは、それがついにボスの料理に飛び火したことだ。ボスの皿から出てきたのは異様な物体。具沢山のミネストローネ

のスプーンからだ。

無言で目の前に突き出されたスプーン。随分大きいのにんじんが乗っているな、切り方にも文句があるんだろうと思っていた。

だが、よく見るとそれは香辛料のプラスチックの赤い外蓋だった。どこで入ってしまったのか記憶がなかった。気付いたらなくなっていて、床にでも落ちてどこかの隙間に入り込んでしまったものと思っ込んでいた。

ボスからは大目玉を食らったのは言うまでもない。これは仕方ないことだ。

気付かずに、喉に引っかけたりしなくて良かった。今回ばかりは、もつともな彼の怒りを私は黙って受け止めた。

さすがに疲れているとは自分でも気付いていた。時間があれば部屋に戻って休んでいたのだが、それさえ億劫になっていた。食堂で椅子を並べてその上で眠ったり、持参したクッションに顔をうずめて座ったまま寝たりしていた。

隊員たちは心配してくれたが、私の都合で解決できる問題でもない。それに、失敗は時折あるが、何とかやっていけているのだ。これからもやれるはずだ。そう思っていた。

だが、ある時。朝から酷い頭痛に悩まされていた日、その信念も崩れ去った。

はつきりと覚えているのは、昼食の準備をしていたということだ。食べやすい大きさに切ったバゲットとホワイトソースを使った野菜たっぷりのシチュー。上々の出来上がりだ。匂いにつられたように食堂に隊員たちが訪れる。

さあ、あとは注げばいいだけ。片手で皿を取る。

すると皿が手から滑り落ちていった。それも真下でなく斜めに。地球の重力が変わってしまったのか、或いはなにか超自然的な力が働いたのか。

何のことはない。私もまた倒れようとしていたに過ぎなかった。反射的に伸ばした手に積まれた皿が触れる。



床で次々と砕けていく音が遠くに聞こえた。それなのに異変に気付いて駆けつけてくる人たちの声ははつきりと聞き取れた。

視界が萎んでブラックアウトした状態だ。体が重くて指一本動かせない。

「大丈夫か、マイケル？」

「おい誰か、早くアビーねえ姐さんねえを呼んできてくれ」

皆が騒いでいる。

「触るなよ、お前ら。脳の方だったら動かすとやべーからな」

この声はグレイだ。コーヒーを目当てに来ていたのだろう。

大丈夫だと言いたいが、声を出すこともできない。本当に脳の病気でこんなことになってしまったのだろうか。

やがてアビゲイルが駆けつけたようだ。

「感染症の危険性があるわ。皆部屋から出て頂戴。処置をするから」  
彼女は今までに聞いたこともない緊張感のある声で言っている。

どよめきが起き、皆の足音が遠ざかっていった。

脳の疾患ではなくて感染症？ それも人を近づけさせないということは、バイオハザード級？ 空気感染でもする新種の細菌やウイルスとかだろうか。

話が大きくなってきた。周り人たちも危ういということなのだろうか。

彼女はがさごと調理器具の置き場所辺りを探っている。

そして、彼女の手が私の白衣のボタンを外しだした。Ｔシャツを体から浮かすと、なにやら高い音が二、三度して胸元が涼しくなった。

「ミシエル、悪いけどこれ取らせてもらうわね。血流の妨げになるから」

胸に巻いているサポーターのことだ。

彼女は伸縮包帯のようなそれを体から離しては、さっき聞いたのと同じような高い音を立てた。多分、これはハサミの音だ。それも調理用のハサミだろう。

こんなものを切っていたら、切れ味が悪くなってしまう。こんなときだというのに心配をしてしまう。

全て切り落としたようだ。

調理台にハサミを置く音と重なって聞こえてきたのは、扉の開く音だった。

「入っては駄目だつてさつきも……」

アビゲイルは苛立った声で言った。だが、それ以上声は続かなかった。

扉の閉まる音。低い足音が近付いてくる。

「ボ……」

彼女は何か言いかけたが、それから先は聞こえなかった。楽になった呼吸。胸にすっと入ってきた空気を吸い込むと、体の力が一気に抜けた。そして、次第に意識もまた暗闇の中に沈んでいった。

夢見ていたのは幼い頃。

父と母、祖母に私と四人で囲んだ夕食後の和やかな語らい。

ソファで眠ってしまった私をベッドまで抱いて運んでくれた父。

心地よい浮遊感と揺れ。その腕の中で感じた幸福。

私は無意識に父の胸に顔を摺り寄せる。

嗅ぎ覚えのある良い香り。だが、それは思い出の父のものとは違っていた。

## 51・過労の末に（後書き）

次回予告：厨房で倒れたミシエルは医務室のベッドに運ばれた。そこで、彼女は自らの胸の内を語るのだが……。

第52話「ここにいる理由（前編）」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

## 52. ここにいる理由（前編）

私は目を開けた。

ぼんやりとした視界に入ってきたのは見慣れない白い天井。細長い蛍光灯の明かり。そして、鼻をつく消毒薬の匂い。目をしばたく私にアビゲイルが声をかけた。

「良かった。気付いたのね、ミシエル」

「アビゲイル、私……」

辺りを見回して気付く。ここは医務室だ。私が横たわっているのは患者用のベッド。

「過労よ。働きすぎ。無理をしたのがたたったのね」

白衣を着た彼女が顔を覗きこむ。

「もっと早く手を打ってあげればよかったんだわ」

「いいえ。私が自分の体力を過信していたから。こんなことになるなんて思わなかったんです」

私は溜め息をついた。

脳の疾患でも感染症でもなかったことにホッとすると共に、アビゲイルの手を煩わせていることに申し訳ないという気持ちがかみ上げる。そうでなくとも、彼女は他の仕事を抱えているのに。

アビゲイルはベッドの脇に置かれた丸椅子に腰掛けた。

「ねえミシエル。あなた、本社に行くのはどうかしら？ 少しは楽な仕事になるわ。本社のほうは了解済みだし、ボスにも話つけたわ」

「そんなの駄目です！」

私は飛び起きた。布団がはぐれて自分のあられもない格好に愕然とする。

ボタンを閉じていない白衣。真っ二つに切り裂かれたTシャツ。

その下には何も身に着けていない。私は慌てて布団をかき寄せる。

「皆の食事はどうなるんです。また、あんなインスタントばかりに

なっっちゃうんでしょう。ボスだって元の不健康な食事に戻ってしま  
うかもしれないし」

顔を赤らめながらも、必死で言いつのる私の頭にアビゲイルは優  
しく手を置いた。

彼女は黙って私の髪をなでている。

「もしかして、もう他のコックを……」

不安に涙がこみ上げてくる。

「いいえ。マステイマのコックが務まるのはあなただけよ、ミシエ  
ル」

彼女はそう言うと手を下して、柔らかく笑った。私は茫然と彼女  
を見る。

「変なことを言っでごめんね。あなたの気持ちを確かめたかったの  
でも、何故そこまで私たちのことを気にするの。あなたの後ろには  
イタリアのマフィア、ブルーノ・マロツチーニがいるでしょう。で  
も、あなたが関係者だとは思えない。どうして、そんな力を借りて  
までマステイマに？」

私は俯いた。隠す理由なんてないだろう。私の正体を知っている  
この人の前では。

顔を上げ、彼女の深い緑色の瞳を覗き込む。この人なら大丈夫だ。  
全てを語ってもきつと分かってくれる。そう確信して口を開いた。

「私、小さい頃、父の料理店の手伝いに出ていて。常連客だったブ  
ルーノさんを狙ったマフィアの抗争に巻き込まれたんです。そこへ  
ボス率いるマステイマが現れて。私は助かったのだけど……父を亡  
くしました」

「あなた、まさかそれを恨んでうちのボスを狙って？」

アビゲイルの早合点に驚いて、思わず短い笑い声を上げてしまっ  
た。「違いますよ。確かに父は助からなかったけれど、マステイマが来  
なければ私の命もなかったんです。父だってその場で死んでいたで  
しょう。病院での三日。短かったけれど、貴重な時間をもらえたん  
です」

少しの間だが意識のあった父との会話。交わした話は十年たった今になっても鮮やかに思い出せる。父は最後まで私に怪我がなくてよかったと喜んでいた。

「父を狙った男を止めてくれたのがボスで。他の人も子供の私を気にかけてくれたりして」

「ちよつと待つて、それつて何年前の話なの？」

アビゲイルが慌てたように話を遮る。

「十年前です」

「ちよつとあの人がボスになった頃、先代から引き継いだくらいだわ。年若きボスの任務ね」

それまで思いもしない言葉だった。あの人もボスではない頃があるのだ。少年時代だつて。ちよつと想像ができないけれど。

十年前のあの夜、ロングコートを着たシルエツトを思い出す。片手の黒い拳銃<sup>リボルバー</sup>。顔もよくは見なかつたし、声色も定かではないが、言葉はもちろんのこと、迫力は鮮明だ。十年前だけれど、確かにあれは今のボスに通じるものがあつた。

だからこそ、私はここにいるのだ。

「私、恩返しがしくて。私の得意なものは料理だつたから、それを磨けば何とかなるかもしれないつて、あちこちで弟子となつて学びました。そして、ブルーノさんに無理を言つてディケンス本社を紹介してもらつたんです」

「なるほど、そういうことだつたのね。でも、入つてみて驚いたんじゃない？ あんなボスで」

確かに驚いた。あんな人がいるなんて世界は広いものだつと。

「言葉遣いは荒いし目つきは悪い、我ままで乱暴でどうしようもない人ですよね」

私はくすりと笑つた。

「でも悪い人じゃない。繊細なところもあるし」

「ボスが繊細？」

「はい。料理に対するこだわりから見てもそうだと思います。それ

に、何よりもマスティマのボスとして誇りを持っています。きっと私のまだ知らない良い所も沢山あるはずです。だって、ただの乱暴者なら誰も付いては行きませんよ」

私の言葉が終わるや否やアビゲイルが背後を振り返った。同時に小さな物音が聞こえる。ついたてに遮られて何も見えないが。

顔を戻した彼女は、にっこりと笑っていた。

「あなたがそう思ってくれるなんて嬉しいわ。ボスだってきつとそう思ってる」

椅子から立って私の傍に寄った。ベッドの端に腰を下ろす。

「ねえミシエル。さっきまでボスがそこにいたのよ」

ついたての方を差し示す。私はすぐには言葉の意味が理解できず、ぽかんと彼女を見つめた。

「あなたが起きたのとボスが去ろうとしたのが一緒だったから、出て行けなくなっちゃったのね。ついでに言っとくけど、あなたを厨房からここに運んでくれたのも、あの人よ」

とんでもないことを言い出す。何かの冗談だろうかと顔に目を凝らしても、何の変化もない。ボスが私を運んだなんて。どうしてあの人があるんなことを。

驚く私を前に、彼女は経緯を話し始めた。

## 52. ここにいる理由（前編）（後書き）

次回予告：倒れた自分を運んだのはボス？ 思いもかけないことに驚くミシエル。そして彼女が休む医務室にやってきたのは……。

第53話「ここにいる理由（後編）」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）



### 53. ここにいる理由（後編）

「あなたが女であることを隠すために隔離したまでは良かったけど、どうやって医務室まで運ぶかが問題だったわ。ジャズを呼んで全て話すしかないと思ってた。その時、ボスが部屋に入ってきたの。騒ぎを聞きつけたのね。私はその時ひらめいたわ。あなたを安全に運ぶにはそれしかないって」

「なんだか嫌な予感がするが、アビゲイルの話は途中だ。私は黙って続きを待った。」

「ボスに運んでくれるよう頼んだけど、もちろん却下されたわ。仕方ないから少し脅しちゃった」

「茶目っ気のある笑顔だが、相手が相手だけにこちらは笑えない。」「このままなら女であることがばれるわよ。そうなればマステイマにはいられない。あなたは美味しい食事も快適な睡眠も一度に失うことになるわ。今さら女も入れるなんて変えても無駄よ。きつと皆はこの子のためにボスの気が変わったんだと思うだけだわって」

「恐るべしアビゲイル。逃げ場なしの八方塞ぎだ。ボスもこれでは観念するしかなかったらろう。」

「ボスが抱き上げて運んでくれたのよ。コートを脱いであなたを包んでね。食堂の外には野次馬がわんさといたけど、ボスの一睨みで沈黙して後退りよ」

「うわあ。皆にどうやって顔を合わせたらいんだらう。特にレイバンには。目にしたか噂を聞いたかで多少違ってくるだらうが、決して良い印象ではないだらう。」

「それにボスにも。あの人にそんなことをさせてしまうなんて。気を失っていたとはいえ、恥ずかしくなってくる。」

「もう赤くなっているいいやら青くなっているいいやら分からない感じだ。」

「あなたはもつと強気で大丈夫だと思ふのよ。食事と安眠。伝家の宝刀を二振りも持っているようなものだもの。ボスだってやすやす

と首にはできないわ。ていうか、首になんてさせないわ」

アビゲイルは立ち上がった。「来たわね」と呟いて、ついたての後ろに回る。その頃には私も気付いていた。扉の向こうの気配に。

彼女が扉を開けると、人のざわめきが耳に入った。

「あなた達、病人がいるのよ。こんなに詰めかけてどうするの」

アビゲイルの声だ。

「でも、姐さんねえ」

「マイケルの容態は……」

「あいつが死ぬなんてこと、ないですよね」

口々の声。

「お前らだけ」

これは 그레이 の声だ。皆の声がぴたりとやんだ。

「アビー、ミックがいねーと美味しいコーヒーが飲めねーんだよ」

「自分の楽しみも減る」

信じられないことに続くのはレイバンの声だ。

私はシートがしわくちやになるほど握り締めた。皆が私を必要としてくれているのが何より嬉しかった。そして、それに答えられる状態ではない自分が情けなかった。

「少しの間、休めば良くなるから。さあさあ仕事に戻って。静かにしてないと、あの子元気になれないわよ」

アビゲイルの言葉が効いたようだ。遠ざかる足音が聞こえる。その音にレイバンの声が混じった。

「これをあいつに渡してくれ。元気を出せとな」

何かをアビゲイルに預けているようだ。

「あらレイバン、あなた、あの子のことを嫌いなんじゃないの？」

「あんな美味しい菓子作ってくれるの、ミックしかいねーもんな」  
「グレイが茶化している。」

「そついうことではない」

慌てたようなレイバンの咳払い。

「ボスの意にすぐわぬ者は自分の敵だ。だが、今回のことはそうではない。あいつにとつての厨房は我々の戦場と同じだろう。そこで倒れた同志を放っておくなど、できるわけがない」

ボスに救われたという同じ境遇が彼にそんなことを言わせたのだろうか。それにしても、同志つまりは仲間として認めてくれたことに感動すら覚える。

やがて皆去っていった。

扉を閉めてアビゲイルが戻ってくる。彼女の手には本が握られていた。差し出された物を良く見ると『最新式筋肉トレーニング』というタイトルだった。体力をつけて倒れるなんてことがないように、との意味だろうか。

何か挟まっているのに気付き、抜き出す。茶封筒だ。何だか嫌な予感がする。

中を覗くとやっぱりだ。私は震える手で封筒の蓋を閉めた。

「またアレを貰ったのね」

アビゲイルが呆れたように言う。

「でも、これを見たらきつと元気になるって。あの人なりに考えてくれたんだと思います」

封筒入りのボスの写真。しかも今度はあのポスターになっていたものの写真版だ。

これ自体は始末に困る代物だが、彼の心遣いが嬉しかった。

「五日間は仕事を休んでもらうわよ。ボスにも言っているから。夜のお勤めもなし。私たちの部屋に来てもらうわ。無理しないように監視するからね」

彼女は腕を組んで見下ろす。とても、逃げられる様子ではない。

皆の食事が気になるが、元気を取り戻さなければ、美味しい料理も作れないだろう。

私は彼女の申し出に従った。幸いなことにオスカーはデイケンス支社をめぐる一週間の出張に出ている最中だという。私のいる四日間には帰ってこないらしい。一日くらいなら、女であることもごまか

せる。

そして、何より私の心を躍らせたのは、プリシラの世話を手伝ってねというアビゲイルの言葉だった。あの可愛い子と一緒に過ごせるなんて、大歓迎だ。

私はつきつきとした気分では休暇に臨んだ。

### 53. ここにいる理由（後編）（後書き）

次回予告：アビゲイル一家の部屋で静養するミシエル。けれど、リラックスというのなかなか難しく……。

第54話「シークレットなサービス」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

## 54・シークレットなサービス

アビゲイル一家のうちには、私の仕事場である厨房と同じ二階で、医務室のすぐ傍にあった。

家族仕様で私の部屋よりずっと広い。中庭に面したりリビングとダイニングの窓は、大きくて日当たりもいい。

部屋数もあって、私にも一室あててくれた。こぢんまりとしたベツドルームで、とても落ち着く。

「オスカーのいない間はコックのマイケルじゃなくて、ミシエルとして過ごすのよ。余計なことは考える必要はないんだから。羽を伸ばして頂戴。食事も私が用意するから、手伝いも無しよ。あなたはお客様なんだから」

アビゲイルの気遣いをありがたく思う。

「あ、そうそう。御飯は少し遅めでもいい？」

その言葉にも不満はなかった。

コックの仕事をしているときも皆の分が終わってからだった。何の問題もないことだ。

「部屋から出るときには少しだけ気をつけてね。うちは出入りが多いし」

彼女の言葉に頷く。自分の部屋で休んでいたって、注意しなければいけないのは一緒だ。

私は言葉に甘えて、ミシエルとして過ごすことにした。

胸に巻くサポーターからの開放。一言で言っただけ。声のトーンにも気を遣わなくていいし。

自分らしく過ごすって、こういうことを言うんだらうか。自然体は気持ちばかりでなく体の力も抜ける。医師であるアビゲイルが勧めたわけを知る。

周りにいるのは本当の私を知るアビゲイルとプリシラだけ。

プリシラにとっては白衣で胸もなくして声も低めなマイケルも、今の私も同じのようだ。まったく気にしている様子がない。大人と違って先入観がないせいだろうか。子供のキャパシティーには驚かされる。

彼女の作るパズルに付き合っていると、気が付いたら夕食の時間。食卓を三人で囲む。

美味しい。もちろん、アビゲイルの料理の腕もある。それ以上に誰かと食事を共にすることが私の心を満たした。

あつという間にその日は暮れていき、夜は明けて朝の八時ごろ。身支度を済ませた私は部屋を出る。コottonのシャツにジーンズのラフな格好だ。

廊下を歩いていると、突き当たりのキッチンにアビゲイルの姿が見えた。エプロンをしている。朝食の準備中のようだ。

こちらに気付いた彼女は、一瞬顔を固まらせた。下げた片方の掌をこちらに向けて、来ては駄目だと示す。立ち止まると、知った声が聞こえてきた。

「いただき！」

この声、ジャザナイア隊長だ。

キッチンに飛び込んできた彼はフライパンの上のベーコンに手を伸ばした。摘み上げて、そのまま口へ放る。

熱かったようだ。小さく悲鳴を上げて掌に吐き出した。

「ちよつと。行儀が悪いわよ」

「ジャズおじちゃん、汚ーい」

プリシラの声。姉どころか姪っ子までに突っ込まれている。すると彼は息を吹きかけて冷ました後、再び口へ放り込んだ。

「汚くねえぞ」

口をもぐもぐさせながら答える。アビゲイルは無言で布巾を彼に手渡した。指がベーコンの油でぎとぎとになっていたようだ。彼はぬぐった手で決まり悪そうに頭を掻いた。

「それよりマイケルは？ 一緒に食うんじゃねえのか」

「病み上がりには気詰まりよ。あなた達と一緒にじゃ。別に食べてもらうわ」

アビゲイルは自然な様子で廊下に通じる扉を閉めた。シャツ姿の隊長の背中が見えなくなった。それでも私は扉を見つめたまま動けずにいた。

あなた達？ さっきアビゲイルは確かにそう言ったけど。それって……。

突然、何かが割れる音がした。

私の左側。壁を隔てた向こう。ダイニングからだ。続いて床に響く重い音。思わず壁に耳を押し当ててみる。

「レイバン、何やってるの」

アビゲイルが呆れた調子で言っている。

「こんな所に植木があるとは……」

焦った声のレイバンだ。どうも植木鉢でもひっくり返したようだ。

「そんな大きな体で、窓から入ろうなんて無理があんだよ」

この声はグレイだ。隊長にレイバンにグレイ。次々の登場に驚く。壁を背にして落ちつかない胸を押さえる。

「グレイ、いつの間に。どこから入ったのだ？」

「オレはちゃんと扉からだぜ。普通が一番目立たねーんだよ」

ボスを除いた幹部勢ぞろい。朝から慌しいことこの上無しだ。

「ちゃっちゃんと食べちゃって。今日の後片付けの当番は？」

アビゲイルが急かす。

「自分だ」

「くまちゃん、お皿洗えるの？」

プリシラの声だ。レイバンに尋ねているようだ。これは大きな出世というべきか。お化けから熊への華麗なる転身だろうか。

「自分は熊ではないぞ。レイバンだ」

「怖ええ顔近づけんって。心の傷になったらどうすんだ」

ジャズ隊長がプリシラをかばっているようだ。可愛い姪っ子とはいえ、あんまりな言い様だ。



「くまちゃん……」

プリシラの萎んだ声。

「そーだな、プリ。そっくりだ」

グレイが声を殺して笑っている。プリシラが何かを見せているようだ。

「何を笑っているのだ、グレイ」

「確かに頭の毛が逆立ってるところとか。いいな、レイバン。グリズリーに似てるなんて」

ジャズ隊長の声は本当に羨ましそうだ。グリズリーってアラスカとかに生息する巨大な灰色熊のことだ。

グレイが我慢できずに噴き出した。

「もう。片付かないでしょ。早く食べて頂戴」

とうとうアビゲイルの一喝が入る。

ようやく皆が席に着いて食事が始まったようだ。壁の向こうが静かになった。

「びっくりしたでしょ」

皆が去った後のこと。私の朝食を用意しながら、アビゲイルは困ったような微笑みを浮かべた。

「ちよつとだけ。皆ここで御飯食べていたんですね」

ずっと気になっていた疑問が一つ解決。しかし、こういうことだったとは。

幹部達が食事目当てで食堂に姿を現すことはなかった。グレイがコーヒーを飲みに来るのとレイバンが菓子目当てに来るのを別にして。

食事のデリバリーの注文も毎日のことではない。以前のボスのように、外に出かけているんだらうとぼんやり思っていた。

「始めはジャズだけだったんだけど、後輩だつてグレイを連れてくるようになった。そのうち、グレイにくっついてレイバンまで来るようになったのよ。まあ、一人、二人増えようと手間は同じだけど

ね

「大変ですね」

「大丈夫よ。オスカーがいるときは彼が作ってくれるし」

アビゲイルの旦那さん、技術情報部長のオスカー。確かにあの人ならやってくれそうだ。物腰が柔らかくて優しい感じだし。笑顔でキッチンに立っている姿が想像できる。エプロンも似合いそうだ。それはさておき。

私はダイニングの窓に目をやった。窓辺のポトスが収まり悪く傾いたまま植わっている。鉢の周りを新聞紙で囲まれて。あれがきつとレイバンがひっくり返したものだ。

「……でも、窓から入って来るなんて」

「レイバンのこと？ あれはね、ある意味仕方ないのよ。ずっと前から他には秘密だし。いくらなんでも隊員全員の面倒までは見られないから」

コック不在の時期が長かったせいだろう。幹部の食事はアビゲイルが用意していたという。確かに彼女やオスカーだけで、隊全員の食事の面倒を見るなんて無理がある。

だからといっても、レイバンの行動は腑に落ちない。

グレイの言葉を思い出す。あんな大きい人が窓から入ろうとするなんてどう考えても目立ちすぎじゃないだろうか。屋上から降りてくるにしても一階から登るしても。

外から見た、壁に貼り付いた絵を思い描いてしまう。プリシラの表現を借りるなら、蜂蜜大好き、木登り熊さんのイメージだ。

テーブルの隅に置かれた絵本を見つけて、笑いがもれてしまう。そこには「蜂蜜がない」と両手を挙げて駄々をこねている、可愛らしい灰色熊の絵が描いてあった。

「どうぞ召し上がれ」

声と同じくして、私の前に置かれた皿。

まだ湯気の立つベーコンエッグ。焼き目のついたトースト。みずみずしいサラダに絞りとてのオレンジジュース。美味しそうだ。

フオークを手にとつて、はたと思いつく。

「アビゲイル、ボスは……」

「気になる？」

アビゲイルは華やかな笑顔で応えた。

「あの人は放つておいて大丈夫よ。あとたった四日間よ。なんとかするでしょ。それに、あなたのありがたみを知ってもらうには良い機会だわ」

家に迎えたのはそのためもあると彼女は付け足した。ここにいれば、ボスも無理は言わないはずだと。

アビゲイルが隊の皆から姐さんと呼ばれている所が分かった。腕を組んだ彼女の笑みが不敵なものに見えてくる。姉御の笑みだ。

「だいたい、ご飯だつて誘つてるのに断つてるのよ」

ああ、それつて想像できる。多分こんな感じで言つたんだろう。

「あいつらと飯まで一緒に食べるかつて、ですか？」

「そう。分かつてるじゃない。それにプリシラもいるから」

落ち着かないということか。それは少しだけ分かる気がする。

「ほら、冷めないうちに」

アビゲイルの言葉ではつとにする。作りたての美味さを逃す手はない。ありがたいことに今私は食べる専門なのだし。

私は急いで、だが、しっかりと美味しい朝食を味わった。

## 54・シークレットなサービス(後書き)

次回予告：休養を終えて明日から仕事復帰。ミシエルを憂鬱にする、ボスへの挨拶。思い立って、彼の部屋へ向ったのはいいものの……。  
第55話「ボスとミシエル(前編)」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします (ランキングの表示はPCのみです)

## 55・ボスとミシエル（前編）

五日間の休暇はあっという間だった。

緊張があるのは、ジャズ隊長やグレイ、レイバンが食事に訪れるときだけ。部屋に隠れて過ごした。

嬉しかったのはプリシラが懐いてくれたことだ。遊んであげているというよりは、彼女に遊んでもらっているような気分だった。

アビゲイルの料理はどれも外れがなかった。優しい味の家庭料理。女三人、そして、最終日にはオスカーを含めて四人囲んだ食卓。

賑やかでとても楽しい気分でも過ごせた。家族っていいなと思う。しばらく帰っていないイタリアの家を懐かしく思った。

そして、自分の部屋に戻ってきたその日の夜、最初に耳にしたのは、廊下を通り過ぎる隊員たちのぼやきだった。どうもボスのご機嫌が斜めで、犠牲になっている者たちがいるのだとか。

どうしようもない人だ。そう思いながら扉を閉めた。

とは言え、私を助けてくれた人なのだ。抱き上げて医務室まで連れて行ってくれた。想像してしまい、赤面する。

熱くなった頬。片手で触れて、はっと我に返った。なにやってるんだらう。ローティーンじゃあるまいし。

胸元を握り締める。ここには私の支えとなってくれたものがある。ブルーノさんを始め、私を守ってくれた存在は沢山いるが、その中でも最も……。

心が落ち着いてくる。体の熱は引いていき、私は深く息を吸い込んだ。

明日の朝、ボスに会ったら、最初に五日間厨房を空けてしまったお詫びと、運んでくれたお礼を言わなければならない。

そして、なにより十年前のことも。

本当はもっと早く話すべきだったとは思っ。

例えば、初めて城に来たときとか。でも、他に人もいる中、廊下

でなんてあんまりだし。翌日の食事を用意したときもボスをボスと認識できずに大失敗、それどころじゃなかった。

チャンスは毎食時あったけど、酷い目に合わされたりして、タイミングを逃がしてきた。

思い立ったが吉日。今より他に好機なし。ちょうどいい機会なんだろう。

医務室であの人が私の話を聞いていたのだとしたら、なおさらだ。伝えないわけにはいかない。

……ボスにありがとうって言葉を？

こみ上げてくるのは気恥ずかしさ。それと共になんとか憂鬱になつてくる。こんな風では落ち着けない。きつと、このままではるくに眠れもしないだろう。

私は意を決した。思い立ったら即実行。悩んでもやもやしている時間はもつたない。

すぐさま支度を整える。今からの時間、コックがボスと会うのは不自然だ。しかも今日までは休暇中だし。気は乗らないが、この格好をするしかない。アビゲイルから借りている化粧道具をフル活用。彼女が貸してくれるワンピースは、時としてぎよつとするほど丈が短い。今回のもだと溜め息ながらに身に着ける。お願いしてレギンスを用意してもらって良かった。これがあるとないとでは、大きな違いだ。

鬘もつけて、ようやく変身完了。廊下に誰もいないことを確認して、部屋から出る。そして、着いた先。扉を目の前にして息を整え、大きい音でノックする。

「誰だ？」

声を聞いて身が引き締まる。五日しか経っていないのに懐かしくさえ思える、扉越しのボスの低く威圧的な声。

「私です。ミシエルです」

少し間があつて返ってきたのは「入れ」という言葉。

私は扉を開けて、ボスの部屋に入ってしまった。間接照明だけの薄

暗いが落ち着く部屋。壁から明るい光が漏れていた。部屋を横切るボスの手にはライフルが握られている。私はびくりと立ち止まった。襟の開いたシャツに用をなさなくらいに緩められた黒いネクタイ。上着を着ておらず、両脇に二挺の拳銃を納めた黒い革製のショルダーホルスターが見えている。今日もまた手袋はつけたままだ。彼はこちらを一瞥もせず、真っ直ぐに光の元へ入っていく。そこは本棚ではないか。扉のようにその一部が開いている。その向こうには白い照明が照らし出す小部屋。隠し部屋だ。

覗くと、ボスが棚の台座にライフルを納めているところだった。そのほかにも、さまざまな種類の銃器が並んでいる。何より驚いたのは、一番奥には特注品と見えるワインセラーがあったことだ。それにしても大きい。透明なガラスの向こうに見えるのは何本だろう。高級なワインが収納されていると見て間違いない。

ボスの宝の部屋ということだろうか。それを隠すための本棚だったのかと納得する。書物とボス、合わない組み合わせだとは思っていたけれど。

本棚を元の位置に戻すと、彼は私の前を通り過ぎ、テーブルに広げた道具を片付け始めた。クロスや薬品の瓶、スプレー缶、ブラシが付いた細い棒など見慣れないものばかりだ。

工具箱のようなものの中にしまい、それを扉つきの棚の中に入れて閉める。

ようやくボスは私を見た。

「何の用だ？」

改めて尋ねられると言葉に詰まる。私は視線を泳がせ、棚に納められた本『世界の料理とその起源』を求めた。あの辺りだ。この距離ではタイトルも読み取れなかったが。

「今日は必要ねえ。これからは週に二日でいい。日にちはまた前もつて言う」

ボスの言葉に啞然として彼を見やる。

「それじゃあ不服か？」

問いかげに首を横に振る。とんでもない。

それなら無理にはならない。きつともう倒れるなんてことはないだろう。だけど、ボスが妥協したなんて信じられなかった。

「でも、それだとボスが……」

眠れなくなるんじゃないだろうか。私がいたって、一度も起きずに済むことは滅多にないのに。

「お前はコックだろうが。勤めを果たしてあいつを黙らせる」  
苛立たし気に言う。

あいつって誰のことだろう。アビゲイルのことだろうか。続く言葉を待ったが、彼はそれ以上何も言わなかった。

ガラス扉の棚に近付くと琥珀色の液体の入った瓶とグラスを取り出す。グラスの形からして瓶の中身はブランデーだ。

私に背を向けてソファに座り、グラスに注ぐ。話をする態度ではない。こうなっては彼の背中しか見えないのだから。

「用がないならさっさと帰れ」

吐き捨てられる言葉に、ようやく思い出す。ここに来た理由。それを果たさずして帰ることなんてできない。私は彼の横まで近づいた。

顔を上げることなく、テーブルに置かれた木箱の中から何やら取り出している。先端をカットして口に咥え、マッチで火をつける。

葉巻だ。

独特の強い香りが漂う。煙草にしる葉巻にしる、こういう匂いはあまり好きじゃない。それでもしばらくの間我慢するしかない。

「ボス、医務室での話なんです。十年前の……」

「そんな昔のことは覚えてねえな」

言いかけた傍から割り込む。葉巻を口にしたまま、ソファに深く座りなおす。私なんていてもいなくても同じだ。

「……そうですよ」

私は汗ばんできた掌をぎゅっと握り締めながら、呟いた。

十年前の出来事。私には大きな転機だった。良い意味でも悪い意



味でも、それまでの人生が一変したのだ。

だから、ボスも覚えているはずだと思いついていた。それは私の傲慢だったのだろう。

マステイマのボスにとっては、数ある任務の一つに過ぎない。いつも危険と隣り合わせ。巻き込まれる一般人なんて珍しくないのかもしれない。

私は気取られないように静かに息を吐き出す。

ボスの姿勢、やはり私の話なんて聞くつもりはないようだ。気持ちを押し付けられるのはごめんだと言わんばかりだ。

だけど、あの人が十年前のことをどう思っているかわからない。

私がマステイマに助けられ、命を救われたという事実は。

私は自分の思うように志を貫くだけだ。相手が覚えていないなんて大した問題ではない。見返りを求めているわけではないのだから。

さて、次の話。これは部下から上司への礼儀。気乗りはしないが、先に進まなければ。

「明日から勤務に戻ります。五日間もお休みを頂いて申し訳ありませんでした。それから……倒れたとき運んでくださったそうで、ありがとうございます」

「そんなことはどうでもいい」

さつきと同じ。こちらを見ようもしない。

私が倒れようが、命を落としていようが構わないということなのだろう。ただの使い捨てのコックに過ぎない。

抱き上げて医務室に連れて行ったのだから、アビゲイルに言われたのこと。そうでなければ捨て置かれたに違いない。

伝家の宝刀。アビゲイルはそう言ったけれど、私はそんな物を持っているわけではないのだ。

顔が熱い。ボスがこっちを見なくて良かった。こんな自分の顔なんて見せたくない。

「それよりお前、ちゃんと飯食ってんのか」

「は……？」

振り返りざまのボスの言葉に私は慌てた。

顔の熱が引いていないのに、このタイミングで振り向くなんて思ってもいなかった。それに驚きすぎて意味も分からない。

彼は葉巻を啜えたまま、じっと私を見つめている。

そんな風に見ないで何か言葉を続けてください、ボス。

固まってしまった体に反して、頭だけが回転する。どっやっこの場を逃れるべきか、それだけを考えていた。

## 55 ポスとミシエル（前編）（後書き）

次回予告：挨拶のはずが、なんだかとんでもないことに。ポスの部屋を訪れたアビゲイルが、二人を目撃して……。

第56話「ポスとミシエル（後編）」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

## 56・ボスとミシエル（後編）

しばらく続いた、いたたまれぬ沈黙。

「そんななりじや銃だつて扱えねえ。武術の威力も半減だ」

ようやくボスが口を開いた。

時間があったお陰で、私は冷静さを取り戻していた。体格のことを言っているのだと理解する。

余計なお世話だ。自分でだつて分かっている。

そりゃアビゲイルくらい背丈があつて、おまけに綺麗だつたら言うことない。だけど、天の節理っていうか、努力ではどうにもならないこともあるのだ。

「私の拳法はスピード重視。一度で駄目なら数撃てばいいんです。ほつといてください」

私は、ほとんどふて腐れて言った。

ボスの視線が更なる凄みを帯びた。何でか分からないが彼を怒らせてしまったらしい。

「人の言葉に口答えするな、この野郎」

私は女だから野郎なんかじゃない。心の中で反発を強める。

葉巻を置いて立ち上がるボスに、ソファやテーブルが邪魔だと判断し、後ろに下がった。足首がぐにやりと曲がる。ああ、もうハイヒールなんか脱いじゃえ。私は靴を脱いで、その場で構える。

ゆっくりと彼は近づいてくる。右手で左脇の拳銃を抜こうとしている。怒りに理性をなくしたんだろうか。あんなものを使われたら、怪我なんかじゃすまない。こうなったら自衛手段に移るしかない。

私は右手を狙って蹴りだした。ワンピースが翻る。生地の高いズボンよりはずつと動きやすい。

左手でブロックされる。その動きは読めていた。足を下しざまに今度は脛を狙って打ち込む。今度はこちらの動きが読まれていたようだ。後ろにかわされた。

距離をとられれば、体術しかない私にとって圧倒的に不利になる。私は懐に飛び込み、銃把クリップに手をかけようとするとところに、拳を叩き込んだ。直撃だ。

だが、その感触に思わず手を引っ込める。拳に痛みが走る。私が打ったのは、ボスの手などではなかった。左手にした黒い銃の銃身だ。彼の両脇には拳銃が固定されたままだ。ということは、どこかに隠し持っていた物だ。

痛みから一瞬動きが止まった隙にボスは私を押し倒した。起き上がる暇もなく、覆いかぶさってくる。左手の銃を突き出して。

大ぶりの銃だ。一見自動拳銃にも見えるが、口径の大きさからして銃というより砲だ。近くで見ると初めてだが、これは例の衝撃銃、ショック・パルス・ランチャーに違いない。

「おい、手数が多ければ勝てるんじゃないやなかったのか？」

見下ろしてのこの言いよう。細められた目。この状況を楽しんでいるようにも見える。私は顔を背けた。

胸に銃が押し当てられる。この距離で撃たれば、傷はできなくても内臓へのダメージは相当なものだ。臓器損傷、心臓が止まることだってありえるはずだ。

こんな風に力づくで屈服させらるなんて。私は自由になる左手で床をまさぐった。目当ての物について行き着く。ボスはまだ気付いていない。

「どうする。許しても請うか」

まったくもって余裕のある声。憎たらしい限りだ。

誰が許しなんて請うもんですか。私は左手の物を握り締めた。

と、その時、別の声が割って入った。

「デイヴィッド、大丈夫なの？」

声の主へとボスが振り返る。私もまた彼の肩越しに見つけていた。アビゲイルだ。白衣を着た彼女がそれこそ心配そうな顔つきで立っていた。床に倒れている私と目が合う。

「あら、お邪魔だった？」

彼女の言葉に慌てる。一体どんな解釈をしたんだろう。

「アビゲイル、なんでこんな所にいる」

ボスは立ち上がりながら、しかめっ面で言う。

「何度もノックしたのよ。でも返事がないから、中で倒れでもしてるんじゃないかと思って。お取り込み中で気付かなかったのね。鍵くらいかけてくれないと」

医者の特権を振りかざした上、思いっきり誤解している。

そりゃあ、ぱっと見、ボスが私を押し倒しているように見えなくもないけど。いや、実際に押し倒されたのだけ。なんて言うか……。これは、やっぱり誤解されても仕方ない状況なんだろうか。

「そんなんじゃない」

ボスはそう言っているが、彼女は聞いていないようだ。クリップボードに挟んだ書類を差し出している。

「本社から急ぎで回してくれっていう書類があつてね。どうしても今夜中にボスのサインが必要なのよ」

ペンも渡そうとしている。ボスは煮え切らない顔のまま、受け取ると署名した。そうしなければ、きつと膠着状態になると判断したのだろう。

アビゲイルは満足そうにボードを受け取った。そして私に目を落とす。

「まあ、ミシエル。そんな物を持って、どうするつもりだったの？」  
ボスの視線もまた降りてきた。私が手にした物を見て眉を寄せる。慌てて後ろ手にして、それを隠した。

握り締めたハイヒール。細いヒールは十分武器になりえる。砂袋を貫通するくらいの威力はある。悪くすれば流血沙汰になっていただろう。

アビゲイルは近付いてきて、私に手をさし伸ばした。助けを借りて立ち上がる。ずれかけた髪を直して整えてくれる。私は気が進まないままにハイヒールを履いた。

彼女の手が埃を払ってくれた。

「この子は病み上がりなのよ。こんな乱暴なことしてどうするの」「彼女の言葉にほっとする。アビゲイルはやっぱり私の味方だ。信頼に値する優しい上司だ。」

「可愛がるのなら、床なんかじゃなく、ベッドを使ってあげなさい」続く言葉に啞然とする。何を言っているのだ、この人は。

ボスはというと声もなく固まっていた。当然だ。二人ともそんなつもりは全くなかったのに。

「おい、アビゲイル」

呪縛の解けたボスは弁解でもするつもりだったのだろう。彼女を呼び止めようと声をかける。

だが、その頃には私を引っ張るようにして部屋を出るところだった。

ボスの声は届いているのに、何の迷いもなく扉をばたんと閉じる。廊下に出た私たちは歩き出しながら、互いに顔を見合わせた。同時に彼女はくすくすと笑い出す。

「今のあの人見た？ あんな風に動揺するなんて久しぶりだわ。あー面白かった」

「アビゲイル、分かって言ってたんですか？」  
私は戸惑いながら問いかける。

「途中からね。今晚来て良かった。ばれずにサインもらえたわ」嬉しそうにボードを掲げる。何か決裁を貰うのが難しい書類だったのだろう。私たちのごたごたを利用するなんて、小悪魔だ。

「それにしても反撃しようとするなんて。悪くしたら、あの銃で撃たれて、また一時お休みになるところだったのよ。私が間に合ってた良かったわ」

あの時は必死でそれが一番だと思ってたけれど。反撃が成功していたら、ボスの逆鱗に触れていただろうし、不成功なら撃たれていたらかもしれない。どちらにしても、きつと良い結果にはならなかった。

私はほっと胸をなでおろす。アビゲイルが来てくれて助かった。

これ以上仕事を奪われれば、勘は鈍るだろうし、何より私を支えてくれる人たちに申し訳が立たない。

「本当ですよ。助かりました」

「私もあなたのお陰でサインもらえたんだから、おあいこね」

そう言つて笑みを浮かべる。

「でも、何を言つてボスを怒らせたの？」

彼女の問いに首を横に振る。何がきっかけだったのか、まるで分からない。いきなり怒り出したように思えるけど。

アビゲイルの誘導で先ほどの出来事を思い返しながら話す。

「それは、あなたが軽くて痩せてるのを心配したんじゃないの？」

彼女の指摘にまさかと思う。ボスが私を案じるなんて。それこそありえないことだ。

「そんなことないです。チビだから、自分の身を守ることなんか無理だつて言いたかつたんですよ」

悔しいけれど自分でチビを強調して言う。あの人は私をチビコックだつて言つていたし。私を馬鹿にしているに違いなかった。

「そうかしらね」

アビゲイルはそう言つていたけれど、私はどうしても彼女のようには思えない。

医務室に戻るアビゲイルと別れ、自分の部屋に帰ってきた。

なんだが大変な一日の終わりだったが、一応挨拶は済んだ。今晩はゆっくり休んで明日に備えよう。

服を脱いで浴室へ向う。

洗面所の鏡に映った下着姿の自分の姿を見て、あっかんべーを試みる。チビで何が悪いっていうの。何か迷惑でもかけたかかっていうの。

私は悪態をつきながら裸になって、バスタブの中でシャワーを浴び始める。

そうすると、全てがなかったことのように思われた。心も落ち着



いてくる。嫌なことはお湯と一緒に流れていったかのようだった。

これなら、明日の朝から気持ちよく仕事ができる。私はそう確信して、ほっとした気分になった。

## 56 ポストとミシエル（後編）（後書き）

お陰さまで連載一周年。感謝を込めて、次回掲載は番外編を予定しています。

内容は短編でシナリオ書式のコメディです。

【番外編2】「実録、幹部会議！（2）」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします

【番外編2】実録、幹部会議！（2）

幹部会議の中休み。ミシエルはコーヒーを準備中。

ボスとアビゲイルは一時退席しており、会議室にいる幹部はジャザナイア隊長にグレイ、レイバン。

ジャズ隊長はテーブルに向い、白紙を前に唸っている。ペンを耳に乗せ、腕を組んで考え込んでいる様子。

ミシエル「隊長、どうぞコーヒーです。休憩中も仕事ですか？」  
コーヒーをジャズの前に置くミシエル。

ジャズ「来月が部隊報の発行月だからな。構成を考えてんだ」  
ミシエル「まさか、また動物ネタとかやらないですよ」（汗）  
ジャズ「うーん。そのネタ、大反響だったからなあ。でも、さすがに前回と同じじゃなあ」

グレイ「面白くねーよな」  
レイバン「同感だ」

いつの間にやら隊長の傍にグレイとレイバンが寄ってきている。

ミシエル「同じ例えるでも、もっと違ったもの方が」（無難な物をお願いします）

ジャズ「そうだなあ」

レイバン「自分が提案を。隊長、テレビや映画に出てくる集団に例えるというのはどうだろう」

グレイ「面白そーだな」

レイバン「自分が思うに……」

レイバンの言葉を遮るジャズ隊長。

ジャズ「『特攻野郎Aチーム』だろ！」

他の三人「えー？」

ジャズ「ハンニバル大佐がボスでな、コングがレイバン、イエローモンキーがグレイで、おれがフェイスマンだ。ブラジャーからミサイルまで何でも揃えてみせるぜってな」

ミシエル（隊長、そのセリフが言いたかっただけじゃ……）  
ジャズ 「あいつらのパワフルさは、おれたちに通じるものがあるんじゃないか」

グレイが片手を上げてアピール。

グレイ 「オレは日本の漫画でいくぜー。その名も『ケロロ軍曹』だ」

レイバン「ケロケロだと？ なんだ、それは」

グレイ 「カエル型宇宙人の出てくる話で……」

説明を始めるグレイだが、日本の、それも漫画に疎いレイバンやジャズ隊長は付いていけない。

グレイ 「ケロロがジャズ隊長で、いつも武器持つてるギロロがボス。存在感のないドロロがレイバンで、マスコットキャラのタママはオレか？ クルルはオスカーかなー」

レイバン「存在感がない？ 聞き捨てならんぞ、グレイ」

グレイ 「ホントーのことじゃん」

ジャズ 「グレイ、部隊報向けじゃねえな。カエル型宇宙人って、それ聞いただけでボスのお冠決定だぜ」

レイバン「だから自分の……」

グレイ 「ミックはどーなんだ。何か案はねーのか」

ミシエル「レイバンが言いたそうですけど」

ちつと舌打ちするグレイ。やっと自分の番が来たと得意げに話し出すレイバン。

レイバン「自分が思うのは、『ミッション・インポッシブル』だ。インポッシブル・ミッション・フォーエバー（IMF）こそ自分たちの姿だ」

グレイ 「トム・クルーズが演ってたアレか。インパクトねー」

ジャズ 「ありきたりかもな」

二人とも食いつきがいまいち。

グレイ 「やっぱり、ミック、お前の案言ってみろ」

ミシエル「そんな急に言われても」(困)

グレイ 「映画でもドラマでもアニメとかでもいいーんだからな」  
グレイの猛プッシュにたじたじのミシエル。

ミシエル 「じゃあ、日本の……サゼエさんとか」

ジャズ 「サゼエさん？ 海鮮料理番組か？」

ミシエル 「マステイマはある意味、家庭的だアットホームと思います」

グレイ 「キャラ設定は？」

ミシエル 「えっと……ジャズ隊長が行動派の長男カツオ、グレイがしつかり者の次女ワカメ。レイバンが甘えん坊のタラちゃん」

レイバン 「甘えん坊……」 (悩)

ジャズ 「なんだ、ファミリードラマか」

グレイ 「じゃあ、ボスって、まさか」

ミシエル 「雷親父の波平さん……？」 (汗)

爆笑するグレイ。ジャズとレイバンは知らないため、訳が分かっていない。

グレイ 「インパクトはあるけど、他の連中は知らねーみてーだな」

ジャズ 「インパクトこそが大事だ。よし、それで行くぞ。そのアニメの注釈入れてな。絵のうまい奴にキャラも描いてもらおう」

ミシエル 「え？」 (大汗)

グレイ 「サゼエさんって日本を代表するアニメだもんな。長寿番組らしいし」

ジャズ 「そりゃ、あやかりてえな」

ミシエルの拒否の言葉もむなしく、マステイマの部内報に掲載されることとなった、マステイマ幹部をサゼエさんキャラに例えたら、BY某コック。はてさてその反響は？

ボス 「こんなつるつる頭が俺か？」

例のごとく、呼び出しを食らったミシエルは沈黙。

ボス 「なんか言い訳あるか？」

半ばヤケになつた彼女の答えは……

ミシエル「波平さんはつるつる頭じゃありません。毛が一本生えてます」

ボス 「そんな問題じゃねえ！」（怒）

ああ、今日もまたマステイマの城に衝撃銃の音が鳴り響く。

日曜日の定番アニメであるサザエさん。その魅力もマステイマのボス、デイヴィッドには伝わらなかったようだ。

部隊報にはもう二度と関わるまいと心に決めたミシエルでありました。

【番外編2】実録、幹部会議！（2）（後書き）

次回予告：なにかとストレスが多いマステイマのコックの仕事。ミシエルはリラックス・ポイントを見つけたのだが……。

第57話「フェアリーテイル」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

## 57・フェアリーテイル

マステイマのコックの仕事は緊張の連続だ。トップがトップだけに気を抜けないことばかりだ。

だから、時には息抜きも必要。そうでなければ、とても続かないだろう。

リラックスできる場所。そういう隠れた、とっておきの場所を私は見つけた。

それは夜を迎えた城の屋根の上。

よじ登るには踏み台が必要だ。食堂からパイプ椅子を持ちだしてくる。そして、床にすえて高い位置にある窓から外へ出る。普通の建物なら五、六階になるうかという高さだ。

とても綺麗とは言えない屋根の上。白衣に汚れが付かないように、気を配らなければならない。

窓から出て、内側からこぼれる光を頼りに、傾斜のある屋根の上をそろそろと進む。

マステイマの城の内部はきちんと整備されたもの。だが、外側に至ってはそれも怪しいようだ。体重をかけようとすると、しなる場所がある。

前にアビゲイルから聞いた、対衝撃仕様になっているはずの天井。それは内側からの衝撃のことなのだろう。外からを想定した対策なら、天井より屋根に特別仕様を組み込むはずだし。

この薄い明かりの中でも所々痛んでるのが分かる。踏み抜いて下の部屋の床まで落下するなんてことも十分ありえそうだ。

最適な位置を確保。ポケットから、折りたたんだ茶色の包装紙を取り出して広げる。その上に寝そべり、見上げる空には満天の星。

イギリスの天気は不安定で、晴れであることは多くない。だからこそ、貴重で大事にしたい時間なのだ。



遮るもののないこの場所。星に手が届きそう。宇宙の一部になった気分だ。嫌なことがあってもここでなら、全て忘れてしまえる。そんな所なのだ。

世界は広い。私なんてちっぽけな存在だ。私の悩みもまた小さいものだ。心を曇らせる必要なんてない。

そんな風に自分の世界に浸りきっていた私を突然、呼び戻すものがいた。

「そんな所で何してんだ？」

窓から覗く一つの顔。私は飛び起きた。ボスではないか。

慌てる私の足元がずりりと滑った。壊れた欠片が斜面を転がっていく。

反射的に掴んだのは下敷きにしていた包装紙。何の頼りにもならない。

私は悲鳴を上げた。甲高い、もろに女の悲鳴だ。

屋根を二メートルほど滑り落ちてやっと止まる。足を伸ばせば端に届くくらいの位置だ。

きつと落ちたものが誰かにあたったのだろう。下のほうから「痛い」と声が響いてきた。

私はそれどころではなく、変な汗をかき続けていた。ゆっくりと四つん這いでボスのいる窓へと戻る。彼は床へと降りてくる私を奇妙なものでも見る目つきで見つめていた。

「ここ、絶好の夜空展望ポイントなんですよ」

私は埃をはたきながら言う。

彼の訝しげな顔つきは変わらず、私と窓の外を交互に見ている。

「他の人には言わないでください。本当は秘密にしておきたかったです」

「変な奴だな」

変な奴って。そんな言葉で切り捨てられる私って一体。

肩を落とす私に背を向けて、ボスは去っていった。何の用事もないのなら、ほっといてくれたらよかったのに。

おもむろに落下物の被害者を思い出す。大きな怪我になつていないといけれど。

私は、その場へ向うべく駆け出していた。

現場にたどり着く前に、騒ぎが広がっていることを知った。

私の悲鳴は静かな夜を打ち破り、辺り一面に響き渡つたらしい。

城の玄関口であるロビーには人ばかり。皆口々に喋っている。

奇妙な声を聞いたとか。それも女の声。でもアビー姐ねえさんのものじゃないらしい。だったら誰の声なんだ。ボスの愛人か。いや、さつきボスが廊下を歩いていたら愛人は来ていない筈だとか。

「何か面白れーことがあつたのか？」

背を向けたソファの肘置きから二本の腕が伸びた。欠伸混じりの声。グレイだ。

彼は体を起こしながら、半分潰れた目で辺りを見渡した。

隊員たちの説明に、また欠伸を一つ。

「幻聴じゃねーのか。オレは聞いてねーぞ」

ソファの背に顎を寄せ、気だるげに言う。

それはきつとあなたが寝ていたからだと思う。皆も同意見のようで、彼の言葉は空気のごとくスルーされた。

「何の騒ぎだ、皆集まつて」

とつとつジャザナイア隊長まで出てきた。

皆はさっきの話を繰り返し訴える。隊長は頭を掻きながら、話を聞いていた。

「女の悲鳴？ それって幽霊とか」

隊長の言葉にしんと皆が静まり返る。

この頃になつてグレイは完全に目が覚めたようだ。にやっと笑いを浮かべている。

「そうそう、よくも私を捨てたわねって。隊長を恨んでる女の生霊かもしれねー」

「よせよ、グレイ」

そう言うジャズ隊長の顔は引きつっている。どうも心当たりがありそうな感じだ。

「女が潜んでいるのかもしれない。徹底的に城の中を調べてだな……」  
まっとうなことを言い出したのは、後からやってきたレイバンだ。だが、そんなことをされては困る。もし、女であることがばれるようなことになれば、ボスはきっと私を首にするだろう。

「そんなことは無意味よ」

そう言うって、私の後ろから現れたのはアビゲイルだ。こちらに目配せする。悲鳴の主が私だと分かってくれているようだ。彼女の助け舟にほっとする。

「ねえ、聞いたことない？ 古い城には妖精が棲むって話。バンシィって言うってね、奇声を上げて人を驚かすの」

隊長の幽霊話とあまり変わらない。だが、皆は信じようとしている。

イギリスは妖精の宝庫でもある。姿のない女の悲鳴なんてあまりに不可解だ。分からないものにはそれなりにでも答えを求めるもの。それに言っているのは科学者でもあるはずの医師、それもアビゲイルだ。

「そのバンシィというのは物も投げけるのか」

真顔で頭を撫でながら、彼女に尋ねているのはレイバンだ。よく見ると彼の頭には小さなたんこぶができていないではないか。

私の全身から冷や汗が噴出した。よりもよって彼に当たるなんて。

心の中で両手を組み合わせて詫びる。それにしても大きな怪我になっただけで良かった。

レイバンのこぶを覗き込んだアビゲイルは、手をひらひらさせて笑ってごまかしている。冷やして安静にしていたほうが良いと、医者らしいことを言っただけをはぐらかす。

ああ、心臓に悪い。私は解散する人たちに混じって、ロビーを後にした。

それもこれもボスのせいだ。急に声をかけたりするから。私の怒りは彼へと向く。

バンシーの正体はボスに苛められた女ですとでも言ってみよう。くだらぬ。

## 57・フェアリーテイル（後書き）

次回予告：ミシエルのとっておきの場所。彼女の聖域を脅かすのは、  
やっぱりこの人で……？

第58話「リノベーション」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチ  
ッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

## 58・リノベーション

数日後、悪戯好きな妖精話も下火になった頃。

夜、廊下を歩いていると、例の窓から空を見上げるボスの姿を見かけた。思わず角に隠れて様子を窺う。

窓を開けた彼は、窓枠に手をかけた。私だと椅子がないととても上れない位置だが、問題ないらしい。あの身長と足の長さだ。

よじ登り、窓の外へ出ようとした彼を通りかかったレイバンが見つけた。

窓からはみ出ているコートを引っ張り、彼を留めている。

「危険です、ボス」

「邪魔すんな」

ボスは振り返り、コートを引っ張り返す。

「このレイバン、ボスのお命に関わることはこの身に代えましても……」

飛びついても下そうとジャンプするレイバンの顔面をボスの足が襲う。

額の真ん中に足の裏がクリティカルヒットだ。

「あいつに行けて俺に行けねえ訳ねえだろうが」

ボスの言いように、私は我慢できずに手の内でぷつと噴出した。

あの人が私に対抗意識を燃やしているなんて。

チビでもいいこともあるものだ。ボスの体重では、恐らく壊れかけの屋根を安全に渡ることは困難だ。

意味の分かっていないレイバンだったが、ボスを助けようとする気持ちは本物だ。額の足型を気にもしないで、必死で止めている。

その様子にもボスも諦めたようだ。下りてきた。

「アビゲイルを呼んで来い」

あからさまに安堵の表情を浮かべるレイバンへと命令する。

「修繕費が要る」

修繕費？ 私が壊してしまった屋根のことを言っているのだろうか。だけど、それはアビゲイルだって知っているはずだ。怪我をしたレイバンだって見ているから。

レイバンが固まっている。訳が分かっていないのは彼も同じのようだ。

ボスはコートの内側に手を回し、銃を取り出した。あの大きさ、普通の拳銃ではない。

悪い予感はずぐに実現した。

銃口の先には開け放たれたままの窓。的も見ずに手を上げた状態で、ボスは引き金を引いた。

派手な爆発音がして屋根が吹っ飛んだ。向こうの通路から大量の埃が流れ込んでくる。

なるほど、それで修繕費か。……って、納得している場合ではない。

ただならぬ物音に駆けつけてくる隊員たち。その中にはアビゲイルもいた。彼女は城の惨状を見て言葉を無くした。しばらく半開きだった唇から漏れたのは、深い深い溜め息。

「衝撃銃のリミッターを勝手に外したのね」

そして、さらに彼女の血の気を引かせたのは「ここにバルコニーを作る」との横暴なボスの言葉だった。

「ただでさえ赤字ぎりぎりなのに。本社の監査があるのに」呪文のように繰り返している。気の毒だ。

それにしてもボスは無茶をする。組織の城を壊すなんて、一体どういう神経してるんだ。

「コックから聞いた。星空はここからの眺めが一番だとな」

ああ、ボス、なんてこと言ってますか。

隊員の一人が私を見つけ、指差す。皆の視線が一斉に集中する。

私のせいだって言うの？ そんなの酷すぎる。私だってお気に入りの場所を壊された被害者なのに……。

結局、修繕費は経費で落ちることになった。

だけど、それだけではとてもバルコニーなんて作れない。そこでボスは作業を隊員たちにやらせる作戦に出た。修繕費を資材に当て、あとは彼らに作らせようというのだ。

地上五、六階の高さなのに素人がバルコニーなんか作って安全だろうか。

だが、それは大丈夫だった。

人数がいれば中には建築に秀でたものもいるものだ。エリート集団のマスティマなら、なおさら高確率だ。

技術情報部が図面を引き、実行部隊が工事に当たる。鮮やかな連携プレー。

休憩中の飲み物やお菓子を現場に届けながら、舌を巻く。マスティマの制服を着ていなければ、本職の人たちと言っても通りそうだ。動きに無駄がない。

正規の業者よりは日にちはかかったというが、やがて、立派なバルコニーが完成した。折りたたみ式の透明のルーフまで付いている。さらに、数段高い場所にはボスのプライベートゾーンまで完備。リクライニング・チェア付きだ。ボスは私物の望遠鏡なんか持ち込んでご満悦の様子だ。

私も平らな場所で安全に星空を眺められるようになった。

大喜びなのはジャザナイア隊長だ。雨の日だってルーフを広げてバーベキューができると。すぐに通販でバーベキューセットを注文したらしい。

グレイも肌を焼くにはいいかもと隊長にデッキリアアの購入を勧めていたし。というか、彼の場合は昼寝にはもってこいということだろう。

レイバンさえも興味津々だ。造設中から度々現場を覗きに来ていた。

溜め息をつくのはアビゲイルだけ。彼女は監査のときにバルコニーをどうしようかと悩んでいた。これはもう見つからないように隠



すしかない。

あんな大きな物、稀代のマジシャンでもない限り、そんなことは無理なのに真剣に考えている。

洗濯物干し専用のものだと言いくるめるかとか。……それにしてもは贅沢すぎるし。

出入り口を壁のように塗り固めるとかとか。……そんなことをしたら使えないと思う。

「ああ、もう。ボスの衝撃銃で吹っ飛ばそうかしら」

煮詰まった彼女はそんなことまで言い出す。そんなことをしたら、後で怖いことになるのは間違い無しだ。ボスにしても本社にしても、

「日にちはまだあるんでしょう。一緒に考えますよ、いい方法」  
思わず声をかける。私にできるのはそれくらいだ。

それでも、彼女は良い協力者が出てきたと喜んでくれた。

一人では無理でも二人なら何とかできることもあるはずだ。私たちは一緒に知恵を絞った。

## 58・リノベーション（後書き）

次回予告：マステイマでクリスマス・パーティー開催が決定？ ロンドンまで買い物に出てきたミシエルは……。

第59話「イン・ロンドン」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

## 59・イン・ロンドン

もう十二月。間もなく今年も終わる。

今日は半日休暇を貰ってロンドンの街に出てきた。一枚しか持っていないスーツを着て。

相変わらず慣れず、違和感は変わらない。それに中に着込みすぎで動きにくい。男物のコートを一枚くらい買っておけばよかった。

だが、クリスマススムード一色の街に、気分も高揚してそんなことはどうでもよくなってくる。

なんだかんだ言いながら、一年あつという間だった。特にマステイマに入ってから。

忙しく余裕もなかった。周りの人たちに助けられて、なんとか今日まで頑張ってきた。

だから、アビゲイルから聞いた、皆の労をねぎらったのクリスマス・パーティ開催には大賛成だった。無礼講の上、なんとプレゼント交換タイム付きだ。

私はコックとして、皆の好きな食べ物を書いて用意するつもりだった。これが私からのプレゼントだ。だけど、それ以外に交換する物を用意しなければならぬ。

だから、ディケンス本社へ出向く用の隊員の便を借りて、ロンドンまでやってきたのだ。

何にするべきか悩んでしまう。雑貨屋を何軒かくぐり、溜め息をつく。これだというものが見つからない。

城に帰る便に乗せてもらうには、本社まで戻らなければならない。移動の時間を差し引くともう時間がない。

どうしよう。また改めて出てくるしかないだろうか。

諦めかけた私の目にショーウィンドーから覗く射的が留まった。

前に城の地下射撃場で目にしたようなものの小型版だ。見るとその店はオモチャ屋ではないか。私は急いで店内に入った。

的とオモチヤの拳銃。箱もあつた。目覚まし時計らしい。箱の脇に書かれた説明書きを読む。

（本職もハマる？ 究極の目覚まし時計。銃での撃つとアラームが止まります）とある。

面白そうだ。だいたいこんな風な物が合いそうだとしたら、グレイドだろうか。いや、それよりも……。

私ははっと腕時計を見やった。やばい。時間がない。もうこれに決めた。

会計を済ませて包装をしてもらつ。箱を抱えて、本社に一直線だ。地下鉄に乗るために駅に走る。

電車に乗っている途中、持参していた布のバッグにその箱を突っ込んだ。

今日は食材を求めて出てきたのであつて、プレゼントを買いに来たのではない。表向きはそうなのだから。

一応先に買っていたパスタを上置きなおす。これで外からは入っているものが見えない。

私は改札を出ると、大急ぎで街を駆け抜け、本社ビルのエントランスの自動ドアをくぐつた。

受付で止められて確認を受ける。

姓名と生年月日、それに所属部署名、IDコードまで求められる。時間がないのに丁寧すぎるほどだ。微笑み溢れる受付嬢の穏やかな語り口にやきもきする。その場で駆け足したい気分だ。

手を差し出すと言われ、甲に押された特殊インクのスタンプに光を当てる。浮かび上がったバーコードを読み込んでパソコンで照合。どこかへ電話をかけた受付嬢は申し訳なさそうに言った。

「へりはもう出てしまつたそうです」

案じていたことが現実になつた。でも、私のせいだ。時間厳守だと念を押されていたのに。私は落ち込んで首を垂らした。

マステイマの城は公共の乗り物を使って行けるような場所にはな

い。

もともと住所なんて存在しないのだ。詳しい場所だって分からないから、タクシーに乗っても運転手に伝える自信がない。

第一、遠すぎる。それに一般の車両を敷地内に入れたりしたら、後できつと面倒なことになる。

どうしようかと思案に暮れる私に、受付嬢は明るく声をかけた。

「一時間半後に出る便がありますよ。それに乗られたらいかがですか」

思わず、本当ですかと聞き返してしまった。

マステイマとディケンス本社の定期便は朝の一本だけだ。悪くすれば、翌日まで足止めを食らうことも覚悟しなければならなかった。こんなに早く次の便があるなんてラッキーだ。これで無事に城に帰れる。

受付嬢に時間つぶしの場所を尋ねた。最上階にティー・ラウンジがあるとのことだったので、エレベーターで向う。

綺麗な場所だ。とても社内とは思えないほどの。

外に面した壁は全面ガラス張りで見晴らしがいい。壮観にさえ思える立ち並ぶビル群。下を覗くと目がくらむ。米粒のような人と、ミニカーよりさらに小さい車。

私は景色の良い窓際の席を陣取った。利用する人もまばらで静かだ。

セルフサービスのコーヒートを紙コップに注いで席に戻る。まずは一口。あまり美味しくないけど、ただで飲ませてもらってるもの。

贅沢は言えない。

私は常備しているメモ帳を鞆から取り出した。パーティのことも考えよう。

まずはメニニューから。城に戻ったら、隊員たちにアンケートをとって食べたい物を尋ねなければ。一人一品と考えて、何品になるだろう。

アビゲイルは城にいる隊員のほとんどが集まると言っていたけれど。

ど、はつきりとした人数はその日まで分からないらしい。となれば、やっぱりビュッフェ形式にしたほうがいいかもしれない。

場所がどこになるかでテーブルの配置が変わる。必然的に置ける料理の数も決まってくる。これは相談しなければ何も決まらない。

私一人ではどうしようもないから、とりあえずこの件は置いとこう。私は早々にメモ帳を閉じた。

そして新たに取り出したのはバッグの奥に入れた本だ。古本屋で見つけたもので、あまり状態が良くはないが、レア物だ。

「世界の料理とその起源」の著者が書いた第二弾「料理の歴史とその変遷」。第一弾が一品一品に的を絞って書かれていたのに対して、この本は大昔の料理から現代の料理までの移り変わりを辿っていく形だ。

時代と共に、土地土地で影響を受けあって生まれる料理の流れは、まさに系統図のようだ。

仕事に戻ればゆっくり読む暇はないだろう。今こそがチャンスだ。無意識に声を出して読んでしまうのを防ぐために口を手で覆う。私はわくわくしながら本のページをめくった。

## 59・イン・ロンドン(後書き)

次回予告：本社の女性たちのおしゃべり。話題に上ったのはミシエ  
ルもよく知った名前。彼女は聞き耳を立ててしまっただが……。  
第60話「噂の人物」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチ  
ッとお願ひします (ランキングの表示はPCのみです)

## 60・噂の人物

集中していれば時間は早く経つ。

本から顔を上げたとき、読み始めてからすでに一時間近くが経過していた。

そろそろ屋上に出て出発を待たなければ。今度こそ遅れることがないように。

すっかり冷めてしまったコーヒーを喉に流し込む。冷えると渋みだけが増して、ますます不味い。むせて咳をする私の近くで笑い声がした。喉を押さえながらも、目を向ける。

いつの間にか後ろの席に三人の女の人がいた。綺麗な人たちだ。お洒落にスーツを着こなしている。ばっちりお化粧して、キャビン・アテンダントみたいな華やかさだ。仕事もてきぱきとこなしそうな雰囲気だ。

休憩時間らしく、寛いだ様子で会話を楽しんでいる。年若い女が集まっただけの話は大体決まっている。

「うちで男探しですって？」

「手っ取り早くね。とりあえず収入は問題ないし」

「焦ったら変なの捕まえちゃいますよー」

三人の話題は、そのものずばり、男のことだ。マステイマではまづ耳にすることがない。まあ男所帯だし、こんな話題沸騰してたら気持ち悪いけど。

こういうのってオフィス・ラブっていうのだろうか。なんだか興味がある。コックの世界しか知らない私には遠い世界。OLっていう響きからして憧れるし。

「だって一度くらいは結婚したいじゃない。誰かいい人いないかな」  
「社で思い当たる人なんていないわ」

落ち着きのある、黒髪をアップにした人がぱつぱりと斬る。それでも結婚相手を探そうとしている長い茶髪の方は諦めきれないよう



だ。

「総取締役なんて素敵じゃない？ 大人だし物腰柔らかいし。大事にしてくれそう」

「あの人は既婚者よ。愛妻家だつて評判だわ。付け入る隙なんてないわね」

黒髪の人、容赦無しだ。相手は、はあと深いため息をついている。「先輩、社の男じゃ目の保養にもならないでしょ。外にも目を向けないとー」

一番若そうな金髪のショートカットの人が満面の笑顔で言う。もちろん同じ短い髪でも私とはまるで違う愛らしいボブだ。

「あら、誰か目をつけたの？」

後の二人は興味津々だ。

質問に金髪の子が、三人だけに聞こえるくらいの小さな声で答えている。

「それはマステイマのデイヴィッドじゃない」

黒髪の人が大きく声を上げた。

デイヴィッドはボスの名前だ。私は彼らの話に釘付けになった。

秘密を聞いているようで悪い気もするが、ここは公共の場なんだしと言いつつ。なんだか胸がどきどきしてくる。

「やめときなさい、あの人は」

さっきの人が顔を横に振りながら言う。溜め息混じりだ。よほど良い印象を持っていないようだ。

「どうして？ マステイマはデイケンスの子会社みたいなものでしょ。デイヴィッドって確かその社長よね」

茶髪の人が言う。彼女の言っていることは少し外れているが、まったくの間違いでもない。そうやって聞くとボスも大したものだと思ってしまう。

「子会社とは言え、あの若さで社長！ すごーい」

金髪の子が、はしゃいで祈るように両手を組み合わせている。

「ワールドで格好いいし、地位もあるなんて最高だよ」

完全な陶醉だ。

「だけど、ボスがそんな風に見られているなんて興味深い。ワイルドか。物は言い様だ。あの横暴さは、とてもそんな一言で片付けられるものじゃないけれど。」

「馬鹿ね。彼はそんな人じゃないわ。うちからマステイマに行った男がどうなったか知ってる？ あの人に腕をへし折られて病院送りよ。周りから悪魔って呼ばれているらしいわ。それに……」

「一番年上らしい、この黒髪の方は、マステイマの事情に通じているようだ。」

「まだ何かあるのかと二人は引き始めている。ボスを推していた子も顔が強張ってきた。」

「それに、総取締役との打ち合わせのとき、コーヒーを用意したことがあるんだけど……。こんな不味いコーヒー飲めるかってテーブルにひっくり返されたのよ。服に跳ねて汚れるわ、ノートパソコンは駄目になるわでもう最悪」

リアルに想像できる。私が飲んだコーヒーみたいなものを出していたとしたら、それはもう気に入らないこと間違いなしだ。

それにしてもマステイマ以外の人にも容赦なしなんて、困った人だ。

「そんな怖い人、嫌」

ボスを慕っていたはずの子がとうとうそう言いだした。

「私、再来月の打ち合わせで応対者に決定してるんだけど……」

茶髪の人が言葉を詰まらせる。金髪の子が可哀想と言わんばかりの瞳で見つめている。

「総取締役の前でだとおとなしいらしいから。対応するときを見計らえば、きつと大丈夫よ」

年上の人が落ち込む彼女の肩に手を置いて励ましている。

本社にはボスでさえ気を遣う人がいるのか。そんな人がうちにもいてくれたら、どんなに楽だろう。マステイマのトップがボスなのだから、これはどうしようもないことだけだ。

私ははっと思い起こした。出発の時間って何時だったか。腕時計を見直して時間のなさに慌てふためく。荷物を持って急いで席を立つ。

「はあ。ちょっといいなと思ってたんだけど、あの赤い髪の副社長も普通じゃないわよね。そんな上司の下で働けるんだもの」

「個性強すぎだよな。銀髪の子なんて、この間、社の廊下で爆竹鳴らして面白がってたもん」

「マステイマの男なんてヤバイのばかりよ。目を合わせちゃ駄目よ」三人の会話は続いている。これはジャズ隊長にグレイの話？

後ろ髪を引かれるが、今度乗りそこなったら、きつと今日中には帰れない。噂話に気を取られている場合ではない。私はラウンジを飛び出した。

エレベーターへ向う前に非常階段を見つけて駆け上がる。待っている暇も惜しい。

そして、扉を開けて屋上に出た私を待ち構えていたのは、プロペラを回して離陸準備に入っている黒いヘリコプターだった。

## 60・噂の人物（後書き）

次回予告：本社からマステイマの城へ戻るヘリコプターの機内。微妙に様子のおかしい同乗者にミシエルは戸惑うのだったが……。

第61話「沈黙のヘリコプター」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

## 61・沈黙のヘリコプター

ディケンズ本社の上にあるポートには、今にも出発しそうなヘリコプター。

回転翼から起こる風に押されながらも必死で駆ける。

その途中で担架に乗せられて運ばれる人とすれ違った。急病人だろうか。黒っぽいズボンだったような。顔も見たことあるような。だけど、足を止めて確認する時間なんてない。まだ扉の開いているヘリへと向う。

「すみません、お待ちさせて」

詫びながら乗り込み、扉を閉めた。

「遅せえ」

低い声が迎える。

顔を上げると目の前の席にいたこの人は、ボスではないか。

白いシャツに黒いズボン、黒いコートのいつもの制服姿。色の濃いサングラスをかけた横顔が見える。

座席に着いた彼は反対側の窓から外を見やっていた。こちらを振り返りもしない。

なんでこんな所にボスがいるんだろう。

昼食の準備を終えた後、すぐに私はロンドンへと発った。その時にはボスはまだ城にいたはずだ。

いや、出発がいつかなんて大したことではない。問題なのは、よりによって私の乗るヘリにこの人がいるということだ。

「遅くなってすみません」

「詫びはさつきも聞いた」

声がとげとげしい。やはり、こちらを見もしない。イライラしている様子の彼は、操縦席を後ろから蹴りつけた。

「お前も降りるか。さっさと出せ」

そう言って操縦士を慌てさせる。なんだか、いつもにも増して凶

暴だ。

それから、むっつりと黙り込んで、ボスは再び窓へと顔を向けた。私は嫌な予感がして操縦席を覗きこんだ。

二つの座席の一つには黒い上着が残されている。操縦士は着ているから彼のではない。ということは、誰かがこの席にいたということだ。そして、今乗っていないということは……。

ヘリは離陸する。窓から建物の中に入っていく担架が見えた。

まさか、あれに乗せられているのって……。私はボスを見やった。彼は変わらず外を見続けている。

何が起こったのかを知るためには、操縦士かボスに尋ねるしかない。

だけど、もちろんどちらにも聞けるわけがない。ボスのあの苛立ちよう、触れたら火傷じゃすまなそうだ。

最新鋭のヘリコプターのステルス機能が働きをみせる。機内の音もかなり抑えられ、静か過ぎるほどだ。なんとも気まずい雰囲気。

ボスの後ろの席に着きながらも気を揉む。

あの人が何に腹をたてているにせよ、重苦しい空気はなんとも我慢しがたい。息をするのにも気を遣わなければいけない感じだ。

こうなったら思い切って突破口を開くしかない。

今晚の御飯の話題とか。コックである私ができる話といったらそれくらいだ。

意を決して、ボスの席へと回った。

「ボス、今日の夕食はペンネ・アラビアータにしようかと思ってるんですけど、どうでしょうか。美味しいパスタが手に入ったので」  
後から思うと冷や汗物だ。文句を言わず食べてくれるもの一つには違いないのだが。

このアラビアータの語源からしてツツコミどころだ。

ボスは何も答えず、振り向こうともしなかった。座席に寄りかかり、足を組んで膝に両手重ねて当てた状態から動かない。サンングラスをかけているから、どこに視線が行っているのかも分かりにくい。

私はそつとボスの傍に寄った。

そして気付く。この人は私を見てはいない、声も聞いてもいないことに。

耳にはイヤホンが差し込まれていた。目は閉じられていて、音楽に没頭しているようだ。

耳を澄ませば漏れている高音域。何を聞いているかは不明だが、完全に外の世界と隔絶している。

私は諦めて自分の席に戻った。

ボスに対抗してではないが、私も自分のことをしようと鞆から本を取り出しかけて止める。

小さな活字のものなんか読んだら酔いそうだ。かといって、他に時間つぶしになりそうなものは持っていない。

外を見るのもいいかもしれないけど、空からの景色って見えていて落ち着かないし。

目をつぶって座席に体を預ける。眠くはないけど休むくらいしかないか。

今晚のボスのご飯はペンネ・アラビアータに決まりだから、それに付け合せる物を考えなきゃ。他の皆のはラザニアにでもしようかな。

夕食のことを考えているうちに、なんだかエンジンの音が心地よくなってくる。ステルス機能がこんな風に作用するなんて。

そうして、私はいつの間にか眠りの海に沈んでいった。

城に着いて、操縦士が起こしてくれたとき、すでに機内にボスの姿はなかった。

そこでようやく事の次第を知った。

ボスの犠牲者が操縦士見習いの隊員であること。離陸を急かすボスへかけた一言が災いを招いたこと。

そして、彼が言ったのは、「本社からマイケルがこの便に乗ると連絡が来ています。待たずに出発してよろしいですか」だということ

と。

とすれば、私のせいとしか思えない。その人が担架で運ばれることになったのは。

なんて謝ればいいだろう。うろたえる私に、操縦士は気にしないように言ってくれた。

ステップを上がるうとするボスに声をかけた見習い隊員は、操縦席から引き摺り下ろされた。

つまり、ボスの苛立ちはへりに乗り込む前からで、呼び止めた時点で彼の運命は決まっていたのだろうと。

そんな風に聞いても慰めにはならなかった。養生が済んで城に戻ってきたら、お詫びをしなければ。

落ち込んだ気分で厨房に戻ると連絡が入った。アビゲイルだ。断りが入ったから、今晚のボスの食事は用意しなくていいと伝えてくれた。

それからその日、ボスの姿を見ることはなかった。



## 61・沈黙のヘリコプター（後書き）

次回予告：「お前は良くやっている」「って、これは誰の言葉？  
シエルは驚くばかりで……。」

第62話「ねぎらい」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチ  
ッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

## 62・ねぎらい

パーティーで隊員たちの好きな料理を作る。それは思っていた以上に大変なことだった。

ひととおりアンケート調査を終えて実感する。

何しろ出身地が世界中と言っているほど散らばっていて、その国独自の料理なんかもある。

用意できるか不安な材料もあるし、何よりも出来良く作らないといけない。試作は欠かせないだろう。不味い物を作ってパーティーを台無しにしたくない。

ちなみに幹部の好きな物を聞くと、アビゲイルはジャンバラヤ、ジャザナイア隊長はミートローフ、グレイはオニオングラタンスープ。そしてレイバンはザツハトルテだった。

ザツハトルテはチョコレートケーキだ。

お菓子が出てくるのは予想外だったが、どのみちデザートは用意するつもりだったので、希望通りに作ることにした。ものすごく期待されているようだから、これは力を入れなければならぬ。

一番こだわりの多そうなボスの好物が気になるところだ。だが、聞くのはアビゲイルに止められていた。

パーティーなんだからサプライズがないと。それに好きな物、大体分かってきたでしょうというのが彼女の言い分。

まあ、ストレートに聞いて答えてくれるとは考えにくい。それから、とうの昔に耳にしただろうし、歴代のコックのメモにだってあったに違いない。

嫌いではないと見て間違いのない物だったら、なんとか分かる。それを用意するしかないだろう。

その最たるものがアラビータだ。食の進むスピードが違う気がする。

ボスとアラビータ。この言葉を並べるだけで、にやけ笑いが起

きてしまう。

正式名スパゲッティ・アラビアータ。怒りんぼ風スパゲティ。アラビアータはイタリア語で怒りの意味だ。

ボスには、ぜひとも好物だと言ってもらいたいところだが、あの人のことだから、そうだとしてみきつと答えてはくれないだろう。

前に夕食をキャンセルされたときに作る予定だったから良かったあれから作っていないから、同じ物を食べることにはならない。文句を言われることもないだろう。

ボスの食事のメインはこれで決まりだ。他は主菜とのバランスで考えればいい。

一番重要なところが案外簡単に決まって、ほっとする。これで他の人たちの料理に専念できる。

私は必要な食材を書いたメモの確認を始めた。あとはアビゲイルに渡すだけだ。

やがて本社経由で注文した食材が届き始める。

冷蔵、冷凍が必要なもの。常温で大丈夫なもの。振り分けて保存しやすい形に加工する。

分からない部分を調べるための本も取り寄せた。

そろそろ試作品の調理に取り掛からなければ。食堂に人気がなくなつたところを見計らつて。

慎重に秘密裏に。パーティで初披露となるように。

会場についてはアビゲイルから連絡があつた。ボスがいつも使っている食堂。テーブルを脇に寄せて、ビュッフェの皿を載せる。他にもテーブルを持ち込まなければならぬが、力仕事は隊員たちに任せていいと言われている。

ボスは立食なんて嫌がるだろうと、別にテーブル席を設けることになつた。

日にちは十日後。開始は午後七時から。人数は、その時域にいる人たちのほとんど、四十から五十人になるらしい。

日程も場所も決まり。あとは料理だけだ。期待に応えるような美味しい物を作らなければ。

私は気合を入れる。普段なら心地よいくらいの緊張感。だが、それが自分で思っている以上に気を負っていたのだと間もなく思い知ることになった。

皆が談笑している。

和やかなパーティ会場の雰囲気の中、私は最後の料理をワゴンで運んできたところだった。

これをテーブルにセットすれば、仕事はひと段落だ。

皿を置いて辺りを見渡す。あちこちで溢れる笑顔。楽しそうだ。こちらまで嬉しくなる。

部屋の一番奥に据えられた横に長いテーブルと椅子。いつも食事をする辺りに座っているのはボスだ。怖がっているのか誰も近付かない。一人で随分とワインを空けているようだ。

まずい。思いつきり目が合ってしまった。彼は目を細めて私を睨みつけると、こっちへ来いと指でサインを送ってくるではないか。無視するわけにもいかず、私は緊張しながら近付いていった。

料理に文句があるんだろうか。だが、皿を覗くとおおかたの物はなくなっている。だとするとなんだろう。心当たりを捜しながら、ボスの隣に立つ。

すると、彼は顎で壁際に置かれた椅子を示している。持ってきて座れということだろう。これは長丁場になるかもしれない。動悸打つ胸を感じながら、彼の横に椅子を寄せた。

見るとグラスが空っぽだ。給仕係として注いだほうがいいのだろうか。だが、その気がないのに勝手に動いたら怒られそうだ。

「ボス、このワインでいいですか？」

一応、栓の開いた赤ワインの瓶を示して聞いてみる。

驚いたことに「おう」と言葉が返ってきた。慄きながらもグラスを満たす。

すると彼は新しいグラスを引き寄せた。別のグラスで飲みたかったのかと真意を測る。彼はそのグラスの足を指でつついた。これは間違いなく注げという意味だ。続けてそちらにも瓶を傾ける。

「まあ座れ」

そう言われて、冷や汗をかきながら席に着く。

新しいほうのグラスがこちらに押しやられた。これって私のつてことなんだろうか。じつとワイングラスを見つめる。

彼は自分のグラスを傾けている。私は汗ばむ掌を膝に押し付けたままだ。なんだか展開についていけない。

「お前はあれだな……」

グラスを置いたボスは、パーティ会場を見つめながら言いかけた言葉を絶やす。

あれって何のことだろうとぐるぐる回り始める私の頭。

「よくやってる」

何秒か後の彼の言葉に、頭の回転が全停止した。

「今回の料理も全部お前が用意したんだろうか。大変だったな」

思わず耳を疑う。ボスからねぎらいの言葉が。こんなこと言えるのか、この人は。

「アラビアータが俺の好物だつてよく分かったじゃねえか」

怒りんぼが怒りんぼ風を好き？ 驚きすぎて笑いだすのも忘れてしまった。

私は椅子から立ち上がった。引っかかった椅子が弾んで大きな音を立てたが、構わずボスの全身を見回す。

艶やかな黒髪、私を見上げる強い灰色の瞳。襟を開けた白い長袖シャツに緩めた黒いネクタイ。マステイマのコートは袖を通さず肩にかけられたままだ。黒いズボンに黒い靴。いつものボスだ。だけど、こんなこと言うなんて普通じゃない。

そして気付く。肌身離さず着けている革の手袋がない。あの人が着けていないなんて見たことないのに。

「こんなのボスじゃない」

私は後退りしながら言った。

そう思って見てみると、何だか不自然な感じがしてくる。ボスがおとなしくこんな席で食事なんてありえるだろうか。

私の声に気付いた皆が一斉にこちらを向いた。

駆けつけるアビゲイルにジャザナイア隊長。近くにいたレイバンは、ムンクの叫びのような形相で固まっている。グレイはというと、輪切りにしたバゲットの一片を大急ぎで口に押し込むところだった。私は確信を込めてボスを指差す。

「ボスの偽者です！」

その大きな声で私は現実に戻された。

ぼんやりとした光の中で、宙に突き出した自分の指が見える。ベツド脇に置いてあるスタンドの豆電球の明かりだ。

自分の声で目が覚めたのだ。体を起こして夢だったことに驚く。

それにしても変なものを見てしまった。パーティ本番に向けてのプレッシャーからだろうか。

おもむろに夢の中のボスが思い浮かんで、笑い出してしまう。

ねぎらいの言葉を言ったばかりに偽者と断定されてしまうとは。

だいたいあの人には、そんな言葉は似合わないのだ。

しばらく笑いは収まらず、眠気は退いてしまった。

ボスに笑わされて睡眠不足になるなんて。それもまたおかしいことだ。

本物のボスに会ったときに笑わずには済むだろうか。私は自信がなくなっていた。

そして、再び眠り始めたときには起きてから二時間は経過していた。起床予定の五時まであと一時間ほどしかない。

今朝はクリスマスパーティの料理の試作品、第一品目を作る予定にしていた。これからは、こういう生活が続くだろう。少しでも多く睡眠時間は確保しておきたい。

それでも、新たな夢の中でもまた私は笑い続けていた気がする。

## 62・ねぎらい（後書き）

次回予告：クリスマス・パーティーの準備で疲労気味のミシエル。彼女を休ませようと行動に出たのは……。

第63話「リフレイン」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

### 63・リフレイン

クリスマス・パーティの日まで、あと五日を残すばかりとなった。やることは山積みだ。

部屋に戻ってからはレシピ本を読み、次の日、仕事の合間に試作品を作る。

頭に叩き込んだ情報の確認作業。その繰り返し。

まさに未知との遭遇。見たこともない料理は感じたこともない味に出来上がったりして、なかなか難しい。調味料を加減して納得できるものに仕上げていく。

普段の仕事も怠れないが、パーティの準備も手を抜くことはできない。

夜のお勤めを減らしてもらって良かった。今の状況では前と変わらない。

ベッドの脇でボスに本を読み聞かせながら、眠りかける回数。そして、またクッションを食堂に持参して空き時間に眠ることもあった。

体調を崩して倒れたときと同じようなことを繰り返している。そうは分かっていたが、あと何日か。パーティが終わってしまえば、またゆとりある生活に戻る。それまでの辛抱だから大丈夫だと思っていた。

ところが事件は起こった。

昼食の時間が終わり、人のいなくなった食堂。片付けを終えて、束の間の休息に入るところだった。

クッションをテーブルの上にセットして、肘の位置を確認。頭をつけて、さあ眠ろうとしたとき、ボスが部屋に入ってきた。

横向きに目にする意外な人物の登場に飛び起きる。どうしてボスがこんな所に。

彼は無言のまま、私の腕を取ると立ち上がらせ、廊下へ向って歩



き出した。

「一体何なんですか？」

問いにも答えようとしない。前を向いたまま、どンドン歩いていくので、私は仕方なく小走りで付いていく。悲しいかなこれはコンパスの差だ。

目的の場所に着けば理由を教えてくれるはず。そう期待していた。扉を開き、執務室を抜けて、着いた先はボスの私室のリビングだ。彼はソファに私を突き飛ばした。

「何をするんですか！」

埋まりこんだクッションから顔を上げて抗議する。訳が分からないう上にこんなことをされて、私は怒り始めていた。

「寝ろ」

ボスは命ずる。起き上がるうとする私の頭を押さえつけて。

一体何だつて言うんだろう。柔らかいソファの革に顔が埋まって窒息しそうになる。この人、こうやって私を永遠の眠りに着かせようとしているんじゃないだろうか。

「いいから寝ろ」

繰り返される言葉。

こんな風にして、私が「はい、眠ります」なんて言うつとでも思ってるんだろうか。物事には順序というものがあるのだ。私は半ば呆れて言った。

「こんな所で寝るなんてできませんよ」

「ソファに縛り付けるぞ」

ボスはコートのポケットから取り出した紐を両手でぴんと張る。本気でやる気だ。私がこれ以上抗うなら。

「……なんだか、ちよつと眠くなってきました」

思わずそう返す。縛られるなんてアビゲイルにされた一件でこりこりだ。

紐をポケットに戻し、ボスは肘掛に寄りかかる私を見下ろした。

「今から打ち合わせに出る。一時間後には戻る。その時にまだ起き

ていたら……」

言葉を途中にして背を向ける。あとは想像してみるということだろう。

私はぞつとして、目蓋をぎゅつと閉じた。こんな風に体中に力が入った状態で眠れるわけもないが、少しでも努力している姿を見せるしかない。

「これ以上、あいつに首を突っ込ませるな。二度目の本社呼び出しなどありえねえぞ」

言葉を置き去りにして去っていく。あいつというのが誰のことで、本社の呼び出しが何のことか説明なんてなしだ。

扉の閉まる音を確認してから目を開ける。

何のことだか分からないが、今回のことが本社と関わりがあるなら、アビゲイルに聞けば何か分かるかもしれない。すぐにも尋ねたいところだが、今この部屋から出るのはやめたほうがいいだろう。

ボスに知られたら、それこそ何をされるか分かったものではない。私は溜め息をついた。窓を見やる。午後の日差しは遮られている。厚いカーテンの縁に沿って光の線が見えるだけだ。

一時間あれば、料理の手順書だって作れるのに。

だけど、どのみち食堂にいたって十五分くらいは眠るつもりだったのだ。四十五分はボスにあげたと思って、休ませて貰おう。私は割り切った。

頭の中でパーティの料理の組み合わせを考えながら、ソファに横になる。

いいソファだ。憎たらしくなるくらいの心地良さ。私のベッドより上等かもしれない。

出来上がった料理が私の頭の中を巡り始める。やがて、それが想像の物であるのか、夢であるのか境目なんてなくなっていくた。

薄暗い部屋の中で私は目覚めた。

見慣れない天井にソファの背を見やっと思い出す。ここはボスの

部屋だ。

視線をさ迷わせて、マントルピースの上の置時計を見つける。ちよつどの形、三時だ。眠ってから、きっかり一時間ほどだ。

ちゃんと休んだのに、なんだか体が重い。体を起こして、かけられたブランケットに気付く。そして私を見つめる視線にも。

驚いて声を上げかけて、慌てて手で口を塞ぐ。

そこにいるのは寛いだ様子のボスだ。上着を脱ぎ、ネクタイもなく、シヨルダーホルスターも外した姿。一人掛けのソファに腰掛け、ワイングラスを片手にしている。

「会議、もう終わったんですか？」

返ってきたのはふんという鼻息だけ。彼はグラスを傾け、赤ワインを喉に流し込んだ。

「休ませていただいて、ありがとうございます。毛布までかけて下さつて。夕食の準備がありますので、これで失礼します」

立ち上がった私はそそくさとブランケットを畳む。少しでも早くこの場から離れたかった。

「そんなもん必要ねえ。何時だと思つてんだ」

ボスの言葉にぎくりとして手を止める。改めて時計を見て、閉じられたカーテンで覆われた窓を見やる。光がない。カーテンの影が暗く縁取っているだけだ。

まさか……私が見た時計の三時つて、午前三時のこと？

「十二時間も寝てたなんて」

「正確には十二時間三十五分だ」

シヨックで咳く私にボスの言葉が追い討ちをかける。

「起こしてくればよかつたのに」

今さらな悪あがきだと分かつていたけれど、そうもらしてしまう。俺もさつき外から帰ってきたところだ。まだいるとは思つてなかつたがな。今さら起こしても何の足しにもならねえ」

確かにそうだろう。食事を作らないコックなんて役立たずだ。ゴミ箱に入れても邪魔になるような粗大ゴミも真つ青な代物だ。

「長々とお邪魔しました。部屋に戻ります」

がつくりと肩を落しながら、挨拶をする。

「また倒れるようなことをするなら、先に撃つてベッドから動けなくするぞ」

彼はグラスを置くと、テーブルに置いていた銃を手に、ちらつかせた。

「これだけ休んだんです。過労で倒れたりとかありえませんか」

私は力ない笑いをもらす。あまりの自己嫌悪に恐怖も感じなくなっている。いつそ撃つて、この思いを吹き飛ばしてくれるなら、それでもいいとさえ思ってしまう。

寝すぎで腰と腹筋が痛い。それに頭も重い。こんな感覚は久しぶりだ。

ボスに暇乞いをして廊下へと出る。

つくのは溜め息ばかりだ。十二時間あれば試作が何品作れるだろう。

それにあの人の前で無防備に眠っていた自分に腹が立つ。もちろん、早々に起こしてくれなかったボスにも。

私起きるまで待つて、その上ブランケットまでかけてくれていた。

いつものボスからは考えられないことだ。やっぱり本社の何かが引っかかっているのだろう。でなければ、外から戻ってきた時点で叩き起こされているはずだ。

そういえば、本社から戻るへりで一緒になったとき、様子が変わった。二度目の呼び出しはとか言っていたから、おそらくあれが一度目の呼び出しだったんだろう。

本社とボスとの間のことが私にまで関わってくるなんて。

「訳分かんない」

人気のない廊下で声を上げる。考えても結論なんて出ないし。

朝、アビゲイルに尋ねることを心に決めて、私は廊下を歩く足を早めた。

### 63・リフレイン（後書き）

次回予告： アビゲイルからセオと呼ばれる、本社のアーロン。ミシエルをマステイマのコックとして採用を決めたこの人は……。

第64話「セオ（前編）」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

巻き起こる風の中を私は歩いている。

足元に広がる四角い石を敷き詰めた地面。白衣の上に着たマステイマの制服である上着がはためく。手には銀色のジュラルミン製のアタッシュケース。

空には厚い雲が流れている。それをかき混ぜているのは騒々しく音を立てるプロペラ。地面から五十センチほどでホバリングして、一機の灰色のヘリコプターが待っていた。

「確かに預かった」

開いたヘリの扉から手を伸ばしたのは、サングラスをかけたスーツの男だった。彼はアタッシュケースを引き込むと、操縦士に合図をした。

後ろ向きに距離をとる目の前で、扉を閉めたヘリコプターが上昇を始める。

塀の内側の植え木がざわめく。私の短い髪の毛も掻き乱される。

背後には朽ちかけの様相を呈する城。大きく周りを取り囲む石塀。ここはマステイマのヘリポートだ。

そして、この闇世界の取引を思わせる出来事。始まりを語るには少し時間をさかのぼらなければならぬ。

十二時間睡眠を取ってから最初の朝食。

いつものボスにほっとする。目を合わせるのは食堂に入ってきて、私が挨拶の声をかけたときの一度きり。

食器を扱う音だけが小さく聞こえる、沈黙のうちの食事。

これこそが平和というものだ。この人が口を開くときは、ろくなことがないのだし。

アビゲイルの姿はなかった。本採用になってからは、それが殆どのことだ。後で医務室に向うつもりだった。

彼女なら知っているはずだ。ボスがボスらしからぬ行動をした理由。それが分からないうちは落ち着かなくて仕方ない。

朝食の食器を片付けることもそこそこに医務室に向う。

「アビゲイル」

名前を呼びながら、ドアを勢いよく開けた。

最初に飛び込んできたのは確かに彼女の白衣姿。デスク近くの薬品棚の前に立っている。

だが、それだけではない。予想外に他にも人がいた。こんな朝早くだから彼女しかいないと踏んでいたのに。

デスクの椅子に腰掛け、パソコンの画面に顔を向けている男の人の姿。黒髪に黒ぶちの眼鏡。身に着けているのは上品なヘリンボーン柄のツイードのスーツ。

椅子を回してこちらを向いたのは見覚えのある壮年の男性。ディケンス本所で私の仮採用を決めたアロンという名の人だ。

「やあ、おはよう」

彼は立ち上がり、深く温かみのある声で挨拶する。

「おはようございます」

反射的にそう返したが、不審はぬぐえなかった。何故この人が今こんな所に。

デスクに届く前に私の足は止まっていた。彼がこちらに近付いてきたからだ。

眼鏡の端を指で押し上げ、じっと私を見つめる。

「体重が落ちたかな。顔も少しやつれているね。だけど顔色は悪くない。髪の毛爪の色もいいね」

腰を折った彼は私の手を取って見る。

じっと観察されている。居心地の悪くなった私は体をもぞもぞと動かす。

「睡眠はちゃんととっているかい？」

「昨日は十二時間も寝てしまいました」

その答えに彼は短い笑い声を上げた。楽しげな声だ。

「眠れることはいい事だけだね。寝溜めなんて意味がないから、毎日の睡眠が大事なんだが、いつもそれくらい眠っているのかね」

「まさか」

今度は私が笑う番だった。彼は微笑んで私の肩に手を乗せる。親しみの持てる不快でない仕草。

「デイヴィッドも少しは気を遣っているようだね。絞った甲斐があったかな」

続く言葉にほぐれていた気分が一気に覆される。

私はあっけに取られた。デイヴィッド……ボスを絞った？ 確かにそう聞こえたけれど、この人が？

くだけた笑顔はそのままだ。ボスに太刀打ちできそうには到底思えない。マステイマの人事に関わっている人だとしても、例え年上だろうと関係ないはずだ。ボスが黙って、こんな柔そうな人の言うことを聞くなんて。

「まるでユニコーンの乙女だね」

彼は自らの咳きにふっと笑いをもらすと、尋ねた。

「夜の勤めは減ってるね？」

「……どうしてそんなことまで」

アビゲイルが話したんだろうか。愕然と彼女を見やる。

いまだ薬品棚の前で腕を組んだまま立っている。傍観者を決め込んでいるようだ。動く気配もない。

私は後退りした。彼の手は追ってこなかった。

どうすればいいのだろう。うるたえる私の思考は混乱する。

頭の芯がかつと熱くなり、不安が押しせまってくる。本社にまで私が女だと知られるなんて。もし、そのことがボスの耳に入ったら……。

「何も心配する必要はないよ、ミシエル。私は君の味方だ。最初からね」

変わりのない穏やかな彼の語り口。

口惜しいことに言葉はまだ出てこない。何を言っているのか分か



らないほど心乱れていた。

彼は、初めから私が女であることを知っていながらマステイマへと案内した。それだけは分かった。

そういえば、城を前にして言っていた。健康診断は必要ないと。アビゲイルはその言葉をヒントに私を女ではと疑った。そう言っていたではないか。

自分の愚かさに今さらながらに驚く。彼が私の正体を気付いた理由。最初の時点で気付くべきだったのだ。

「それはブルーノさんが……」

「彼は君の性別については一切触れなかった。私自身の判断さ」

私は唇を噛みしめた。束の間とは言え、ブルーノさんを疑ってしまっなんて、どうかしている。

アーロンは歩み寄ってきて私の顔を覗きこんだ。再び唇に笑みが浮かぶ。

「デイヴィッドがなんと言おうと、君をマステイマのコックから外す気はないよ。君がそれを願っている限り……」

「何を言ってるんですか。あなたにそんなことが」

遮って言葉が飛び出す。それが失礼だと考えることもできなかった。

ボスが決めたこと覆すだなんて、いくら本社でも不可能なはずだ。マステイマのボスは一人なのだから。

「それができるのよ。セオなら」

アビゲイルが初めて口をはさんだ。アーロンの傍に歩み寄る。

「彼はボスのただ一人の上司。本社の総取締CEO役なんだから」

その言葉に混乱は深まるばかりだった。

#### 64・セオ（前編）（後書き）

次回予告：アーロンはディケンス警備会社の総取締役だった。本社用に菓子を作って欲しいとの彼の提案を受け入れたミシエルだったが、思わぬ事態に……。

第65話「セオ（後編）」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

## 65・セオ（後編）

落ち着いて考えよう。まずは一回深呼吸。

総取締役の英語の綴りを頭に描く。確か、Chief Exec  
クティブ オフィサー チーフ エグゼ  
utive Officer。略してCEOだ。シイオ

本社の女の人たちが言っていた、ボスが一目置いているという人物。それがこの人だったとは。

そうか。だからCEOなのか。セオ勝手に苗字か名前の一部かと思っ  
ていた。

「健康状態は良好のようだ。そうでなければ、最後の手段に出るつもりだったか……」

彼の視線は私からアビゲイルへ。彼女は頷いた。

「ボスも懲りたんでしょう。本社に呼びつけられて訓告を受けるなんて、もうご免だと思ってるはずよ」

「三度目だよ」

アーロンは何処か無然とした調子で言った。

「一度目の注意は無視。彼女が倒れての二度目の注意も同じ調子だったから、来てもらったんだ」

この人こそがボスが口に使っていた“あいつ”だったのだ。私は確  
信する。

「勤めを果たして、あいつを黙らせる」「あいつに首を突っ込ませるな」

どちらも苛立ったような言いようだった。ようやく話が繋がる。

ボスの性格だ。外から茶々を入られたのでは、お冠になる気持ちも分かる。

アーロンの瞳は変わらなかった。眼鏡の奥で柔らかい光に溢れていた。この人の言うことにボスが耳を傾けるなんて、いまいち実感がわかない。

アビゲイルとアーロン。二人の視線が集まるのを感じて、私は身

を硬くした。

「どうするの。予定通りこの子を連れて行くの？」

「いや」

言いざまに体を反らしたせいで、彼の眼鏡に銀色の光が差した。

何かを思いついたのか、思い出したかしたようだ。唇に微笑みが広がる。すっかりお馴染みになった笑顔で彼は再び腰をかがめた。

「ミシエル、君の料理は本社でも有名だ。マステイマの隊員からの話が広がってね。社員達も興味津々。特にお菓子は絶品だと聞いているよ。そこでだ」

内緒話をするかのように声を落とした。

「ビスコッティを焼いてもらいたいんだ。うちは来客が多いしね。

茶請けに出したいんだが。もちろん社員にも食べさせてやりたいからたくさんね」

「……それは構いませんけど」

彼は笑顔のまま「決まりだ」と言った。

机の脇に置いていたアタッシュケースを取り、私へと渡す。よくビジネスマンが持っているジュラルミン製の銀色のケースだ。

この中に入れてくれと彼は言う。とてもじゃないけど、お菓子の入れ物には見えない。

「明日の午後二時、遣いの者を送る。それまでに用意できるかな。

場所はここのヘリポート。他の者には内緒で頼むよ。複雑にはしたくないのでね」

ビスコッティで複雑なことってなんだろうか。

分からなかったが頷いた。理由を尋ねたりしたら、それこそ煩わしいことになりそうだ。

アロンは「そろそろ戻らなければ」と口にした。

当然出口に向っていくだろうとの予想に反し、彼は部屋の奥へ歩いていく。白いついたての向こうの患者用ベッドが置かれている方向へ。

ベッドフレームの鉄の支柱に触れる。すると、驚いたことにベッ

ドが折りたたまれ、床に穴が出現した。ライトが自動で点り、下へと続く螺旋階段が見える。隠し通路だ。

「そうだ、アビゲイル。カルテのチェックが途中になってしまった。本先にデータを回してくれ」

「了解。あとで送っておくわ」

アーロンは頷くと、私の傍までやってきて頭に手を乗せた。

「クリスマスパーティーの準備だからといって、無理は禁物だからね」子供にやるような仕草で撫でる。不思議と不快な気分にならない、優しさに満ちた触れ方。

「張り切るのはいいけれど、また倒れるようなことになったら……」

「分かっています。これ以上ボスに迷惑はかけません」

私は本心からそう言った。イライラするボスも嫌だが、奇妙に優しいボスもなんだか落ち着かない。

アーロンはにっこり笑うと、踵を返して階段を下って行った。

彼の背中が遠ざかると自動で床が塞がり、ベッドが元の位置に戻る。

私の背後からアビゲイルが肩を掴んで顔を覗きこんでくる。

「それにしてもユニコーンの乙女ねえ」

アーロンが口にした言葉を繰り返す。気になって尋ねてみた。

「それって、どういう意味ですか？」

「例え話ね。ユニコーンは乙女の前ではおとなしくなる、彼女の膝を枕にして眠ってしまうっていう伝承があるから」

もしかして、ユニコーンってボスのことだろうか？ まったく印象が合致しない。そんな優美な伝説の生き物のイメージとはちょっと違うと思う。

私が乙女っていうのも微妙だ。何といってもマステイマでは男で通ってるし、ボスに膝枕だってもちろんしたことないし。……と思つて、はっとする。

まさか、私がボスにそんなことをしていると誤解してるなんてことは……。

「面白い例えだわ」

アビゲイル納得したように頷きながら言っている。私は奇妙な想像を頭から必死で追い出そうとしていた。

「それにしてもセオ自ら動くなんて。気に入られているのね。自分が推したものだからほっとけないんだわ」

「あの方も医者様なんですか？」

少し焦り気味に尋ねる。こういうときは別のことを考えるに限る。そういえば、彼はカルテがどのと言っていた。確かに、あの人はドクターっぽい。白衣や聴診器が似合いそうだ。

となれば、彼の私への関心は職業病みたいなもので、健康状態に不安があるからじゃないだろうか。コックである私が痛みやすい素材に気を使っみたいに。

「セオの専門は精神科だけだね。内科や外科にも通じていて、腕の立つ医師だわ。私の師でもあるのよ。彼はマステイマどこるかデイケンス警備会社、全社員のカルテに目を通してているの。五千を超えるってこのに見るって聞かなくなっつてね」

凄い数だ。デイケンスは世界規模の警備会社だから、社員数もそれくらいになるのだろう。

「それよりよかったわね。明日の午後はボスが不在だし。うまく立ち回ればセオが来たこともばれずにいけるわよ」

「それも秘密なんですか？」

「当たり前でしょ。ボスは彼のことをあまり良く思っていないもの。城に来たなんて知っただけで気分を害すわ」

玄関から出て行かずに秘密通路を使った理由を知る。それに渡されたジュラルミンケースも。内緒ということか。それにしても手間のかかることだ。

ケースを見下ろして息をつく。

ビスコッティをこんなものに入れるなんて、あまり気が進まない。入れ物として不適切というだけではない。後で分かることになるのだが、それは多分虫の知らせだったのだ。

午後の日差しを遮る厚い雲。ヘリコプターの色が空に溶け込んでいく。

これで守らなければいけない秘密も去っていった。私はほっとした思いでそれを見送っていた。

「おい、マイケル。今のはなんだ？」

突然、後ろから声をかけられて驚く。

振り向くと、そこにあつたのは、天を仰ぎながら近付いてくるジャザニア隊長の姿だった。

私はアローンの内緒だという言葉を出す。うまく切り返さなければと考えたが、すぐには出てこない。

代わりに隊長の耳に届いたのは、胸ポケットに収まった小型無線機の声だった。

「フライトスケジュールには記録ありません。未登録のヘリです」

隊長が城へと目をやる。ここからでは姿を見ることはできないが、屋上にいる監視員からの連絡だろう。

「よし、横っ面にかましてやれ」

無線機への応答に慌てる。

「ジャズ隊長」

声をかけるも、止めることなど遅すぎた。

城の屋上から白煙の尾を噴き出しながら、何かが打ち出された。

方向を定めて進むヘリの脇を掠めるようにして飛んでいく。あれはロケットランチャーから撃ち出されたものだ。

「隊長、あのヘリは……」

「げえ！」

押し潰れたその声と私の声は殆ど同時だった。

彼は折りたたみ式の簡易スコープを手にした。目を離して肉眼で確認して、また覗き込む仕事を繰り返している。

「本社の機体じゃねえか。何で言わねえんだ、マイケル」

そんなことを言っただって、私の言葉なんて待ってくれなかったの

に。

「まいったな、こりゃ。先に本社に謝つとくしかねえな」

ぶつぶつ呟きながら背を向ける。頭をかきかき、歩いていった。まいった。

嵐のようにやってきて、過ぎ去っていく。そういつところはよく知っているものの、いまだに付いていけない。

というか、まともに張り合えるのは、もう一つの大嵐の元であるボスクらいなものだろう。

そして、それは間もなく実証されることとなった。



## 65・セオ（後編）（後書き）

次回予告：ボスにヘリを威嚇砲撃した報告をするジャザナイア隊長。  
その言い訳にミシエルはひとり焦るばかりで……。

第66話「未確認飛行物体」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチ  
ッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

## 66 未確認飛行物体

ディケンズ本社へのりを威嚇砲撃してから三日後の朝。

私は城の廊下を歩いていた。

押しているワゴンの上の皿は空っぽ。朝食ミッションは無事完了。次の仕事はこれらを洗うことだ。

途中、人の話し声を耳にして足を止める。

これはジャザナイア隊長の声だ。そして、聞こえてきたのはボスの執務室からだ。

扉が完全に閉まっていない。隊長の仕業とみて間違いない。こういう細かいところをあまり気にしないのが彼でもある。

言葉の端を聞きつけた私は、ワゴンを壁に寄せ、扉に寄り添った。ボスへ向けられたジャズ隊長の声を聞いて、耳を疑う。交わされているのは、この間の事件の話。

「それが残弾数不一致の理由か」

答えるボスの声は冷たくて深い。これは嵐の前の静けさだ。

「ああ。U・F・Oに一発かましたんだ」

対照的に明るい隊長の声。

しかも微妙に事実と違っている。確かに、隊長にとっては未確認飛行物体だったわけだけだ。

それにしても、なんで今そのことを話しているんだろう。ボスに報告する際には、一緒にとお願いしていたのに。

なんといつでも本社のへりが来ることになったわけは、私にあるのだから。CEOの言葉を安請け合いましたせいなのだ。

その時、隊長は随分渋っていたけど、最後には了解してくれた。今日の午後に二人でボスに報告する予定のはずだった。

一応腕時計を確認する。まだ十時にもなっていない。思いつきりフラッシングだ。

「ほう。それはどんな形をしていた？」

「えっと、スワロフスキー型だったぜ」

U・F・Oってそんな形があったっけ。

なんだか隊長、苦しい言い訳になってきたんじゃないだろうか。本人が自覚しているかは不明だ。声のトーンはまるっきり変わっていないし。

「……アダムスキー型のことか」

ボスの声、心なしか震えているような。

「さすがボス。物知りだな！」

隊長の声と重なる大きな打撃音。ボスがデスクを叩いたようだ。

「ざけんな。お前が狙ったのはヘリコプターだろうが」

やばい展開だ。

でも、なんでボスがそんなことを知っているんだろう。その時は城にはいなかったはずなのに。

その疑問はボス自身の言葉ですぐに答えが出た。

「レーダーに機影がくつきりだ。三日前、俺が行っていたのは本社の技術開発局。最新鋭のレーダー実験会だ」

「ゲエ……」

ジャズ隊長の押し潰れた悲鳴と私の心の悲鳴は一致していた。

「くだらねえ嘘だな」

ボスが席を立ち、近付いてくる。このままではまずい。

足音を耳にして、いてもたってもいられず、私は部屋の中に飛び込んでいた。

「待ってください、ボス」

ジャズ隊長の前に立ってボスと向かい合う。

鋭い眼光が射抜くが、構っていられない。私がしでかしたことで、ジャズ隊長が犠牲になるなんて間違っている。

「なんで出てくんだ、マイケル」

隊長は後ろから私の肩を掴んで下がらせようとする。私は彼へと振り返った。

「話が違います、隊長。報告には僕も立ち合わせてもらおう約束じゃ

ないですか」

「どつちにしたって、あいつの怒りは変わらねえ」

「でも……」

言いかけた私を突然、肩を掴んでいた隊長が横に押し出す。

耳の辺りに風を感じた直後、派手な音を立てて壁にぶつかる物を目にした。

床に落ちたのは、デスクにあつたはずの獅子をかたどった書類を  
押さえるための重石。

背後からのスローイング。隊長が押ししてくれたお陰で当たらずに  
済んだのだ。

「邪魔だ。うせろ」

高圧的なボスの声。

振り向くと、腕を組んで私を睨みつけていた。自分自身を奮い立  
たせながら、私は一歩前に出た。

「聞いてください、ボス。原因は僕にあるんです」

「ちよつと待て」

ジャズ隊長が慌てたように私の右腕を取った。腕を振ってそれを  
払おうとする。

「重要なのは結果だ」

ボスは冷たく言い放った。

「領空を侵せば落とされて当然。それが何処の機体だろうとな」

この人は、三日前に城を訪れたのがヘリコプター、それが本社の  
ものだ知っているのだ。私は確信しながら、ぞつとした。

「これ以上、おれに恥をかかせるな」

ジャズ隊長はそう言って、抵抗を忘れた私を引きずるようにして  
扉へ向った。

外の廊下へと突き飛ばされ、尻餅をつく。起き上がる暇もなく、  
扉は閉じられていた。飛び起きてノブを回しても開かない。内側か  
ら鍵をかけられている。

「ジャズ隊長！」

叫んで扉を拳で叩いたが、返事はなかった。そばに耳を寄せても何も聞き取れない。隙間があれば届く物音も今は阻まれている。それでもボスが銃を使ったなら、その銃声くらいは聞き取れるはずだ。大きな音が特徴の衝撃銃なら、間違いない。ショック・バルス・ランチャー問題なのはそんな音を耳にしても、扉の先にはいけないことだ。すぐに助け出すことはできない。静か過ぎる廊下で気を揉むばかりだ。隊長のことが気がかりで、その場から放れることができなかった。

二十分ほど経って、扉が内側から開いた。

廊下に出てきたジャザナイア隊長を目にしてほっとする。無事だ。彼は私を見つめ、目を丸くした。

「まだいたのか、マイケル」

「だって、僕の尻拭いのために隊長の身に何かあったら……」

私の頭に手をやり、彼はにこやかに笑う。  
「気にすんな。こんなの日常茶飯事だ。部下を守るのもおれの仕事だからな」

頭をぽんぽんと叩かれながら、私は白い歯をこぼす隊長を見上げた。

笑顔が眩しい。細められた緑色の瞳は愛情深さに溢れている。赤い巻き毛も豊かな感情を表しているようだ。肩幅も思ったより広いことに気付く。この人ってこんな頼りがいのある人だったのだろうか。

「……隊長、惚れそうです」

思わず口走った言葉。彼はぎょっとして手を引つ込めた。

「おれは男には興味ねえぞ」

軽く笑顔を引きつらせている。

そういう意味ではなかったのに。彼が男だからとか、私が本当は女だからとか、そんなことではない。一人の人間として尊敬に値すると思っただけだ。あのボスに真正面に向き合うことができる、数少ない人物に違いないのだから。

隊長は私に背を向けた。

「もちろん。人としてつてことですよ」

私の言葉に振り向いて、分かっているといわんばかりに頷く。笑顔が戻る。

「早く仕事に戻れ。あいつに怒るタイミングを与えねえためにもな」隊長の言葉に従って、私は壁に寄せたワゴンに手をかける。

そして、隊長が向ったのとは反対の方向にある厨房へと歩き出す。私はほっとしていた。この時は、ヘリへの威嚇砲撃の問題は解決したものだと思っていたのだ。

ジャズ隊長が無事に執務室から脱出を果たしたことから見ても、間違いないと思っていた。あのボスが納得せずに隊長を帰すはずがないのだから。

## 66 未確認飛行物体（後書き）

次回予告：城の庭を工事している作業員。だけど、この人たちって見覚えが。シヨベルカーを操縦しているのって……。

第67話「マステイマ式勤労奉仕」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

## 67・マスティマ式勤労奉仕

それは、ジャザナイア隊長がボスへの報告を終えた翌日の午後のこと。

厨房のゴミをまとめた私は、城の外へ運び出そうとしていた。両手には満杯のゴミ袋。それを所定の場所に置きに行くのだ。

扉にはめ込まれたガラス窓から空を見上げる。一面重い灰色の雲。見るからに寒そうだ。

早く目的を果たそうと庭に踏み出す。そして、騒がしい音に気付いた。

重機の音だ。サイズは小さいが、シヨベルカーが庭に入り込んでいる。シャベルやつるはしを持った、作業服を着た人たちが地面を掘り起こしていた。

業者が入るなんて聞いていないけど、私まで連絡が来ないのはいつものことだ。

地面からの寒さ。足元から冷えが上ってきて凍えそうだ。早く暖房の効いた部屋に戻りたい。

城を取り囲む塀の傍のゴミ置き場に急ぎ、始末する。身を切るような一陣の風に思わず足が止まり、体をすくめてしまう。続いて「くちん」と子犬みたいなくしゃみが出た。

「そんな薄着で大丈夫かあ？」  
聞いたことのある声が出た。

私は首をめぐらせて啞然とする。キャタピラーを軋ませて近付いてくる白いカラーリングのミニシヨベルカー。それを操作する人、ヘルメットに灰色の作業着のこの人はジャザナイア隊長ではないか。彼はシヨベルカーを横付けにした。

着ておけと上着を脱いで放る。内側にボアのついた紺色のウインドブレーカーだ。

そんなことをしたら隊長が寒いんじゃないかと思っただが、取り越



し苦労だった。中綿入りのジャンパーの下に重ね着をしているように着膨れている。他の作業員の人たちと比べて、明らかに着すぎだ。とりあえず礼を言つて袖を通す。まったく別次元。温かさ格別だ。「何をやってるんですか、隊長……」

気を取り直して尋ねる。白いヘルメットには安全第一なんて書いてあるし、足元はゴム長靴だ。

「何って新しい訓練場を作ってたんだ」

「隊長がですか？」

答えが腑に落ちない。仮にもマステイマのナンバーツー、部隊長である人だ。こんな土方に借り出されていいはずの人ではない。

彼は片手で髪に触れた。私はその行動に釘付けになる。こういう行動を取るときの隊長って、パターンがあるような気がする。

「ボランテアだって！」

じとつとした私の視線にたまりかねたように声を上げる。ますます怪しい。

「まさかジャズ隊長、この間のへりのことと関係あるわけじゃないですよね？」

「なんのことだあ？」

やっぱりだ。しらばくれて。後ろ頭をかく仕草からしてみても不自然だ。

「隊長」

詰め寄る私に、これ以上は無駄だと判断したらしい。

座席にかけていた黒い制服のコートのポケットに手をつ込むと、私に向かって何かを放り投げた。小石ほどの大きさのそれを慌てて受け止める。

「幸運のアイテムだ」

彼の言葉に、そつと包み込んだ両手を解くと、そこにあったのは十ペンスのイギリス硬貨だった。

裏返して愕然とする。表と同じ柄、頭に王冠を載せた獅子のデザイン。両面とも表だ。

「まさか、これでボスを？」

頭がくらくらしてきた。こんなものであの人を丸め込んだなんてそんなことがばれたりしたらって考えたりしないのだろうか、この人は。

「グレイに貰ったんだ。両面裏もあるんだぞ」

得意げに言っているが、そんな問題でもない。

「だから、ボランティアなんだ。なあ」

隊長は後ろを振り返って言う。

いつの間にか向こうにいた作業員達がシヨベルカーの周りに集まっていた。

「終わってからの飲み会が楽しみで」

「隊長、ご馳走になります」

異口同音の五人の男達。シャベルやつるはしを肩に乗せて。

よく見ると彼らもまた見覚えのある顔だ。マステイマの隊員たちではないか。体格のいい彼らは本職の人たちと比べても遜色無しだ。「この仕事なくしても土方で食っていけるぞ」

隊長の言葉に皆はどつと笑い声を上げた。

「さあ、ランチャーの弾代稼ぐまで、もうひと踏ん張りだ」

弾代稼ぐって……それはすでにボランティアですらないと思うのだけど、皆笑顔を見せて楽しそうだ。片拳を上げて皆を鼓舞する隊長。まさに体育会系のノリ。

この間の事件の関係なら、私も働くべきだと思ったが、それはジャズ隊長に一蹴された。

「お前は休んだことなんてねえし、いつもが無償奉仕みたいなものだろ」と。

聞けば、ジャズ隊長を始め彼らは一様に休暇中で、“ボランティア”の後の親睦会を目当てに、集っているらしい。

つまり、昨日今日から始まったことではないということだ。

城の修復を名目にバルコニーを作ったとき、手際が良かったわけを知る。

あのボスが気付いていないはずはない。隊長に付き合って、あの人なりに折れているということなのだろう。

そう考えると、いつもは滅茶苦茶でも、やっぱりボスなんだなと思う。……とはいっても、感心しているわけではない。そんなことは決してない。

「今日は寒いし、終わったたらホットウイスキーで一杯やるか」  
そう言って隊長たちは盛り上がる。

「日本酒の熱燗っていう手もありますよ」  
私は口を添える。

先日、取り寄せた料理用の日本酒。何故か来たのは大吟醸の一升瓶。料理酒に使うのもはばれる名酒中の名酒。

冷え切った彼らの体を温めるのに使えるなら、これ以上のことはない。

両方味わおう。彼らの結論はこうだった。

ジャズ隊長の自室を開放してのお疲れ様会。ボスの夕食前までには返してもらったことを約束して、保温機能付きのワゴンを貸し出した。これで、熱燗だって冷めることなくばっちりだ。

こうして、ようやく「本社へり威嚇砲撃事件」の幕は下りたのだった。

## 67・マステイマ式勤労奉仕（後書き）

次回予告：いよいよ始まったパーティ。腕の見せ所とミシエルは奮闘する。皆楽しんでる様子だが、例外がいるようで……。

第68話「クリスマス・パーティ」

？

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

## 68・クリスマス・パーティ

クリスマスパーティ本番当日。

制服を身に着けたままの隊員たちで会場は黒一色だ。

賑やかさはいつも以上。忙しいのは夢を超えている。会場と厨房を何度往復しただろう。

皆には、温かくてできたての料理を食べてもらいたいから、これは仕方ない。厨房のガスコンロもオーブンもフル稼働だ。

横目でしか様子は見ていないが、最初から盛り上がっているようだ。

グレイは器用にもトランプやコインを使ったマジックを披露していたし、レイバンはいきなりお菓子の場所に寄ってきていた。

ジャザナイア隊長の大きな笑い声は絶えず聞こえていたから、上機嫌に違いない。

アビゲイルはオスカーと一緒に出席していた。プリシラも来ていて、手を振り合った。赤色のワンピース姿が会場に色を添える。

隊員たちからエンジェルと呼ばれて、すでに沢山のプレゼントを受け取っていた。マスコットキャラクターのような人気だ。

私はボスの夕食を運んでいた。くしくも夢の中と同じ配置だ。

ボス本人の姿はまだ見えないが、料理はすぐにも出せる状態だ。八時に来る予定だとアビゲイルは言っていた。あと一、二分でその時間。あの人が予定の時間に遅れることはほとんどない。

扉が開いた。ボスが現れた。

彼はその場で立ち止まる。あまりの賑わいに驚いているのか入ってこようとしない。何故だろうと思って見ていると、私の傍にいたアビゲイルが苦笑を浮かべていた。

なんだか妙な雰囲気だ。

「何の騒ぎだ」

隊員たちを見回して言う。低いがよく通る声に皆が振り返り、動

きを止める。

ボスは左右に分かれた人たちでできた道を抜けて、こちらへ歩いてきた。

「アビゲイル」

「何ってクリスマスパーティーよ。年に一度のお楽しみじゃないの」  
彼女の口ぶりは見たら分かるでしょうと言わんばかりだ。だけどボスは納得していない。

あちこちに目をやって、更なる金縛りの人を増やしていく。視線で人を石化するという伝説の生き物、バシリスクのようだ。

だが、アビゲイルには免疫があるためか、まったく通用していない。澄ました顔のままだ。

「ボスの好きな物をマイケルに用意してもらったのよ。席はあつちね」

「聞いてねえ」

テーブルを示しての言葉に、ボスは苛立ちを見せる。  
アビゲイルは肩をすくめた。

「そんなはずはないわ」

彼女は上着のポケットから折りたたんだ紙を取り出した。それを開いて彼の前に掲げる。まるで日本の時代劇で見たご隠居様の印籠のようだ。

「本社に提出した書類の控え。あなたのサインだってちゃんとある。クリスマスパーティーの承認書よ」

アビゲイルの余裕たつぷりの声。

ボスはそれに目を近づけると唸った。

「こんなもん、いつの間に」

覚えていないようだが、私には心当たりがある。

休暇明けにボスに挨拶に行った晩のこと。体格のことを言われて、挑発に乗ってしまった私を押し倒したときだ。あの時、アビゲイルが決裁のサインを求めてやってきた。きっとその時の書類だ。

本物であるかどうか疑っているようだ。ボスは手にとって調べて

いる。だけど、それは間違いなく彼のサインだ。私もペンを取るところを見たもの。

「本社からO・Kは取れているし、経費で出るわ。今さら止める？ 皆楽しんでるのに」

こういうやりとりを聞いてみると、アビゲイルとジャズ隊長はやっぱり姉弟だなって思う。悔やむなら、やってしまった後にしろってタイプだ。

ボスは渋い顔をして辺りを睨みつけていたが、止める理由を思いつかなかったらしい。

なんと言ってもサインをないことはできない。ろくに見もせず署名したことは彼の問題であって、そんな理由で書類は無効にはならないということだ。

入り口に向きかけたボスの足が止まる。引き返してきて、見事な仏頂面のまま席に着いた。

どうしてだろうと扉のほうを見やると、前にはプリシラがいるではないか。彼女はグレイと話している。気付かれずに扉を通り抜けることは、いくらボスでも不可能だ。彼女がいるのはドアノブの真下辺りだ。

「おい」

しかめっ面のボスの視線が私に移る。

慌ててワゴンにセットされた鍋から料理を皿に盛る。スパゲッティ・アラビアータ、伸びていないと良いけど。あとはパン、野菜の甘酢煮、仔羊の香草焼きだ。

本来なら進み具合を見ながら、一品ずつ出していくのだが、今日他にもやるのが沢山ある。これらの料理は今までも出したこともあるし、この場を離れても大丈夫だろう。

皿を並べ終わるとテーブルを離れる。ビュッフェの料理はまだ途中だ。あと三品残っている。それを出し終えれば区切りがつく。

ワゴンを押して会場を突っ切っていく。

料理が美味しいと褒めてくれる人、一休みして飲まないかと声を

かけてくれる人もいる。

私は礼を言いながら、あと少しだからと断りを入れる。早く片付けて皆と合流したい。

扉にたどり着くと、前ではまだグレイとプリシラが話していた。

プリシラは貰ったプレゼントが気に入らないようだ。可愛いウサギのぬいぐるみをグレイに押し付けている。

「プリが好きなのって、これだったけ？」

グレイはどこからか掌ほどの袋を取り出して、彼女に渡している。プリシラはそれを開けるなり、声を上げた。

「キュート！ ねえ、ミシエール」

通りかかる私は、声をかけられてぎょっとする。

ミシエールって殆ど私の本名だ。だけど子供の言い様。グレイは気にも留めていないようだった。

良かった。ほっとする私に、グレイから貰った人形をつき出して見せる。

この造形、私にはとてもキュートには思えないけれど。どっちかと言えばクールが近いかな。

彼女が手にしているのは、確か日本映画に出てくる怪獣のキャラクタ―だ。名前はゴツドジラーだった。恐竜ティラノサウルスの大型版のような姿。黒い皮膚と突き出した背びれが特徴。爬虫類には珍しい白目が凶悪さを象徴している。

プリシラは人形を振り回しながら、鳴き真似をして遊んでいる。気に入っているようだ。

ウサギのぬいぐるみより、こんな怪獣が良いなんてユニークだ。それに真似をしている彼女の可愛いことと言ったら。

ボスに抱っこをせがむこの子の心理がなんとなく分かった気がする。ボスの乱暴さは怪獣級だということだろう。もしかして、彼女なら言うんじゃないだろうか。ボスをキュートだと。

私はくすくすと笑いをもらしながら、ワゴンを押して外に出た。

あと少しだから頑張ろうっと。やる気が沸き起こる。プリシラか



ら元気を貰った気がした。

## 68・クリスマス・パーティ（後書き）

次回予告：クリスマス・プレゼント。よりにもよって、何故この人に渡すことになったのか。ミシエルは気が進まないままに……。

### 第69話「プレゼント交換」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

## 69. プレゼント交換

全ての料理を出し切り、とりあえずの仕事は終わった。

ワゴンの下の段に乗せていたプレゼントを取り出す。さあ交換会だと意気込む私に残念なお知らせが。

たった今終わったらしい。皆が持っているのは交換後のプレゼントなのだ。

さすがにがっかりだ。ロンドンまで行って買ったものなのに。マステイマの人ならきつと喜んでくれるものだと思うのに。

「プレゼントをもらっていない人がいるのよ。その人にあげたら？」  
アビゲイルが声をかけてきた。

私が持っていたって仕方ないし、そうしよう。

彼女は私の腕を絡めて歩き出した。

片手に大きな紙袋を手をしている。プレゼントが満載だ。それに目を落としていると、アビゲイルは照れたように笑った。

「人妻なのに、ありがたいことよね」

膨れ上がった紙袋。隊員たちの中での人気が分かる。納得だ。アビゲイルは綺麗だし優しいし仕事もできる、女である私でも憧れる人だ。

彼女と私は人の間をすり抜け、奥に進む。

なんだか、この方向ってまずい気がする。足をとめた彼女の傍で強張る。

ワインの空き瓶が乗ったテーブル。その向こうの椅子には、こっちを見つめるボスの姿。

酔っ払ってるのか目が据わってる気がする。いや、この人の目つきが悪さは素面のときでも変わらないか。

「ボス、マイケルからクリスマス・プレゼントですって。受け取ってあげて頂戴」

アビゲイルの言葉に息が止まりそうになる。

まるで、私がボスのために用意したみたいなきさま。そんなことはありえないのに。

確かにグレイじゃなければ、ボスに似合うかもってちらっと思ったけど。本当に渡すつもりなんてなかった。

ボスは無言で私たちを睨みつける。「そんなもん、いるか」ってテレパシーでも伝わってきそうだ。

「こういう時はノリ良く受け取るものよ」

構わず、アビゲイルは私を前に押し出す。こうなったら、もう渡すしかないじゃないか。

私は恐る恐る包装された箱を差し出した。

ボスは私の顔を見上げたまま動かない。結ばれたままの唇。下から挑むように見つめる瞳は、私を追い詰めるだけだ。

こういう時ってどうすればいいんだろう。プレゼントを引くべきか、押し付けるべきだろうか。焦り始めた私に近付いてきたのはジャザナイア隊長だ。

彼は刺繍の入った白いシャツを身に着けていた。カトルマンと言ったんだろうか、フェルト製で革の飾り紐の付いたハットをかぶっている。ウエスタンススタイルだ。

さつき見たときにはなかったものだ。とすれば、これらはプレゼントだろう。早速着用しているなんて隊長らしい。それに束ねた赤毛に映えて、とても似合ってる。

私のプレゼントに目をとめた彼は、笑顔を見せた。

「ボスにもプレゼントか。いいな。いらねえんからおれが貰うぞ」

ジャズ隊長の言葉にボスの眉がびくりと動く。箱を手を取った。人から欲しいと言われたら、惜しくなる心理に陥ったようだ。

「レイバン」

ボスは私の背後を見やって声をかける。

振り返ると、レイバンが紙袋を提げて立っていた。ボスに渡すつもりだったのだろう。彼は名前を呼ばれて、喜び勇んで私の隣に並んだ。

「代わりにそれをやれ」

ボスの言葉に彼は硬直する。

まるで機械仕掛けの人形のように、ぎこちなく動いて、こちらを見下ろす。

ボスのためのプレゼントのはずなのに。そんな物を受け取るなんてできるわけがない。

「気持ちだけでいいです」

私は精一杯の笑顔で、その場を切り抜けようとする。レイバンはあからさまに安堵の表情だ。紙袋をボスに差し出す。

ボスは黙って受け取ると、テーブルの上を滑らせた。止まったのはジャズ隊長のまん前だ。

「二つもいらねえ」

あんまりな言葉だ。レイバンはショックのあまり顔面蒼白になっている。

「じゃ遠慮なく」

手を伸ばす隊長。本当に遠慮なしだ。

ボスもボスなら、隊長も隊長だ。レイバンの視線が私に下りてくる。彼は唇をへの字に曲げていた。プルプルと震えながら私の肩に手を置く。

気にするなと言うことだろうが、表情が全てを物語っている。彼は後ろからでも分かるほど肩を落として去って行った。

「毎度のことなのに落ち込むわね」

アビゲイルの声に同情の色はない。

「おれ、また貰っちゃったぞ」

ジャズ隊長もそう言いながら、まるで気にしている様子がない。この人たち、同じようなことを毎年繰り返してるんだらうか。

私の考えをよそにボスが箱の包装を破りだす。パーティが終わってからそつと開けてもらいたかったのに。あんなオモチャ見て怒り出したらどうしよう。

箱から取り出して、テーブルに置いた射的と銃。

彼は眉を寄せた。何も言わずに射的の底にあるスイッチを捜して入れている。

途端に警報音と繰り返し返しの音声が鳴り響く。

「午後九時二十八分。侵入者アリ、侵入者アリ。撃退セヨ」

ボスはオモチャの銃を取ると引き金を引く。効果音の銃声と共にアラームが止まった。

「へえ、目覚ましか。いいな」

隊長はうらやましげに言う。

私はというとボスの恐ろしい反応を予想して、耐え切れずに逃げ出していた。離れた場所から様子を窺う。

ボスはテーブルの離れたところに的を置き直して、射撃を続けている。

「面白れーの。ボスも気に入ってんな」

グレイが笑いながら近付いてきて言う。

私には本当にそうなのか判断がつかない。顔を見てもほとんど無表情だし、楽しんでいるようには見えないのだけど。

そういえば、あの人の笑った顔なんて一度も見たことがない。っていうか、笑ったりするんだろうか。

「ミシエール、ボスはまだお仕事？」

いつの間に近寄ってきたのだろう。プリシラが私の白衣の裾を引っ張る。近くには父親であるオスカーもいた。

私は彼女の顔と並ぶように腰を落とした。

「もうちよつとかかるかな。ボスは忙しい人だから」

仕事が忙しいから抱っこは辛抱しなさい。母親であるアビゲイルからもずつとそう言われてきたのだ。良心が痛むけれど、彼女を傷つけないためだ。

「プリシラ、がまんできるよ。だってお願いしたんだもん」

きゅっと愛らしい唇を引き絞って言う。

「サンタさんをお願いしたもん。ボスの抱っこプレゼントしてって」  
グレイはぶつと噴出して慌てて唇を手で覆った。ぎよつとしたよ

うに娘を見下ろしているのはオスカーだ。

それはそうだろう。クリスマス・プレゼントをそつと用意するのは親の役目だ。

私はというと、彼女のけなげさに胸を打たれていた。私がサンタなら、クリスマスの奇跡でもなんでも使って、プリシラの望みを叶えてあげるのに。

現実には非常に実現の難しい願いだ。

「プリシラ、動くゴッドジラーのオモチャが欲しいんじゃないのかい？　がおーって言って火を噴くやつ」

オスカーは慌てて娘に尋ねる。それにしてもまた随分とデンジャラスなオモチャだ。

プリシラは真剣な顔で考え込んだ。大きな葛藤が渦巻いているらしい。今、彼女の中では、ボスと火を噴く怪物が天秤にかけられている。

「いつそボスに着ぐるみ着てもらったらいいんじゃない？」

グレイがにやけを隠せないまま、小さい声で口にする。

オスカーは仰天していた。プリシラに余計なことを聞かせまいとするように、彼女を掻き寄せる。

私もボスの着ぐるみ姿を想像してしまった。口の辺りから顔を覗かせた神妙な顔つきのボスを。

ドツボにはまって動けなくなる大人たちを不思議そうに見上げるプリシラ。彼女を囲む三つの壁を幸いにしてか、当のボスはいつの間にか姿を消していた。

そうして、ほどなくパーティは終わりを迎える。

## 69・プレゼント交換（後書き）

次回予告：朝、ボスの部屋から聞こえてきた銃声。踏み込んだミシエルの目の前で明らかになったのは……。

第70話（最終回）「パーティー後日談」

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）



## 70・パーティ後日談

クリスマス・パーティ翌日の早朝、サプライズがあった。

部屋の表のドアノブにプレゼントが釣り下がっていたのだ。入れ物の黒いブーツは本物の革製のもの。本格的だ。

新品っぽいが一応匂いを嗅いでみた。だって臭かったら嫌だもの。良かった。真新しい革の匂いだ。もらい物だから、あとで返しに来て欲しいとメモがあった。ジャザナイア隊長からの伝言だ。

じゃあ、これは隊長から？ プレゼント交換を逃して、ちよつとばかり落ち込んでいた私のテンションが一気に回復した。包装紙まで大事に思えて、丁寧に包みを解いた。

赤いマフラーだ。肌触りも良くて温かそう。

ジャズ隊長以下、隊員皆からの気持ちだとカードが添えられていた。

じんと熱いものが胸にこみ上げてくる。私を認めてくれる人たちがいることを心強く思った。同時にこれからも頑張らなければと気合も高まる。

部屋に戻ってマフラーを大切にしまう。

さあ、仕事だ。仕事。朝ご飯の支度をしなければ。いつも以上に気持ちが入る。

静まり返った廊下に、変わらない景色。

昨日のことなのに、クリスマスパーティがあったことさえ夢のようだ。毎日の仕事が果てしなく続いていくような錯覚。

年の終わりにつきものである慌しさもマステイマには無縁のもの。元々、曜日なんて関係ないし、カレンダーもあってないようなものなのだから。

ちなみにクリスマス休暇なんてのもない。

アビゲイルに尋ねたら、新入りは日を改めて取ることになっているといふ答えだった。イタリアに里帰りできる日はいつになるのや

私はワゴンを押して歩いていった。ボスの食堂の掃除と空気の入れ替え、朝食の食器を取りに行くいつもの作業だ。

窓の外はまだ暗い。イタリアもそうだが、イギリスもまたこの時期は日の出が遅い。

廊下は静けさに包まれている。響いているのはワゴンの車輪の音と私の足音だけ。まるで深夜と変わらない。

と、突然、静寂を打ち破る一発の銃声。聞こえてきたのは目の前の扉。ボスの部屋からだ。

お馴染みの衝撃銃の音ではない。これはボスの愛用するリボルバーの音だ。

私は後先も考えないまま、扉を開け、ボスの部屋に飛び込んだ。起こしに行った隊員に向って撃つたのだろうか。その考えもすぐに違うことが分かる。

手前のリビングにはひと気がなかった。寝室へ続く扉は閉じられたままだ。起こし役の人がいるなら扉は開いているはずだ。最低限の逃げ口の確保は基本中の基本。

だとしたら、ボスの寝込みを狙って入り込んだ人間がいるのか。私は覚悟した。侵入者と鉢合わせになるか、あるいはその死体を目にするようになるのか。どっちにしても、あまりありがたい展開とは言えない。

二発目の銃声や物音を聞き逃すまいと神経を集中して、ノブに手をかける。

「失礼します」

そう言いながら、身構えつつ、素早くボスの寝室の扉を開けた。目に飛び込んできたのは、ベッドの中で体を起こしている彼の姿。布団の上に置かれたその手には、もちろん拳銃が握られていた。

「何があつたんですか、ボス？」

部屋の中には他に誰かいるような気配もない。

踏み出した私の足元で、何かが割れる高い音がした。硬い感触に

足を上げて床を見る。

これって……。

私は何も言うことができず、顔を上げて再びボスを見やった。ボスはそっぽをむいている。微妙な空気が流れる。

私の足元にあるのは、目覚ましである標的のなれの果てだった。砕けたプラスチックの欠片が散らばっている。対のオモチャの銃ではなく、本物の拳銃で打ち抜いてしまったらしい。

「間違えたんですね」

私は息を吐きながら言う。安堵と呆れの混じった溜め息だ。

人騒がせなことだ。おそらく寝ぼけでもして銃を取り違えたのだろつ。

ボスは私に眼を向けた。鋭い視線が飛んでくる。やばいと思った瞬間だった。

「なに勝手に部屋に入ってたんだ？」

言葉が終わらないうちに聞こえた二発目の銃声。私の足元に打ち込まれた弾丸。ボスが発砲したのだ。

決まりの悪さを晴らすために、銃を使うなんてとんでもないことだ。漂う火薬の匂いに、私は口から飛び出そうとする抗議の言葉をぐつとこらえる。

「文句でもあんのか？」

お見通しのボスは、銃を構えながら凄む。

私は唇を固く絞ったまま、首を横に振った。

言いたいことはもちろんあるが、口にしたところでちゃんとは伝わらない。それどころか、言葉を返したことを理由にして、制裁が待っている可能性だってある。

我慢だ、我慢。拳を硬く握り締める。今文句を言っただって良い事なんて一つもない。

私は扉まで戻り、大きく一息深呼吸すると、ボスに向き直った。

「ボス、今日の朝御飯はBLTホットサンドとサラダにポタージュスープ、果物のヨーグルトがけです。食堂でお待ちしています」

思いつきりの笑顔を添えて。

もちろん、返事なんてなかったけれど、彼は銃を持った手を下した。私の反応に苛立つ気分もそがれたように見えた。

廊下に出てから扉を閉めて、その場で両拳を握り締める。

やった。なんだか新たな対処法を生み出した気がする。

いつまでも同じ私だと思っていたら大間違いですよ、ボス。人というものは追い詰められたら、それを切り抜けるために思わぬ力を発揮するものなのだから。

騒ぎに気付いて駆けつけてくる隊員たちに大丈夫だと告げながら、食堂へと向う。

私の足取りは軽かった。ワゴンを押しながら気分は上々。

外はまだ薄暗いが、これから朝が世界を塗り替えてゆく。月も星も光に溶ける。私を感じた明るい見通しのように。

間もなく訪れる新しい年に私は思いを託す。来年もまた良い年になるようにと……。

こうして、一年の終わりという区切りに、このお話もひとまず終わりを迎える。

コックとしての関わりはこれからも続いていくが、それはまた別の機会に。

私は翼を形作る一枚の羽のようなもの。

黒い翼を象徴とするマステイマ。それは決して光の元には姿を現さぬもの。一般の人々の生活には何一つ触れるものを持たず、その眼が捉えるのは漆黒の闇だけ。

物語がいつもめでたしめでたしで終わるとは限らない。

だけど信じたいと思う。私自身を、ボスをジャザナイア隊長を。アビゲイル、グレイにレイバン、そして私を支えてくれる隊員たちを。

これは私の運命。私の選んだ道なのだから

||  
||  
||  
完  
||  
||  
||

## 70・パーティ後日談（後書き）

最終回としましたが、続編を考えていますので掲載した際には第一部完に変更します。

あとがきについては活動報告にて掲載しています。

作者名から作者のページに飛び、活動報告の文字をクリックすると一覧で見られます。

2011年8月7日の記事です。これからの予定なども載せています。興味のある方はどうぞ。

（話の末尾にあるあとがき欄ではちょっと……、かといって、別に一話分に代えて載せるのもどうかと思いましたが、こちらに載せました）

お話を気に入っていただけでしたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

## キャラクター紹介 その1

主人公ミシエル（マイケル）をホスト役にした主要キャラクターの紹介。

マスティマの城の会議室を借りて、始まり始まり。

ミシエル「今日のゲストはマスティマの幹部内で最年少、コーヒーが大好きなグレイです」

グレイ「ども」

ミシエル「グレイのプロフィールは……」

（名前） グレイ

（名付け親） ボス

（組織での役割） 幹部。人材発掘、育成

（容姿） 銀髪、碧眼。右目は髪で隠れて見えない。身長179

cm、体重65kg

（嗜好品） フレンチコーヒー

（好きな食べ物） オニオングラタンスープ

（苦手な食べ物） 甘いもの全般

（尊敬する人） ボス

（趣味） 悪戯、マジック

（特技） 高速ヘアカット

（好きな言葉） 明日は明日の風が吹く

（血液型） AB型

（出身国） （年齢） （誕生日） ??????

ミシエル「え？ 名付け親がボスって、本名じゃないんですか？」

グレイ「マスティマにはそういう奴結構いるんだぜ。ちなみに誕生日も年もシークレット。出身国はここだけの話、フランスって

ことで」

ミシエル「ってことで？ アバウトですね」

グレイ 「ちなみに名前の由来は髪の色らしいぜ」

ミシエル「ちよつと安易な気も。尊敬する人もボスなんですか？」

グレイ 「もちろん。ボスは普通じゃねーもん。あれ以上面白れー人いねーよ」

ミシエル「ボスが面白い？ そういえばグレイはいつもその言葉を口にしますね」

グレイ 「世の中は面白れーこと満載。どんな人間でも捜せば一つくらいあるんだぜ。レイバンのボスに対する忠誠心、あれも面白れーし。ジャズ隊長の懲りねー所も面白れー。ボス自身も常識離れしてるんだ。まさにスーパー・ボスだぜ」

ミシエル「……ちよつと分かった気も。悪戯やマジックもその延長ということでしょうか。それにしても体験して実感したんですけど、ヘアカットは神業です！」

グレイ 「最初は冗談のつもりだったんだけどな。ショーとして成立するためには技術を見せねーと」

ミシエル「根っからのショーマンですね。話は変わりますが、コーヒー好きですよ。もう中毒の範囲ではないかと思うんですが」

グレイ 「そーかもな。しばらく飲まねーと頭痛がするし、体のだるくなるんだよな」

ミシエル「完璧なカフェイン中毒では？」

グレイ 「昔はヘビースモーカーだったんだよ。卒業した反動でコーヒーに走つちまったんだな」

ミシエル「ボスのエスプレッソ・マシンを持ち出したこともあるとか」

グレイ 「高級だから絶対美味しいコーヒーができると思ったんだけど、オレには濃いすぎ。エスプレッソは好きじゃねー」

ミシエル「ボスは相当怒ったのでは」

グレイ 「証拠なんて残さねーもん。ま、オレだとは思ってるん



だろうけど。ボスは確証なしではまず怒らねーし」

ミシエル「そうなんですか？」

グレイ「そーゆー人だよ。もひとつ、いーこと教えてやるつか。何かしてかすときには、ボスが怒る相手を絞った後を狙え。そいつが割を食うから、こっちは安全なんだ」

ミシエル（割を食うって……。それは使っちゃまずいんじゃない）

グレイ「面白れーを見つけるにはまず観察から。これ基本だけ」

ミシエル「それはなんとか参考になりそう（汗）。グレイ、ありがとございました」

《他のキャラからグレイへの一言》

ジャザナイア……若えんだからもっと青春しようぜ

レイバン……亀の甲より年の功という言葉があるんだが

アビゲイル……今のうちに修行を積んで良い男に育ってね

ミシエル……すきっ腹にコーヒーは胃に悪いですよ

デイヴィッド……エスプレッソ・マシン、やっぱりお前か

《グレイについて作者のつぶやき》

登場回数は少ないわけじゃないのに、他のキャラが濃すぎて実は影薄いかも。今は要領良く立ち回っている彼も過去には色々あったという設定。

## キャラクター紹介 その1（後書き）

キャラクター紹介は全5回の連載でお届けする予定です。

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

## キャラクター紹介 その2

主人公ミシエル（マイケル）をホスト役にした主要キャラクターの紹介、第二弾。

マステイマの城の会議室を借りて、始まり始まり。

ミシエル「今日のゲストは、マステイマでナンバーツー。実行部隊のジャザナイア隊長です」

ジャズ「おっす！」

ミシエル「ジャズ隊長のプロフィールは……」

- (名前) ジャザナイア
- (組織での仕事) 幹部。実行部隊・隊長。
- (容姿) 赤い巻き毛の長髪。緑眼。身長183センチ、体重68kg
- (趣味) 仲間内での賭けごと。動物もののドキュメンタリー番組の鑑賞。ウエスタンスタイル好き
- (特技) 投げ縄
- (好きな食べ物) ミートローフ
- (好きなお酒) 一番はビール
- (好きな言葉) あとは野となれ山となれ
- (年齢) (生年月日) ??????
- (血液型) O型
- (出身国) アメリカ

ミシエル「ジャズ隊長の髪はパーマ当てたみたいで格好良いですね」

ジャズ「そうだろ。おれのチャームポイントだ。なんといつても派手さが一番！」

ミシエル「ボスに切られたこともあったり」

ジャズ「そんなこともあったなあ。もう伸びたし、気にしてねえけど」

ミシエル「隊長はボスの次に偉い人ですけど、大変なことって多いですか？」

ジャズ「うーん。色々あるけど、まあ、やっていけるからな。終わりよければ全てよしってやつだ」

ミシエル（どこが終わりなんだろう）

「えっと、ボスと旨くやっていくコツってありますか？」

ジャズ「考えすぎねえことだな。思ったままにバーンとぶつかっていく。人間ってやつは全身全霊でぶつかれば必ず伝わるもんだぜ」

ミシエル（それは随分勇気がいりそうな）

「……賭け事、好きですよな」

ジャズ「仕事の楽しみ方だよな。ボスの目覚まし係の結末とか、任務での使用弾薬の数とか、会議の休憩にコーヒーが出てくるまでの時間とか。なんでも対象になるからな」

ミシエル「そんなことまで（汗）。今度コーヒー持って行くときに緊張してしまいそうです」

ジャズ「お前は真面目だなあ（笑）。もっと気楽に行こうぜ」

ミシエル（笑い声大きすぎ）

「隊長の笑い声って特徴的ですな」

ジャズ「そうかあ？　そういうえば、昔アビーに怒られたこともあったつけ。あんたが先に笑うから私が笑えなくなるって。八つ当たりだよなあ」

ミシエル（アビゲイルの気持ち、よく分かります）

「ボスにも怒られたりしてましたよな」

ジャズ「神経質なところがあるからなあ。けど、あいつがいねえとしまらねえ。組織の文鎮みたいなものだな」

ミシエル（文鎮？　分かるような分からないような）

「動物もののドキュメンタリー番組を見るのが楽しみだとか。お気に入りの動物ってありますか」

ジャズ 「コアリクイ。威嚇のポーズがキュートだぜ」

ミシエル「？」

ジャズ 「キリンの喧嘩もダイナミックだ」

ミシエル（それは好きな動物と違うんじゃないか）

「特技の投げ縄って、カウボーイがやるやつですか」

ジャズ 「ああ。子供の頃は子牛を捕まえたりしてたんだぜ。今は仕事にも活用できてるし、人生何が役に立つかわからねえな」

ミシエル「馬に乗ってやるんじゃないんですか？」

ジャズ 「バイクで我慢だ。任務には連れて行けねえもんな。城で飼おうとしたらボスに却下されたし」

ミシエル「それはボスが正しいと思います」

ジャズ 「今でもうちは十分動物園だって。ひでえよな。せめてサファリ・パークくらい言ってもらいたいぜ」

ミシエル（？）

「それだけ皆さんが個性的ってことですよ、きつと」

ジャズ 「そうかあ？」

ミシエル「そろそろ時間です。ジャズ隊長、ありがとございませした」

ジャズ 「おっ、もうか。お疲れさん！」

《他のキャラからジャザナイアに一言》

グレイ……隊長、いっつも髪何処で切ってるの？

レイバン……ボスの片腕が務まるのは尊敬に値する

ミシエル……隊長が怒っていると見たことないです

アビゲイル……ボスと一緒にマステイマを盛り上げなさい

デイヴィッド……訓練と称した遊びは許さねえ

《ジャザナイアについて作者のつぶやき》  
ボスとの対比を出したくて、こんなキャラに。書いていて気分がア  
ガってくるムードメーカー的存在。

## キャラクター紹介 その2 (後書き)

お話を気に入っていただけでしたら、下のランキングの文字をポチ  
ッとお願ひします (ランキングの表示はPCのみです)

### キャラクター紹介 その3

主人公ミシエル（マイケル）をホスト役にした主要キャラクターの紹介、第三弾。

マステイマの城の会議室を借りて、始まり始まり。

ミシエル「今日のゲストは、総務担当で医師でもあるアビゲイルです」

アビー「はい」

ミシエル「アビゲイルのプロフィールは……」

- (名前) アビゲイル
- (組織での仕事) 幹部。総務担当。医師。得意分野は外科
- (容姿) 巻き毛の赤い長髪に緑眼。身長168センチ、体重54kg
- (趣味) 夫オスカーへの教育。人間観察
- (特技) 針を使った麻酔。ボスの怒りをかわすこと
- (好きな言葉) 心頭滅却すれば火もまた涼し
- (嫌いな言葉) つい言ってしまう「赤字」
- (好きなもの) 料理はジャンバラヤ
- (嫌いなもの) 人間は言うことを聞いてくれない男
- (年齢) (生年月日) ??????
- (血液型) O型
- (出身国) アメリカ

ミシエル「アビゲイルは医師として以外の仕事も多いですね」

アビー「ボスは人使いが荒いから。ある意味、私がマステイマの顔みたいなものね。ボスの顔を知らなくても私なら知ってるって  
いう外部の人間多いのよ」



ミシエル「小さい子をかかえてるのに大変ですね。疲れたりしませんか？」

アビー「そりゃ疲れる時もあるけど、ここの仕事は面白いわ。刺激的だし。他では味わえない充実感がある。部下達も良い子だしね」

ミシエル「皆、姐さん<sup>ねえ</sup>つて慕つてますもんね」

アビー「嬉しいことね。私にとっては家族みたいなものなの。苦楽を共にする仲間だから。私は自分のできることをやるだけよ」

ミシエル「結婚も職場ですよ。なれそめとか聞かせてもらえませんか？」

アビー「オスカーも人使いの荒いボスの犠牲になっていてね。連続の徹夜で疲れが抜けないときとか、よく医務室にビタミンの点滴を受けに来ていたの。そこで親しくなったのよ」

ミシエル「優しいそうな旦那さんですよ」

アビー「もちろん。でも、男は優しいだけじゃ駄目。技術も兼ね備えてないと、いざって時に頼りにならないわ。だから教育は大事なのよ」

ミシエル「教育ですか？」

アビー「男も家事くらいできなきゃね。オスカーはもともと器用な人だったから、今では料理は私よりも上手なの」

ミシエル「凄いですね。アビゲイルが先生になってですか？」

アビー「子供と同じで褒めて育てるのが一番よ。褒めて悪い気なんてする人いないし、機嫌よくやってくれるわ」

ミシエル「ボスにもその手なんですか？ レイバンやジャズ隊長、それにもちろん私もボスの怒りに触れることがあるわけですけど、アビゲイルはそんなことないみたいだし」

アビー「まさか。私は彼との距離を心得ているだけよ。それに昔のこと握ってたりするから。私に喋られちゃ困ること、あると思うわ。だからじゃないかしら」

ミシエル「わっ、なんだろ。知りたいです」

アビー 「話したら秘密じゃなくなるから、無理なのよね」

ミシエル 「やっぱりそうですね。でも、昔のことって、ボスとはどれくらい前からの付き合いなんですか。ジャズ隊長も同じなんですか？」

アビー 「はつきりとした年数は内緒。ちなみにマステイマ入りはジャズとボスが同時期、私はその後よ」

ミシエル 「秘密が多いですね、マステイマでは」

アビー 「年齢は人物特定には重要な要素だから。好きな年を名乗ればいいんだわ」

ミシエル 「それは女性には嬉しいことですよね」

アビー 「そうよ（笑）。二人で喜びましょう」

ミシエル 「以上で、アビゲイルの紹介でした」

アビー 「上手くしめたわね。上出来！」

《他のキャラからアビゲイルへの一言》

グレイ…… 男の操縦術、半端なさげ

レイバン…… マステイマの花は高嶺の花

ジャザナイア…… なんか尻に敷かれてる気がする

ミシエル…… 女だったらきつと誰でも憧れるプロポーションです

デイヴィッド…… 子供の管理は親の仕事だ

《アビゲイルについて作者のつぶやき》

実は影のボス？ 女性ならではの現実的な視点で多くを把握。彼女がいないとマステイマは金銭的問題で即崩壊の危険性大。

### キャラクター紹介 その3 (後書き)

お話を気に入っていただけでしたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします (ランキングの表示はPCのみです)

## キャラクター紹介 その4

主人公ミシエル（マイケル）をホスト役にした主要キャラクターの紹介、第四弾。

マステイマの城の会議室を借りて、始まり始まり。

ミシエル「今日のゲストは、幹部で最年長、レイバンです」  
レイバン「よろしく頼む」

ミシエル「レイバンのプロフィールは……」

- (名前) レイバン
- (名付け親) グレイ
- (名前の由来) 本当の苗字と名前の一部をくっつけたもの
- (組織での仕事) 幹部。アジトである城の警備主任
- (容姿) 短い金髪に浅黒い肌。左頬に横一直線の傷跡。身長206センチ、体重88kg
- (趣味) ボスのプロマイド作成と収集。筋肉トレーニング
- (特技) ドッグトレーニング
- (尊敬する人物) ボス
- (好きな言葉) ボスは偉大だ
- (好きな食べ物) 甘いもの。特にザッハトルテ
- (嫌いな食べ物) 苦いもの、辛いもの
- (安らぎの時間) 愛犬マリアとのひととき
- (年齢) (生年月日) ??????
- (血液型) B型
- (出身国) ドイツ

ミシエル「レイバンは甘いものが大好きですよ。なのに、贅肉なしなんてうらやましいです」

レイバン「日ごろのトレーニングの賜物だ。鍛錬は毎日。一日休めば取り戻すのには三日かかるのだぞ」

ミシエル（見た目どおりの体育会系だー）

「いつもグレイと一緒に食堂に来ますね」

レイバン「たまたま休憩時間が一緒になるだけだ。金魚の糞などではないぞ」

ミシエル「そんなこと言ってませんよ（汗）」

レイバン「目がそう言っている」

ミシエル「そんなことありませんよ（冷や汗）。……つと、ボスのプロマイドの出来は素晴らしいですよ」

レイバン「今ではプロ級だ。カメラの撮影技術、画像の補正も完璧だ」

ミシエル「頂いたうちの一枚は映画のポスターのようでした。どうやって撮ってるんですか？」

レイバン「内緒だが、任務の途中でだな、スコープを改造してカメラをつけたもので隠し撮りしているのだ」

ミシエル「任務中ですか（驚）。それはばれたら、かなりまずいのでは？」

レイバン「うむ。見つかって、カメラは何度も壊されたな。殴りも蹴られもしたし。だが、ボスのお姿を留め置いたためだ。尊い犠牲だ」

ミシエル「ボスに撮らせてくださいって言っても、まず無理ですようしね」

レイバン「だが、いつかは分かってくださるはずだ。ボスが写真をちゃんと見てくだされば。自分の真摯な気持ちにも理解を示されるはず」

ミシエル（うわあ。見てもくれないんじゃ、いつまでも理解なんてしてくれるわけないし）

レイバン「いつかマステイマの隊証を作って載せるのが夢なのだ。あの方の偉大さは、言葉だけでは語りつくせんからな」

ミシエル（隊証に？ 四六時中あの目つきの悪いボスと一緒にとか、それはちよつと嫌かも）

「……ところで、ドッグ・トレーニングが特技とか？ それってマリアちゃんにも？」

レイバン「マリアは他の犬とは違うのだ。トレーニングなどいらん。あいつほど可愛いやつはおらんからな」

ミシエル（それって、もしかして犬馬鹿？）

レイバン「少し甘やかしすぎてしまった気もするが」

ミシエル（少しどころじゃないかもですよ。いつか人咬んじやいそうですよ）

「そういえば、マリアって女の人の名前ですよ。なに  
か由来があるんですか」

レイバン「……」

ミシエル「あれ、レイバン？」

レイバン「……」

ミシエル「まずいこと聞いちゃいました？」

レイバン「……以上、レイバンの自己紹介であった」

ミシエル「勝手にしめちゃ駄目ですよー」

《他のキャラからレイバンに一言》

グレイ……マステイマで一番菓子を美味そうに食うよなー

ジャザナイア……ごついけど、言うこと聞いてくれる可愛い部下だ  
アビゲイル……砂糖は健康のためにほどほどにね

ミシエル……お菓子のリクエストあれば、また聞かせてください  
デイヴィッド……変わったやつ

《レイバンについて作者のつぶやき》

こんなに特徴あるキャラになるはずじゃなかったのに。ボスのプロ  
マイド收拾の趣味が強烈過ぎたか。

## キャラクター紹介 その4（後書き）

キャラクター紹介は5回分の予定でしたが、5-1、5-2と1回分追加、計6回でお届けすることになりそうです。

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

## キャラクター紹介 その5 - 1

主人公ミシエル（マイケル）をホスト役にした主要キャラクターの紹介、第五弾。

マステイマの城の会議室を借りて、始まり始まり……じゃなくて。随分と小声で、それも部屋の隅で話は始まります。

ミシエル「今日のゲストってボスなんですか？」

アビー「そうよ。彼がいなきゃ主要キャラ紹介にならないじゃない」

ミシエル「それはそうですね、僕だと、まともなインタビューにならないんじゃない……」

グレイ「やってみて、駄目だったら代わればいいじゃん」

ミシエル（それって、いざとなったら代わってくれるってこと？）

ジャズ「そうそう、何事にも当たって砕けるだ」

ミシエル（砕けちゃうなんて嫌です）

レイバン「ボスをお相手になんて夢対談だぞ」

ミシエル（ひとことだと思って……。だけど、腹を決めてやるしかないか）

「分かりました。やるだけやってみます！」

送り出されたミシエルは対談席へ。

すでに椅子に座ったボスは足を組み、待ちかねている様子。

ミシエル（ううつ、早く終わりたい）

「お待たせしました。今日のゲストはボスです」

ボス「……」（睨）

ミシエル「ボスのプロフィールは……」

ボス「ちよっと待て」



焦り気味にプロフィールの紙に目を落とすミシエルを遮るボス。

ボス 「なんだ、今のは」

ミシエル「はい？」

ボス 「俺はこのボスだ。ボスが名前か。何も伝わってねえぞ」

ミシエル「し、失礼しました。今日のゲストはマスティマのボスことデイヴィッド…です」

(これで勘弁してください)

ミシエル「ボスのプロフィールは……」

(名前) デイヴィッド

(組織での仕事) ボス

(容姿) 黒髪に濃い灰色の瞳。色の濃い肌。身長???センチ、体重???kg

(趣味) ?

(特技) 狙撃

(好きな食べ物) ?

(嫌いな食べ物) ?

(好きな言葉) ?

(血液型) ?

(年齢) (生年月日) (出身国) ??????

ミシエル(これってアビゲイルの字だ。しかもほとんど記入がないー！(慌))

「えっと……マスティマのボスの仕事って、大変ではないですか？」

ボス 「人に語るようなことじゃねえ」

ミシエル「(汗)じゃあ、お休みのときには何をしてるかとか…」

ボス 「そんなことを喋る必要が何処にある」

ミシエル（話す気ないのになんでここにいるのー？（大汗））

「でもボス、これじゃインタビューになりませんよ」

ボス 「知るか。俺はそんなもん聞いてねえ」

ミシエル（ええっ？）

部屋の隅を振り返るミシエル。ごめんと片手を上げて謝っているアビゲイル。ジャズは腕時計を指すと、巻けと指示を送っている。

ミシエル（無茶苦茶だー。どうやってこれ以上進めろって言うの）  
パニックに陥るミシエル。

すると、ボスは立ち上がり、部屋の隅に目をとめる。

ボス 「俺を騙して遊びに誘うとはいい度胸だ」（苛）

衝撃銃を取り出している。

慌てるミシエル、ジャザナイアたち。

アビー 「遊びじゃないわよ。読者サービスよ」

一人、歩み寄ってくるアビゲイル。

アビー 「読者あつての私たちじゃない。読者様は神さまよ」

ボス 「俺は無神論者だ」（怒）

アビー 「知ってる」

にっこり笑うアビゲイル。

アビー 「ここからが本番よ。今日のゲストは、コックのマイケル。インタビューは私ことアビゲイルでお送りします」

ボス 「……………」

ミシエル（私に振るのをやめてー）

焦るミシエルの心の中の悲鳴を残して次話へ続く

《他のキャラからボスへ一言》

グレイ……………ボス、サイコー！

レイバン……………何処までも付いて行きます

ジャザナイア……………こいつがいるからこそそのマスティマだ

アビゲイル……………備品を壊すのは控えぬにお願い

ミシエル……カトラーリの扱いは天下一品です

《デイヴィッドについて作者のつぶやき》

設定や過去など書き連ねていくと主人公であるミシエルより文量が多くなる。どれくらい出すべきか、出さないべきか、それが問題。

## キャラクター紹介 その5-1 (後書き)

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします (ランキングの表示はPCのみです)

## キャラクター紹介 その5-2

アビー 「さて、これがマイケルのプロフィールです」

(名前) マイケル

(組織での仕事) コック

(容姿) 茶と金の混じった短髪でくせ毛。紫がかった青い瞳。身長158センチ、体重46kg

(特技) 拳法

(尊敬する人) 祖母、料理の師匠

(好きな食べ物) 一番は祖母の作る日本料理

(嫌いな食べ物) 特になし

(好きなもの) 足の多いものとなないものを除いた動物

(苦手なもの) ゴキ〇リ

(好きな言葉) 好きこそものの上手なれ

(血液型) A型

(年齢) (生年月日) (出身国) ?????? 一応内緒というこ  
とで

アビー 「マイケルに質問コーナーやります。まずは私ね。早速  
だけど、マイケル、私に隠しことない?」

ミシエル「……隠しことですか? ありませんよ、そんなの」  
(まさかアビー、この場で私が女だつてばらす気じゃ…

…(汗)

アビー 「この間、医務室で定期検査受けたわよね?」

ミシエル「え?」(嘘でしょ?(冷や汗))

アビー 「あなた、身長サバ読んでるでしょ。自己申告じゃ15  
8センチって聞いてたけど、計ってみたら155.7センチだった  
のよね」

ジャズ 「3センチは大きいぞ」

ミシエル (2.3センチです、隊長。小数点以下が大事です)

「前に計ったときは158センチだったんですよ」

グレイ 「年寄りじゃねーし、そんなに縮まねーだろ」

ミシエル 「でも、本当に……」

ミシエルの肩をぼんと叩くレイバン。

レイバン 「分かるぞ。自分も学生時代、200センチ超えを198と言ったことがある」

ミシエル 「変な同情しないでください。本当なんですから」

アビー 「書類に誤まった記載をするのはどうかしら」

ボスをちらりと見るアビー。

ボス 「どっちでもチビには変わりねえ」

ミシエル (そんな身も蓋もない) (半泣き)

アビー 「……えっと、じゃあ次行きましょ、次。グレイね」

グレイ 「無茶振りすんなー。んーと、お前、オレたちが外の連中から影でどう呼ばれてるか知ってるか？」

ミシエル 「えっと……黒ずくめだから悪魔の軍団とか？」

グレイ 「着眼点はいいけどなー。お前が大嫌いな黒いやつだ」

ミシエル 「!?」 (それってまさか! (悪寒))

グレイ 「何処からか湧いて出るって意味もあるらしいぜ」

ミシエル 「……」 (脂汗)

ジャズ 「生命力はすげえよな、ゴキブリって」 (感服)

ミシエル 「……そんな名前で呼ばれて平気なんですか？」

ボス 「そいつらこそがゴミだ」

アビー 「マステイマを敵視するのは後ろ暗いところがある人たちだもの。そんな連中からどう呼ばれようと気にすることはないわ  
頷く一同。ミシエルはひとりシヨックから抜け切れていない。

ミシエル (それでも、やっぱりそんな名前で呼ばれるのはちょっと……)

アビー 「マイケルが気分悪そうだから話題変えましょ。次はレ

イバン」

レイバン「クリスマス・パーティーのザツハトルテは絶品だった」

アビー「それは質問じゃなくて感想でしょ。続いてジャズ」

ジャズ「お前、アビーに気に入られてるみたいだけど、身の危険を感じたことはねえか？」

アビー「それはどういう意味？」

ジャズ「組織内不倫は、部隊長としてちょっとなあ」

アビー、ミシエル「そんなこと、あるわけないじゃない（ですか）！」

アビー「お馬鹿なジャズはほつといて。気を取り直して、最後にボスどうぞ」

ボス「なんでお前、辞めねえんだ？」

皆「……」

ミシエル（酷いです、ボス（涙目））

アビー「……以上マイケルの紹介でした」

ミシエル（自己紹介にオチはいらないですー！）

《他のキャラからミシエルに一言》

グレイ……根性すげー

レイバン……ライバルから同志へだな

ジャザナイア……どんな良いバッテリー持っても充電は大事だぞ  
アビゲイル……ボスと上手くいってくれたら、経理的にも個人的にも嬉しい

デイヴィッド……料理以外は不器用者

《ミシエルについて作者のつぶやき》

レイバンのイメージを猪と言っていたけど、性格的には彼女の方が近いかも。思い込んだら一直線、猪突猛進キャラ。

## キャラクター紹介 その5-2（後書き）

特別編のキャラ紹介はこれにて終了です。

次週は絵師様に依頼して描いていただいたイラストを掲載する予定です。

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）



## ボスとミシエルのイラスト（頂き物）

まずは絵師様のご紹介です。

お名前はm i c k様。

「小説家になろう」と提携の画像投稿サイト「みてみん」でもイラストを掲載されています。  
素敵な絵を描かれる方です。

ミシエルとボスのイラストを依頼して、イメージとしてあげていただいた2枚の線画。

通常はどちらかなのでしようが、両方描いて欲しかった……！！  
2枚のイラストというわがままなお願いでしたが、快く引き受けてくださいました。

設定なども詳しくお伝えしています。  
こちらとしても大満足な絵に仕上げて頂きました。

> i 3 2 2 1 5 — 4 0 5 0 <

ふんぞり返って座っているボスと料理をこぼしかけているミシエル（マイケル）。

いつか見た光景です（笑）

きっと彼女を驚かせるようなことをしたんでしょう。

（銃を持っているから、やっぱり発砲？）

飛んでるタコさんウインナーがカワイイです。

ツートンカラーの床やエンジ色の椅子もオシャレ。

アジトの城との内装とは少し違うのですが、こういうのもアリかなと思います。

枠がフィルムになっていて、映画などのパイロット版のようですね。

街の中（裏通り）のボスとミシエルです。

2人して街に出るなんてあり得ないので、これはもうサービス・シヨットと言ってもいいでしょう。

上のイラストでは見る事ができなかったボスのロングコート姿も格好良いです。

ベース色が赤に対し、こちらは青。

色味がとても好みだったりします。

それにしてもボスって木箱の似合う男だったんだんですね。

2枚のイラストを見て思ってしまった（笑）

**ポストとミシエルのイラスト（頂き物）（後書き）**

本日10月2日より、キャラクター人気投票を開催します。目次ページにリンクがありますので、協力をお願いいたします。実施は2週間程度を予定しています。

今回のような企画物、気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2989k/>

---

運命のマスティマ

2011年10月2日20時27分発行